

2021 年度 博士学位論文

高校野球にまつわる「物語」の再生産に関する研究

—メディアの影響に着目して—

立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科

中山健二郎

正誤表

訂正箇所	誤	正
p.9 1~2 行目	<u>1984 年</u> には <u>49 校</u> を代表とする現在の仕組みが確立されている	<u>1983 年</u> には <u>32 校</u> を代表とする現在の仕組みが確立されている
p.40 図 3-1	「正しく模範的な高校野球のあり方」をめぐる「 <u>精神主義</u> 」と「科学主義」のせめぎ合い	「正しく模範的な高校野球のあり方」をめぐる「 <u>鍛錬主義</u> 」と「科学主義」のせめぎ合い
p.77 表 6-1	2 回戦 北海 vs <u>秀岳館</u>	2 回戦 北海 vs <u>神戸国際大附</u>
p.107 図 8-1	「高校野球の <u>意味づけ</u> 」	「高校野球の <u>見方</u> 」
p.130 図 9-1	「正しく模範的な高校野球のあり方」をめぐる「 <u>精神主義</u> 」と「科学主義」のせめぎ合い	「正しく模範的な高校野球のあり方」をめぐる「 <u>鍛錬主義</u> 」と「科学主義」のせめぎ合い

目次

序章	
1. 問題意識	…3
2. 各章の概要	…4
第一章 研究の背景	
1. 高校野球発展の経緯	…6
2. 高校野球のメディア報道と制度改正	…11
3. メディア・スポーツと「物語」の概念	…17
第二章 先行研究の検討および本研究の目的	
1. 儀礼論的スポーツ研究の視点	…21
2. メディア・スポーツ論の研究系譜	…24
3. 高校野球論の「物語」に関する研究	…29
4. 先行研究の課題と本研究の目的	…32
第三章 研究の枠組み	
1. 正統性、象徴闘争、再生産	…36
2. 再生産とメディア	…38
3. 研究の枠組みおよび分析視点	…40
第四章 選手や野球部の取組みにみられる揺らぎ	
1. 「鍛錬主義」「科学主義」の象徴闘争と投手のあり方	…46
2. 調査概要	…48
3. 夏の甲子園における投手戦術の変遷	…50
4. 「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎ	…53
5. 投手のあり方をめぐる揺らぎの諸相	…61
第五章 新聞報道にみられる揺らぎ	
1. 分析概要	…62
2. 投球数制限に関する報道	…66
3. 夏の甲子園で完投・連投する投手に関する報道	…70
4. 高校野球の投手に関する新聞報道と「物語」の再生産	…74
第六章 テレビ放送にみられる揺らぎ	
1. 分析概要	…76
2. 完投する投手に関する放送	…80
3. 継投する投手たちに関する放送	…83
4. 完投と継投のテレビ放送と「物語」の再生産	…86

第七章 ソーシャルメディアと「物語」	
1. インターネット、ソーシャルメディア、「炎上」	…88
2. 高校野球に関する「炎上」の分析枠組み	…89
3. 分析概要	…94
4. 安楽投手の連投に関する Twitter 言説の様相	…96
5. インターネット・ユーザーの態度	…99
6. ソーシャルメディア言説と「物語」の再生産	…102
第八章 受け手の解釈にみられる揺らぎ	
1. 背景および分析枠組み	…106
2. 調査および分析の概要	…108
3. 高校野球に対する受け手の解釈	…111
4. 選手や監督による「物語」の解釈・意味づけ	…120
5. 受け手の解釈のゆらぎと「物語」の再生産	…125
第九章 結論：メディアを介した「物語」の再生産	
1. 研究結果のまとめ	…127
2. メディアを介した高校野球の「物語」再生産のダイナミズム	…130
3. 本研究の成果と展望・課題	…132
引用・参考文献	…134
資料 1	…143

序章

1. 問題意識

2015年に発祥100周年を迎えた日本の高校野球は、今日、多くの人々の注目を集め社会的な熱狂を生み出す「運動部活動の典型として広く国民に根付いた、わが国固有のスポーツ文化」(甲斐・谷口, 2012, p.3)としての地位を確立している。「夏の風物詩」とも形容される全国高等学校野球選手権大会(以下「夏の甲子園」と略す)は、2019年には総入場者数84万1千人、1日平均入場者数約6万人を記録した(日本高等学校野球連盟, online1)。この数字は、同じ2019年の日本野球機構プロ野球公式戦の1日平均入場者数(約3万人)を大きく上回っている。また、木原・櫛木(2012)によれば、夏の甲子園のテレビ放送量は、全国高等学校総合体育大会(以下「高校総体」と略す)の25倍程にのぼるうえ、新聞報道においても他のスポーツ・イベントと比較して多量の記事で報じられる傾向にあるという。夏の甲子園が1日に複数試合行われ観客の入れ替わりが可能であることや、大会開催時の一定期間に集中して報道量が増加する傾向にあることなどにも留意する必要があるため、入場者数や報道量の単純比較には注意が必要であるものの、技術的に最高峰とは言い難い高校生の部活動としての野球がこれほど人々の注目を集め、多量のメディア報道がなされているという事実は、特筆に値しよう。

高校野球に対する注目度の高さについては、新聞社が全国大会である夏の甲子園および選抜高等学校野球大会(以下「春の甲子園」と略す)を主催してきたことを含め、特にメディアと密接に関わり合いながら発展してきた経緯が大きく影響しているものと思われる。有山は、「われわれの側が、技術的には未熟な高校生の野球を面白くかつ感動的なものとして見てしまう認識の枠組みと価値観を持っている」と指摘し、その枠組を「マスメディアが提供した眼鏡」(有山, 1997, p.10)として論じている。また、清水は、「この国の人々の思考と身体を無意識のうちに縛っているスポーツの解釈」(清水, 1998, pp.2-3)を「物語」という概念で捉え、メディア報道を通じて生成されてきた高校野球の「物語」について検討している。清水によれば、高校野球の「物語」とは、「精神修養・鍛錬主義」など観念を基盤とした「青春」「若者らしさ」の「物語」であるという。

一方で、今日では、「勝利至上主義が子供たちのけがにつながっている」(日経新聞, 2019年1月26日, 朝刊)、「あまりに過密な試合日程ではないか」(読売新聞, 2019年7月30日, 朝刊)、「なぜ『炎天下』の開催にこだわるのか」(産経新聞, 2018年8月3日, 朝刊)など、夏の甲子園を中核とした高校野球の伝統的なあり方や考え方に対する批判的な言説も散見される。これらの批判的言説は、これまで高校野球において自明視されてきた規範や価値観の揺らぎを示唆するものである。しかし、こうした揺らぎが散見されつつ、高校野球は近年においても、「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みに準拠して、多くの人々の注目を集め感動を喚起しているものとみられる。では、高校野球をめぐる規範や価値観の揺らぎが示唆される今日において、高校野球の「物語」はどのように揺らぎつつ、再生産されているのだろうか。この点について、本研究では主にメディアの影響に着目して読み解いていく。

なお、本稿で扱う「高校野球の『物語』」とは、「高校野球をめぐる歴史的動向のなかで生成され社会的に共有された高校野球に対する価値観や観念、ならびに高校野球に対する見

方や解釈の枠組み」を意味している。また「再生産」とは、全く同型のものが単純反復的に生産されることではなく、生産一と生産二の間に「ある観点からみた同型性や相似性がみられること、およびその二つのプロセスの間に確認される一定の因果関係があること」（宮島，1994，p.152）を指しており、その意味で「変動を理解し、説明するひとつの観点」（宮島，1994，p.154）として扱っている。それぞれの概念に関する定義については、第一章および第三章において改めて詳述する。

2. 各章の概要

以下に、本研究の章立てと各章の概要を示す。

第一章では、本研究の背景について論じる。まず、高校野球発展の歴史的経緯について、特にメディアとの関係に着目しながら検討し、「鍛錬主義」の精神などを基盤として高校野球の「正しいあり方」という規範や価値観が形成されてきた経緯を概観する。また、今日において、高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いが生じている様相を読み解いていく。加えて、メディア・スポーツの構造と「物語」の概念について検討し、メディア・スポーツ論の観点から高校野球の「物語」を把握するという本研究の視座を提示する。

第二章では、本研究に関連する先行研究について検討する。ここでは儀礼論的スポーツ研究の視点、メディア・スポーツ研究の系譜、およびその系譜に位置づく高校野球の「物語」研究について検討し、その知見を整理する。また、「物語」の動態的側面をいかに把握するのかという点や、ソーシャルメディアを含む現代的なメディア環境を勘案したメディア横断的な分析が必要とされる点など、高校野球の「物語」研究に関する課題を検討し、メディアを介した「物語」再生産のダイナミズムを読み解くという本研究の目的を示す。

第三章では、先行研究の課題を踏まえ、インターネットを含む各メディアの特性を勘案して、「物語」の動態的な様相を読み解くための研究枠組みを提示する。具体的には、象徴闘争および再生産の概念について検討し、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を背景に「物語」が再生産されるダイナミズムを分析するという理論的枠組みを示す。また、各メディアが「物語」の再生産に関わる様相を読み解くための研究構成について説明する。

第四章では【研究 1】として、高校野球における投手のあり方と取り組みの揺らぎについて検討する。選手や野球部による取り組みの揺らぎは、メディア報道を介して「物語」の再生産プロセスに重要な影響を与えるものと思われる。ここでは特に、夏の甲子園における投手戦術に着目し、その変化を計量的に分析していく。また、戦術の変化に影響を与えうる、「正しい投手指導のあり方」に関する観念的な揺らぎについても検討を行う。

第五章では【研究 2】として、高校野球の投手に関する新聞報道について分析する。ここでは【研究 1】で示した投手戦術の変化を踏まえ、投手の投球数制限に関する記事、ならびに完投・連投に関する記事を対象にテキスト分析を行い、それぞれの記事にみられる「立場・主張」「報道対象」「視点・意味付与」などの傾向性を検討していく。これまで「鍛錬主義」的な取り組みを美談化する傾向が指摘されていた新聞報道が、今日において変化する取り組みをどのように伝えているのかを読み解くことで、「物語」の再生産に対する新聞報道の関わりについて考察する。

第六章では【研究 3】として、高校野球の投手に関するテレビ放送について分析する。【研

究 1】で示した投手戦術の変化を踏まえ、ここでは夏の甲子園において完投した投手、ならびに継投した投手たちを主題としたドキュメンタリー番組を対象にテキスト分析を行う。投手の完投と継投に関する戦術の変化がみられる今日、それぞれの取り組みからテレビ放送がどのような意味作用とメッセージを生成しているのかを読み解き、「物語」の再生産に対するテレビ放送の関わりについて考察する。

第七章では【研究 4】として、高校野球の投手に関するソーシャルメディア言説の分析を行う。ここではソーシャルメディアに特徴的な「炎上」現象について、その内実を把握するための理論的枠組みを検討したうえで、投手の連投に関する Twitter の「炎上」事例を分析していく。「炎上」という特徴的な現象が「物語」の再生産にどう影響しているのかという点から、「物語」の再生産に対するソーシャルメディアの関わりを考察する。

第八章では【研究 5】として、高校野球に対する受け手の解釈に関するアンケート調査の分析を行う。受け手の高校野球に対する解釈にどのような揺らぎがみられるのかに関して、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」などに着目し、メディアによる伝達と受け手の解釈との相互作用による「物語」再生産の様相について検討していく。

第九章では、【研究 1】から【研究 5】の結果をまとめ、本研究で示唆された、メディアを介した「物語」再生産のダイナミズムについて論じていく。

第一章 研究の背景

1. 高校野球発展の経緯

野球という競技は、明治初期に外国人講師やアメリカ留学からの帰国者によって日本に紹介され、まず、当時の高等教育機関を中心に普及した。高校野球は上記の野球黎明期に、高等教育機関の学生たちが指導的役割を果たして中等教育機関の学生に野球を伝えたことなどを通じて各地で普及し、新聞社が主催する甲子園大会を中心として発展を遂げてきた。

ここでは、高校野球の「物語」に関わる重要な背景として、明治期の野球振興に中核的な役割を果たしてきた第一高等学校（以下「一高」と略す）の野球信条とその伝播、ならびに甲子園大会の主催をはじめとする新聞社の関わりに着目し、高校野球発展の歴史的経緯を概観する。

1) 一高の野球信条とその伝播

一高は、1886年に第一中等学校として開校された後、1894年の高等学校令によって改称された旧制高等学校である。アメリカから伝えられたベースボールが野球として日本に根づくにあたっては、「第一高等学校という学校の存在とそのエトスが基盤」（有山，1997，p.23）となったことが指摘されている。そこで、以下では明治期の一高野球について詳細に検討した諸研究（日下，1975；有山，1997；清水，1998）を参照し、一高で形成された野球信条とその伝播について論じていく。

野球が日本に移入された明治初期、はじめは主に高等教育機関の学生らによる自主的な同好集団、クラブなどで愛好されていた。これらの集団は、西洋文化に通ずるというハイカラな意気をまとった「好球人による同好の集団」（日下，1975，p.27）であり、そこでは「野球好きの同好の志が楽しんでプレーしていた」（清水，1998，p.119）とされている。その後、1887年頃からチーム同士の対抗戦が本格化し、プレーや服装面で猛々しさを誇示するバンカラな気風も現れはじめた。学校間の対抗戦では、プライドをかけて激しい応援が行われるなどの様相もみられたという。

明治20年代以降、上記の群雄の中から一高が台頭し、野球界での覇業を確立する。一高は、明治期の国家主義的教育という枠組みにおけるエリート養成学校として性格づけられており、その校風は一高生の野球に対する考え方に少なからず影響を与えていた。日下は当時の一高野球の担い手たちの記述を参照し、一高生にとって野球の対抗戦がエリート校としての校風と名誉をかけて戦う「一高健児の意気と優越性を誇示する場」（日下，1975，p.29）として意味づけられたことで、「勝利至上主義」とそのための猛練習という野球信条が形成されたことを指摘している。一高生にとって野球は「一時的な楽しみを求めるだけの遊戯であってはいけなかった」のであり、「校風の名誉にかけて戦うからには是が非でも勝たねばならなかった」（日下，1975，p.29，傍点原著）ものであった。結果として、一高は1895年から1902年までの8年間で56勝10敗の戦績を残し、「一高時代」（清水，1998，p.121）とも称される黄金期を迎え、黎明期の日本野球界を牽引した。

一高における「勝利至上主義」の野球信条は、勝つことによる私的な快楽の充足と、校風発揚という野球の公的な意義づけの両側面を担保していた。加えて、国家主義的教育観と

「知、徳、体兼備の人物鍛錬主義的な儒教的、伝統的モラルを重視」（日下，1975，p.37）する教育理念のもと、野球に打ち込む一高生はその理念を象徴する「武士」的人物であることが要求された。そのため、勝利を目指した猛練習には心身の鍛錬、精神の修養を通じた「武士道」的な徳の涵養という意味が付与され、「精神修養・鍛錬主義」の野球信条が形成されていったという。例えば、一高の練習の苛烈さは「冬でも上半身裸になり素手で1時間ボールを投げ合う」「倉庫の壁に穴が空くほど毎晩投球練習をする」「練習しすぎて湾曲した腕を伸ばすために桜の木にぶら下がり、また練習する」などの逸話で物語られているが、こうした苛烈な練習は、試合のためとしてという以上に心身鍛錬のためとして理解され（清水，1998，p.130）、『単にプレーヤーとしてだけではなく、人間としての心身の鍛錬、とりわけ精神的な修養に役立つものであるべきだ』とする『武士道』的な精神修養・鍛錬主義的信条（日下，1975，p.41）に重点がおかれていたとされる。

一高野球の「勝利至上主義」「精神修養・鍛錬主義」などの信条は、特に一高生が学生野球の指導的立場になることによって中等教育機関にも伝播した。清水は一高野球部史を参照し、中等教育機関への野球の普及について、「東京府下以外の関東地方や東北地方、そして関西地方などにも一高野球部の選手が出身中学に帰省した際に指導をするなどして、一高野球の精神は広まった」（清水，1998，p.137）と述べている。有山も「中学への野球伝道の役割を果たしたのは、一高をはじめとする高校生で、彼らが縁故のある中学に教え、さらにその中学から周辺の学校に広まるが多かった」（有山，1997，p.43）と論じている。また、早稲田、慶応など一高以外の野球が台頭しアメリカ式の新しい技術・戦術の導入などがみられた明治中期においても、「一高の武士道的野球観を批判する野球観が形成された訳ではない」（有山，1997，p.45）とされ、高等教育機関の学生による中等教育機関への野球指導では「ときに技術の伝授以上に『一高式野球』の精神、武士道的野球観が教えられた」（有山，1997，p.45）という。「勝利至上主義」「精神修養・鍛錬主義」などを中核とする一高の武士道的野球信条は、こうした学校間、学生間の交流を通じて、野球の普及拡大とともに中等教育機関に広まったものとみられる。

2) 「野球害毒論争」

明治末期には、中等教育・高等教育の拡大期と連動し、学生野球もますます普及拡大を遂げた。しかし、野球の普及拡大によってその弊害も顕在化しはじめ、野球への過度な熱中による騒乱、入場料徴収による見世物化、観客の目を意識した「華美」な振る舞いによる風俗の乱れなどが指摘されることとなった。顕在化した野球の弊害と当時の学生野球界の事情を象徴的に示しているのが、1911年に生じた「野球害毒論争」である。

「野球害毒論争」は、東京朝日新聞（のちに大阪朝日新聞と統合され朝日新聞となる）が新渡戸稲造ら識者による野球の弊害についての見解を連載し、野球をする学生の学業軽視や「勝利至上主義」への傾倒、見世物化などの問題点を挙げて野球排斥キャンペーンを展開したことに端を発した。このキャンペーンに対し、押川春浪（天狗倶楽部）や安部磯雄（早稲田大学野球部長）らが他紙の紙面や演説会等で野球擁護論を展開して論戦を行い、多様な新聞社を巻き込んで全国規模の論争へと拡大した。「野球害毒論争」については、新聞の論調分析（木村，1962；秦・加賀，1990）や、野球界のみに留まらない国民の道德観や教育観の相克という視点からの分析（小野瀬，2002；石坂，2003）、新聞社の立場に主眼をおい

た分析（有山，1997；綿貫，2001）など、多角的な視点から検討されている。ここでは特に、当時の学生野球界に広まっていた一高野球の信条と「野球害毒論争」の関係性、および論争を仕掛けた新聞社の企図に着目したい。

まず、一高野球の信条と「野球害毒論争」の関係性について、論争を仕掛けた東京朝日新聞が理想とした野球観がまさに一高野球の姿であったという綿貫（2001）の指摘は示唆的である。野球を「害毒」とした東京朝日新聞の主張は、一高の「勝利至上主義」「精神修養・鍛錬主義」的な信条を「害毒」と捉えたものではなく、野球が大衆化したことで一高野球の信条と乖離し俗化してきたことに対して向けられた批判であった。対して、「擁護論」を唱えた陣営も「全く異なる理想の野球像を掲げて野球擁護論を唱えたわけではなく、東朝と同様に『一高式野球』を理想としていた」（綿貫，2001，p.44）とされる。すなわちこの論争は、「害毒」論者と「擁護」論者がともに「同じ武士道の野球観を共有し、そこから見た現状の認識と評価をめぐって起きた」（有山，1997，p.56）ものであったと捉えうる。結果として、「勝利至上主義」や「精神修養・鍛錬主義」を中核とした一高の野球信条は、「野球害毒論争」を経てますます学生野球を正当化する言説として強化されることとなった。

また、綿貫は「野球害毒論争」に参画した新聞各社に新聞の販売促進という意図があったことを指摘し、「販売促進のための『商品』」（綿貫，2001，p.44）という観点から社会的に認知された野球が利用された可能性に言及している。当時の新聞各社は、販売拡張に向けて、政治的言論を中心とした旧来的なジャーナリズムから「より広範な読者の日常的関心に応える多様性と一般性を志向する」（有山，1997，p.50）方針に転換してきており、その方針は各紙の社会面に具現化されていた。「野球害毒論争」は、まさにこの社会面を中心として各紙に扱われ、全国的な議論となっている。こうした背景に鑑みれば、「野球害毒論争」は、一高野球の信条という学生野球を正当化する言説の強化とその伝播という意義に加え、メディアが自社の販促としての観点から野球を取り扱うという構図の源流としても、重要な意味をもつ事象であったといえる。

3) 甲子園大会の創設・発展と新聞社の立場

「野球害毒論争」以後、中等教育における野球は大正期において、大阪朝日新聞（のちに東京朝日新聞と統合され現在の朝日新聞となる。以下「朝日新聞」と略す）によって夏の甲子園が創設されたことで、全国的に組織化され、さらなる普及・拡大を遂げた。夏の甲子園は、1915年に朝日新聞の企画により、箕面有馬電鉄軌道が経営する豊中グラウンド（大阪府）において地方予選を勝ち抜いた10校の代表校が参加した全国中等学校優勝野球大会を第1回大会とする。1924年には阪神甲子園球場が完成し、第10回大会からは甲子園球場で開催されることとなった。出場する代表校は、1930年の第6回大会で15校、1935年の第11回大会で21校と徐々に拡大し、1979年の第61回大会から正式に、各都道府県代表校49校（東京と北海道は各2校）で開催される今日の形式が確立された。地方予選を含めた全出場校についても、1930年の第6回大会で500校、1950年の第32回大会で1500校、1969年の第51回大会で2500校を突破するなど、段階的な拡大が続いてきた（日本高等学校野球連盟，online1）。

また、1924年に大阪毎日新聞（のちに東京毎日新聞と統合され現在の毎日新聞となる。以下「毎日新聞」と略す）が創設し、主催者の推薦によって代表校を選定するという特色を

有する春の甲子園についても、第1回大会の代表校8校から拡大を続け、1984年には49校を代表とする現在の仕組みが確立されている（日本高等学校野球連盟，online2）。

2つの甲子園大会に関して、ここでは特に、大会を主催する新聞社の立場や思惑について検討しておきたい。日本の新聞社によるスポーツ・イベントの主催とその報道に関しては、メディア史研究や体育・スポーツ史研究の領域で議論されており（山本，1979；木下，1996；寶學，2002）、特に甲子園大会と新聞社との関わり、および制度化の経緯に関しては、甲子園大会を一種の儀礼として読み解くメディア・イベント研究や高校野球研究の文脈で検討されている（有山，1996，1997；清水，1998）。明治後期から大正期にかけて、高まる競技スポーツの人気を背景に、日本の新聞各社は「単に記録会記事の掲載だけでなく、新聞社自身が競技会を主催して記事とし新聞販路の拡張を企図」（木下，1985，p.267）し、多くのスポーツ・イベントを自社事業として主催した。ニュース価値の高いスポーツ・イベントを事業として展開し、独占的に自己宣伝や報道を行うことは、新聞社の大衆向け商業紙への転換という戦略と連動し、部数や広告収入の拡張に寄与する新聞経営の一分野となった。

朝日新聞が主催し1915年に第1回大会が行われた夏の甲子園も、新聞社による販売拡張を企図した自社事業の1つとして成立したとみることができる。当時の朝日新聞は、経営規模や言論の立場において「大正初期の新聞界を領導」（有山，1996，p.73）する存在であり、大阪を中心とした販路を拡張し全国紙体制を確立することを展望していた。その際、「明治期以来の野球の人気イベント創出の絶好の資源であり、販売・広告拡張活性化の大きな契機となりうるという読み」（有山，1996，p.78）によって、全国大会の創設という大規模な投資に踏み切ったとされる。また、毎日新聞が主催し1924年に第1回大会が開催された春の甲子園についても、夏の甲子園と同様に、「大阪毎日新聞社の経営戦略の一環であったことは明らか」（有山，1997，p.139）であると指摘されている。新聞社の販売拡張戦略として展開された2つの甲子園大会は、結果として地方大会から連なるトーナメントの整備と全国規模の組織化、多量のメディア報道を介した高校野球人気の過熱化を生じさせ、「国民的行事」とも称される大規模スポーツ・イベントとして、今日まで高校野球を取り巻く熱狂の核となってきた。

さて、ここで先述した「野球害毒論争」の議論と、甲子園大会創設時の新聞社の立場を整理しておきたい。夏の甲子園を創設し、高校野球人気を牽引する「国民的行事」として主催を続けてきたのは、かつて「野球害毒論争」を展開した朝日新聞である。この点について、清水は大会創設時の朝日新聞の記事を参照し、「野球害毒論を唱えていた朝日が学生野球の精神を尊重し、その精神に沿って弊害を生じない学生野球界をつくっていくように援助と監視、指導をしようという、いうなれば大義名分を唱えた」（清水，1998，pp.212-213）と指摘している。つまり、朝日新聞は、学生野球がこれまで準拠してきた一高野球の武士道的野球観を離れ風紀の乱れなどの「害毒」が生じたのは、学生野球を律し管理する主体が不在だったからであると主張し、「害毒論」を展開した朝日新聞自らが主催者として指導的役割となることで、高校野球を「正しく」発展させようという立場をとったということである。第1回夏の甲子園で掲げられた「凡て正しく、模範的に」という標語は、上記の朝日新聞の立場を象徴するものであり、ここでいう「正しく」「模範的」なあり方とは、「勝利至上主義」「精神修養・鍛錬主義」を重視した一高の武士道的野球信条に基づく「若者らしさ」の理想像であった。

模範的な若者像の追求という甲子園大会の規範的性格は、大会の制度や仕掛けとして随所に顕在化している。例えば、開会式の入場行進や試合開始・終了時の整列・礼は武士道的な儀礼としての意味合いを強めるしきたりとして機能し、また 1926 年の第 12 回大会から制定された「野球大会の歌」は「若き生命を真に捧げ、正しく強く力に生きん」と高校球児のあるべき姿をシンボリックに表象している（清水，1998，pp.217-224）。さらに、甲子園球場は高校野球という儀礼が展開される舞台装置として神聖化され（菊，1994）、高校野球関係者のみならず、一般的に「高校野球の聖地」と認識されていった。

4) 「野球統制令」と戦時・戦後の高校野球

このように、甲子園大会は「若者らしさ」を発揮する舞台として規範的性格をまといながら国民的な人気イベントの地位を確立し、高校野球の発展を牽引してきた。大会人気の拡大については、大会主催者を中心とした新聞報道や日本放送協会（以下「NHK」と略す）によるテレビ放送が大きく影響しているものと推察されるが、この点については後に改めて詳述したい。ここでは、大会規模拡大時の様相や、戦時・戦後の高校野球について論じた諸研究（有山，1997，2002；中村，2010）を参照し、高校野球を取り巻く規範や価値観が、今日に至るまでどのように継承されてきたのかについて検討する。

大正から昭和初期における甲子園大会の規模・人気の拡大は、観衆の増大や応援の過熱化を生じさせ、必然的に「野球害毒論争」でも争点とされた武士道的野球観と現実との乖離を再び顕在化させることとなった。その結果、大会を主催する新聞社は、大会規模の拡大が本音としての販促・経営拡大という思惑に対して歓迎すべきことである反面、学生野球を「正しく」管理し導くという大義名分が失われかねないという構造的な矛盾に直面することとなる。他方、大会が拡大を続けた昭和初期は、日本において国家が国民の身体を管理・統制する機運が高まっていた時期でもあった。

こうした背景のもと、1932 年にいわゆる「野球統制令」が制定され、文部省による学生野球の管理・統制が行われはじめた。「野球統制令」によって、対外試合に際しては学校長の承認が義務付けられたほか、留年した選手の試合出場禁止、プロとの試合禁止、入場料の制限、優勝杯以外の褒章の禁止、応援団を学校教職員のみとする規定などが設けられ、商業主義化や応援の過熱化、学業の堕落などの問題に対して明確なルールが定められた（中村，2010，pp.41-42）。国家による統制は、高校野球が「正しく」「模範的」なものであるべきだとする規範や価値観をますます強固なものにすると同時に、「正しさ」として提示された精神主義や自己犠牲的な集団主義を、国家への献身というイデオロギーに転化させる機能も果たしていた（有山，1997，pp.170-171）。その後、1941 年に行われる予定であった第 27 回夏の甲子園が、満州における戦局悪化を理由として地方予選の半ばで文部省次官通達により中止され、以降 1945 年まで、甲子園大会は戦時中断を余儀なくされた。

終戦後、1946 年には第 28 回大会として夏の甲子園が復活し、翌 1947 年には第 19 回春の甲子園も再開された。終戦から約 1 年で再開された夏の甲子園は、日本における「敗戦後初の大規模なイベント」（有山，2002，p.40）であり、この早期再開には、連合国軍最高司令官総司令部（General Headquarters of the Supreme Commander for the Allied Powers、以下「GHQ」と略す）による日本統治の戦略が密接に関連していたとされている。開会式でアメリカ占領軍から祝辞やボールの贈呈などが行われたことで、1946 年の夏の甲子園は、

「占領軍は寛大で優しいスポーツの奨励者として登場し、日本人の選手と観衆はそれに感謝感激するという儀礼」(有山, 2002, p.42)として定位していたという。結果として当該大会は、終戦後間もない時期の開催にも拘らず、675校と戦前のピークを超える大会史上最多の参加校が集まり、観客も連日超満員となった(有山, 2002, p.40)。以降、2つの甲子園大会が年々拡大を続けて今日に至ることは、先に論じた通りである。

有山は戦後の高校野球について、国家主義から離れ所属組織に献身するという集団主義の意味変容などがみられるものの、基本的には戦前の武士道的野球観、すなわち「精神主義的人間鍛錬、集団主義といった本旨を引き継ぐ『日本の正統野球』」(有山, 2002, p.32)への原点回帰によって、戦後の解放と自由を求める風潮に対する秩序再形成という価値を提示しながら人気を獲得していったと論じている。つまり、戦後においても、一高野球の武士道的野球観に基づく「正しく」「模範的な」「若者らしさ」を発揮する舞台としての甲子園大会、高校野球という規範や価値観は概ね継承され、その様相に国民は感動し、結果として高校野球は、戦後も絶えることなく拡大を遂げてきたのである。

また、戦後の高校野球復興に際しては、GHQ主導のもと、国家統制からの解放が進められた。1946年には、全国中等学校野球連盟(翌年の学制改革により全国高等学校野球連盟となる)および全国学生野球協会が設立され、学生野球基準要項(のちに学生野球憲章に改正)が成立するなど、高校野球を管理・運営する民間組織とその指針が整備されている。学生野球憲章について詳細に検討した中村は、この憲章が『学生たること』と『日本人たること』の自覚を基礎に、怠惰と放縦を戒め、『フェアの精神』や『明朗強靱な情意を涵養』し、『強健な身体を鍛錬する』。野球は単なる楽しみではなく、これらの諸徳を体現するものであることを定めたものであると指摘し、戦後の高校野球において明文化された「正しさ」の指針が、まさに戦前のあり方を引き継ぐ「精神主義的な野球観、教育観」(中村, 2010, p.145)に依拠していることを示している。

さて、ここまで高校野球黎明期の様相、ならびに新聞社による甲子園大会の主催と戦前・戦後の展開について概観してきた。一連の歴史的経緯をみると、高校野球の発展に新聞社が密接に関与しながら、一高の「精神修養・鍛錬主義」などの武士道的な野球観に基づく「正しく」「模範的な」規範や価値観が歴史的に継承されてきた様相が看取される。「国民的行事」として高校野球人気を牽引する甲子園大会の主催者である新聞社は、経営拡大という本音を抱えつつ、学生野球を「正しい」あり方に管理・統制していくという大義名分を掲げてきた。その結果、高校野球人気が拡大すればするほど、見え隠れする俗的(商業主義的)側面を覆い隠すように、ますます「正しさ」の言説が強化された。「正しさ」を管理・統制する立場は、社会背景に応じて国家や民間組織へと変遷し、今日では憲章として明文化された規範が、高校野球の規範的性格を支えている。こうして価値づけられた「正しく」「模範的な」「若者らしい」高校野球に、人々は熱狂してきたのである。

2. 高校野球のメディア報道と制度改正

1) 高校野球のメディア報道

高校野球とメディアの関わりについては、特に新聞社が自社事業として全国大会を主催

しつつ、その様子を報じてきた点、ならびに NHK による甲子園大会の生中継をはじめ、テレビでも多量の放送がみられている点に特徴を有する。高校野球において歴史的に形成されてきた「正しく」「模範的な」「若者らしさ」の規範や価値観は、上記のメディアによる扱いを通じて広く人々に伝えられ、高校野球の「物語」生成に重要な影響を与えてきたものと思われる。そこで、ここでは高校野球、とりわけ甲子園大会に関する新聞報道ならびにテレビ放送の様相について整理する。また、近年ではインターネットの登場に伴い、メディアの送り手と受け手の関係性が曖昧化するなどのメディア環境の変化、複雑化が生じている。この点を踏まえ、現代的なメディア環境において散見される高校野球を取り巻く言説についても検討していく。

(1) 甲子園大会の新聞報道

明治期の野球に関する新聞報道について検討した伊東（1976a）によれば、野球に関する初の新聞報道は、1879 年に横浜毎日新聞に掲載された、外国人が野球場の拡張を計画しているという内容の記事であったという。また、当時は「球投げ」「ベースボール」の語で報じられることが多かったものの、1897 年に、福陵新報が山口高校（山口県）と熊本高校（熊本県）の試合を報じた記事において「野球」という語を初めて用い、以来徐々に「野球」の語が定着していったとされる（伊東、1976b）。

高校野球の新聞報道については、先述したように、新聞社が 2 つの甲子園大会を創設し主催することにより、大会に関する記事を中心に多量の報道が展開されてきた。西原（2013）は、朝日新聞による夏の甲子園に関する記事量（大阪）が 1915 年の大会創設当初から年間 1,000 を超え、さらに 1922 年以降は毎年 2,000 を超えていたことを明らかにしている。東京での報道量については、大会創設から 10 年ほどは数 100 程度と、大阪での報道と比較して少数であったものの、甲子園球場への大会移転をきっかけとした大会人気の過熱化により、徐々に大阪の報道量に迫る記事数がみられるようになったという。また、大会人気の拡大に伴い、より速報性の高い報道の需要が生じたこと受け、1927 年には朝日新聞直売所で夏の甲子園の速報掲示が開始されている（川喜田、2012, pp.20-21）。さらに、甲子園大会の報道が部数拡大に繋がることに目をつけた読売新聞が地方予選大会から詳細な報道に乗り出す（池井、1991, p.13）など、報道の活況は大会を主催する新聞社以外にも広がっていた。

今日では高校野球のみならず、高校総体をはじめ多くの学生スポーツが新聞紙面に扱われているが、木原・櫛木（2012）によれば、高校野球は特に多量の記事が掲載される傾向にあるという。例えば、夏の甲子園開催期間である 8 月の朝日新聞においては、プロ野球の 2 倍以上、サッカー（J リーグおよび海外リーグ）の 3 倍以上と、学生スポーツはおろか他のメジャーなプロスポーツをも大きく上回る記事量がみられることが明らかにされている。

報道内容に関しては、有山による一連の研究（有山、1996, 1997, 2002）が詳細に論じている。有山は、明治から昭和にかけての大会創設・発展期における甲子園大会の新聞報道に関して、「大会の精神を具現化する野球美談」（有山、1997, pp.106-107）ともいえる傾向性を指摘した。具体的には、学生の「純真」さが強調され、「精神修養・鍛錬主義」的な精神は、困難な状況（疲労や怪我など）を乗り越えて敢闘する選手の姿を記すことで具現化されており、また、「勝利至上主義」の精神は、トーナメントという優勝劣敗の世界で勝ち

残る「勝者」への盛大な賛美に表れているという。明治期の学生野球を経験し、その精神を自ら体現してきた者たちが新聞社に入社し高校野球の報道に携わったことが、上記の報道傾向に影響を与えているという指摘（清水，1998，pp.239-240）もみられている。

戦後の報道については、一部「武士道」という表記が「スポーツマン精神」に置き換わるなどの変化がみられたものの、開会式の軍隊式ともいえる行進を「純真」「至純」「真剣味」として賛美するなど、報道の全体傾向は戦前のあり方と「深層で連続している」（有山，2002，p.44）とされる。今日の新聞報道をみても、例えば、『『純粋な姿』伝えたい』（毎日新聞，2019年9月1日，地方版・神奈川）、「不屈の一球入魂」（朝日新聞，2019年3月19日，東京・夕刊）、「壁打ち破り頂点」（読売新聞，2019年8月23日，大阪・朝刊）などの見出しをみれば、歴史的に形成された大会の規範や価値観に引き寄せた記事で受け手の感動を惹起させるような報道のあり方が、一定程度踏襲されている可能性を指摘できよう。

（2）甲子園大会のテレビ放送

夏の甲子園のテレビ中継は、1953年のNHK本放送開始初年度から開始された。スポーツの実況中継は、ニュース性、ドラマ性、オリジナリティを兼ね備えたコストパフォーマンスの高いコンテンツとしてテレビ放送黎明期から重宝されていた（広瀬，1997）が、特に夏の甲子園については、その人気から「夏の風物詩」とも称され、毎年全試合の実況中継が繰り返されてきた。また、1954年に中継が開始された春の甲子園についても、「春は選抜から」と称されるほどの人気を博し、毎年全試合の実況中継が継続されている。

2つの甲子園大会を全試合放送することで、NHKの甲子園大会に関する放送量は年間およそ150時間にのぼるという（中島，2016，p.iii）。この放送量は、例えば高校総体全体のテレビ放送量と比較すると約25倍の規模であり、高校野球がテレビに「破格の扱い」（木原・櫛木，2007，p.380）を受けていることを示している。また、平日の昼間にも関わらず高い視聴率を記録してきたこと（中島，2016，p.iii）や、1988年に行われた世論調査において、「テレビで見たいスポーツ」の第1位が「高校野球」（58%）であったこと（池井，1991，p.171）などに鑑みれば、甲子園大会の実況中継は、まさに「国民的行事」として多くの人に親しまれてきたといえる。また、1981年から朝日放送において、夏の甲子園のハイライトを扱うドキュメンタリー番組『熱闘甲子園・高校野球ハイライト』の放送が開始されるなど、甲子園大会を扱うテレビ放送はNHKの実況中継以外にも拡大している。

夏の甲子園の実況中継を分析した清水は、放送において『『青春』や『若者らしさ』の『物語』（清水，1998，p.50）が受け手に伝えられていることを示している。例えば、「気迫・精神力」「友情」「一体感」などが強調して伝えられているなどの様相がみられるという。こうしたテレビ中継での扱いについて、清水は新聞報道の傾向性と同様、一高野球の信条が基盤となり形成された高校野球の精神が具現化されたものであると論じている。テレビ放送における高校野球の精神性の具現化（とその過剰さ）については、清水の他にも多くの指摘がみられる（中条，1979；小椋，1994）。2015年の高校野球100周年に際した『産経ニュース』の特集記事では、NHKの高校野球放送に関して「聖地・甲子園を美談仕立てに語り継ぐ風潮」が現代でも継続されていることが指摘されており、歴史的に形成された大会の規範や価値観に依拠し「青春」や「若者らしさ」を前景化させ放送するあり方は、今日においても一定程度踏襲されているものと思われる。

(3) ソーシャルメディアにみられる高校野球をめぐる言説

新聞報道やテレビ放送において、高校野球の規範や価値観を具現化して「美談」を形成する傾向がみられるという指摘を踏まえ、以下ではインターネット、とりわけソーシャルメディアにみられる言説に着目する。ソーシャルメディアとは、「ブログ、ソーシャルネットワーク・キングサービス（SNS）、動画共有サイトなど、利用者が情報を発信し、形成していくメディア」（総務省，online）の総称である。すなわち、マスメディアにみられる送り手と受け手という二分構造と異なり、従来はメディア情報の受け手であった人々が送り手として情報を発信し、流通させていくという特徴を有するメディアである。ソーシャルメディアの特性については第三章および第七章で改めて詳述するが、特に今日では「特定の対象に対して批判が殺到し、収まりがつかないような状態」（荻上，2007，p.7）である「炎上」が頻繁に生じていることが指摘されている。

高校野球に関しても、ソーシャルメディアを発端として、高校野球の規範や価値観およびその枠組みに準拠した報道などに対する「炎上」が散見される。例えば、2016年の第98回夏の甲子園では、私立大分高校（大分県）の甲子園事前練習に補助員としてグラウンドに入場した女子マネジャーが大会本部に練習参加を制止された事態に関して「インターネットなどを中心に『危険という点では男女同じ』『時代錯誤だ』と批判が続出」（産経新聞，2016年8月6日，朝刊）し、「日本高校野球連盟（日本高野連）に『なぜ駄目なのか』などと抗議する電話が相次ぐ」（読売新聞，2016年8月5日，朝刊）などの「炎上」が生じている。この事例は、高校野球の規範や価値観に内包された性別役割構造（江刺，1994）に基づく制度的対応に対して批判が表出したものであったといえる。また、2018年、第100回夏の甲子園の新潟県予選では、準々決勝で敗退した私立加茂暁星高校（新潟県）に関して、朝日新聞が「練習直後に倒れ…亡き女子マネジャーへ、捧げる2本塁打」（朝日新聞デジタル，2018）という記事を掲載したことに対し、「ネットでは『美談にすべきではない』といった批判の声が殺到」（BIGLOBE ニュース編集部，2018）して「炎上」状態となった。この事例では、「ホームランボールと一緒に女子生徒に報告に行くつもりだ。『いまは、ただただありがとうと言いたい』（朝日新聞デジタル，2018）などの記述にもみられるように、困難を乗り越えて大会に臨んだ選手の姿に着目する高校野球の伝統的な価値観に依拠した美談化に対し、批判が表出している。

以上のように、高校野球とメディアの関わりを概観すると、新聞報道やテレビ放送において、学生のスポーツとしては特異的な多量の記事や放送がみられ、その内容について、一高野球の信条を基盤として歴史的に形成された「正しく」「模範的な」「若者らしい」高校野球の規範や価値観に準拠したものが中心であることが指摘されている。こうした新聞やテレビによる扱いによって、歴史的に形成された規範や価値観は「高校野球らしさ」として、広く社会に浸透してきたものと推察されよう。

一方で、ソーシャルメディアでは、高校野球の規範や価値観に準拠した報道などに対する批判的言説が「炎上」という形式で表出している様子も散見される。このことは、歴史的に形成された「正しく」「模範的な」「若者らしい」高校野球の規範や価値観が、固定的で不変のものではなく、動的で変動の可能性を含んだものであることを示唆していよう。この点を踏まえ、以下では甲子園大会の制度改正に関する動向から、高校野球の規範や価値観の動

態的な側面について、より具体的に検討してみたい。

2) 甲子園大会の制度改正にみられる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合い

これまで論じてきたように、一高野球における苛烈な練習が武士道的な心身の鍛錬として意味づけられたことを源流として、精神力の涵養や身体の鍛錬に重きをおく「精神修養・鍛錬主義」の信条が、戦後の高校野球においても「正しく」「模範的な」価値として継承されてきた。例えば、清水は1960年代の高校野球中継において肘の痛みに耐えて投げる投手を「見事な精神力」と語る実況から、「気迫・精神力」を「若者らしさ」と捉える高校野球の価値観を読み解いている（清水，1998，pp.39-50）。

その一方で、夏の甲子園に関する制度改正の変遷をみれば、選手の健康管理という観点から、身体の酷使を低減させるための対応が取られてきた様相も看取される。表1-1は、戦後の夏の甲子園における選手の健康管理に関する制度的対応について、その対応が生じた契機とされる事例と合わせて整理したものである。特に1990年代以降、選手の身体酷使が問題化されたいくつかの象徴的な事例を契機として、延長戦回数の削減、メディカルチェックの導入、大会日程の過密化是正、タイブレークや球数制限の検討といった制度改正が段階的に実施されていることが分かる。

表 1-1 選手の身体酷使に関する事例と高野連の制度的対応

1958	春季四国大会で、徳島商（徳島）の板東英二投手が延長16回の準決勝、延長25回の決勝を一人で投げた。この事例が選手の体調管理について検討する契機となり、同年の 第40回夏の甲子園から延長18回引き分けの規定 ができた。
1991	第73回夏の甲子園で、沖縄水産（沖縄）の大野倫投手が6試合を一人で投げ、大会後に右肘の疲労骨折が判明した。この事例を受けて高野連は選手の障害予防対策に本腰を入れ、メディカルチェックの導入が検討された。
1994	春夏の甲子園に出場が決まった選手は 整形外科医によるメディカルチェック を受けることが義務化された。
1998	第80回夏の甲子園で、横浜高校（神奈川）の松坂大輔投手が準々決勝のPL学園（大阪）との試合で延長17回、250球を一人で投げた。この事例が、延長回数の再検討や過密日程の解消に関する議論の契機となった。
2000	第82回夏の甲子園から 延長が15回までに短縮 された。
2003	第85回夏の甲子園から準々決勝を2日に分け、 同一チームの4連戦を避ける日程 が設定された。
2013	第85回夏の甲子園で済美高校（愛媛）の安樂智大投手が9日間で5試合772球を投げたことについて、米スポーツ紙が「正気の沙汰ではない」と報道し、身体酷使への批判が加熱化。同年の第95回夏の甲子園から、 同一チームの3連戦を避ける日程 が設定された。
2018	第100回夏の甲子園から延長12回を同点で終えた場合13回からは無死一二塁で攻撃を開始する タイブレーク制 が導入された。 12月に新潟県高野連が2019年の県大会で各投手の一試合での投球数を100球に制限する 球数制限を試験的に導入すると発表 した。
2019	新潟県の発表を受け、高野連が「 投手の障害予防に関する有識者会議 」を設置した。

朝日新聞社（2019）、広尾（2019）を参照し筆者作成

高柿は、選手の身体酷使の顕在化を契機とした上記の制度改正について、「スポーツ科学の発展により合理性や効率性が追求される」スポーツ界の今日的様相を背景とした「科学的野球スタイル」(高柿, 2020, p.146)という新たな価値観が、歴史的に継承されてきた武士道的野球観に基づく規範や価値観を揺るがした事態であると論じている。スポーツ科学的知見の蓄積と大会制度の改正との関係性については第四章でも改めて検討するが、例えばピッチング障害に関する論考(吉松, 1983)、高校野球選手の肘の障害に関する症例分析(長嶺ほか, 1996)、肩関節可動域と投球時の痛みの関連性に関する分析(中野ほか, 1997)など、1980年代から90年代にかけて、高校野球に関するスポーツ障害を対象とした医科学的研究の蓄積がみられる。こうした研究動向を踏まえれば、高柿が指摘するように、上述した制度改正は、高校野球に関するスポーツ科学的知見の蓄積と一定程度連動しながら展開してきたものと捉えることが可能であろう。

しかしながら、スポーツ科学的知見の蓄積が、歴史的に形成されてきた武士道的野球観を一新させたと言い切ることは難しい。友添(2016)によれば、日本におけるスポーツ科学的研究や方法論は、特に1964年の東京オリンピックにおける選手強化の動きを契機として発達し、その後徐々に一般化されてきたものの、その過程では現場の経験主義的、精神主義的方法論との対立もみられてきたという。甲子園大会の制度改正についても、例えばタイブレークや投手の球数制限の検討に際して、指導者側から「体を壊してまでやる必要は全くないが、人を育てるということ言えば、限界までトライしてほしいという思いもある」(毎日新聞, 2014年12月2日, 朝刊)、「負けたら終わりのトーナメント大会で(球数制限は)やってほしくない」(読売新聞, 2019年4月27日, 朝刊)など、まさに精神主義的、勝利主義的な価値観に準拠した立場からの問題提起もみられている。

このように、甲子園大会の制度改正に関する近年の動向に着目すれば、一高野球の信条を基盤として歴史的に形成されてきた観念と、スポーツ科学的知見に基づく選手の健康管理に主眼をおいた観念が、「正しく模範的な高校野球のあり方」をめぐるせめぎ合うなかで、段階的な制度改正が展開されてきたと捉えることができる。上記に示した2つの観念を、ここではそれぞれの主張の要点に基づき「鍛錬主義」、「科学主義」と命名しておく。

甲子園大会の制度面において、高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いが生じているという事態は、人々が抱く「高校野球らしさ」のイメージや捉え方を揺るがし変容させていくことにも繋がる可能性があるだろう。しかしながら、序章でも述べたように、高校野球を「若者らしさ」「青春」と解釈する枠組み、すなわち高校野球の「物語」は、今日においても人々の高校野球に対する見方を規定し、感動や熱狂の有りを形式づけているようにもみえる。例えば、朝日新聞が2004年に行った調査(狩野, 2004)では、高校野球を好意的に受けとめ楽しみにしている人々が、「選手が一生懸命だ」「さわやかだ」など、まさに「青春」「若者らしさ」に準拠した目線を高校野球に向けていることが示唆されている。

では、高校野球の「物語」は今日、揺らぎや変動の可能性を含みつつ、いかにして再生産されているのだろうか。特に、これまで高校野球に関する規範や価値観の伝播と人気の形成に大きな影響を与えてきたメディアは、その再生産構造にどのように関係しているのか。本研究ではこれらの点を研究課題として、メディアを介した高校野球にまつわる「物語」の再生産について検討していきたい。

3. メディア・スポーツと「物語」の概念

高校野球の「物語」とメディアについて議論を進めるにあたり、以下ではメディア・スポーツ、ならびに「物語」の概念について検討し、本研究の視座を提示する。

1) メディア・スポーツの概念と構造

黒田によれば、メディア・スポーツとは、報道の主体となるメディア、番組や記事などのテキスト、それを享受する受け手の相互作用からなる「メディアを媒介されたスポーツ文化全般」（黒田，2012，p.ii）を意味しているという。つまり、メディア・スポーツの基本的な構造は、送り手、メディア・テキスト、受け手の三者関係で整理される。

また、佐伯はメディア・スポーツの概念について「メディア論的には『メディア・ソフトとして編成されたスポーツ』と定義され、スポーツ論的には『メディアとしてのスポーツ』として定義される」（佐伯，2006，p.259）と述べている。「メディア・ソフトとして編成されたスポーツ」とは、「メディア・エージェントによってメディア商品・製品として編成され、消費・享受されるスポーツ情報」（佐伯，2006，p.258）、すなわち送り手によって生成されたメディア・テキストのことである。他方、スポーツはそれ自体が「身体的パフォーマンスとしての記号表現」（佐伯，2006，p.259）であり、特定の意味や価値をシンボリックに提示する「メディアとしてのスポーツ」の側面を有する。佐伯（2006）によれば、スポーツが内包する「メディアとしてのスポーツ」の特性が、「メディア・ソフトとして編成」されることで一層強化・拡張、あるいは矮小化されながら、受け手に意味の伝達がなされており、その構造を読み解くことがメディア・スポーツ論の固有命題であるとされる。

以上の議論を踏まえ、メディア・スポーツの構造を示したものが図 1-1 である。メディア・スポーツは、スポーツに関する無数の出来事を送り手が取捨選択し、再構成して伝えている点において、受け手に直接観戦とは異なる固有の経験を提供している。送り手がスポーツというメディア資源を取捨選択、再構成する過程は、機器・技術等のテクノロジーや送り手の職業文化・価値観、受け手の需要に対する洞察などの諸要素に規定される。この過程を経て生産されたメディア・テキストは、スポーツがもともと内包しているメディア性を強化・拡張、あるいは矮小化しながら種々のメッセージを生成する。受け手は生成されたメディア・テキストおよびメッセージを享受し、解釈・意味づけを行う訳であるが、ここでの解釈・意味づけのあり方は、視聴読者個々人の社会的・文化的背景により多様な形で現れる。

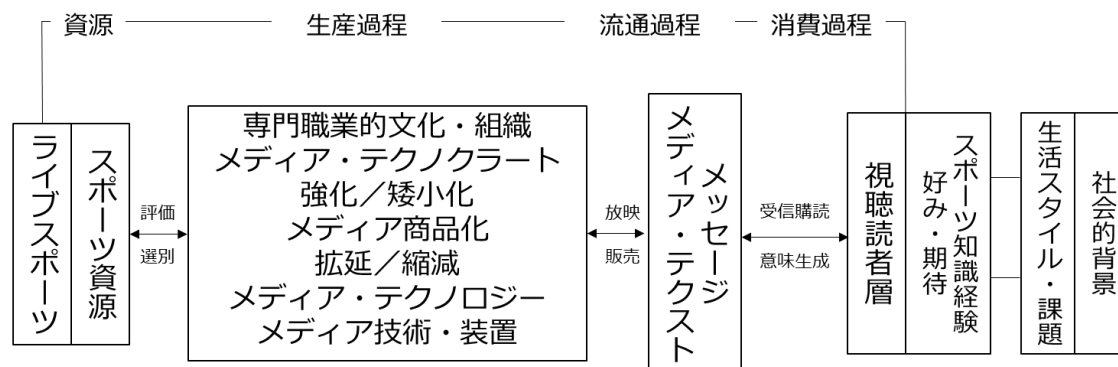


図 1-1 メディア・スポーツの構造

佐伯（2006）を参照し筆者作成

上記メディア・スポーツの構造に準拠し、「メディア・スポーツとしての高校野球」の様相と「物語」の生成について検討してみたい。これまで論じてきたように、高校野球はそれ自体が「正しく」「模範的な」「若者らしさ」という価値をシンボリックに提示する「メディアとしてのスポーツ」として存立してきたものと思われる。また、新聞やテレビへの多量の露出と、そこで展開される高校野球の規範や価値観に準拠した「美談」は、まさに高校野球が内包するメディア性を強化したメディア・テキストであるといえる。こうしたメディア・テキストおよびそのメッセージが歴史的に繰り返し受け手に提供され続けた結果、清水（1998）や有山（1997）が論じたように、「青春」や「若者らしさ」といった高校野球に対する共通観念、すなわち高校野球の「物語」が社会に浸透し、高校野球文化に対する受け手の解釈のあり方を規定しているものと捉えうる。しかしながら、今日では、受け手が自らの考えや意見を発信し、それがメディア・テキストとして多数に共有されるソーシャルメディアなどにおいて、歴史的に形成された高校野球の規範や価値観に対する批判的な言説も散見される。

本研究は、上述したメディア・スポーツ論の視座に立ち、送り手、メディア・テキスト、受け手の三者関係を中心とした構造において、高校野球の「物語」が再生産される今日的なダイナミズムを読み解く「高校野球のメディア・スポーツ研究」として位置づけられる。

2) 「物語」の概念と理論的系譜

「物語」という概念について、井上は「現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係に従って一定のまとまりをもって叙述したもの」（井上，1996，p.21）と定義している。また、藤田は「物語」の機能について、出来事を時間の経過の中で「必然的な因果関係」（藤田，2006，p.167）として理解することで、そこから「教訓」「喜び」「恐怖」「憐れみ」などの心的作用がもたらされると述べている。

「物語」という言葉は、一般的には小説や映画、舞台などの「作品」を指すものとして用いられているが、井上（1996）や藤田（2006）の議論に依拠すれば、これらの「作品」は、時間的順序の中で事象の因果関係が配列されて構成されているという意味において「物語」なのである。したがって、「物語」的要素を有する事象は必ずしも文学作品やメディア作品だけであるとは限らない。後に詳述するが、例えば歴史の理解や人々の意識、価値観などについても、世界を因果関係（意味のまとまり）に再構成し理解するという点において、広義に「物語」という視点から読み解くことが可能となる（小方，2018）。

文学作品やメディア作品を対象とした狭義の「物語」研究については、その構造と機能を体系的に論じたプロップ（1983）を始め、様々な理論・方法論が蓄積されているが、本研究ではあくまで「高校野球に対して人々に共有された共通観念」を「物語」の概念を用いて分析することから、「作品」を対象とする狭義の「物語」研究に関する詳細な議論は避け、社会学領域で扱われる広義の「物語」概念について検討していくこととする。

浅野（2000）によれば、社会学的な広義の「物語」概念は多様・曖昧であり、明確に定義する理論的および方法論的同一性はないという。「物語」概念の多義性を踏まえ、浅野は社会学に重要な影響を与えてきた「物語」論として、「歴史哲学の視点からの『物語』論」、「認識論の視点からの『物語』論」、「イデオロギー論の視点からの『物語』論」、「臨床的視点からの『物語』論」という4つの系譜を検討している。

まず、「歴史哲学の視点からの『物語』論」とは、歴史的な事象を「意味のまとまりとして理解可能なもの」（浅野，2000，p.147）として記述するために「物語」概念を導入してきた諸研究の議論を指している。歴史学の意義は過去に生じた諸事象の関係性を理解可能なものにすることである（Mink，1974）とされるが、諸事象の関係性は、事後的な観察・記述によって初めて説得的なものとなる。ここに、「遡及的に事象を選択・配列する構造化の過程」（浅野，2000，p.148）を把握する理論的枠組みとして「物語」の概念が導入され、歴史を記述する（「物語る」）ことが歴史的事象の意味関連を創出する説得行為であるとする立場が形成されてきた（大塚，2006）。

また、「認識論の視点からの『物語』論」とは、歴史認識の「物語」性を指摘した上記の議論に対し、その観点を個人の認識論にまで拡張したものである。個人の認識は日常的な諸体験が意味的に再構成されているという点において「物語」として捉えることが可能であり、「どんな人であれ、その生活を営む上で、何がしかの歴史認識や何がしかの社会認識をたえず産出し、訂正し、伝達しているはずだ。（中略）そもそも日常的な諸体験自体がどれもみな意味的に構成され、解釈過程のうちにおかれているのだとすれば、そこにもまた物語化の働きが介在しているのではないか」（浅野，2000，pp.148-149）という問題関心から出発する認識論的「物語」論は、個人の心理作用やアイデンティティ形成を分析する理論的枠組みとして採用されてきた。

認識論的「物語」論の視点に依拠すれば、現実にかかる事象の捉え方（「物語」化のあり方）は当然個人により異なるため、「物語」の唯一性の否定、すなわち「世界や自己には複数のバージョンが存在し」「それら諸バージョンの間の優劣を客観的に評定し得るような超越的視点が存在しない」（浅野，2000，p.150）という前提に立つことになる。しかし、実際には個人がある事象を認識するとき、特定の解釈のパターンを「無自覚に自然なもの」（浅野，2000，p.151）とみなすこともある。このような、自明視され正統性を帯びた共通観念としての「物語」が社会に成立していること着目したのが、「イデオロギー論の視点からの『物語』論」である。例えば、人類学では、「物語」としての神話の構造分析から、個人に内在する普遍性を帯びた神話的思考に焦点があてられ（レヴィ=ストロース，1970）、「世界を認識するために人間が潜在的にもつ、像やストーリーの束をたよりにして構築されたモデル」（山口，1978，pp.175-176）としての神話が、特定の文化圏において儀礼や見世物によって成員に伝達、共有される様相が記述されてきた。この視点は、社会学におけるイデオロギー研究とも親和性を有し、メディアの意味作用やメッセージを分析する理論的枠組みとしても援用されている。

また、「臨床的視点からの『物語』論」とは、個人の認識的な「物語」を構成主義的な観点から捉え直し、認識的「物語」に他者が介入することによって個人の新たな「物語」が編み上げられていく側面に着目する立場である。この視点は主に家族療法における実践形式の1つとして、セラピストが治療対象者との会話を通じて対象者の認識的「物語」に介入し、「会話の中の共同作業として物語が書き換えられていく」（浅野，2000，p.154）ことで対象者の心的問題を快方に導くというアプローチの理論的背景として議論されてきたものである。

3) 高校野球の「物語」という視座

浅野は上述した「物語」論の系譜を踏まえ、社会学的「物語」論では、「人々があたかも自分自身の欲望にしたがってそうしているかのように、自然に行動してしまう」(浅野, 2000, p.155) 状況について、個人の能動性を無視した構造決定論や構造的な権力作用を無視した構築主義などに偏ることなく、構造的な力学と個人の認識・行為との相互作用のダイナミズムとして検討することが重要であると論じている。この視座は、先述した「イデオロギー論の視点」、すなわち人々に共有され自明視されている自然な社会の「物語」という視点に基礎をおきつつ、その「物語」が成立する様相を構造と認識・行為の相互関係から読み解くことを志向するものである。

既に社会学領域では、上記の視座から特定の社会・文化の成員に共有された観念、自明的なものの見方や解釈の枠組みを「物語」として扱った研究が散見される。例えば、井上(1996)は、個人の認識的な「物語」は常に「文化要素としての物語」、すなわち文化として個人を取り巻く認知や解釈の枠組みを内面化するプロセスを経て組みあげられていることに言及している。また、津田は「共同体の物語」(津田, 2013, p.16)、「社会で共有された物語」(津田, 2013, p.19) という視点で戦後から現代までの日本を取り巻く規範や価値観を検討し、現代の日本には「シニカルな物語」、すなわち意見の異なる他者の背後に私的利益を読み込むことで一方的に距離化し批判対象とするような物事の捉え方が社会に蔓延していることを指摘している。「物語消費論」という観点から現代の消費者動向を読み解いた大塚(2001)は、かつて伝統的共同体や宗教的秩序の中で共有されていた「物語」から解放された人々が、世界の輪郭を理解する「物語」の潜在的な作用を欲し、個別の商品を通じてその背後にある世界観や秩序の体系を消費している事態に注目している。

以上、文化的・社会的な共通観念を「物語」という概念から検討した諸研究を示したが、本研究で扱う「高校野球の『物語』」も、上記「物語」論の系譜に接続するものである。高校野球においては、「精神修養・鍛錬主義」などの信条を基盤とした「正しく」「模範的な」「若者らしさ」の規範や価値観が歴史的に形成されてきた。また、これらの規範や価値観は、それに準じる事象を「美談」として扱うメディアによって伝播し、高校野球に対する人々の解釈に影響を与えている。これらの点を、「物語」の概念を用いて検討することにより、「高校野球らしさ」ともいうべき観念が自然なものとして人々に浸透し、高校野球の見方を規定している様相を、構造的な力学と個人の認識・行為との相互関係にみられるダイナミズムとして読み解いていくことが可能となろう。

以上の議論を踏まえ、本研究では「高校野球をめぐる歴史的動向のなかで生成され社会的に共有された高校野球に対する価値観や観念、ならびに高校野球に対する見方や解釈の枠組み」を「高校野球の『物語』」として捉え、メディアを介した「物語」の再生産に関する今日的な様相について検討していく。

第二章 先行研究の検討および本研究の目的

本章では、儀礼論的スポーツ研究とメディア・スポーツ研究の系譜について整理したうえで、その系譜に連なる高校野球の「物語」研究とその課題について検討していく。また、課題の検討を踏まえ、本研究の目的を提示する。

1. 儀礼論的スポーツ研究の視点

人類学や社会学の領域では、「所定のパターンに従いつつ、〈象徴／シンボル (symbol)〉を通して公共的な、あるいは共有された意味を表現するあらゆる公的行為」(アバークロンビーほか, 1996, p.281)を儀礼という概念で捉え、宗教的儀礼(デュルケム, 1975)や通過儀礼(ヘネップ, 1977)などにみられるように、象徴性を通じて社会統合が達成される様相や、個々人が所属集団の価値基準や世界観を内面化する様相などが検討されてきた。Klapp (1965)によれば、儀礼とは反復性、規則性、情緒性、ドラマ性、象徴性の要素から成り立つものであるという。公的な式典や儀式のみならず、演劇やゲームなどの種々の文化事象も、ある種の儀礼的な要素を備え、特定の社会や文化圏において共有された意味や価値をシンボリックに伝達しているものとされており、その意味で、スポーツも儀礼性を有する文化事象の一つとして研究対象とされてきた。

1) スポーツの儀礼性

プレイ(遊び)の概念と儀礼の概念の関係性について検討した青木は、特に伝統社会において、プレイ(遊び)と儀礼が「日常的な社会秩序からの分離」という点で共に「境界性の経験」(青木, 1984, p.149)であり、「象徴的コミュニケーションのための文化的に構成されたシステム」(青木, 1984, p.151)として捉えうることを指摘している。この点について、作田(1967)は、遊戯と儀礼がともに日常生活から独立した象徴的活動であり特有の規則に支配されているという共通項を挙げたうえで、自由か厳粛かという点において日常生活からの独立の仕方が対極的であると論じている。しかしながら、作田は「反世俗性という媒介項を通じて宗教的儀礼のきわめて濃厚な厳粛性が、ほんらいシリアスではありえないところの遊戯の形式の中に、かなり自然に盛り込まれるということもありうる」(作田, 1967, p.264)とも指摘し、スポーツ等の遊戯的文化が宗教的儀礼を代替しうる可能性も示唆している。また、Turner (1974)によれば、伝統社会においては部族や血縁という共同体が基盤となり、儀礼による統合の感覚が生成されていたが、近代社会ではその基盤が芸術、スポーツ、ゲーム、娯楽などのレジャー領域にシフトしているという。Turnerはスポーツをすることについて、苦痛を伴う相互のぶつかり合いが生じるものの、俯瞰的にみれば「参加者が一つの統一的体験へと『流れ』ていく機会」であり「同時に、内省的側面をも合わせもつ」(ターナー, 1981, p.80)と捉えており、スポーツの場に、非言語的な過程で共同体のコードと自分の生き方を理解するという儀礼的作用が生じることを示唆している。

青木(1984)や作田(1967)、Turner (1974)の議論は、スポーツという文化が非日常的、象徴的営みとして、共同体の統合や価値の内面化に寄与する儀礼的作用を有するという示唆的な視点を提示している。こうした儀礼論的な視点に依拠し、スポーツ文化にみられる儀礼性について個別具体的に分析した研究が展開されてきた。

例えば、ギアーツは、「アメリカなるものの多くが、野球場、ゴルフ場、競馬場、あるいはポーカーテーブルに表れるのと同じように、バリなるものの多くが闘鶏場に現れる」（ギアーツ, 1987, p.397）ことを発見し、緻密なフィールドワークによって、闘鶏がバリの村落社会における日常的な（あるいは潜在的な）知覚と経験の象徴構造として存立している様相を読み解いている。動物を嫌悪の対象とする文化において、鶏を男性シンボルとみなして生死を賭けた戦いに投じ、戦いを焦点として当事者および見物人による二重の賭博が行われる闘鶏は、平静さの背後に潜む日常では抑制された本質的な残忍さ、地位への関心や羨望などを提示する形式づけられたモデルであるとされる。バリ人は闘鶏を通じ、これらの気質を形成すると同時に発見しているという。

また、DaMatta（2009）はギアーツらの儀礼論的視点を援用し、ブラジル社会のフットボール文化の分析を試みている。ブラジルにおいてフットボールは、運命と個人の欲望との対立という宗教観、人種主義に根差した悲観思想とその転覆、ブラジル国民としての帰属意識、伝統的な階級的秩序と平等主義の相克など、ブラジル社会を潜在的にとりまく価値観のダイナミズムについてのメタファー（ドラマタイゼーション）として定位しているという。ブラジル国民はフットボールを通じ、これらの価値観を内面化しつつ、自らを表現していると指摘している。

日本では、山口が相撲にまつわる儀礼性について検討し、「民族的想像力の中で、相撲及びそれを成り立たせている原理は、目に見える風景を、不可視の風景（トポス）に重ねるための仕掛けの一つであった」（山口, 1983, p.324）と論じている。髷という江戸時代を模した髪型や化粧廻しにみられるアナクロニズムなど、相撲が提示する記号は日本古来の時間感覚を温存して表面化し、近代的に均質化された時間感覚と仲介する作用を果たしているという。また、舞台（土俵）における東西の二分など、相撲に内在する種々の二項対立構造は、現実社会に様々なレベルで存在する二項対立構造を劇化し、遊戯として提示する枠組みを提供しているとされる。

上記の諸研究は、それぞれ特定の文化圏における価値基準や世界観などがスポーツによって象徴的に提示され、それらが人々に内面化されつつ秩序形成がなされる様相について論じている。儀礼論的スポーツ研究は、スポーツが単に個々人の気晴らしとしてのみではなく、ある集団において成員に特定の価値観や認識の枠組みを内面化、共有させる文化的営為として定位していることを具体的に読み解いた点に特徴を有する。

2) スポーツと「神話」、イデオロギー

マカルーン（1988）は、スポーツの儀礼性をはじめ、特定の文化圏においてシンボリックな意味の生成・伝達が行われる文化事象を文化的パフォーマンスという概念で説明した。文化的パフォーマンスとは「単なる娯楽や、教訓ないし説得の定式や、また放縦な憂さ晴らしなどを越えるもので、一個の文化あるいは一個の社会としてわれわれが自らを鏡に映しだし、自らを定義し、その集合的神話と歴史を劇化し、様々な代替案を自らに提示し、結局、ある面では同じ姿のまま留まりながら、ある面では変身を遂げる場となるものである」（マカルーン, 1988, pp.11-12）という。マカルーンの記述にみられるように、特に人類学領域では、特定の社会や文化における個々人の認識や信念体系を形作る枠組みを「神話」という概念で捉え、「神話」を生成・具現化する儀礼の作用が検討されてきた。ここでいう「神話」

とは、伝承されている個別の伝説や古典的作品などを表す狭義の概念ではなく、「われわれの心に沈殿して、われわれの意識の表層を決定するエピステーメ（認識）の膜のようなもの」（山口，1978，p.174）、すなわち個々人に内面化された潜在的な思考のモデルを指す広義の概念として扱われている。

Kilmer（1977）によれば、儀礼は「神話」的思考の行動的側面であり、人の無意識レベルに沈殿する「神話」を社会現象として具体化、象徴化し、集団の連帯形成と「神話」的思考の伝播を担っているという。また、Kilmer はスポーツが儀礼的作用を有することにも言及している。具体的には、作田（1965）の議論と同様、スポーツは日常から切り離された空間の神聖性、固有のルールや規範とその反復という点で儀礼的な構造を有しているとみている。Kilmer の議論に依拠すれば、スポーツという儀礼を通じて、人々はある種の「神話」的な思考の枠組みを象徴化し、伝播している可能性を指摘できる。例えば、高橋（1994）は日本のプロ野球観戦者にみられる集合的な応援行動に着目し、そこで象徴化される「神話」について考察している。高橋によれば、プロ野球の応援に用いられるリズムの基本型は日本古来の農耕儀礼において扱われるリズムと一致しており、集団的な応援行動は、呪術的な力を使って人間の意志で願いを実現しようとする「神話」的思考を表出させ共有する集合的沸騰の状態として捉えられるという。また、清水（1987，1989，1998）は日本の高校野球が儀礼的に「神話」的な思考の枠組みを伝播している様相について綿密に分析・考察した。清水による一連の研究は、高校野球の「物語」生成に関わる重要な議論として、後に改めて詳細に検討することとする。

スポーツが儀礼として人々の潜在的な思考の枠組みを生成・具現化しているとする「神話」論に近似的な議論として、スポーツのイデオロギー論をあげることができる。この観点は、イデオロギー、すなわち「人びとが世界に意味を与え、彼らの経験に意味を持たせるために用いる思想と信念が編み込まれたもの」（コークリー・ドネリー，2011，p.19）を生成する装置としてスポーツを捉える立場である。コークリー・ドネリーは、スポーツ文化が社会の権力者や支配層が自らに好ましいイデオロギーを強化、再生産するための装置として定位していることを指摘した。スポーツの理念や組織化を通じて、身体、能力、ジェンダー等に関する支配的イデオロギーが固定化されている可能性があるという。また、影山（2017）はオリンピックにナショナリズムの高揚と対立、スポーツの過剰な産業化、勝利至上主義、差別の助長、環境破壊などの問題が内包されていることを指摘し、オリンピックイデオロギー、およびそのイデオロギーを背景とする過度なチャンピオンスポーツへの傾倒や規律訓練としての体育のあり方などに警鐘を鳴らしている。これらの研究にみられるように、スポーツのイデオロギー論は、主にヘゲモニックな思想や価値体系に対する批判的検討の文脈で展開される傾向にある。

さて、ここまでスポーツの儀礼性と「神話」、イデオロギーに着目した研究を概観してきた。スポーツを儀礼として読み解く諸研究では、スポーツによって特定の文化圏における価値基準や世界観が象徴的に表現され、秩序形成がなされる様相が検討されてきた。特に、ここで具現化・共有される人々の潜在的な認識・思考の枠組みは「神話」という概念で捉えられ、スポーツが伝播する「神話」的思考の枠組みを分析する研究もみられている。

ただし、研究の焦点がスポーツによって象徴化される意味や価値の読解に向けられる一

方で、それらの意味や価値の体系がスタティックな構造として扱われる傾向にあることから、意味や価値の生成と変動をダイナミックに読み解く試みなどはあまりみられていない。この点については、儀礼論的スポーツ研究の系譜上に位置する高校野球の「物語」研究にも共通する課題として、後に改めて検討することとしたい。

また、イデオロギー論の文脈をみれば、スポーツの象徴性が支配的な価値の形成に寄与しているという指摘もなされている。スポーツの「神話」論とイデオロギー論は、問題関心の違いはあるにせよ、スポーツを通じて人々の認識を形作る枠組みが象徴的に伝えられているという観点を共有している。この観点は、特にメディアで報じられるスポーツを読み解く際に有効なものとされ、メディア・スポーツ論の研究視点として援用されていくこととなった。

2. メディア・スポーツ論の研究系譜

メディア・スポーツの研究史を整理した橋本（2002）によれば、メディア・スポーツ研究の視点は、受け手の思考・行動に与える影響に着目した機能主義的研究、儀礼論に依拠しメディア・スポーツの儀礼性に焦点を当てた研究、メディア・スポーツのテキストにみられる意味付与やイデオロギー性を読み解いた研究、メディアによる伝達と受け手による解釈との相互作用に着目したカルチュラル・スタディーズ的研究などの系譜に大別されるという。ここでは高校野球の「物語」論に特に関連する議論として、後者3つの研究系譜、すなわち儀礼論的メディア・スポーツ研究、メディア・スポーツのテキスト分析、カルチュラル・スタディーズ的メディア・スポーツ研究について検討する。

1) 儀礼論的メディア・スポーツ研究

1960年代以降、マスメディアが人間の行動や価値観形成に大きな影響を及ぼしていることが西欧諸国で注目されはじめたことを背景として、マスコミ研究やメディア論の研究領域が成立・発展した（橋本，2002，p.29）。メディア研究黎明期に、メディア・スポーツの儀礼性に言及した研究として、Real（1975）によるアメリカン・フットボールに関する論考があげられる。Realはフットボールがファン集団のアイデンティティ形成、巡礼が可能な聖地の設立、集団的熱狂の焦点としてのゲーム、シーズンのサイクルによる時間感覚の提示などの点で儀礼的な要素を備えていると捉え、フットボールがもたらす儀礼化された大衆活動が、電子メディアとスポーツスペクタクルが結びつくことで達成されていると論じている。しかしながら、スポーツの儀礼性にメディアがどのような影響を与えているのかについて、具体的な検討はなされていない。

スポーツの儀礼性に関するメディアの影響に具体的に言及した萌芽的研究として、Cheska（1981）の論考があげられる。CheskaはKlapp（1956）が提示した儀礼の要素に照らし、スポーツ・イベントが儀礼としての要素を備えていることを示した。スポーツ・イベントは、善と悪（敵と味方）、秩序と混沌、男と女、「持つもの」と「持たざる者」などの二項対立により、観戦者に権力性と支配のメッセージを提示しているという。ここでCheskaが扱う観戦者とは、スポーツ・イベントの会場で観戦する者と、マスメディア（テレビ）を通じて観戦する者の両者を含んでいる。マスメディアによってスポーツ観戦への参加が容易になることは、スポーツによる象徴的な意味の伝達をグローバル規模で達成する

ことに寄与しているとされる。

メディアの影響をスポーツという儀礼的空間の拡張と捉えた Cheska (1981) の議論に対し、Deegan and Stein (1978) は、メディア・スポーツに生じる特有の儀礼性について言及している。Deegan and Stein によれば、米国のフットボールでは暴力の統制と官僚的システム、性別役割分業、商業主義などのアメリカ文化の暗黙のテーマが象徴的に表現されており、人々は観戦という非日常的空間において共同体の価値観との結びつきを体験しているとされる。そして、スポーツのテレビ放送によって、多数の人が同時にゲームに参加することが可能になったこと、メディアがスポーツの提示する価値観を恣意的にコントロールしていることなどを指摘している。例えば、新聞によってシーズン前の特集記事、シーズン中の試合報道、シーズン後のイベント報道や来季の予測などが通年的に報じられることにより、フットボールが 1 年を通じた「物語」として人々に提供されているという。また、Wahnnel (1992) も Deegan and Stein と同様、メディアによるスポーツの伝え方が特有の儀礼的作用をもたらしていると指摘する。具体的には、テレビ放送のリプレイや時系列の操作などの技術が儀礼性を強化していること、恣意的な放送構成（編集）がスポーツ・イベントに対する視聴者の一体感を促進させていることなどを挙げている。

メディア・スポーツの伝え方から生じる特有の儀礼性に加え、受け手であるテレビ視聴者の視聴形態により生じる特有の儀礼性を検討した研究も散見される。例えば、Rothenbuhler (1988, 1989) はオリンピックについて、アメリカ国民の多くが他の番組と比べて特別に集団で観戦する傾向にあり、視聴形態がある種の祝い事として定位していることを示唆している。オリンピック視聴という儀礼的行為は、視聴者が社会で共有された価値観や信念をシンボリックに受け取りながら、個人と社会の繋がりを再確認、再構成し、社会統合を達成する定期的な機会であるという。また、Eastman and Riggs (1994) はスポーツファンがテレビ視聴時においてもチームのユニフォームやカラーを身にまとうことや、特定の食事や行動様式に固執し反復するような行為がみられることに着目し、行為の意味を検討する実証研究を行った。Eastman and Riggs のインタビュー調査は、テレビ視聴者の行為の意味として「メンバーシップ」「参加」「接続」「安心感」「影響力」の概念が抽出されている。ファンはテレビの前での儀礼的行為によってゲームに参加し、自身の行為がチームのパフォーマンスに影響を与えていると信じ、チームを取り巻く共同体の一員として統合される感覚を享受している可能性があるという。

2) メディア・スポーツのテキスト分析

Deegan and Stein (1978) や Wahnnel (1992) が指摘したメディアによる恣意的な構成、すなわちスポーツを編集によって再構成し、特定の意味や価値を伝達するテキストを生成するというメディアの働きに着目すれば、メディア・テキストが具体的にどのような意味や価値を提示しているのかを読み解くことは、メディア・スポーツ研究における重要な検討課題となる。このことから、新聞報道やテレビ放送などの内容からどのようなメッセージが伝えられているのかを析出する、いわゆるメディア・テキスト分析は、「メディア・スポーツ研究において最も好んで取りあげられた研究テーマのひとつ」(山本, 2000, p.3) となった。

Kinkema and Harris (1992) は、1991 年までに報告されたメディア・スポーツのテキスト分析 152 件の二次分析を試みている。Kinkema and Harris によれば、メディア・スポ

ーツのテキスト分析では主に「ナショナリズム」「ジェンダー」「人種」「勝利や成功」「競争的個人主義」「チームワーク」「暴力」「消費社会」などの主題が析出される傾向にあり、メディア・スポーツの提示する価値と社会の支配的なイデオロギーとの親和性を指摘できるという。この分析結果は、メディア・スポーツのテキストを「神話」論やイデオロギー論の観点、すなわち人々の認識や価値観を形作る枠組みの象徴的な伝播という観点から分析することの妥当性を示唆しているといえる。

Kinkema and Harris (1992) が検討した期間以降、日本でもメディア・テキスト分析を用いてメディア・スポーツが提示する意味や価値、「神話」やイデオロギーを読み解く研究が盛んに行われてきた。例えば、舛本 (1998) はオリンピックを題材とした 7 つの記録映画に関するテキスト分析から、オリンピズムという思想の多元性と、その思想が「神話」として再生産されることを示す映画表現上の仕掛けについて分析している。オリンピックの記録映画では、主に個人主義、民族主義、国家主義・愛国主義、国際主義・普遍的人間主義などの多元的な意味の表現がみられ、これらの表現が「繰り返し反復され、同じ意味を伝え、同じものとして解釈され意味が固定」(舛本, 1998, p.43) されることで、人々の心の奥底に沈殿し表層意識を支配するオリンピズムの「神話」が生成されるという。

グローバル規模でのオリンピック「神話」の生成に着目した舛本 (1998) に対し、ローカル・スポーツにおける「物語」生成に着目したのが山本 (2005) である。山本は九州一周駅伝に関する西日本新聞の報道内容を分析し、「駅伝の物語」の構造について検討している。山本の分析では、九州一周駅伝の新聞報道から「チーム間競争」「個人競争、あるいはヒーローの活躍」「九州らしさ」「家族関係」「復活」「雪辱」「郷土愛」「世代間関係」「仲間への感謝」「九州一周の伝統」など多様な意味が析出され、読者の興味関心に応じた多様な解釈を許容するテキストの構造が示されている。一方、それぞれの意味の関係性をみると、「チーム間競争」という「物語」を中心として構造化されており、多様な語りが特定の「物語」構造に収斂しているとも捉えうるといえる。

また、トンプソン (2008) は人種概念が言説的に構築されるという立場から、日本のメディアによるスポーツの扱いと「日本人種」言説の再生産に関する諸相を分析している。アスリートを扱う書籍、広告、相撲の中継放送など、多様なメディア言説から日本人特有の身体性に関する語りを析出したトンプソンは、「日本人種」が生物学的固有性を有する存在として自明的に語られる一方で、その身体性に付与される意味は文脈によって多様である(あるいは、都合よく意味が付与されている)ことを指摘している。

これらのメディア・テキスト分析は、テキストを解釈するという点で分析者による主観的判断の余地が大きいことから、分析の客観性や説得性を担保するにあたり、方法論および手続きの妥当性が重要視されることとなる。この点について、橋本 (1986, 1988) は、文化現象が象徴的に形成する意味体系の解読を志向した「記号論」に示唆を得て、メディア・スポーツに対する記号論的分析を提案している。記事や放送などの表現そのもの(記号表現)が何を意味しているのか(記号内容)を理論的枠組みに基づいた手続きを経て検討する記号論的分析は、メディア・スポーツが人びとの思考の枠組や価値観を形成している構造を客観化するという点において、特にテキストから「神話」の生成やイデオロギー性を読み解く手法として妥当性が高いものとされた(橋本, 1986, p.44)。橋本の分析では、日本の大相撲に関する新聞報道から「男らしさ女らしさ」「地域的アイデンティティ」「家父長制」「たて

社会」「師弟愛」「競争」という価値、またプロ野球の新聞報道やテレビ放送から「個人の道徳的価値（統率力、不屈の精神、冷静さ、礼儀正しさ等）」「義理人情的関係」「エスノセントリズム」「ローカルまたはナショナル・アイデンティティ」「セクシズム」という価値が析出されている。

3) カルチュラル・スタディーズ的メディア・スポーツ研究

ここまでみてきたように、メディア・スポーツが提示する意味や価値を読み解く試みとして、メディア・テキスト分析が盛んに行われ、方法論的な精緻化も進められてきた。しかしながら、メディアがどのような伝え方をしていたとしても、解釈の仕方は受け手に自由に開かれているのではないかという指摘も残る。この点について、カルチュラル・スタディーズ派のメディア研究では、受け手の解釈を射程に含めて、メディア・スポーツによる意味や価値の生成を捉えなおそうという試みがなされている。

カルチュラル・スタディーズの視点に依拠しメディア・スポーツについて論じたハーグリーヴス（1993）は、メディア・スポーツが特定の社会的価値やイデオロギーを強化していると論じたうえで、その過程が視聴者の解釈との相互作用によって成立している点に着目している。ハーグリーヴスによれば、メディア・スポーツは秩序と統制、競争の個人主義と市民的私生活主義、ジェンダー、人種差別主義と結びつく民族中心主義などの価値を提示しているとされる。そして、こうした諸価値を含んだスポーツニュース等は、意図的に労働者階級の文化に親和性の高い言語や表現のスタイルを用いることで、受け手を「決められた流儀で解釈するように誘惑」（ハーグリーヴス，1993，p.196）していると指摘する。その結果、受け手に自然に受け入れられ、強化・再生産される支配的なイデオロギーは、支配集団と労働者階級の関係性を保守するよう駆動しているという。

また、Davis（1993）も、メディア・テキストに対する受け手の解釈が単一ではないということを前提としながらも、テキストの構造によって理想的な受け手と好ましい読み方が設定されている点を強調している。Davis はスポーツ・イラストレイテッド紙のテキスト分析を行い、テキストのメッセージが西洋人・白人、富裕層、キリスト教徒、異性愛者の男性の読者が有する観念を仮定して構成されていることを指摘した。上記の読者が自らの観念に準じてテキストの意味を補完しながら解釈することで、スポーツ界のヘゲモニックな価値観やイデオロギーが強化されている可能性があるという。

メディアの伝え方に対する受け手の「従順な解釈」、意味の補完による価値やイデオロギーの生成を指摘した上記の諸研究に対し、テキストを多様に（時には対抗的に）解釈する受け手に着目した研究も散見される。例えば Wilson and Sparks（1996）は、有名な黒人アスリートが出演するスニーカーの CM を黒人と非黒人の若者集団に視聴させた結果、集団によって CM に異なる意味づけがなされたことを報告している。黒人の若者集団は、スニーカー自体や起用されたアスリートに肯定的なインパクトを受けており、彼らにとってスニーカーと黒人の表象はライフスタイルとアイデンティティ形成に密接に関連するものとして捉えられていたという。しかし、非黒人の集団は、スニーカーにそれほど価値を見出しておらず、CM から受けたインパクトも少なかったとされる。この結果は、同じメディア・テキストであっても、それを解釈する枠組みは所属するコミュニティの社会的位置やアイデンティティによって異なることを示唆している。

また、高橋（2000）は、阪神大震災の被災と関連付けて語られるプロ野球オリックス球団優勝の「物語」とファンの経験や認識のズレに着目し、メディア・テキストと受け手の解釈を詳細に分析している。震災後に優勝を果たしたオリックスの軌跡は、新聞報道において「被災地の試練」「オリックスの躍進と被災地復興の重なり」「優勝による被災地への勇気・元気」「ありがとう（感謝）」「復興への希望」という文脈で報じられていたという。しかし、震災後の復興を生活課題として抱えるファンは、オリックスの優勝に元気づけられたことを認める一方で、優勝と復興は本質的には無関係であるという思いも持ち合わせていたとされる。このことから、高橋は、受け手に「テキストが積極的に読解され、受け手の側で意味が補完・再構成される以上の能動性、すなわち、このメッセージを拒み、跳ね返す程の能動性があること」（高橋，2000，p.70）を指摘している。

このように、カルチュラル・スタディーズ派のメディア研究は、受け手による「読みの多様性」（山口，2001，p.54）を考慮し、メディア空間を送り手と受け手による意味をめぐる抗争の場として捉え分析してきた。これらの研究によって、テキストに対する受け手の「従順な解釈」や「対抗的な解釈」などの諸相が示され、メディア・スポーツを通じた意味や価値の生成は、テキストが固定的に決定するものとしてではなく、解釈をめぐる送り手と受け手の相互作用によって動的に構築されるものとして捉えうるという視点が提示された。

ここまで、メディア・スポーツ研究について、儀礼論的メディア・スポーツ研究、メディア・スポーツのテキスト分析、カルチュラル・スタディーズ的メディア・スポーツ研究の系譜について検討してきた。儀礼論的メディア・スポーツ研究では、主に人類学領域で論じられてきたスポーツの儀礼性に関する議論を拠り所として、メディアがスポーツの儀礼性を拡張することや、メディア・スポーツが特有の儀礼性を生み出すことなどが示唆されている。また、スポーツが象徴的に提示する意味や価値が人々の認識や価値観の枠組みを形成する側面があることに着目する「神話」論やイデオロギー論の観点から、メディア・スポーツが伝達する意味や価値を読み解くメディア・テキスト分析も展開されている。しかし、テキストが特定の意味や価値を受け手に伝えているとしても、受け手がそれを皆同一に解釈するとは限らない。カルチュラル・スタディーズ的メディア・スポーツ研究によって、メディア・スポーツによる意味生成は、受け手の多様な解釈との相互作用によって構築されるものとして捉えうることが示されている。

以上の研究系譜によって、送り手、メディア・テキスト、受け手の三者が構成するメディア空間においてスポーツが生成する意味や価値を分析する枠組みが体系化されてきた。本章の冒頭でも述べたように、この枠組みは日本において、メディアを介した高校野球の「物語」生成に関する分析にも援用されている。ただし、上記の枠組みはあくまでマスメディアと受け手の関係性を前提としたものであり、第一章で論じたような、受け手が同時に送り手となり得るソーシャルメディア等の作用をいかに把握するかという点は、課題として残されているものと思われる。この点については、後に高校野球の「物語」研究に関する課題を検討する際にも改めて言及する。

3. 高校野球の「物語」に関する研究

ここまでみてきたスポーツの儀礼性に関する諸研究、およびメディア・スポーツによる意味や価値の生成・伝播に関する諸研究を念頭に、以下ではこれらの研究と関連しつつ展開されてきた高校野球の社会学的研究、高校野球のメディア論と「物語」研究について検討していく。

1) 高校野球の社会学

日本において、高校野球が人々に提示する意味や価値を読み解く研究は、主に体育・スポーツ社会科学研究の領域で扱われてきた。その先駆的な研究として、戦後の高校野球文化について検討した作田（1967）の議論が挙げられる。作田は、精神主義と勝利主義が手を結んだ高校野球の様相をある種の宗教的儀礼と捉え、「日本の軍隊が日本の社会の縮図であったように、日本の高校野球もまた日本人の精神構造のシンボルである、といったら誇張が過ぎるであろうか」（作田，1967，p.262）と論じている。本来は遊戯であり、自由な営為であるはずのスポーツの 1 つにすぎない野球が、非日常性や象徴性などを媒介項として厳粛な儀礼へとすり替わり、結果として集団主義や安全第一主義などの価値観が高校野球を覆っているという作田の指摘は、日本の高校野球文化を読み解く社会学的な視角として大変示唆的なものであった。

作田（1967）の議論を受け、松田・島崎（1994）は「遊」としての野球がいかにして「聖」と結びつき国民的儀礼となるのかについて、選手や観客にみられる涙に着目して検討している。松田・島崎によれば、甲子園野球にまつわる涙は、「奇蹟」を通じて日常的なルーティーンから離れた至高体験を享受している状態において生じるとされる。民主化・合理化によって「聖」なるものが導く至高体験を享受することの困難性が増した今日、人々は甲子園に青春を賭け「奇蹟」を生み出す至高者としての高校球児に同一化し、至高体験へアクセスしているという。換言すれば、日常から離れた「聖」の領域、至高体験を求める人びとの情動が、甲子園野球を近代日本における「聖」なる儀礼として形式づけているという指摘である。

作田（1967）や松田・島崎（1994）の議論は、先に検討したスポーツの儀礼性に関する議論を念頭に、甲子園大会を中心とする高校野球文化を読み解いたものであるといえる。規範的性格を有する甲子園大会が「国民的行事」として多くの人々の注目を集めている様相をみれば、それがもはや単に部活動の全国大会という意味を超越し、ある種の国民的儀礼として定位しているという見方は説得的なものであるといえよう。そして、高校野球を儀礼という視点から検討しようとするれば、儀礼論的スポーツ研究の系譜と同様、そこでどのような意味や価値が象徴的に提示されているのかに研究の関心が集まることとなる。例えば、形式的なマニュアル依存という日本社会の行動様式（沢田，1994）、産業社会の性別役割構造（江刺，1994）、郷土アイデンティティ（田中，1994）などの価値が、高校野球を通じて人々に伝播・内面化されているという指摘がみられている。

また、儀礼としての高校野球の成立要件について、甲子園球場の意味と機能（菊，1994）や選手の振る舞い（杉本，1994）に着目した研究もみられる。菊（1994）は、人間の営為を、人間と人間を取り巻く装置（制度や施設など）との相互作用が織りなすシステムとして捉える相対主義的見地から、甲子園野球の儀礼性が甲子園球場という物的文化装置を基礎

として存立していることを示唆している。球場を舞台化する設計戦略や、都市生活者の生活空間に非日常性を提供する地理的条件など、経済的・政治的ダイナミズムが、甲子園球場が単なるモノから記号へと変換されるプロセスを構造的に規定してきたという。また、杉本（1994）は、観客、マスコミ、選手の三者が繰り広げる儀礼的な相互作用のなかに、「高校生らしさ」を演じる選手の振る舞いを読み解いている。甲子園大会に出場する選手たちは、プレイに没入することと観客に向けて演じるものの間を浮遊している状態であり、観客とマスコミによる高校野球への眼差しが、選手を「高校生らしさ」のパフォーマーとしての振る舞いに駆り立てていると指摘している。

以上のように、高校野球に関する社会学的研究では、甲子園大会を中心とする高校野球文化が主に儀礼論的視点から分析され、高校生の野球大会が国民的儀礼にすり替わるメカニズムや、そこで提示される意味や価値、高校野球を儀礼たらしめる構造などが検討されてきた。先に検討したメディア・スポーツ研究の議論を参照すれば、こうした高校野球の儀礼性は、特にメディアを介することで影響力の拡張や特有の儀礼的形式を生み出しているものと推察される。とりわけ高校野球は、主催するメディアの意図と戦略により「高校生らしさ」の規範や価値観をまとう大会として形式づけられ、新聞やテレビなどのメディアによってその規範や価値観を前景化させた多量な報道がなされてきた経緯がある。したがって、メディア・スポーツ論の視座から、高校野球のメディア報道を通じて人びとに伝えられる意味や価値を読み解くことは、高校野球文化の諸相を検討するうえで重要な研究課題であるといえる。

2) 高校野球とメディア、「物語」

高校野球、甲子園大会を一種の国民的儀礼として読み解く社会学的視点を踏まえ、特にメディアの役割や影響を検討した研究として、有山（1997）、小椋（1994）、西原（2005）、清水（1987, 1989, 1998）などが挙げられる。

有山（1994）は、マスメディア・イベントという視点から甲子園大会とメディアの関わりについて論じている。ここでいうマスメディア・イベントとは、メディア企業がニュースバリューの向上や他社との差別化を志向し、人びとの深層意識や価値観に合致するメッセージ性を内包したイベントを創出して自ら報道する一連のシステム（有山, 1997, pp.3-5）を指している。一高野球の精神と甲子園大会の創設、およびその報道について検討した有山は、甲子園大会が武士道的精神や国家主義的な身体文化を提示する象徴的儀礼として定位してきたと論じたうえで、新聞が甲子園大会の「社会的意味を説明する物語」（有山, 1997, p.82）を作り上げてきたと指摘する。有山のいう「物語」とは、「マスメディアが提供した眼鏡」が「技術的には未熟な高校生の野球を面白くかつ感動的なものとして見てしまう認識の枠組みと価値観」（有山, 1997, p.10）を形成している様相を表したものである。

小椋（1994）や西原（2005）も、メディアによって高校野球の「物語」が生成されているという立場から、その内実を検討している。小椋（1994）は朝日新聞に掲載された社説の分析から、高校野球が精神主義的な教育理念、郷土の代表、平和の象徴などの文脈で報じられる傾向にあることを指摘した。この分析を踏まえ、小椋は「朝日新聞という巨大メディアがこれまで『甲子園』とはこういうものだ、という像を国民に提供してきた。多くの日本人がそれを受け入れた。それは一種の物語（高校生についての、高校野球についての、そして

日本人についての)であった」(小椋, 1994, p.174)と論じている。また、西原(2013)は、明治末期に形成された高校野球の規範性が甲子園大会運営の前提となってきたことを前提に、1920年代以降の新聞言説を分析し、「青年らしさ」「純真」などの「理想化された他者」という枠組みがメディアによって形成され、甲子園の「物語」として定位してきた経緯を示している。

小椋(1994)や西原(2005)の議論は、高校野球の儀礼性を踏まえ、メディアを介して人々に伝えられる意味や価値が、人々の高校野球に対する見方や解釈の枠組み、すなわち高校野球の「物語」を生成してきた様相を、メディア・テキスト分析を通じて検討したものであった。しかし、メディア・スポーツ研究で蓄積されてきたテキスト分析に準じた方法論は採用されておらず、分析の客観性、妥当性については課題が残されている。また、受け手がそのテキストをどのように解釈しているのかという点は考慮されておらず、「物語」生成を送り手とメディア・テキストの視点からのみ捉えている点にも課題が残る。

対して、清水による一連の研究(1987, 1989, 1998)では、メディア・スポーツ研究の方法論を踏まえ、受け手の「物語」に対する解釈や意味づけを射程に含めながら、高校野球の「物語」生成の構造が体系的に検討されている。

清水は高校野球を「潜在的にある世界認識のための思考の枠組—モデル—を提供し、我々が日常生活でいかに生きるべきかといった『物語』を伝播する装置」(清水, 1998, p.5)と捉え、「物語」生成の構造とその「神話」化について検討した。清水はまず、NHKによる甲子園大会の実況中継と受け手の解釈について記号論的な手法を用いて分析し、投手が痛みに耐えて投げる姿や、記録への言及、スタンド応援の様子などを通じて「一生懸命さ」「ヒーロー性」「努力」「一体感」などの意味が生成され、高校野球に対する人びとの固定的な解釈枠組み、すなわち『青春』や『若者らしさ』の『物語』(清水, 1998, p.50)が生み出されてきたことを示した。『物語』は、時を経て歴史性を帯びると、人びとの心の中に『神話』としてある共通のイメージを沸き立たせる(清水, 1998, p.18)という。また、文献研究によって、この「物語」が一高野球の精神修養・鍛錬主義的な野球信条を基盤として生成されてきたことを示している。さらに、受け手が「物語」の意味を解釈する文脈にも着目し、フィールドワークによって池田高等学校(徳島県)の甲子園出場に関連する催しやテレビ放送を町民が儀礼的に共同体験する過程を検討している。池田町民は池田高校の野球を「その自然環境やコスモロジーといえる共通の感覚—いなか意識など—で解釈」(清水, 1989, p.47)し、さわやかで純粋な高校生という郷土的神話を強化しているという。また、池田高校の甲子園出場にまつわる催しを儀礼的に共同体験することが、町民にとって「個人個人が、その人生に沿いながら、自分とは何者であるのかを認識させる糸口」(清水, 1989, p.47)になっていると論じている。

このように、清水による一連の研究は、社会学領域で展開された儀礼論的視点を踏まえた高校野球研究を、同じく儀礼論的視点からメディア・テキストが提示する意味や価値を読み解いてきたメディア・スポーツ研究へと接続し、方法論的妥当性を担保しつつ、高校野球の「物語」生成とその「神話」化に関する構造を読み解いたものであった。清水が示している、精神修養・鍛錬主義の信条を基盤とした「若者らしさ」「青春」の「物語」や、受け手が「物語」の枠組みに準じて高校野球を解釈する過程で「神話」的思考が惹起・強化され、結果として甲子園大会が日本人の自己定義に関わる一種の儀礼として定位しているという様相は、

明治期以降、メディアと密接に関わりながら作り上げられてきた高校野球文化の諸相を読み解く枠組みとして大変示唆的であった。

4. 先行研究の課題と本研究の目的

これまで検討してきた儀礼論的スポーツ研究やメディア・スポーツ研究の系譜、ならびにその系譜を踏まえて体系化された高校野球の「物語」研究について、以下ではその課題を抽出し、本研究の目的を提示する。

1) 「物語」の揺らぎ

高校野球の「物語」研究における第1の課題は、「物語」の揺らぎや変動をいかに把握するのか、という点である。第一章で検討したように、甲子園大会の制度改正に関する動向をみれば、「正しく模範的な高校野球」という価値観や規範をめぐり、一高野球の精神を源流として野球を武士道的な心身の涵養と捉える「鍛錬主義」的なあり方と、選手の健康管理という観点からスポーツ科学的知見を踏まえた「科学主義」的なあり方とがせめぎ合う様相もみられている。こうしたせめぎ合いは、メディアを介した高校野球の「物語」生成にどのような揺らぎや変動をもたらしているのだろうか。この点について検討するためには、「物語」を所与の固定的なものとしてではなく、揺らぎや変動の可能性を含んだ動態的なものとして捉える視点が必要である。

高校野球文化に関する観念的側面の揺らぎについては、既に石坂（2008）、加藤（2009）、甲斐・谷口（2015）によって示唆されている。石坂（2005）は特待生問題という「高校生らしさ」の「神話」性から乖離した現実について、「神話」を揺るがし解体するか、あるいは「神話」作用によって現実が再解釈されるという2つの可能性を提示した。また、加藤（2009）は高校野球のドキュメンタリー番組において、放送の主題が集団主義から個人的な人間関係へ変化している可能性を示している。高校球児とその親に対するインタビュー調査を行った甲斐・谷口（2015）は、競技力による進路形成という教育戦略を重視して野球部に所属する選手やその親が、伝統的な高校野球の規範に対する迷いや葛藤を抱いていることを明らかにしている。こうした指摘に鑑みれば、メディアを介した「物語」の揺らぎや変動に関する内実を読み解くことは、今日の高校野球に関するメディア・スポーツ研究において重要な検討課題であるといえる。

しかしながら、先にも指摘したように、従来の儀礼論的スポーツ研究やメディア・スポーツ研究では、スポーツが象徴的に伝達する意味や価値の読解に関心が集中する一方で、その意味や価値が固定的な構造として扱われる傾向にあり、意味や価値の揺らぎや変動といった動態的側面を読み解く視点や実証はあまりみられていない。この課題は、これらの研究系譜上に位置する高校野球の「物語」研究にも共通している。メディアを介して「青春」「若者らしさ」の「物語」が生成されていることを読み解いた清水（1987, 1989, 1998）も、「物語」生成に関する歴史的経緯については論じているものの、「物語」の揺らぎや変動については必ずしも詳細に検討してはいない。

選手たちの練習や試合における取り組みをみれば、明治期の一高においては苛烈な練習が行われており、これらが「鍛錬主義」的なあり方として価値づけられてきた訳であるが、近年ではメディカルサポートによる傷害予防（岡部・甲賀, 2012）など、医科学的知見を活

用したあり方なども散見される。このような取り組みの変化は、その取り組みを資源に構成されるメディア・テキストが伝える意味や価値の変化にも表れる可能性があるだろう。ただし、取り組みの変化を踏まえたとしても、これまでも論じているように、「若者らしさ」や「青春」という解釈枠組みが人々の高校野球に対する見方を規定し、高い注目度を生み出している構図自体は、今日の高校野球文化を説明するうえでも有効であるようにも思われる。したがって、「変わった」「変わらない」の単純化した二項対立的議論ではなく、「正しい」あり方をめぐって「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いがみられるなかで、メディアを介して高校野球の「物語」がいかんにして揺らぎながら構造化され、人々の目線を規定する枠組みとして再生産されているのかについて、「物語」を動的に把握する視点を導入して検討していく必要がある。

2) ソーシャルメディアを含むメディア横断的な分析

第2の課題として、高校野球の「物語」が動的に構造化されるダイナミズムを読み解くにあたっては、ソーシャルメディアなどの現代的なメディア環境も考慮しつつ、各メディアの特性を考慮したメディア横断的な分析が必要とされるという点が挙げられる。

従来のメディア・スポーツ研究では、主にマスメディア中心のメディア空間を前提とした枠組みに依拠し、テキストが伝達するメッセージの分析と受け手の解釈に関する分析を通じて、メディア・スポーツが生成する意味や価値が論じられてきた。高校野球の「物語」研究も上記の研究枠組みや方法論に準じ、主に新聞やテレビのテキストを対象とした研究が展開されている。新聞社が2つの甲子園大会を主催し、新聞やテレビで他のメディア・スポーツイベントと比較して多量の報道が展開されている様相を踏まえれば、こうした研究手法は、現代における高校野球の「物語」を読み解くうえでも一定程度妥当性を有しているといえる。

しかしながら、今日ではインターネットメディアの発達により、「物語」の再生産に対し、従来の枠組みでは把握しきれないメディアの影響が生じている可能性も指摘できる。例えば、第一章でも論じたように、これまで情報の受け手であった人びとが個人単位で情報の送り手にもなり得るソーシャルメディアでは、高校野球で歴史的に形成されてきた価値や、その価値に準じた取り組みのあり方に対する批判的な言説もみられている。これらの言説とその影響を等閑視すれば、「物語」が動的に構造化される今日的なダイナミズムの内実を見誤る可能性もあろう。従来の送り手／受け手の構図では把握しきれないソーシャルメディア言説については、その影響を読み解く新たな分析枠組みを導入して検討していく必要がある。

また、「物語」の生成に重要な影響を有する新聞報道とテレビ放送についても、これまでそれぞれ個別に分析されてきてはいるものの、メディア横断的な分析という点に課題が残る。小椋（1994）や有山（1997）は新聞報道、清水（1987, 1998）はテレビ放送の分析からそれぞれ「物語」の様相を論じているが、送り手と受け手というメディア空間全体の構図のなかで、各メディアの影響がどのように絡み合いながら「物語」が構造化されているのかについて検討した研究はみられていない。

テレビと新聞は、それぞれ高校野球との固有の関わりや異なるメディア特性を有している。新聞はその一部が「物語」の核となる甲子園大会を主催する立場であり、活字の編集に

よって大会の事前報道、結果の速報などを多量に記事化して受け手に提供してきた。テレビは甲子園大会の生中継によってリアルタイムでの観戦を可能にし、映像や音声の編集によって直接体験とは異なる固有の経験を受け手に提供している。こうしたメディア特性を考慮し、メディア空間において各メディアの影響がどのように関連しつつ高校野球の「物語」が構造化されているのかを読み解く、メディア横断的な研究が必要であるといえる。

3) 本研究の目的

第一章で論じたように、本研究の課題は「正しく模範的な高校野球のあり方」という規範や価値観をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いともいえる様相がみられる今日において、メディアを介して高校野球の「物語」がいかにして再生産されているのかを読み解くことである。

先行研究の検討により、高校野球の「物語」研究は、スポーツを一種の儀礼として捉え、象徴的に提示される意味や価値、「神話」やイデオロギー生成の様相を読み解く儀礼論的スポーツ研究、およびその議論を援用したメディア・スポーツ研究の視点や方法に依拠して展開されてきたことが確認された。この観点から、「鍛錬主義」的な価値観を基盤とした「若者らしさ」「青春」の「物語」がメディアを通じて人びとに伝えられ、高校野球に対する見方や解釈枠組みとして社会に共有されている様相が論じられている。一方で、「物語」の揺らぎや変動を検討する視点と実証、ソーシャルメディア等を含む各メディアの特性を踏まえたメディア横断的な分析などは、課題として残されているものとみられた。

以上の議論を踏まえ、本研究では、高校野球の規範や価値観において「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いがみられるなかで、メディアを介して高校野球の「物語」が再生産されるダイナミズムに関して、「物語」を動態的に把握する分析枠組みを設定し、現代の複雑化したメディア環境と各メディアの特性を踏まえたメディア横断的な分析を通じて検討していくことを目的とする。この目的を達成するため、以下 5 つの研究および下位目的を設定する。

【研究 1】

高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いという観点を踏まえ、選手・野球部による練習や試合での取り組みに関する揺らぎや変化の諸相について検討する。

【研究 2】

選手・野球部による取り組みの揺らぎや変化の様相を踏まえ、甲子園大会を主催し高校野球の規範や価値観を具現化した報道によって「物語」生成に関わってきた新聞が、その揺らぎや変化の様相をどのように報じているのかについて検討する。

【研究 3】

選手・野球部による取り組みの揺らぎや変化の様相を踏まえ、映像と音声によって高校野球の意味や価値を象徴的に人びとに伝えてきたテレビが、その揺らぎや変化の諸相をどのように報じているのかについて検討する。

【研究 4】

ソーシャルメディア言説の内容とその作用を分析する視点を導入し、「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合い、および選手・野球部による取り組みの揺らぎや変化に対してソーシャルメディアでどのようなテキストがみられ、そのテキストが「物語」の再生産にどのように関係しているのかについて検討する。

【研究 5】

各メディアを介した高校野球に関する意味や価値の伝達に関する諸相を踏まえ、受け手の高校野球に対する見方や解釈の枠組みにどのような揺らぎや変化がみられるのかについて検討する。また、特に高校野球の選手や監督がメディア報道や「物語」をどのように捉えているのかを分析することで、メディア空間で生成・再生産された「物語」が選手たちの取り組みに再帰する様相についても補足的に検討する。

第三章 研究の枠組み

本章では、高校野球の「物語」を動態的に把握しつつ「物語」の再生産に対するメディアの関わりを読み解くための研究枠組み、および分析視点を検討する。

1. 正統性、象徴闘争、再生産

1) 高校野球文化の正統性

はじめに、高校野球が提示する規範や価値観が一定程度自然なものとして社会に受け止められていること、すなわち「若者らしさ」「青春」の「物語」が社会的に共有されている様相について、正統性の概念を用いて検討していく。Suchmanによれば、正統性とは「ある存在者の行為が、社会的に構成された規範や価値や信念や定義のシステムの中で、望ましく適切でふさわしいと受け入れられる一般的な認識あるいは前提」(Suchman, 1995, p.574)と定義される。正統性の概念は、「支配の三類型」について論じたマックス・ウェーバー以降、政治体制や指導者がいかに正統であるとみなされるのかを検討する理論枠組みとして用いられてきたが、政治論や組織論のみならず、「象徴的な意味化とその意味の受容を課する」(宮島, 1994, p.100)という点において、文化的現象とその背後に潜む権力性に関する議論にも適用されている。

大井(1982)は、ウェーバーの正統性概念を検討した丸山眞男の議論を参照し、正統性を制度上の正統性と教義上の正統性に分類して、西欧近代社会の成立過程を分析した。制度上の正統性とは「統治者又は統治体系を主体とする」正統性を、また教義上の正統性とは「教義・世界観を中核とする」正統性を指している(大井, 1982, p.87)。2つの正統性は、互いに浸透しあったり、あるいは無関係に位置したりしながら、相互補完的に特定の社会や文化の秩序形成・維持の機能を果たしているとされる。例えば、神権政治においては、統治者と教義が同一であるという点で、2つの正統性が表裏一体のものとして個人の認識や行為を規定している。一方、民主主義(資本主義)社会においては、社会契約という制度的正統性が社会的規範を形成しつつ、多様化した教義におけるそれぞれの正統性が個人の内面を規定し、制度的正統性をますます強固なものにするよう駆動しているという。いずれにせよ、2つの正統性が互いに関連し合いながら、特定の社会・文化における自明的な「正しいあり方」を形づくり、集団の秩序形成・維持がなされていると捉えうる。

ここでは上記の正統性概念に依拠し、高校野球文化の秩序形成について検討してみたい。まず、高校野球の制度的な正統性に関わるものとして、学校、全国高等学校野球連盟(以下、「高野連」と略す)とそれに紐づく都道府県高等学校野球連盟(以下、「県高野連」と略す)、大会を主催する新聞社が結びついた組織体系を挙げることができよう。教育システムという制度的基盤のうえに成り立つ部活動としての野球部は、歴史的に組織化された高野連のもとに束ねられ、管理されている。この形態が、新聞社が主催する2つの全国大会を核として成立してきたことは、第一章で論じた通りである。学校、高野連、新聞社が結びついた権威的な組織体系とそれらが生成する諸制度は、高校野球という営みの正統性を制度的に担保している。

そして、この制度的な正統性は、高校野球の「物語」という教義的な正統性と相互補完的

に、高校野球文化の正統性を形成・維持しているといえる。第一章で論じたように、高校野球では歴史的に精神修養・鍛錬主義などを核とする「若者らしさ」の規範や価値観が生成され、秩序形成が志向されてきた。「物語」は正しい高校野球のあり方を観念的に人びとに提示し、高校野球にまつわる実践の指針として機能している。とりわけ、全国大会を新聞社というメディアが主催しているという点が、制度面と教義面の正統性を強固に結びつけているものと思われる。象徴的な正統性が背後にある権力関係の隠蔽作用をもつという議論（宮島，1994，p.100）に鑑みれば、全国大会が新聞社の経営戦略として展開されているという本音を、「物語」という建前が不可視化していると指摘することもできよう。

2) 象徴闘争と再生産

では、高校野球の「物語」を、文化的秩序の形成・維持に寄与する教義的な正統性として捉えた場合、本研究で扱う「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いや「物語」の動態的な側面はいかにして把握しうるのであろうか。この点について、象徴闘争および再生産の概念を用いて検討していく。

ブルデューは「スポーツ活動の場は、わけてもスポーツ活動の正しい定義の強制を、スポーツ活動の正しい機能の強制を、独占しようとすることを狙った闘争の場」（ブルデュー，1991，p.233）であると述べている。また、松尾はブルデューの議論を援用し、スポーツの場では「スポーツ実践の正統なあり方の定義をめぐる、さまざまなレベルで象徴的な闘争が繰り広げられている」（松尾，2015，p.22）と指摘している。ここでいう象徴闘争とは、「何が正統的な価値基準かの定義をめぐる、文化言説による闘争」（高橋，1990，p.9）を意味する。ブルデュー（1991）や松尾（2015）に依拠すれば、スポーツ実践をめぐる正統性は、所与の固定的なものではなく、正統であるという地位をめぐる様々な規範や価値観、観念がせめぎ合いながら成立する動態的なものであると捉えうる。

以上の議論を踏まえれば、これまで言及してきた「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いは、まさに高校野球の「正しいあり方」をめぐる1つの象徴闘争であると考えることができる。第一章で検討した高校野球の制度改正に関する動向は、一高野球の精神を源流とする「鍛錬主義」的なあり方と、スポーツ科学的知見に基づき選手の健康管理を重視する「科学主義」的なあり方による象徴闘争、およびその結果として制度的正統性が揺らぎつつ動態的に成立している様相として理解することが可能であろう。そして、こうした「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争、および制度的正統性の揺らぎのなかで、教義的正統性としての「若者らしさ」「青春」の「物語」が、特にメディアを介することで、どのように揺れ動きつつ人々の高校野球への目線を規定しているのかという点が、本研究の主題となる。

これまでも論じてきたように、「若者らしさ」「青春」という解釈枠組みは、高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争がみられる今日においても、引き続き人々の高校野球への目線を規定しているようにみえる。こうした様相を捉えるにあたっては、再生産という概念が重要な示唆を与えてくれる。ここでいう再生産とは、全く同型のものが単純反復的に生産されることではなく、生産一と生産二の間に「ある観点からみた同型性や相似性がみられること、およびその二つのプロセスの間に確認されうる一定の因果関係があること」（宮島，1994，p.152）を指しており、その意味で「変動を理解し、説明するひとつの観点」（宮島，1994，p.154）として扱われる概念である。宮島は再生産の

観点からみた社会や文化の変動について「既存の構造的条件、規則、慣習の重い規定作用から自由に起こりうるものでは断じてなく、その意味で同形的なパターンの再現という要素をかならず含む。しかし、そこで生起する人びとの行為がそれらの条件の単なる反映、あるいは被拘束態にすぎないか」というと、そうではなく、ギデنزの言葉でいう、行為の『自省的評価』(reflexive monitoring)が個々に、また集団共有的に行われることを通して、その都度新たな意味が付せられている行為である」(宮島, 1994, p.156)と述べている。

宮島(1994)の議論に依拠し、再生産の観点から「物語」を検討することで、歴史的に生成された「物語」が人々の高校野球への目線を規定しているという従来の研究知見を踏まえつつも、素朴な構造決定論から逃れ、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争のなかで「物語」が動態的に構造化される様相をダイナミックに読み解くことが可能になるといえる。そこで本研究では、高校野球の「物語」を「象徴闘争と正統性の揺らぎを含みつつ再生産される、高校野球の『正しいあり方』に関する教義的正統性」という理論的枠組みで捉え、その再生産の様相について検討していくこととする。

2. 再生産とメディア

高校野球にまつわる「物語」の再生産について、本研究では特にメディアの影響に着目し、メディア・スポーツ論の視座から読み解いていく。そのため、ここでは文化の再生産過程におけるメディアの関わりについて検討しておきたい。

1) 象徴権力としてのメディア

宮島は文化的現象について「事実上強固な構造をもち、人びとの思考をあたかも外から枠づけるかのような作用を果たしながら、その構造、作用がほとんど意識されないものがある」(宮島, 1994, p.222)と論じたうえで、その構造における意味体系の恣意性、すなわち「論理的必然的な根拠がしられぬままにある意味が付与されてくる」(宮島, 1994, p.233)側面に注目している。正統性概念の見地に立てば、こうした文化における意味付与の恣意性については、その背後にある権威性が問題化される訳であるが、この点について宮島は「マスメディアの提供してくれる疑似環境のほとんど無意識の取り込み」(宮島, 1994, p.269, 傍点原著)を例に挙げ、象徴的な力を通じた意味の押しつけと受容によって文化の意味体系の正統化、自然化が生じることを指摘している。

このように、ある文化で構造化された意味体系の再生産プロセスにおいて、メディアは、本来的には恣意性を孕む意味体系を象徴的な力で「正統なもの」「自然なもの」として人々に受け入れさせる一種の象徴権力として把握しうる。ここでいう象徴権力とは、特定の意味や価値を提示する象徴がある種の権威性と強制力を獲得している状態(安田, 2008, p.49)を指している。ブルデューのメディア論を検討した安田は(2008)、メディアが商業主義的スタンスを取ることで、経済資本と象徴資本が一体化した新しい権力として存立していることや、メディアによる象徴的な意味の伝達が支配的なものの見方の自然化に寄与していることを示唆している。また、批判的コミュニケーション論の視座に立つ山腰も、メディアが「特定の『社会的現実』を自然化するだけでなく、そうした『現実』の構築を可能にする枠組み自体をも自然化する」(山腰, 2014, p.46)象徴権力であると論じている。

象徴権力としてのメディアという観点から高校野球の「物語」をみれば、まさに歴史的に形成されメディアが伝播してきた精神修養・鍛錬主義的な「若者らしさ」「青春」の「物語」が、新聞社の権威性と価値づけの恣意性を隠蔽しつつ、人びとの解釈枠組みとして自然化されてきた様相が浮かび上がることとなる。この観点は、儀礼論的メディア・スポーツ研究でなされてきた象徴的な意味の伝達と神話やイデオロギー生成に関する議論や、その枠組みに準拠して論じられてきた従来の高校野球に関する「物語」研究の議論とも親和性を有している。

2) メディアを介した「物語」の再生産過程

では、象徴権力としてのメディアが主導し形成される高校野球の「物語」は、いかなる形で正統性の揺らぎ、せめぎ合いに晒されつつ再生産されるのであろうか。この点について、第一章で論じたメディア・スポーツの構造に準じ、選手や野球部の取り組みとメディア・テキストの関係性、およびメディア・テキストと受け手の解釈との関係性という 2 つの側面から検討してみたい。

第一に、選手や野球部による取り組みは、それ自体、「正しい取り組み方」をめぐる揺らぎ、せめぎ合いのうちにおかれていると考えられる。高校野球の伝統的な組織体系や練習方法、戦術、価値観などは、当然それぞれの選手や野球部全体の取り組みを一定程度条件づけていると思われるが、条件付けられた行為は必ずしも単純反復的行為として表れる訳ではなく、構造的な諸条件に規定されつつも、行為者の主体的な解釈・選択により、同形的な再生産の中に変化が内包されうるものである（宮島，1994，pp.11-12）。したがって、「正しい高校野球のあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争という様相のなかで、選手や野球部による練習・試合での取り組みには、例えば新たな練習方法や戦術の導入、慣習の変化など、種々のミクロな揺らぎが生じているものと考えられる。

そして、高校野球にまつわるメディア・テキストは、上記のような揺らぎが想定される選手や野球部による無数の取り組みを資源とし、それらを取捨選択、再構成することにより生成される。したがって、メディアが象徴権力として恣意的な意味を自然化させているという視点からみれば、取り組みの揺らぎに対してメディアがどのような取捨選択を行い、テキストを構成しているかという点が、「物語」の再生産を把握する重要な焦点となる。つまり、選手や野球部の取り組みとメディア・テキストの関係性からみた場合、取り組み自体の揺らぎと、その揺らぎと連動したメディア・テキストの揺らぎという二重の過程を検討することから、「物語」の再生産に関する一側面を具体的に検討することが可能となる。

第二に、カルチュラル・スタディーズに依拠した先行研究によって指摘されてきたように、メディア・テキストは受け手によって多様に解釈されうるものである。したがって、メディアが象徴権力として人びとに恣意的な意味を押しつけているとしても、その過程は一方的・固定的な意味の伝達と受容としてではなく、メディアによる伝達と受け手の解釈との相互作用による意味生成プロセスとして読み解く必要がある。宮島は再生産について、「自動的決定ではなくむしろ解釈的過程とみるべき」（宮島，1994，p.12）と指摘し、構造的な規定に対する行為者の主観的解釈の過程が構造に変化を与える可能性を示唆している。すなわち、メディア・テキストと受け手の解釈との関係性という点では、選手や野球部における取り組みとメディア・テキストの揺らぎを受けて、受け手の解釈がどのように揺らぎながら、

結果として「物語」という自然化された解釈枠組みが再生産されているのかを読み解くことが重要であろう。また、メディアを介した「物語」生成・再生産のサイクルが選手たちの取り組みを起点として生じることから、その循環的な構造を読み解くため、特に選手たち自身や、その取り組みを主導する監督が、「物語」をどのように解釈しつつ日々の取り組みや振る舞いを産出しているのかについても、補足的に検討しておきたい。

上記 2 つの観点は、マスメディアによるメッセージの伝達と受け手による解釈という従来のメディア・スポーツ論の分析枠組みに依拠しつつ、「物語」の再生産を読み解くための着眼点である。加えて、第二章でも論じたように、本研究では現代の複雑化したメディア環境、とりわけ受け手が同時に送り手にもなり得るソーシャルメディアが、「物語」再生産のダイナミズムにどのような影響を与えているのかにも着目していく。

3. 研究の枠組みおよび分析視点

1) 研究の枠組み

これまでの議論を踏まえ、メディアを介した高校野球にまつわる「物語」の再生産について分析する本研究の枠組を示したものが図 3-1 である。この枠組みに基づき、第二章でも示した以下 5 つの研究によって、メディアを介して高校野球の「物語」が再生産されるダイナミズムを読み解いていきたい。

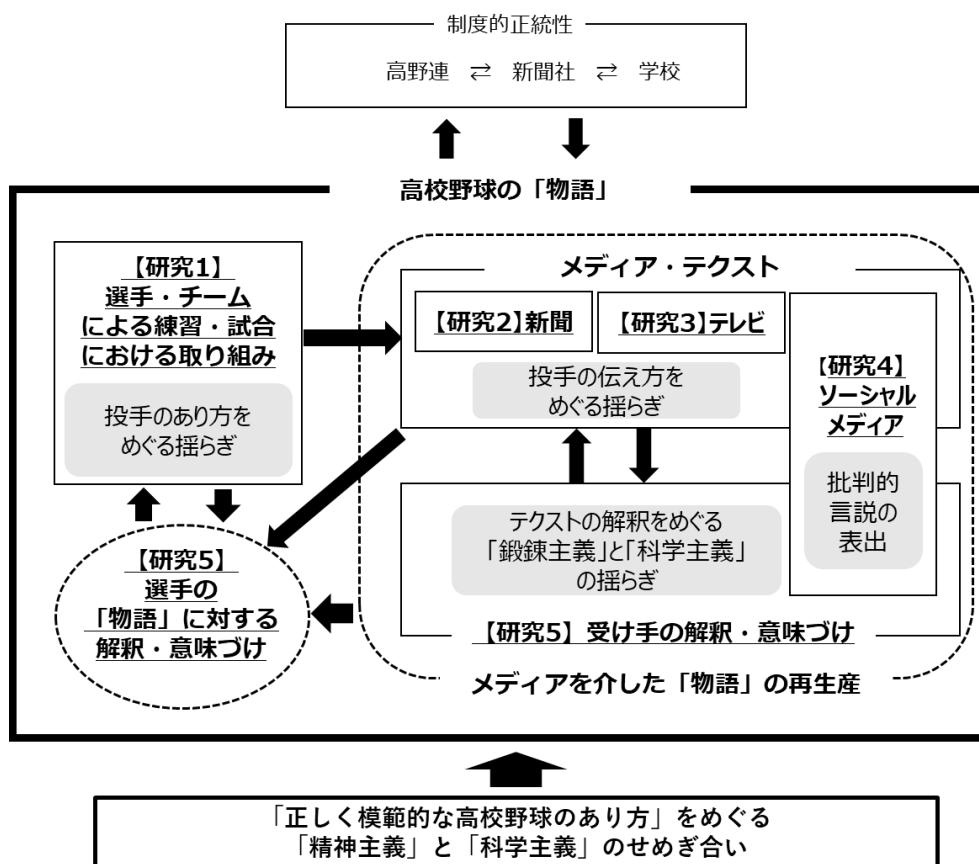


図 3-1 研究の枠組み

- ・【研究 1】 高校野球の選手や野球部による試合や練習での取り組みにみられる揺らぎ
- ・【研究 2】 高校野球の新聞報道にみられる揺らぎ
- ・【研究 3】 高校野球のテレビ放送にみられる揺らぎ
- ・【研究 4】 高校野球に関するソーシャルメディア言説とその作用
- ・【研究 5】 高校野球の「物語」に対する受け手の解釈および選手や監督の振る舞い

なお、選手や野球部による取り組みとメディアによる伝達については、当然様々な取り組みに様々な意味付与がなされながら、総体としての「物語」が生成されているものと思われる。そのなかでも、本研究では特に、投手をめぐる取り組みのあり方とメディア・テキストに着目していくこととする。

野球は、投手の投球を起点として一連のプレーが生じる競技である。その意味で、投手は競技における中心的な存在となり、とりわけアマチュア野球では、投手個人の能力や投手戦術が、試合展開や勝敗に大きな影響を及ぼす可能性が高い。そのため、高校野球では、投手がいわば「主人公」として、メディアに中心的な扱いを受ける様相がしばしば見受けられる。例えば、朝日新聞が夏の甲子園 100 回の開催を記念し、過去の注目選手を都道府県別に紹介した記事（週刊朝日編集部，2019）では、47 都道府県の「故郷のヒーロー」のうち 33 名を投手が占めている。また、「名投手物語」と題し、高校野球で活躍した投手を主題としたノンフィクション作品（鈴木，2008）などもみられている。こうした様相を踏まえれば、高校野球の投手をめぐる「物語」は、高校野球の「物語」を構成する 1 つの代表的事象であり、投手に関する取り組みのあり方やメディア・テキストの諸相から、高校野球にまつわる「物語」の再生産過程を象徴的に把握することができる可能性があるといえる。

2) 研究内容および分析視点

上記で示した研究の枠組みをもとに、以下では本研究を構成する 5 つの研究について、研究内容および分析の視点を提示する。

(1) 選手や野球部による練習・試合における取り組み

メディア・テキストの構成に影響を与えうるものとして、まず、選手や野球部による練習や試合での取り組みにおいてどのような揺らぎや変化が生じているのかについて分析を試みる。先述したように、文化的な取り組みは、歴史的に形成された文化構造の規定を受けつつも、行為者の主体的解釈による変化の可能性を含んでおり、その過程に「正しい取り組みのあり方」をめぐる揺らぎを観察することができると思われる。甲子園大会の制度面において「鍛錬主義」的なあり方と「科学主義」的なあり方の象徴闘争が看取されるという背景を踏まえ、投手に関する取り組みの揺らぎを客観的に把握するため、【研究 1】では夏の甲子園における投手戦術、具体的には投手の完投と継投に関する動向に着目していく。

従来、高校野球では、肘の痛みに耐えて投げ抜く投手を美しいものとして捉える（清水，1998，pp.39-48）など、1 人の投手が 1 試合を投げ抜く完投が「鍛錬主義」的な「正しいあり方」の 1 つとして価値づけられてきたものとみられる。しかしながら、近年では、完投や連投が「選手を酷使し、将来ある体に悪影響を与える部分が多々ある」（日経新聞，2018 年 8 月 15 日，朝刊）などの指摘がなされ、複数の投手で 1 試合を繋ぐ継投や、1 試合で 1

人の投手が投げられる球数を設定する投球数制限などを推奨する「科学主義」的な議論も見られる。

そこで【研究 1】では、夏の甲子園において歴史的に投手の完投と継投という戦術がどのように展開してきたのかを計量的に分析し、選手や野球部における取り組みの揺らぎに関する具体的な様相を検討する。また、その取り組みの揺らぎを条件付ける重要な要素として、「正しい投手指導のあり方」に関する揺らぎの諸相を読み解いていく。

(2) マスメディアのテキスト分析

マスメディア（【研究 2】新聞、【研究 3】テレビ）については、【研究 1】で検討した選手や野球部による取り組みの揺らぎを踏まえ、その様相をメディアがいかに伝えているかという点に着目し、メディア・テキスト分析による検討を行う。

新聞やテレビのメディア・テキストに関する具体的な分析視点を検討するためには、それぞれに固有のメディア特性および高校野球、甲子園大会との関わりについて整理しておく必要がある。一部の新聞社が大会を主催する立場であること、また、新聞・テレビがともに他のスポーツと比較して多量のメディア・テキストを生成し、高校野球人気の拡大に寄与してきたことは、第一章で論じた通りである。こうしたメディアと高校野球の関係性に加え、メディア論として検討されている各メディアの特性を参照しつつ、研究内容と分析視点を設定したい。

メディアの特性とその分類については、マクルーハン（1987）による議論が代表的であろう。マクルーハンはメディアを情報精細度の高低、参与性の高低などの基準で「熱い (hot) メディア」と「冷たい (cool) メディア」に分類している。熱いメディアとは単一の感覚を「高精細度 (high definition)」で拡散するメディアであり、データが十分に与えられることで、受け手側による補完の余地が少なくなり参与性は低くなる。対して「冷たい (cool) メディア」は情報の精細度が低く、受け手の参与性が高い。上記の基準では、新聞は熱いメディア、テレビは冷たいメディアに分類されるという。

①新聞報道

新聞というメディアは、多様な文字情報を紙面にモザイク状に配列させ共同体のインサイドストーリーを生み出す公共的な告白形態であり、その形態は集団的態度を形成するという点において、民主主義的政治に不可欠なものであるとされる（マクルーハン，1987，pp.208-209）。その特性から、新聞は「世論」と密接な関係にあるメディアとして扱われ、世論を象徴的に把握する目的で新聞の論説を分析する実証研究（筒井，1999；中嶋，2008）などが展開されてきた。ただし、これらの研究は、新聞が価値中立的立場で「事実の客観的な報道」を行っているという理解を前提とするものである（藤竹，1996）。対して、むしろ、新聞が現実を生起する無数の出来事の一部を取り上げ、高精細度の文字情報として紙面に配列することで、受け手の現実世界に対する解釈枠組みを生成していることに着目する機能主義的な研究（斉藤，1998；竹下，2008）や、新聞社によるイベント生成とその報道そのものが社会的事実を構成しているという立場をとるメディア・イベント研究（津金澤，1996）などもみられている。

一部が甲子園大会の主催者であり、大会の精神である「鍛錬主義」的側面を美化する傾向

にあったと指摘されている新聞報道をある種の象徴権力と捉え、高校野球の「物語」再生産について検討するためには、上述した研究系譜のうち、新聞が取捨選択し紙面に配列するテキストが受け手の解釈枠組みを構成しているという視点に示唆を得て分析を行うことが重要であろう。特に、「物語」の再生産を検討するためには、選手やチームの取り組みの変化に関連するテキストに着目する必要がある。

そこで【研究 2】では、【研究 1】で示した投手戦術の変化や制度改正の議論を踏まえ、甲子園大会の投手に関わる制度改正を取り上げた記事、ならびに近年において甲子園大会で連投や完投をした投手たちを扱った記事を対象にテキスト分析を行う。「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争という背景のもとに揺らぐ投手のあり方や制度設計に関する議論を、これまで「鍛錬主義」的な価値の伝播を担ってきたとされる新聞はどのように報じているのか。この点を分析することで、高校野球の「物語」再生産に対する新聞報道の関わりを読み解いていく。

②テレビ放送

テレビというメディアは「われわれをその世界に引きずり込む」ものであり、テレビを視聴する時、人びとは「テレビと『一体化』しなければならない」(マクルーハン, 1987, p.324)という。テレビ放送は単一の感覚で享受される印刷メディアと異なり、視覚と聴覚が統合された感覚に関与し、受け手による没入という高い参加度を生み出す。換言すれば、テレビ放送は時間と空間を超えた「共時的な場」を生み出し、「視聴者が祝祭という公的空間に参加するための装置」(今村, 2003, p.140)であるといえる。

マクルーハンはテレビ放送について、「パッケージ化された製品よりも製造過程を見せるのに適している」(マクルーハン, 1987, p.321)と比喩的に論じている。これはすなわち、映像と音声によって時空間が共有されることから、放送で直接明示された意味のみでなく、時にはそれ以上に、そのプロセスに内在する暗示的、象徴的な意味作用が重要な働きをもつという指摘である。ただし、テレビで共有される空間は、編集という過程を経ているという点で擬似的(恣意的)なものであることにも留意する必要がある。これらのメディア特性から、テレビ放送を対象とした実証研究では、CM、ドラマ、ドキュメンタリー放送など様々なコンテンツに対して、その放送が象徴的に伝達する意味を読み解く分析が展開されてきた(橋元, 1983; 藤田, 2006; 松山, 2012)。こうしたテレビのメディア特性と研究視点を踏まえれば、高校野球に関するテレビ放送分析の視点は、特に選手やチームによる取り組みの過程を描く放送から、どのような意味が象徴的に伝達されているのかについて、映像や音声の内容から読み解いていくことが重要となろう。

そこで【研究 3】では、投手の完投、継投それぞれに着目して練習や試合の取り組みの様子を描いた 2 つの放送を分析対象に、それぞれのテキストがいかなる意味や価値を象徴的に伝達しているのかについて、メディア・テキストの意味作用を析出する記号論的手法を用いて分析していく。「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いを象徴する投手の完投と継投という取り組みをメディア資源としたテレビ放送が、それぞれの放送で何をどのように伝えているのかを明らかにすることから、「物語」の再生産に対するテレビ放送の関わりを検討していきたい。

(3) ソーシャルメディア言説

先述したように、ソーシャルメディアはこれまでメディアの受け手であった個々人が同時に送り手にもなり得るという点で、従来のマスメディアとは異なる固有性を有している。したがって、分析にあたっては、ソーシャルメディア上で表出する言説が「物語」の再生産にどのように関係するのかを読み解く理論的枠組みを設定し、言説の内容と合わせてその影響を検討していくことが求められる。

第二章で指摘したように、マスメディアが伝播する情報と比較し、ソーシャルメディアでは、特に「鍛錬主義」的な高校野球のあり方に対する批判的言説が目立ち、その事態がマスメディアに取り上げられ大きく問題化されるなどの様相が散見される。いわゆる「炎上」と称されるこれらの現象は、高校野球に限らず様々な話題をめぐって観察され、インターネットやソーシャルメディアによるコミュニケーション特有の現象として分析がなされている（荻上、2007；平井、2012）。しかしながら、メディアの使用法は「メディアが使用される社会の構造に規定され、その条件の下で選択される」ため、「メディアの技術的特性は、そうした社会的選択を条件付ける要因の一つではあっても、単一の要因ではない」（若林、2007、p.827）とも指摘されている。この指摘を踏まえれば、「炎上」がどのような現象なのかを分析する視点は、単なるメディア環境決定論としてではなく、そこで「炎上」という行為を選択する個々人のおかれた社会的文脈を考慮して設定することが重要であるといえる。

そこで【研究4】では、鈴木（2005）が後期近代における個々人の振る舞いの特性として示した「カーニヴァル」の概念を援用し、高校野球の投手をめぐる「炎上」現象の内実と「物語」への影響について検討したい。「カーニヴァル」の概念については第七章で改めて詳細に論じるが、先取りしていえば、「炎上」現象のメカニズムをメディア環境とそれを使用する人びとの社会的文脈を接合させながら読み解けること、また、言説の内容のみならず、現象自体の意味を読み解くことで、「物語」への影響を検討する有効な視点になりえるものと思われる。

具体的には、甲子園大会において完投や連投をめぐる「炎上」がみられた象徴的な事象に関する Twitter 言説について分析し、高校野球の「物語」に関するソーシャルメディア言説の影響に関する一側面を検討していく。

(4) 受け手の解釈および選手の振る舞い

高校野球のメディア報道に対する受け手に着目した研究として、プロ野球と高校野球視聴者の比較研究（川口、1990）や、朝日新聞が実施した高校野球のイメージ調査に関する分析（狩野、2004）などがみられている。これらの研究は、プロ野球と高校野球の見られ方の違い、受け手の野球経験に応じた見方・楽しみ方の違い、性別や年代による高校野球イメージの違いを析出している。

しかしながら、受け手の解釈から「物語」再生産の様相を検討するためには、単に高校野球の見方やイメージ形成のパターンを分類するのみではなく、メディア報道を介して揺らぎつつ構造化され、受け手に提供されてきた高校野球に対する見方や解釈の枠組みによって、受け手の高校野球に対する解釈がどのように揺らぎながら、結果として自然化された「物語」が生成されているのかを読み解いていく必要がある。

そこで【研究5】では、高校野球の「正しい」あり方をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」

の象徴闘争、および【研究1】から【研究4】で検討された選手の取り組みやメディア・テキストにみられる揺らぎを踏まえ、受け手の高校野球に対する解釈の何がどのように揺らいでいるのかについて、要素分解的に把握することを目指す。具体的には、清水（1998）が示した「物語」の構造を参照し、受け手の高校野球に対する価値観、見方、表象などにみられる揺らぎについて検討していく。

また、先述したように、高校野球の「物語」が選手たちの取り組みを起点として生成・再生産されていることを勘案して、特に選手やその取り組みを主導する監督の「物語」に対する解釈・意味づけについてインタビュー調査を用いて補足的に検討し、メディアが生成する意味や価値が選手たちの取り組みによって「物語」の構造化に再帰する循環的な構造について考察してみたい。

第四章 選手や野球部の取組みにみられる揺らぎ

本章では【研究 1】として、高校野球の「正しいあり方」をめぐる「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争という背景を踏まえ、選手や野球部による練習や試合での取り組みの揺らぎや変化について、特に投手のあり方に着目して検討する。

1. 「鍛錬主義」「科学主義」の象徴闘争と投手のあり方

一高野球の精神を基盤とする「鍛錬主義」的な規範や価値観は、学生野球憲章や甲子園大会の制度設計に具現化され、メディアを通じて人々に伝播し、高校野球の「正しいあり方」として歴史的に継承されてきた。この「鍛錬主義」的な価値観において、投手のあり方は、主戦投手（エース）が疲労や困難を乗り越えて 1 人で投げ抜くことが美德とされていたものとみられる。

例えば、1933 年の第 19 回夏の甲子園では、3 年連続優勝を成し遂げた中京商業高校（愛知）のエース・吉田投手が全 5 試合を完投したことに称賛が集まった。吉田投手は、2 回戦でボールを目の上に受けるアクシデントに見舞われたが、その場で傷口を縫う治療を受けて続投している。そして、準決勝では当時の大会記録となる 25 回の延長戦を戦い 336 の投球数で勝利すると、翌日の決勝戦も完投し、チームの勝利に貢献した（朝日新聞出版, 2019, pp.88-89）。吉田投手の活躍について、大会を主催する朝日新聞は「中京吉田の強猛には唯々感歎する外はない。廿五回の記録試合に投げ続けて一日の休養もなく又九回を完投して敵を厭伏した。興へし安打二、流石に四球は多かつたけれども走者をだして動ぜず崩れぬ大投手振り多くカーブを用ゐず速球を併用して打者をいすくめるところ連勝投手としていよいよ貫禄を高めた」（朝日新聞, 1933 年 8 月 21 日, 朝刊）と評し、まさに「鍛錬主義」的なあり方の体现者として、疲労や困難を乗り越えて完投、連投を続けチームの優勝に貢献した吉田投手を讃えている。

疲労や困難を乗り越え 1 人で投げ抜く投手を賛美する言説は、上記事例以外にもこれまで度々みられてきたことが指摘されている（黒田ほか, 2018）。しかしながら、第一章でも論じたように、戦後の甲子園大会においては、選手の健康管理を重視した段階的な制度改正もなされている。そこで以下では、第一章でも提示した夏の甲子園における選手の健康管理に関する制度改正とその経緯を再掲（表 4-1）し、その経緯において、特に投手のあり方がどのように扱われてきたのかについて概観する。

1958 年の春季四国大会における坂東投手の連投と、それを契機とした夏の甲子園における延長規定の導入は、選手の健康管理という観点から甲子園大会の制度改正がなされた最初の事例であったとされる（朝日新聞出版, 2019, p.672）。この規定が初適用となったのは、同じく坂東投手が出場した 1958 年夏の甲子園における徳島商業高校（徳島）対魚津高校（富山）の試合であった。当該試合に関する朝日新聞の戦評は、延長 18 回まで完投した坂東投手と村椿投手を「すばらしいピッチングでマウンドを守りつづけた」と讃えており、「最後までスタンドの大観衆を立去らせなかった両チーム力の限りの攻防は今大会随一の大接戦で、かつての中京商―明石の延長二十五回の熱戦を投げ合った吉田、中田の一騎打ちを思い起こさせる好試合であった」（朝日新聞, 1958 年 8 月 17 日, 朝刊）と記している。決められた回数の上限まで 1 人で投げ抜く投手が「すばらしい」ものであり、延長制限が無

い時代にみられた長時間の熱戦を「思い起こさせる」ものと評されている点から、延長戦の回数制限がなされて以降も、疲労や困難を乗り越えて 1 人で投げ抜くことが投手の美德であり「正しいあり方」であるという価値観が一定程度踏襲されている一面が伺える。

表 4-1 選手の身体酷使に関する事例と高野連の制度的対応（再掲）

1958	春季四国大会で、徳島商（徳島）の板東英二投手が延長16回の準決勝、延長25回の決勝を一人で投げた。この事例が選手の体調管理について検討する契機となり、同年の 第40回夏の甲子園から延長18回引き分けの規定 ができた。
1991	第73回夏の甲子園で、沖縄水産（沖縄）の大野倫投手が6試合を一人で投げ、大会後に右肘の疲労骨折が判明した。この事例を受けて高野連は選手の障害予防対策に本腰を入れ、メディカルチェックの導入が検討された。
1994	春夏の甲子園に出場が決まった選手は 整形外科医によるメディカルチェック を受けることが義務化された。
1998	第80回夏の甲子園で、横浜高校（神奈川）の松坂大輔投手が準々決勝のPL学園（大阪）との試合で延長17回、250球を一人で投げた。この事例が、延長回数の再検討や過密日程の解消に関する議論の契機となった。
2000	第82回夏の甲子園から 延長が15回までに短縮 された。
2003	第85回夏の甲子園から準々決勝を2日に分け、 同一チームの4連戦を避ける日程 が設定された。
2013	第85回夏の甲子園で済美高校（愛媛）の安樂智大投手が9日間で5試合772球を投げたことについて、米スポーツ紙が「正気の沙汰ではない」と報道し、身体酷使への批判が加熱化。同年の第95回夏の甲子園から、 同一チームの3連戦を避ける日程 が設定された。
2018	第100回夏の甲子園から延長12回を同点で終えた場合13回からは無死一二塁で攻撃を開始する タイブレーク制 が導入された。 12月に新潟県高野連が2019年の県大会で各投手の一試合での投球数を100球に制限する 球数制限を試験的に導入すると発表した 。
2019	新潟県の発表を受け、高野連が「 投手の障害予防に関する有識者会議 」を設置した。

朝日新聞社（2019）、広尾（2019）を参照し筆者作成

こうした「鍛錬主義」的な規範や価値観に揺らぎがみられた契機の 1 つとして、1991 年の沖縄水産高校（沖縄）大野倫投手による夏の甲子園での連投と怪我、およびその事例を受けて高野連が導入したメディカルチェックが挙げられる。広尾（2019）は当該事例について、「『エースシステム』による投手の過酷な登板と、それによる健康被害が初めて問題視された」（広尾，2019，p.23）できごとであったと論じている。1991 年、第 73 回夏の甲子園において沖縄県勢初の決勝進出を果たした沖縄水産高校は、予選大会から甲子園の決勝まで全 6 試合をエースの大野投手が完投した。そして、決勝戦の後、大野投手が右肘を疲労骨折していることが発覚する。この事態を受けて、高野連による投手の障害予防に関する議論が本格化し、1994 年からは甲子園大会に出場する選手に対して整形外科医によるメディカルチェックが義務化された。

上記の事例以降、1990 年代から今日にかけて、選手の健康管理を目的とした甲子園大会の制度改正が段階的に行われてきた経緯は、表 4-1 に示した通りである。特に、投手のあり

方をめぐっては、2人以上の投手を繋いで1試合を戦う継投を高校野球の正当な投手戦術の1つとして扱う言説が散見され始める。例えば、1997年夏の甲子園でみられた智辯和歌山高校（和歌山）による5人の投手の継投戦術について、朝日新聞は「今年の甲子園の話題の一つに、スポーツ障害を防ごう、というのがあった」「無理せずかえていくやり方は、これからの高校野球の、スマートなあり方の一つであるように思える」（朝日新聞、1997年8月23日、朝刊）という投書を掲載している。

2018年12月には、新潟県高野連が2019年春の新潟大会において、1人の投手が1試合で投げることができる投球数を100球とする、いわゆる投球数制限の試験的な導入を行う計画を発表した。さらに、翌2019年には、スポーツ庁長官の鈴木大地氏が高校野球における投球数制限を支持する談話を公表している。投球数制限は、これまで甲子園大会で導入されてきた延長戦回数の削減や過密日程の解消と異なり、1人の投手が一定期間に決められた投球数を投じた場合必ず交代しなければならないという点において、継投という投手戦術をダイレクトに導く規定となる。この点について、高野連は「勝敗に影響を及ぼす規則は全国で足並みを揃えて検討すべきだ」（広尾，2019，p.30）として新潟県高野連による独自の動きに「待った」をかけ、2019年4月から「投手の障害予防に関する有識者会議」を設置し具体策を議論することを決定した。

以上のように、高校野球における投手の「正しいあり方」に関する動向を概観すると、歴史的に形成された「鍛錬主義」的な規範や価値観が、1人の投手が疲労や困難を乗り越えて投げ抜く完投や連投を賛美するものであった一方、選手の健康管理という「科学主義」的観点を踏まえて展開されてきた甲子園大会の制度改正が、継投という新たな戦術を認め導いている可能性も示唆されている。選手や野球部による取り組みの変化は、その取り組みを伝えるメディアの報道内容の変化に関わるという点で、「物語」の揺らぎや再生産に影響を与えうるものである。したがって、甲子園大会での投手戦術において、上述した制度改正を背景としながら、完投と継投という投手戦術が具体的にどのように実践されてきたのかを分析することで、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争のなかで生じている、「物語」再生産に関わる取り組みの揺らぎに関する一側面を把握できるものと思われる。

また、第三章で指摘したように、選手や野球部による取り組みの変化は、それ自体、構造的な規定と行為者の主体的解釈との相互作用により再生産するものとして捉えられる。この再生産のあり方を条件付ける重要な要素として、指導者による指導を挙げることができよう。部活動における指導者は、「活動目標及びその目標達成に向けた練習計画・内容を決定」することで「主導性を発揮して適切な方向に導く」（深見・井上，2019）役割を有している。特に、本章で着目する投手戦術の選択については、多くの場合、指導者がチームの監督として決定権を有しているものと推察される。この点を踏まえ、投手の完投や連投、あるいは投球数制限や継投という具体的な取組みのあり方に重要な影響を与えうる、「正しい投手指導のあり方」に関する規範や価値観の揺らぎについても検討しておきたい。

2. 調査概要

上記の議論を踏まえ、【研究1】では以下2点の調査から、高校野球の「物語」再生産に関わる選手や野球部の取り組みの揺らぎに関する一側面として、投手戦術と「正しい投手指導のあり方」に関する揺らぎの諸相を分析する。

1) 調査 A：夏の甲子園における完投率の推移

調査 A では、夏の甲子園出場校において投手の完投と継投が歴史的にどのように実践されてきたのかについて検討する。戦術の変遷を客観的に明らかにするためには、数量化した指標を時系列的に分析していくことが望ましい。そこで、ここでは朝日新聞社と朝日放送テレビが夏の甲子園大会に関する過去の戦績を提供しているウェブサイト「バーチャル高校野球」(SPORTS BULL, online) に掲載された各大会のスコアデータを用いて、夏の甲子園における投手の完投率の歴史的な推移を分析していく。

また、算出された完投率の推移を、甲子園大会における制度改正や、高校野球に関する医学的研究の展開と摺り合わせ、投手戦術の変遷が「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争といかに関連しているのかについて考察を行う。

2) 調査 B：「投手の障害予防に関する有識者会議」議事要旨の検討

調査 B では、調査 A で示された夏の甲子園における投手戦術の変遷を踏まえ、その変遷に重要な影響を与えと思われる「正しい投手指導あり方」の揺らぎについて、「投手の障害予防に関する有識者会議」議事要旨を用いて検討していく。

スポーツの規範や価値観をめぐる正統性の揺らぎや変動について、制度的正統性を担保する組織の議事録等を分析対象とした研究として、松島(2009)、海老田(2012)、黒須(2013)、来田(2014)などがみられる。これらの研究は、世界戦略へ向けたラグビー機構の再編成(松島, 2009)、日本における「柔道整復」という文言の承認プロセス(海老田, 2012)、IOC によるオリンピック休戦アピールの決定過程(黒須, 2013)やオリンピックの女性参加推進(来田, 2014)など、それぞれ特定の領域において正統とみなされる制度やシステム、支配的コードの形成やその変動に関するダイナミズムを、議事録に記されたやり取りから読み解いたものである。

これらの研究手法に示唆を得て、調査 B では、球数制限の是非に関する議論を契機として創設された上記会議の議事内容から、「正しい投手指導あり方」に関する規範や価値観の揺らぎを読み解くことを試みる。分析手順は来田(2014)を参照し、会議の構成メンバーや議事内容の全体像を整理したうえで、会議の時系列に沿って投手指導のあり方に関する個別の発言内容をカテゴリー化して分析していく。

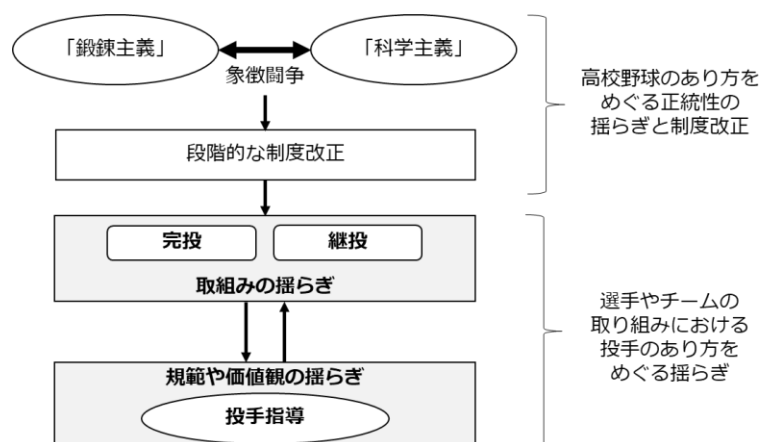


図 4-1 投手の取り組みと「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎ

3. 夏の甲子園における投手戦術の変遷

以下では調査 A として、夏の甲子園出場校の投手戦術における完投と継投の割合およびその時系列的推移に関する分析結果を示し、戦術の変遷が「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争という背景とどのように関連しているのかについて検討する。

1) 完投率の推移

まず、第 1 回夏の甲子園（1915 年）から第 100 回夏の甲子園（2018 年）までの投手の完投と継投の割合およびその変化を大局的に把握するため、10 大会ごとに全試合の完投率を算出した。結果を図 4-2 に示す。

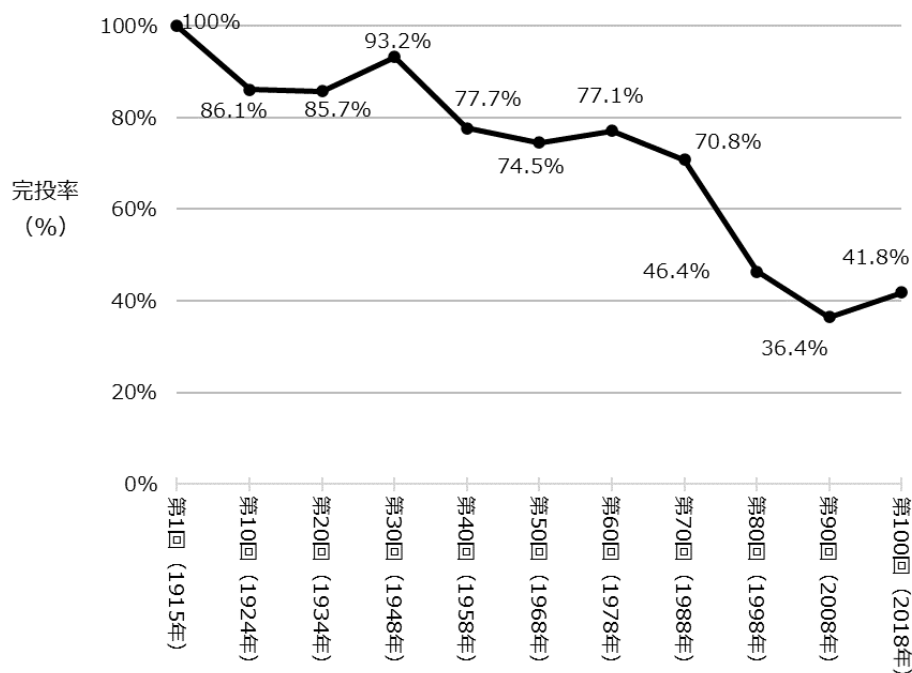


図 4-2 夏の甲子園における完投率の推移（10 大会ごと）

完投率の推移をみると、全試合で全チームの投手が完投し、完投率が 100%であった第 1 回夏の甲子園から、現代に至るまで段階的に完投率が減少（＝継投の割合が増加）してきている様相を読み取ることができる。特に 1990 年代以降、完投率の大幅な減少がみられ、第 80 回（1998 年）、第 90 回（2008 年）、第 100 回（2018 年）の 3 大会では完投率が 50%を切っている。上記 3 大会では、投手戦術として完投より継投の方が多く用いられていたことが分かる。

そこで、投手戦術に顕著な変化がみられた 1990 年代以降の推移をより詳細に明らかにするため、1990 年の第 72 回大会から 2018 年の第 100 回まで全大会の完投率を算出した。結果を図 4-3 に示す。

1990 年代以降の大会においては、各年で多少の増減がありながら、段階的に完投率が減少してきている様相を読み取ることができる。すなわち、1990 年代以降における完投の減少、継投の増加は、特定の大会に偶然みられた事象であるというよりも、夏の甲子園における投手戦術の変化に関する一傾向であると考えられる。

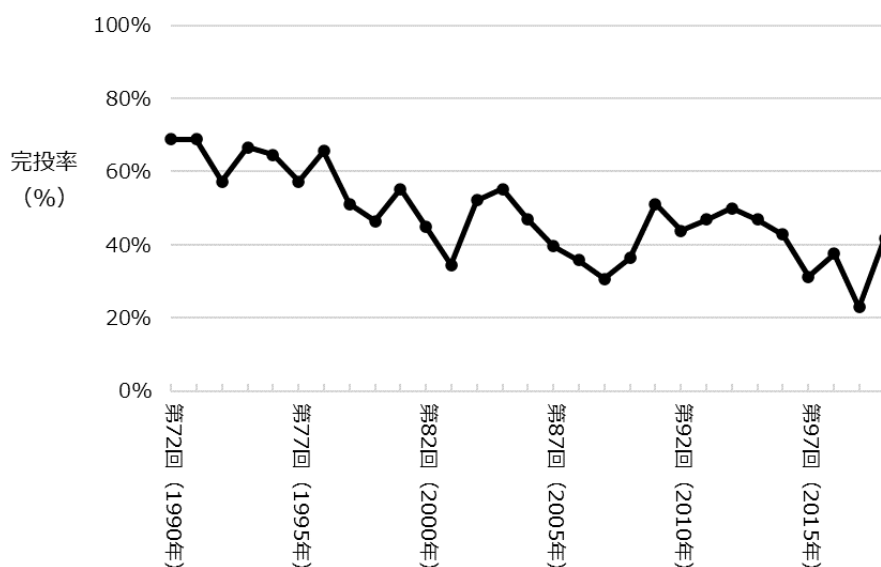


図 4-3 1990 年以降の夏の甲子園における完投率の推移

2) 「科学主義」と継投の関係性

特に 1990 年代以降、夏の甲子園において投手の完投が減少し継投が増加しているという傾向を踏まえ、以下では高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争が、上記の投手戦術に関する傾向とどのように関連しているのかについて検討していく。

第一章で論じたように、甲子園大会における選手の健康管理という観点に基づく制度改正や、高校野球に関する「科学主義」的な規範や価値観の形成は、日本のスポーツ界における科学的知見の蓄積と連動して生じてきたものと指摘されている（高柿，2020）。そこで、ここで改めて「甲子園大会の制度改正」「高校野球に関する科学的知見の蓄積」「甲子園大会における投手戦術の変遷」の三者関係を検討するため、甲子園大会の投手に関わる主要な制度改正、ならびに高校野球に関する科学研究の発表数を、図 4-2 で示した夏の甲子園における 10 大会ごとの完投率の推移と合わせてグラフ化した（図 4-4）。なお、科学研究の発表数集計については宮川ほか（2010）の手続きを援用し、「CiNii 論文情報ナビゲータ」を用いて「高校野球 and 科学」をキーワードとして抽出した論文のうち、①日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会誌に掲載されている文献、②大学が発行する研究紀要および報告書に掲載されている文献、という条件に該当するものを年代ごとにカウントしている。

先に論じたように、1958 年夏の甲子園から導入された延長回数制限の規定は、夏の甲子園において選手の健康管理という観点から取り入れられた初の施策であったとされているが、投手の「正しいあり方」をめぐるのは、その後も完投や連投が賛美される価値観が一定程度続いてきたものとみられる。完投率の推移をみても、1980 年代の大会まで 70% 台を推移しており、完投の方が継投よりも大会において主要な投手戦術であったことが伺える。研究の動向をみると、1970 年代まで、高校野球に関する科学研究はいくつか散見される程度である。具体的な研究内容については、例えば運動中における心拍周期の測定（宇都山，

1961) や夏の甲子園出場選手の身長・体重に関する分析(額田ほか, 1968) など、基礎的な身体・生理指標を測定・分析したものが中心であった。

研究数は、1980 年代以降に増加傾向がみられる。1980 年代の研究では、これまで論じられてきた身体・生理指標に関するものに加え、選手のスポーツ障害対策やその治療法に関する研究(川村ほか, 1990 ; 服部ほか ; 1993) など、高校野球選手の障害に着目したものもみられている。1993 年には、夏の甲子園に投手として出場する可能性がある投手 130 人を対象に肩肘関節機能の検診が行われ、約 7 割の選手が肩・肘の故障歴があるという報告(中川ほか, 1994) がなされた。1994 年に甲子園大会にメディカルチェックが導入されて以降は、具体的な症例分析(長嶺ほか, 1996) や甲子園大会メディカルスタッフの活動報告(橋本, 1998) などの論考もみられている。

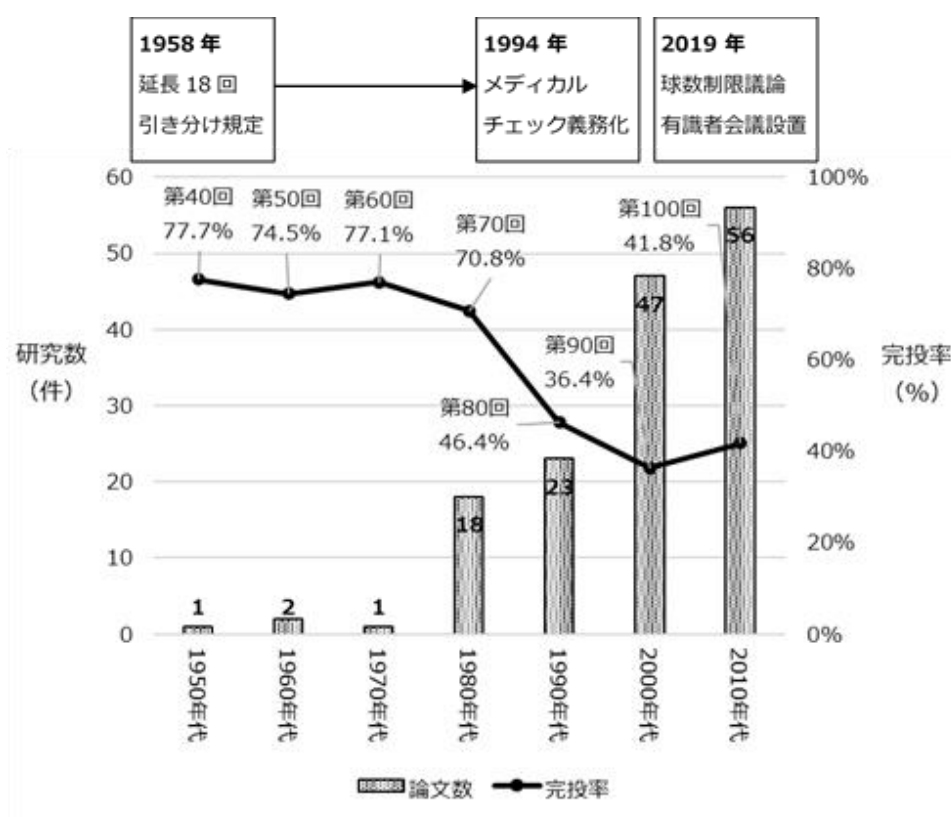


図 4-4 完投率の推移と研究数および制度改正の動向

橋本(1998) は甲子園におけるメディカルチェックの導入が、上記 1993 年に報告された検診結果(中川ほか, 1994) を踏まえたものであることを示唆している。この橋本(1998) の議論や、上述した制度改正と研究数増加の時系列をみれば、「甲子園大会の制度改正」は、「科学的知見の蓄積」と連動し、その成果を踏まえて展開されてきたものであったと理解することができよう。そして、1990 年代以降、研究数のさらなる増加と呼応するように、投手戦術における完投率の減少(完投の減少、継投の増加) が顕著にみられている。この様相は、高校野球における「科学的知見の蓄積」と「甲子園大会の制度改正」が、出場校における投手戦術のあり方に影響を与えてきた可能性を示唆していよう。この点について、1981

年から 2002 年まで高野連の会長を務めた牧野直隆氏は、朝日新聞のインタビューにおいて「複数投手制も甲子園大会では現在、主流を占めるようになった」（朝日新聞，2006 年 7 月 19 日，朝刊）と述べ、その変化を推し進めた要因が選手の障害予防に向けて導入されたメディカルチェックであったという認識を示している。

以上、調査 A として、夏の甲子園における投手の完投率の推移、ならびにその推移と高校野球に関する科学的知見の蓄積や大会の制度改正との関連性について検討してきた。甲子園大会における投手の完投率は歴史的に減少してきており、特に 1990 年代以降に顕著な減少がみられている。この変遷は、高校野球に関する科学的知見の蓄積と、その知見を踏まえた大会の制度改正を背景として生じてきた可能性があるといえる。

4. 「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎ

調査 A の結果を踏まえ、以下では調査 B として、完投の減少、継投の増加という取り組みの変化に関係する「正しい投手指導のあり方」に関する規範や価値観の揺らぎについて、「投手の障害予防に関する有識者会議」の議事要旨を対象として分析する。

1) 「投手の障害予防に関する有識者会議」の概要

「投手の障害予防に関する有識者会議」は、新潟県高野連による提案やスポーツ庁長官の談話を契機とした投手の投球数制限導入に関する機運の高まりを受け、高野連によって 2019 年に設置された会議である。会議の目的は「高校野球のスポーツ障害の実態を把握し、その予防に必要な対策を検討する。また、高校野球の障害予防を考えると、成長期途上にある小学生、中学生の野球活動との一貫した取り組みを考える必要があり、その実態を把握しつつ、医学的知見をもとにし、成長期の野球選手にとって、より適切な活動指針を有識者により提言することを目的とする」（日本高等学校野球連盟，2019a）と定められており、主な検討課題として、①高校野球が実施してきたこれまでの障害予防の取り組みの再評価、②高校野球の大会・試合、日常の練習に関する実態把握とその課題、③成長期の野球選手にとって持続、継続可能な障害予防の検討、④投球制限に関するエビデンスの検討、⑤投球制限などの実施に向けた具体的な課題の検討の 5 点が挙げられている（日本高等学校野球連盟，2019a）。

会議は 2019 年 4 月から 11 月までの期間に計 4 回開催された。委員は「医学、教育、体育及び技術指導の経験者の中から適任者を理事会が選任し、会長がこれを委託する」（日本高等学校野球連盟，2019b）とされ、表 4-2 に示した 13 名で構成されている。第 1 回会議から第 3 回会議までの議事要旨は高野連のホームページ上で公開され、第 4 回会議後には、これまでの議論に基づきまとめられた高野連に対する答申案の骨子がメディア向けに公開された。

表 4-2 「投手の障害予防に関する有識者会議」委員（五十音順、敬称略）

宇津木 妙子	（公財）日本ソフトボール協会副会長
岡村 英祐	太陽法律事務所／弁護士
川村 卓	筑波大学体育系准教授／同大野球部監督
小宮山 悟	早稲田大学野球部監督
田名部 和裕	（公財）運動器の健康・日本協会事務局長、（公財）日本高等学校野球連盟理事
土屋 好史	（公財）日本中学校体育連盟・軟式野球競技部専門委員長、高崎市立榛名中学校教諭／同中学野球部監督
富樫 信浩	新潟県高等学校野球連盟会長
中島 隆信	慶應義塾大学商学部教授
正富 隆	行岡病院副院長、（公財）日本高等学校野球連盟医科学委員会委員
百崎 敏克	佐賀県立佐賀北高等学校野球部元監督
山崎 正明	高知県高等学校野球連盟理事長
渡邊 幹彦	東京明日佳病院院長、（一財）全日本野球協会医科学部会会長
渡辺 元智	横浜高等学校野球部元監督
日本高等学校野球連盟（2019b）を参照し筆者作成（肩書は委託当時）	

2) 「投手の障害予防に関する有識者会議」の議事内容

計 4 回の会議それぞれの期日および議事内容の概略を表 4-3 に示す。

表 4-3 「投手の障害予防に関する有識者会議」概略

	期日	主な内容	主題
第1回	2019年4月26日	有識者会議設置の背景 新潟県高野連による提案経緯説明 委員による意見交換	障害予防に関する方向性、論点の抽出
第2回	2019年6月7日	医科学的エビデンスの共有 指導経験者の意見 新たな規定導入の枠組み検討	多角的視点を踏まえた規定枠組みの検討
第3回	2019年9月20日	規定導入の枠組みにおける各項目の 具体的検討	規定内容の具体化
第4回	2019年11月5日	議事録未公開のため詳細は不明 （本会議をもって高野連への答申案確定、マスメディアへ公表）	

日本高等学校野球連盟（2019c, 2019d, 2019e）を参照し筆者作成

主に第1回、第2回の会議において、投手の完投・連投や継投、球数制限等の規定に関する是非やその論拠、規定導入の方針や枠組みについて検討がなされ、第3回、第4回の会議において、導入する規定や答申案に盛り込む項目の具体的な精査が行われたものとみられる。そこで、ここでは主に、具体的な規定導入の前提として投手指導のあり方に関する議論がみられた第1回、第2回会議の議事要旨から、「正しい投手指導のあり方」をめぐる規範や価値観の揺らぎについて検討していくこととする。

(1) 規定導入の考え方と方向性に関する議論

2019年4月26日に開会された第1回会議では、会議の趣旨や新潟県高野連による投球数制限提案についての経緯が共有された後、投球数制限等の規定に対する考え方について委員間で意見交換が行われている。各委員の意見が規定の導入や投手のあり方に関する自身の立場や観点を示した発言となっていることから、ここではそれぞれの立場ごとに提示された観点を整理していく。

まず、投球数制限等の導入に肯定的、積極的な立場を示した委員の意見を以下に示す。

「やはり医科学の先生方と話をしながら、選手たちの将来を考えてあげるべきではないか」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.3）

「高校生に関する制限は甲子園の検診時のアンケートから考慮した。投手は1日当たり120球以下だと70~80%で故障はなく、1週間の投球数が500球以下だと80~90%で故障はなかった」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.4）

これらの意見は、これまでの甲子園大会の制度改革においても焦点であった【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】を改めて確認し、現在よりも踏み込んだ対応として投球数制限等の導入を検討するべきであるとするものである。また、この観点を前提としつつ、別の観点を加えて示したものとして、以下のような意見もみられた。

「スポーツ界が変わってきている。指導者は環境が変化していることを理解し、昔のままの指導ではいけないので勉強しなければいけない」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.3）

「新潟の提言では小中学生を含めた野球界全体へのメッセージと思う。その中でインパクトの大きい高校野球がどちらを向くか問われている。野球界全体で取り組むいいチャンスだと思う」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.4）

これらの意見は、医科学的な観点に加え、野球界あるいはスポーツ界全体における【スポーツ指導観の変化】を念頭におき、影響力の大きさが推察される高校野球の指導においても踏み込んだ対応が求められているとするものである。

一方で、投球数制限等の規定に対して否定的、あるいは慎重に議論すべきであるという立場からは、以下のような意見が挙げられている。

「現状で 1 試合 100 球制限をすると部員数の少ない学校ではとても厳しい。ただ連投を避けることは重要だと思う。野球の特性として格下が格上を倒せる競技で、その原点は投手。1 試合 100 球という制限は選手たちが本当の喜びを分かち合うことができにくくなり、かえって野球離れが生じる懸念がある」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.3）

「先の全国大会で優勝したとき複数投手で戦った。甲子園では一人では勝てないから二人でやった。一人でよければ一人でやる」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.3）

これらの意見は、一人の投手が投げられる投球数を制限すると部員の数の違いによって競争の不公平性が生じる懸念がある点や、投手戦術は勝利を目指すうえで合理的なものが選択されることが自然であるといった点など、いわば【勝利に対する公平性・合理性】の観点から、投手の投球数制限等の導入に懸念を示したものであるといえる。

また、上記の観点とは異なる点から規定の導入に慎重な議論を求めたものとして、以下のようない意見もみられている。

「高校生なので自分の管理は自分です。任せて欲しいと言っている。僕も反対だ。トーナメントで負けたらおしまい、子供たちの気持ちも考えてほしい」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.4）

「教え子で卒業後も野球を続けたのはわずかしかない。ほとんどが高校で野球生活を終わる。夏の大会は最後の目標だ。生徒たちにとって将来ではなく今が大切だ」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.5）

これらの意見は、選手にとって高校野球は、将来を見越した健康管理以上に、今この瞬間に賭ける特別な意味があるものであることや、そのことを前提に選手の自己管理を重視すべきであるとする、いわば【チーム・選手の意味世界と自主性】の観点から規定の導入に懸念を示した意見であるといえる。ここでいう「チーム・選手の意味世界」とは、選手や野球部の視点からみた論理、価値判断の基準を指している。

以上のように、規定導入の方向性を検討する第 1 回会議の意見交換において、投手や指導方針のあり方をめぐり【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】【スポーツ指導観の変化】などの観点から投球数制限等の導入を積極的に進めるべきだとする立場と、【勝利に対する公平性・合理性】【チーム・選手の意味世界と自主性】などの観点から、制限導入について慎重に議論すべきだという立場がせめぎ合う様相が看取された。

ただし、会議のまとめに際し「新潟県の提案は高校だけでなく小学校、中学校を含めた野球界全体でのスポーツの障害予防の取り組みを訴えていると思う。その点では誰も反対はない」（日本高等学校野球連盟，2019c，p.5）として議論が進められていることから、上記に示した観点のうち【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】については委員間で合意が形成されたものとみられる。この合意を前提に、第 2 回以降の会議では、どのような対策であれば挙げられた懸念点を払拭しつつ導入することができるのか論点となる

ことが確認されている。

(2) 具体的な制度設計に関する議論

2019年6月7日に行われた第2回会議では、高校野球の指導経験者における指導現場での具体的な取組事例や考え方、特定の期間に投球数を制限する基準を検討する上で参照されるべき医科学的エビデンス、小中学校における指導の状況などが各委員から示され、それらを踏まえて投手の障害予防に関する新たな規定の具体的な枠組みについて議論がなされている。

【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】が委員間の合意事項であることは先述の通りであり、この点について、当該会議では具体的にどの程度の期間で何球程度の投球数が望ましいのかについて調査データをもとに議論が進められている。対して、以下では特に、現場の指導者からの意見と、その意見を踏まえて規定の枠組みが具体化されるプロセスにみられる「正しい投手指導のあり方」に関する揺らぎに着目していく。

指導現場の取組事例について報告した2人の委員は、現場での指導方針や考え方について、それぞれ以下のような意見を述べている。

「うちの学校の場合、よその学校みたいに優秀なピッチャーがはいってこないものですから、1人で9回、あるいは何試合も投げるといのはほとんどありません。でも、そういう選手が来なくても甲子園には出たい。しつこく出ていますけれども、ということは、それを補う野手であったりとか、そういう者をなんとか使えるように準備しております。大体1試合の中で5人から6人用意しています。調子がよければ3回、4回、悪ければ1回でかえると、そういう考えのものとにやっています。試合をする以上は勝ちたい、勝って甲子園に出たい、甲子園にできれば勝ちたい、そういうものはあるものですから、どうしてもよその学校を見ますと、エース、エース、エース、エースでいくんですね。1人のピッチャーに負担がかかる」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.4）

「球数制限そのものは、私は将来的には大いに議論を重ねて、前向きに検討してもらいたいとは思っていますけれども、高校でそれならば、何が僕は一番必要かといいますと、高校で鍛えないでいつ鍛える時期があるのかと。もともと野球がこれだけ盛んになった、大谷選手が出た、イチロー選手が出た、その長い間の100年の歴史の中の積み重ねの中で、限界にトライしていこうという、そういう強い姿勢がある中で野球は進歩してきたと思うんです。できないことをできるまでやることが一流の選手を生むことなんだろうというふうに解釈しております」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.5）

上記の意見は、指導現場の実情として、第1回会議でも挙げられた【勝利に対する公平性・合理性】の観点や、高校野球のあり方として歴史的に継承されてきた【鍛錬主義的な精神】を示したものであるといえる。これらの意見は、投手の投球数等を制限するという対策

そのものが指導現場の「正しい」あり方に適うものであるのかについて、問いを立てるものであるとも解釈しうる。しかしながら、第1回会議にて【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】が合意事項とされていることから、議論の焦点は、これらの意見を踏まえつつ、指導現場の懸念を払拭できる規定を検討することに向かっている。

対策の具体化に際しては、指導者側から以下のような意見が出され、それぞれ議論を喚起している。

「人によったら、50球でダウンする子もおりますし、200球投げても大丈夫な子もおります。そういう面では、球数制限はどうかというのはあります」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.4）

「高校生でも50球でだめなの、100球でだめなの、250球いけるという選手もいます」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.5）

「個人差があるため、疲労度がある場合は投球せずに、あとは速い投球ができる選手ほど同時に障害のリスク、速い球を投げるとするのはそれだけ負荷がかかっているということを押さえた上で、指導されるということが望ましい」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.11）

これらの意見は、1日の投球数に耐えうる力は選手によって異なるとする【選手の個別性】という観点を示したものである。この観点に関する議論を踏まえ、投球数制限等の規定は「1人1日何球以内」という固定化したものではなく「1人数試合あるいは1週間で何球以内」という形式で、指導現場で運用する幅を持たせた規定が望ましいことが確認された。

また、指導現場で規定を運用することと関連して、以下のような意見も挙げられた。

「指導者研修会がいかに大事であるか、指導者がその観点に立たない限りは、幾ら球数制限、あるいは障害予防、あるいはけが予防、これを議論してもなかなか前に進まないような気がいたします。基本は指導者だと、間違いなく指導者であると、なぜならば現場にいる指導者が一番よくわかるわけです」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.5）

「本来、スポーツというのは、本人の主体性を持って臨んでいくことが一番大事な問題だろうというふうに思うんです」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.5）

「現場の監督が研修会を開いて、そして選手の個々の力を洞察する。そして、主体は選手であって、選手にできるところまでやらせるということが高校野球の一番の魅力ではないかと、個人の思考力を養わない限り、本人たちの野球が終わった後の世界はむなしなものに終わってしまうのではないかという風に思います」（日本高等学校野球連盟，2019d，p.6）

これらの意見は、管理・指導する指導者に適切な知識を身に着けてもらう【指導者教育の必要性】を具体的に形にすることで、【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】を前提としつつ、第1回会議でも提起された【チーム・選手の意味世界と自主性】を尊重することが可能になるはずだ、という指摘である。これらの指摘を踏まえ、第3回、第4回の会議においては、具体的な期間と投球数を定めることに加え、競技団体として高校や野球界全体の指導者育成に取り組む方針や計画についても答申案に盛り込むことが検討されることとなった。

以上のように、具体的な制度設計に関する議論が行われた第2回会議について、指導者の意見を踏まえ制度の枠組みが検討されたプロセスに着目してみると、指導者から【勝利に対する公平性・合理性】【鍛錬主義的な精神】など、投球数制限等の導入それ自体の正当性を問う観点からの意見もみられたものの、会議の目的であり合意事項とされた【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】自体を覆す議論とはならず、具体的な制度改正の枠組みについて議論が進められている。一方で、指導現場における実情を踏まえた制度の導入という点で、【選手の個別性】や【チーム・選手の意味世界と自主性】を勘案し、指導現場で運用する幅を持たせた規定にすること、および、運用の幅があっても適切な指導がなされるよう【指導者教育の必要性】についても答申案に盛り込むことが示されている。

3) 「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎ

ここまで検討した2回の会議を踏まえ、第3回、第4回の会議では、高校野球における投手の投球数制限等の規定のあり方、および障害予防対策の枠組みと方針について具体的な項目が検討され、第4回会議の後、高野連への答申案の骨子が公表された（表4-4）。投球数等の具体的な制限は「1人7日間で500球以内」とされたほか、本会議の議論に基づき、高野連が検討すべき規定に加えて加盟校および野球界全体に障害予防に対する指針を示した答申案となっている。

表 4-4 「投手の障害予防に関する有識者会議」 答申案骨子

分類	内容
競技団体としての責務	<ul style="list-style-type: none"> ・ 3連投の回避（雨天で日程変更等、やむを得ない場合を除く） ・ 1人の投球数は7日間で500球以内に制限（3年間は試行期間） ・ 健康管理調査票の活用
加盟校が行うべきこと	<ul style="list-style-type: none"> ・ 過剰な練習の回避 ・ 身体の痛みや不安を指導者に伝えられる環境づくり ・ 積極的な複数投手の育成 ・ 正しい投球フォームの指導方法を深く学ぶ
野球界全体へ向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野球手帳の普及・推進 ・ 学童・中学期における大会、試合数の精査とシーズンオフの導入 ・ 成長期のスポーツ障害早期発見のための健診システムの構築 ・ 野球関係団体による地域連絡協議会の結成 ・ 指導者のライセンス制の検討

朝日新聞（2019年11月6日、朝刊）を参照し筆者作成

ここで改めて、議論のプロセスにみられた「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎについて整理しておく。

まず、投球数制限等の導入それ自体の是非や妥当性をめぐる議論において、高校野球で歴史的に継承されてきた勝利主義や精神修養・鍛錬主義の規範や価値観とも合致する【勝利に対する公平性・合理性】【鍛錬主義的な精神】を重視するあり方と、スポーツ科学的知見の蓄積に基づき甲子園大会の段階的な制度改正の論拠とされてきた【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】を重視するあり方とのせめぎ合いがみられた。このせめぎ合いは、まさに本研究の背景である高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争が、「投手指導のあり方」をめぐって具現化されたものとして捉えうる。しかしながら、当該会議はその設置目的自体が障害予防を焦点としていることもあり、【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】、すなわち「科学主義」的な観点からの制度改正が合意事項とされたうえで、規定の枠組みが検討された。

具体的な規定の枠組みを検討するプロセスにおいては、【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】に関する議論が統計的なデータを基に特定の投球数規定として一律に線を引く性格であることに対し、指導現場から【選手の個別性】や【チーム・選手の意味世界と自主性】を勘案する必要があるという論点が提示された。この議論は、一定の基準について一般化を志向する「制度の論理」と、指導者や選手自身による主体的判断の余地と柔軟性確保を志向する「指導現場の論理」とのせめぎ合いであると解釈できよう。結果として、答申案に盛り込まれた規定は一定程度指導現場での運用の幅を持たせたものとなり、その運用が【医科学的エビデンスに基づく障害予防対策の必要性】に適うよう、【指導者教育の必要性】に関わる提言として、競技団体としての規定の提示のみでなく、加盟校や野球界全体に対して障害予防を啓蒙するための項目が盛り込まれることとなった。

以上のように、「投手の障害予防に関する有識者会議」の議論では、「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎの内実が、「鍛錬主義」的観点と「科学主義」的観点のせめぎ合いから、「科学主義」的観点を前提とした指導における「制度の論理」と「指導現場の論理」のせめぎ合いへと移行しており、結果として制度面において、「科学主義」的な新規定を指導現場での運用における柔軟性を残しながら導入していくことに決着していた（図 4-5）。

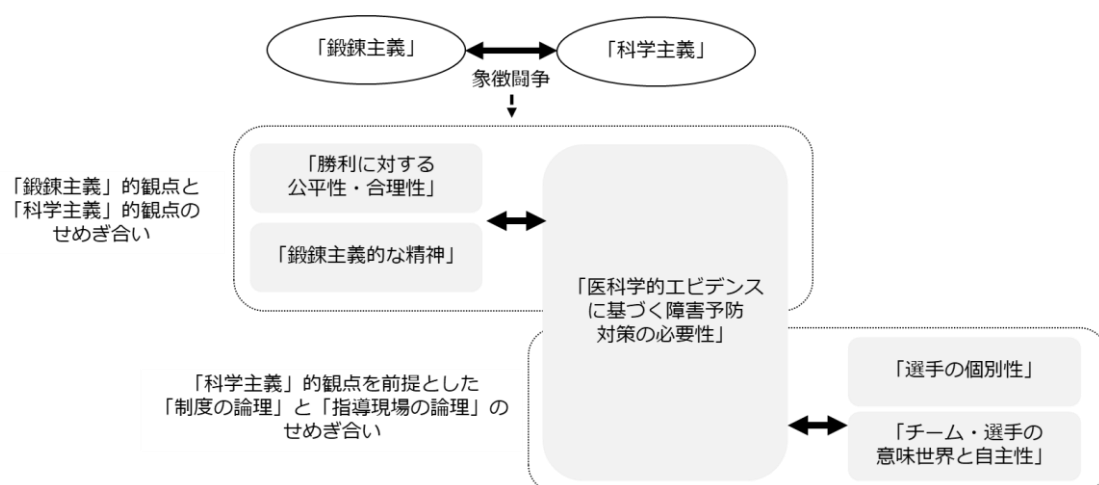


図 4-5 「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎの構造

5. 投手のあり方をめぐる揺らぎの諸相

【研究1】における2つの調査結果をもとに、投手戦術の変遷や「正しい投手指導のあり方」をめぐる揺らぎが、高校野球にまつわる「物語」の再生産にどう関連するのかについて論じていきたい。

調査Aの結果より、甲子園大会において歴史的に完投の減少、継投の増加という投手戦術の変遷がみられ、特に1990年代以降では、医科学的知見の蓄積と制度改正に連動した顕著な変化が看取された。したがって、上記の変化が加速する今日において、完投する投手と継投する投手たちを、それぞれメディアがどのように報じているのかについて分析を行うことで、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を背景とした取り組みの変化と「物語」再生産のダイナミズムを具体的に読み解くことができる可能性がある。

また、投手に関する取り組みの変化に影響を与えているものと思われる、指導のあり方に関する規範や価値観について、調査Bでは、「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合いから、「科学主義」を前提とした「制度の論理」と「現場指導の論理」のせめぎ合いへ、すなわち科学的な基準による線引きと選手の個別性や意味世界の尊重をめぐるせめぎ合いへと移行する様相がみられた。指導のあり方が「科学主義」を前提としたものに移行しているという変化は、投手戦術における科学化、すなわち完投の減少、継投の増加という変化を後押しする規範や価値観の変化であると捉えうる。

ただし、選手の個別性や意味世界を尊重するという指導現場の論理が、「鍛錬主義」的なあり方や観念を担保する余白となる可能性も指摘しておきたい。氏家は高校野球の指導者について、「試合では『選手が続投を志願した』という理路で、登板過多の正当性を語る。さらには『エースと心中した』と美談にしようとする傾向にある」（氏家，2014，p.4）と指摘している。「科学主義」的な価値基準に基づく制度的な線引きに対し、本来的には科学的な障害予防の重要性を共有しつつ教育的論理に立脚した立場であるはずの「選手に合わせた指導」「選手の自主性を重んじた指導」という立場が、結果として「鍛錬主義」的なあり方や観念を正当化する拠り所となる可能性もあるといえる。

以上の議論を勘案しつつ、メディアと「物語」の再生産について論じる際に重要となるのは、「科学主義」的な制度改正と取り組みの変化がみられるなかで、結果的に今日生じている投手の連投や完投など、これまで「鍛錬主義」的な観点から賛美されてきた取り組みを、今日のメディアがどのように報じているのかという点であろう。

次章以降では、現代における投手の完投や連投、および継投などの取り組みを扱うメディア・テキストの分析から、高校野球にまつわる「物語」の再生産の諸相とメディアの影響について検討していきたい。

第五章 新聞報道にみられる揺らぎ

本章では【研究 2】として、高校野球の投手に関する新聞報道に着目し、「物語」の再生産に対する新聞報道の関わりについて検討する。

1. 分析概要

1) 分析の背景および視点

第三章で検討したように、新聞というメディアは、限定化された紙面に文字情報を配列させることで、共同体の公共的ストーリーを告白すると同時に、集団的態度を形成する作用を有することを特徴とする（マクルーハン，1987）。このことから、新聞記事の内容から「世論」を象徴的に把握しようとする研究（筒井，1999；中嶋，2008）や、あるいは新聞ができごとを取捨選択し限定化した情報や自社イベントの自主報道が人々の解釈枠組みを構成していることを明らかにしようとする研究（斉藤，1998；竹下，2008；津金澤，1996）などが展開されてきた。

高校野球発展の経緯における新聞社の立場、およびメディアをある種の象徴権力として読み解くという視点を踏まえれば、本研究における新聞報道の分析は、上述した研究系譜のうち後者、すなわち新聞が取捨選択し配列した高校野球に関する文字情報が、人々の高校野球に対する解釈枠組みを生成しているという視点が特に示唆的であるといえる。一部の新聞社が甲子園大会を主催し、高校野球の制度的正統性の生成に関わると同時に、その価値基準に準拠した選手やチームの取り組みを美談化して伝える傾向性が指摘されてきたことは、これまで論じてきた通りである。特に、本研究で着目する「投手のあり方」に関する報道では、第四章でも示したように、「鍛錬主義」的な価値基準に基づき疲労や困難を乗り越えて連投や完投を果たす投手を賛美する傾向もみられていた。

これらの背景を踏まえ、本章では【研究 2】として、高校野球の「物語」再生産に対する新聞報道の関わりについて検討していく。第三章で論じたように、「物語」の再生産に対するメディアの関わりを読み解くためには、選手やチームの取り組みの揺らぎ、およびその揺らぎを伝えるメディア・テキストの揺らぎという二重の過程を検討することが有効であると思われる。取り組みの揺らぎに関しては、【研究 1】において、夏の甲子園で歴史的に完投の減少、継投の増加という投手戦術の変遷がみられることや、特に 1990 年代以降、高校野球に関する医科学的知見やそれを踏まえた制度改正と連動して上記の変化が顕著であること、制度改正の議論において「正しい投手指導のあり方」に関する揺らぎがみられることなどが示された。

そこで、【研究 2】では、歴史的に連投や完投を賛美し「鍛錬主義」的な価値を提示してきたとされる新聞報道が、投手戦術の変化や「投手のあり方」をめぐる揺らぎがみられる今日において、その揺らぎや変化の様相をどのように報じているのかについて分析を行い、高校野球の「物語」再生産に対する新聞報道の関わりについて検討していきたい。

2) 分析対象

2018 年から 2019 年にかけて朝日新聞に掲載された①高校野球の投球数制限に関する記事、②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事、を分析対象とする。

朝日新聞は、高校野球を「正しく」管理するという立場から、夏の甲子園の主催を大正期より続けており、歴史的に高校野球に関する規範や価値観の醸成・伝播に深く関わってきた。第一章で検討したように、朝日新聞が一高野球の信条に依拠し、夏の甲子園を、「正しく」「模範的な」高校野球の取り組みを象徴するイベントとして創設したことに端を発し、メディアを介した「物語」の形成が促されてきた。このことから、高校野球の新聞報道を読み解くうえで、朝日新聞の記事は特に重要な研究対象とされ、これまで、朝日新聞のテキストを対象とした分析によって、精神修養・鍛錬主義や勝利主義など一高野球の信条を基盤に形成された甲子園大会の精神を具現化・美談化する報道傾向がみられること（有山，1997）や、その報道が日本人の伝統的な価値基準を象徴化したものであること（小椋，1994）などが指摘されている。春の甲子園を主催する毎日新聞や、その他多くの新聞においても高校野球の報道は盛んにみられるが、上記の経緯を踏まえれば、朝日新聞による報道を読み解くことは、高校野球の「物語」について検討するうえで重要な意味をもつといえよう。そこで、ここでは、「正しい投手のあり方」が揺らぐ今日において、その揺らぎが具現化された制度改正の様相や、夏の甲子園で完投・連投する投手たちの取り組みを、朝日新聞がどのように報じているのかを分析することで、「物語」の再生産における新聞報道の関わりに関する諸相を読み解いていきたい。

投手の投球数制限については、第四章で詳細に検討したように、2018 年末の新潟県高野連による提案を契機として社会的な議論が生じ、2019 年に高野連が設置した有識者会議において具体策が検討されている。投手戦術の変化、具体的には完投の減少、継投の増加をダイレクトに導く可能性が高い制度であることから、高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争、およびそのもとに生じている「正しい投手のあり方」をめぐる揺らぎを代表する事例の一つであると捉え、分析対象とした。

また、上記の揺らぎがみられるなかでも、今日の夏の甲子園においても一定数、投手の完投や連投がみられている。では、これまで高校野球の「鍛錬主義」的側面を美談化する報道傾向が指摘されてきた朝日新聞は、「正しい投手のあり方」が揺らぐ今日、完投・連投する投手の様相をいかなる文脈で報じているのであろうか。この点を投球数制限に関する報道と比較しつつ検討することで、「物語」再生産に対する新聞報道の関わりをより多角的に検討できるものと考え、完投・連投した投手に関する記事も併せて分析対象とした。

対象となる記事は、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱ」を用いて、表 5-1 に示した検索条件及び期間をそれぞれ設定し抽出した。連続した期間の記事を検討することで 2 つの記事群の対比をクリアに把握することを意図し、①高校野球の投球数制限に関する記事については、新潟県高野連による提案がなされた 2018 年 12 月 22 日から 2019 年夏の甲子園開幕日前である 2019 年 8 月 5 日まで、②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事については、2019 年夏の甲子園開幕日の 2019 年 8 月 6 日から大会終了 1 週間後の 2019 年 8 月 29 日までのものを対象とした。上記の条件により、①高校野球の投球数制限に関する記事 48 本、②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事 66 本が抽出された。

表 5-1 調査対象

	検索条件	期間	抽出本数
①高校野球の投球数制限に関する記事	「高校野球 and 球数制限」 「高校野球 and 投球数制限」	2018年12月22日から 2019年8月5日	48
②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事	「高校野球 and 連投」 「高校野球 and 完投」	2019年8月6日から 2019年8月29日	66

3) 分析方法

新聞記事の分析に関しては、コーディングによる内容分析が広く一般的に用いられており（日吉，2004）、スポーツに関する新聞報道を分析する方法としても活用されている（遠藤，2018；小木曾ほか，2021）。コミュニケーションを記述し、意味についての推論を行うため、あるいは、コミュニケーションから生産と消費の両者のコンテキストを推論するための方法論である内容分析（Riffe et al, 2019）は、紙面上に限定可され配列されたテキストから新聞社の立場や付与された意味を読み解き、それらを踏まえて「物語」の再生産に対する新聞社の関わりを検討するうえで有用な手法であろう。

本分析では、町田ほか（2018）によるコーディングの手法を参照しつつ、高校野球の「物語」再生産に対する新聞の関わりを読み解くという目的を勘案し、投球数制限あるいは投手の完投・連投に関して肯定的か否定的か等の「立場・主張」、何を主題として記事化されているのか、誰の意見が用いられているのか等の「報道対象」、投球数制限あるいは投手の完投・連投がそれぞれどのような視点で報じられ、どのような意味付与がなされているのか等の「視点・意味付与」の3つのカテゴリーを設定し、コーディングを行った。カテゴリーの特性を考慮し、「立場・主張」については記事ごとに1つの項目を記録し、「報道対象」「視点・意味付与」については記事ごとに該当する全ての項目を記録した。「報道対象」「視点・意味付与」は全ての記事の内容からコーディング項目を列記していき、すでに挙げられた項目と異なる項目が出現した際には新たな項目として付け足した。結果として、①高校野球の投球数制限に関する記事については22項目（表5-2）、②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事については17項目（表5-3）が抽出された。

コーディングは、カテゴリーと項目の枠組みに沿ってテキストを機械的に分類していく作業ではあるが、どの記述がどの項目に当てはまるのかを判断するうえで、筆者であるコーダーの主観的解釈が結果に影響を与えてしまう可能性もある。そこで本分析では、町田ほか（2018）の手続きに準じ、第二コーダーに一部の記事のコーディングを依頼し、筆者によるコーディング結果との一致度を検証することで、項目および判定の客観性・妥当性を検討することとした。体育・スポーツ研究領域において新聞記事のコーディング経験を有する大学院後期課程の学生1名を第二コーダーに選出し、コーディングマニュアルを共有した後、30分程度筆者がレクチャーを行ったうえで作業を依頼した。評定者間の信頼性を確認するためには、サンプル全体10%程度（サンプル数が膨大な場合は50件程度）を対象に検証することが望ましいとされている（Lombard, 2002）。そこで、①高校野球の投球数制限に関

する記事 5 件、②夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事 7 件をそれぞれランダムに抽出して検討した。筆者と第二コーダーによる 2 つの記事群のコーディング結果について、偶然の一致も考慮に入れた一致度の評価指標である kappa 係数(k)は、それぞれk=0.76、0.67 であった。k=0.81 から 1 でほぼ完全な一致、k=0.6 から 0.8 で実質的な一致とみなせることから、コーディング項目および判定の客観性・妥当性は高いと判断し、以降は筆者のコーディング結果に基づき分析を進めることとした。

表 5-2 投球数制限に関する記事のコーディング項目

カテゴリー	コーディング項目
立場・主張	肯定的
	否定的
	両論併記的
	その他
報道対象	高野連の動向
	新潟県高野連の動向
	甲子園大会、地方予選の動向
	過去の事例
	関係者・有識者のコメント
	選手・監督の取り組み・コメント
	調査
	朝日新聞の主張
視点・意味付与	負担軽減・障害予防
	投げすぎによる疲労・健康問題
	選手の将来
	野球人口の減少、子どもの未来
	投球数制限以外の施策
	スポーツマンシップ
	勝利・公平性
	相手の投球数を増やす作戦
	精神力
	選手の思い・チームの主体性

表 5-3 投手の完投・連投に関する記事のコーディング項目

カテゴリー	コーディング項目
立場・主張	肯定的
	否定的
	両論併記的
	その他
報道対象	試合の結果・展開
	チームの背景・展望
	過去の事例
	選手・監督の取り組み・コメント
	朝日新聞の主張
視点・意味付与	エースとしての誇り
	成長、困難の乗り越え
	技術・能力の卓越性
	野手・仲間の支え
	涙
	勝利主義
	精神力
	疲労、けが、休養

2. 投球数制限に関する報道

まず、高校野球の投球数制限に関する報道について分析していく。

1) 投球数制限に関する「立場・主張」

「立場・主張」のカテゴリーについて、投球数制限に「肯定的」「否定的」「両論併記的」「その他」に該当する記事それぞれの割合を表 5-4 に示す。最も多い記事は、特に立場や主張を明示しない「その他」に該当するもの（41.7%）であり、次に多い記事は、肯定的、否定的双方の立場や主張を示した「両論併記的」に該当するもの（37.5%）であった。どちらか一方の立場・主張を示した記事としては「肯定的」に該当するもの（18.8%）の方がやや多く、「否定的」に該当するものは1本のみ（2.1%）であった。

上記の割合を念頭に、記事でそれぞれの「立場・主張」が示された時系列と合わせ、記事の内容を検討していきたい。2018年12月から2019年8月まで、1ヶ月ごとに各項目の記事数を示したものが、図 5-1 である。

表 5-4 投球数制限に関する「立場・主張」

n=48			
肯定的	否定的	両論併記的	その他
9本 (18.8%)	1本 (2.1%)	18本 (37.5%)	20本 (41.7%)

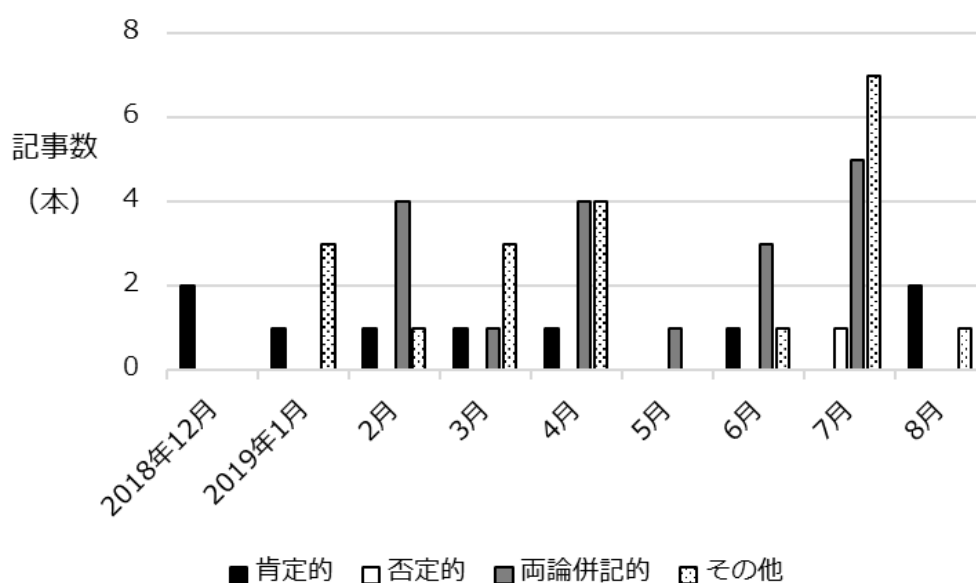


図 5-1 投球数制限に関する「立場・主張」の時系列推移

新潟県高野連が投球数制限の提案を行った 2018 年 12 月当初においては、「投手の負担軽減や故障予防に加え、複数の投手を育成することで、より多くの選手に活躍の機会を与える」（朝日新聞，2018 年 12 月 23 日，朝刊）などのメリットを挙げた、投球数制限に「肯定的」な立場を示した報道が散見される。

その後、2019 年 1 月以降、「両論併記的」な立場を示した記事が増加している。「両論併記的」な記事の増加について、記事内容をみると、2 月 20 日の高野連理事会において、新潟県高野連単独での投球数制限導入に再考を申し入れること、および 4 月に有識者会議を設置し当該事例について議論することが決定されたことの影響を読み取ることができる。高野連が制度を早期に導入する前にまず議論を深めるという見通しを示したことで、例えば「投球過多の防止の大切さは日本高野連も認める。（中略）複数投手の確保が難しいチームには不利との反論がある」（朝日新聞，2019 年 2 月 21 日，朝刊）など、投球数制限の具体的なメリット・デメリットを併記した記事が多くみられており、「多角的な検討が必要」（朝日新聞，2019 年 2 月 22 日，朝刊）という論調への変化が伺える。また、4 月には有識者会議が開催されたことから、会議で提示された投球数制限に関する賛否の意見を客観的に報じる記事も多くみられている。

7 月には「その他」および「両論併記」的な記事が期間中最も多くみられた。ここでは、

夏の甲子園の地方予選の様相を伝える記事のなかで、今後は投球数制限が導入される可能性があることに触れつつ、その是非については具体的に言及していないものや、投球数制限のメリットを示しつつ、「勝ち負けへの影響を懸念する声が目立った」（朝日新聞，2019年7月20日，朝刊）など、現場の声を交えて肯定的・否定的双方の立場を示す記事が多くみられた。8月には夏の甲子園開幕を前にして、「選手の健康を出発点に」（朝日新聞，2019年8月5日）など、改めて選手の健康管理という観点から投球数制限を望ましいものとする「肯定的」な立場を示した記事も散見された。

2) 投球数制限に関する「報道対象」

「報道対象」のカテゴリーについて、8つのコーディング項目それぞれの割合は表5-5に示す通りであった。

表 5-5 投球数制限に関する「報道対象」

							n=48
高野連の動向	新潟県 高野連の動向	甲子園大会、 地方予選の 動向	過去の事例	関係者・ 有識者の コメント	選手・監督の 取り組み・ コメント	調査	朝日新聞の 主張
23本 (47.9%)	21本 (43.8%)	13本 (27.1%)	4本 (8.3%)	21本 (43.8%)	18本 (37.5%)	6本 (12.5%)	6本 (12.5%)

何を報道の主題とする記事かについては、「高野連の動向」（47.9%）、「新潟県高野連の動向」（43.8%）などが主であった。また、主張やコメントの主体としては、「関係者・有識者のコメント」（43.8%）、「選手・監督の取り組み・コメント」（37.5%）に該当するものの割合が高く、「調査」（12.5%）や「朝日新聞の主張・解釈」（12.5%）に該当するものの割合は相対的に低かった。投球数制限に関する報道は、高野連や有識者会議における制度的な議論の様相を中心に、朝日新聞の見解や調査データよりも有識者や選手・監督の声をベースとして報じられる傾向にあったといえる。

また、「報道対象」の各項目について、「立場・主張」が「肯定的」あるいは「両論併記的」な記事ごとに集計したところ、表5-6に示す結果となった。主張やコメントの主体に関して、「肯定的」な立場の記事では「関係者・有識者のコメント」（55.6%）に該当するものが主であるとみられるが、「両論併記的」な立場の記事では「関係者・有識者のコメント」（44.4%）に加え「選手・監督の取り組み・コメント」（55.5%）や「調査」（33.3%）に該当するものが、「肯定的」な立場の記事よりも多い割合でみられることが分かる。この点について、「選手・監督の取り組み・コメント」や「調査」の項目に該当する記事の内容をみると、例えば「球数を一律に制限することへの疑問も上がった」（朝日新聞，2019年6月26日，朝刊）、「県内のチームでは、半数以上の監督、主将が導入に反対」（朝日新聞，2019年7月20日，朝刊）など、「両論併記的」な記事において、指導現場の論理として投球数制限の懸念点が示されているものが多くみられた。

表 5-6 投球数制限に関する「立場・主張」ごとの「報道対象」

n=48

立場・主張	高野連の 動向	新潟県 高野連の 動向	甲子園大会・ 地方予選の 動向	過去の 事例	関係者・ 有識者の コメント	選手・監督の 取り組み・ コメント	調査	朝日新聞の 主張
肯定的 (n=9)	6本 (66.7%)	4本 (44.4%)	2本 (22.2%)	1本 (11.1%)	5本 (55.6%)	2本 (22.2%)	0本	2本 (22.2%)
両論併記的 (n=18)	9本 (50.0%)	11本 (61.1%)	3本 (16.7%)	1本 (5.6%)	8本 (44.4%)	10本 (55.5%)	6本 (33.3%)	2本 (22.2%)

3) 投球数制限に関する「視点・意味付与」

「視点・意味付与」のカテゴリーについて、コーディング 10 項目それぞれの割合は表 5-7 に示す通りであった。

表 5-7 投球数制限に関する「視点・意味付与」

n=48

負担軽減・ 障害予防	投げすぎ による疲労・ 健康問題	選手の将来	野球人口の 減少、 子どもの未来	投球数制限 以外の施策	スポーツ マンシップ	勝利・公平性	相手の 投球数を 増やす作戦	精神力	選手の思い・ チームの 主体性
31本 (64.6%)	22本 (45.8%)	13本 (27.1%)	8本 (16.7%)	29本 (60.4%)	5本 (10.4%)	17本 (35.4%)	7本 (14.6%)	1本 (2.1%)	7本 (27.1%)

投球数制限がどのような視点から報じられているのかについては、「負担軽減、障害予防」(64.6%)、「投球数制限以外の施策」(60.4%)、「投げすぎによる疲労・健康問題」(45.8%)などに該当したものが高い割合でみられた。「負担軽減、障害予防」「投げすぎによる疲労・健康問題」は、例えば「選手の心身への負担はさらに軽減される」(朝日新聞, 2019 年 1 月 31 日, 朝刊)、「過度の投球からひじや肩の故障を抱え、思うようにプレーできないまま野球生活を終えざるを得なかった選手たちがいたことに無関心であってはならない」(朝日新聞, 2019 年 2 月 14 日, 朝刊)など、主に投球数制限の必要性を報じる文脈で提示されている。また、「投球数制限以外の施策」は、例えば「(投球回数) 制限導入や、練習、練習試合での投球数管理の提言など、より良い故障予防策を探っていく」(朝日新聞, 2019 年 2 月 21 日, 朝刊)、「熱中症対策なども検討していきたい」(朝日新聞, 2019 年 4 月 20 日, 朝刊)など、選手の健康管理を前提としながら、投球数制限のみならず、多角的な観点から制度の検討をすべきだとするものが中心であった。

一方で、投球数制限導入への懸念を示す論点に関わるものとしては、主に「勝利主義・公平性」(35.4%)、「選手の思い、チームの主体性」(27.1%)などの項目がみられた。「勝利主

義・公平性」は、例えば「厳しい大会日程をこなして勝ち上がることに、選手の負担軽減の両立は難しい」（朝日新聞，2019年7月23日，朝刊）、「部員が少ない公立校が選手層の厚い私立校に対してより不利になるのではないか」（朝日新聞，2019年6月27日）など、勝利を目指すうえで困難性や学校間の不公平性が生じるのではないかという論点を提示したものである。また、「選手の思い、チームの主体性」は、例えば「彼らの達成感とどう両立させるのか」（朝日新聞，2019年7月31日，朝刊）「3年生の夏の大会が最大の目標。大人が制限を設けるべきではない」（朝日新聞，2019年4月27日，朝刊）など、指導現場や選手の実情・心情を踏まえ、機械的な線引きに懸念を示したものであった。

以上、高校野球の投球数制限に関する報道についての分析結果を検討した。投球数制限に関する朝日新聞の記事は、賛否どちらかの立場について記したものよりも、特定の立場を明示しないものやどちらの立場も併記したものが中心であり、特に有識者会議による議論が展開された期間には「両論併記的」な記事が増加傾向にあった。また、記事内容は朝日新聞の主張や調査よりも有識者や選手・監督等の関係者による意見として報じられたものが中心であった。投球数制限に対する視点としては、主に「負担軽減、障害予防」、「投げすぎによる疲労・健康問題」という選手の健康管理に重点をおいたものと、「勝利主義・公平性」「選手の思い、チームの主体性」という指導現場の論理を踏まえたものなどがみられた。

3. 夏の甲子園で完投・連投する選手に関する報道

次に、夏の甲子園で完投・連投する選手に関する報道について検討していく。

1) 完投・連投する投手に関する「立場・主張」と「報道対象」

「立場・主張」の категорияについて、投手の完投・連投に「肯定的」「否定的」「両論併記的」「その他」に該当する記事それぞれの割合を示したものが、表 5-8 である。

表 5-8 投手の完投・連投に関する「立場・主張」

n=66			
肯定的	否定的	両論併記的	その他
0本	0本	2本 (3.0%)	64本 (97.0%)

大多数の記事は、完投・連投について特に特定の立場を明示しない「その他」(97.0%)であった。立場を明示したものは「両論併記的」(3.0%)の2本のみであり、「肯定的」「否定的」どちらかの立場のみ示した記事はみられなかった。投手の完投・連投に関する新聞報道は、完投・連投それ自体の是非を問う文脈で報じられてはいなかったことが分かる。

また、「報道対象」の категорияについて、5つのコーディング項目それぞれの割合を示したものが表 5-9 である。

何を主題とした記事かに関しては、「試合の結果・展開」(77.3%)に該当するものが主であった。また、主張やコメントの主体は「選手・監督の取り組み・コメント」(74.2%)に該当するものが大半であり、「朝日新聞の主張」(3.0%)に該当するものは2本のみであった。記事の内容については、例えば表 5-10 に例示したように、試合結果や試合の展開を選手・監督のコメント付きで報じる記事が多くを占めているものとみられた。

表 5-9 投手の完投・連投に関する「報道対象」

n=66				
試合の 結果・展開	チーム・ 選手の背景	過去の事例	選手・監督の 取り組み・ コメント	朝日新聞の 主張
51本 (77.3%)	14本 (21.2%)	1本 (1.5%)	49本 (74.2%)	2本 (3.0%)

表 5-10 試合結果・展開のコメント付き記事の例

「昨夏も先発したが、1回戦で敗れた。『今年は体力もつき、余裕を持って投げられました』と西野。完投で前年の悔しさを晴らした」 (朝日新聞, 2019年8月9日, 朝刊)
「四回に連続長打で同点とされたが、以降の7イニングは決定打をゆるさなかった。 12イニングを140球で完投。『最後まで魂を込めて投げぬいた。力は出し切れませんでした』」 (朝日新聞, 2019年8月11日, 朝刊)
「エースは崩れなかった。『この夏は打線が頼りになるので、まったく慌てなかった』(中略) 終わってみれば、二回以降は三塁を踏ませず完投」 (朝日新聞, 2019年8月19日, 朝刊)

このように、完投・連投する投手に関する新聞報道では、投球数制限に関する報道と比較して、あまり多様な「立場・主張」や「報道対象」がみられず、特に完投や連投に賛否の立場を明示せず試合展開や選手の活躍をコメント付きで示しているものが中心であった。この傾向を踏まえ、テキストの文脈において完投・連投に対してどのような視点や意味付与がなされているのかという点から、報道の傾向を詳細に読み解いていきたい。

2) 完投・連投に関する「視点・意味付与」

「視点・意味付与」のカテゴリーについて、8つのコーディング項目それぞれの割合を示したものが表 5-11 である。

表 5-11 投手の完投・連投に関する「視点・意味付与」

n=66							
エースとしての誇り	成長・困難の乗り越え	技術・能力の卓越性	野手・仲間の支え	涙	勝利主義	精神力	疲労・怪我・休養
3本 (4.5%)	20本 (30.3%)	39本 (59.1%)	14本 (21.1%)	1本 (1.5%)	1本 (1.5%)	3本 (4.5%)	7本 (10.6%)

「技術・能力の卓越性」(59.1%)、「成長・困難の乗り越え」(30.3%)、「野手・仲間の支え」(21.1%)などの項目に該当するものが相対的に高い割合でみられた。「技術・能力の卓越性」は、例えば「190センチ近い身長から角度ある直球を投げ込み、スライダーの制球も良い。西東京大会では全6試合に先発し、5回戦以降の4試合をいずれも3失点以内で完投した」(朝日新聞, 2019年8月12日, 朝刊)、「連投で球数を重ねてもしっかりとゲームを作れる、いいピッチャー」(朝日新聞, 2019年8月14日, 朝刊)など、投手の完投・連投を高い技術や能力、パフォーマンスと紐付ける文脈で報じているものである。「成長・困難の乗り越え」は、例えば「9回を9安打無失点。143球の完投でチームを3回戦に導いた。これまでは岩崎との継投が多かったが、『9回を投げ切れたことは自信になる』と清水。一回り成長した姿をみせた」(朝日新聞, 2019年8月14日, 朝刊)、『この春以降フォームが安定し、体力もついた』と昨夏との違いを評価する。甲子園でも1回戦は4失点完投」(朝日新聞, 2019年8月15日, 朝刊)など、完投・連投を選手の成長した姿や困難を乗り越えた到達点という文脈で報じているものである。また、「野手・仲間の支え」は、例えば「最後の打者を二ゴロに打ち取って完投した。荒井を支える野手陣の好守も光った」(朝日新聞, 2019年8月14日, 朝刊)、「マスクをかぶる宮崎の奮起に高下も応じ、準決勝、決勝と強打の相手に対して、走者を出してから低めの制球が良く、2失点以内で完投した」(朝日新聞, 2019年8月20日)など、完投・連投と周りの仲間や野手との関係性に言及し、投手を支える野手や仲間という文脈で報じたものである。一方で、「精神力」(4.5%)「勝利主義」(1.5%)など、一高野球の信条を基盤とする高校野球の伝統的な規範や価値観としてこれまで指摘されてきた一部の要素に該当する項目は、相対的に低い割合となっていた。

ここで、一定数みられた「疲労・怪我・休養」(10.6%)の項目に着目したい。割合は相対的には低いものの、投手の完投・連投による疲労や怪我などの問題に言及している可能性があるという点で注目に値する。そこで、「疲労・怪我・休養」の項目に該当した記事について、記事内に他の「視点・意味付与」がどのようにみられるのかを分析したところ、表 5-12 に示す結果となった。

表 5-12 「疲労・怪我・休養」に該当するものに付与された他の「視点・意味付与」

n=7

記事見出し	日付	エースとしての誇り	成長・困難の乗り越え	技術・能力の卓越性	野手・仲間の支え	涙	勝利主義	精神力
鳴門西野、巧みに完投	2019年8月9日		○					
鳴門、チャンス逃さず 先制、流れつかみ初戦突破	2019年8月10日			○			○	
甲子園での激闘振り返る 守備の成長、随所に光る	2019年8月12日			○	○			
宇部鴻城、磨き直した二刀	2019年8月13日		○	○				
「最高の野球できた」 松尾主将	2019年8月15日		○	○				
14年ぶり 同じ都道府県勢連覇	2019年8月21日							
奥川の起用、 投球数の議論に一石	2019年8月24日		○					

「疲労・怪我・休養」のみが該当していた記事は1件のみであり、残り6本の記事は全て他の項目も併せてみられ、特に「成長・困難の乗り越え」「技術・能力の卓越性」の項目に多く該当していた。「疲労・怪我・休養」の項目のみに該当した記事は、2019年夏の甲子園ではなく、過去の大会において連投で疲労が溜まった投手が休養日によって回復したことを記したものであった。一方、「成長・困難の乗り越え」「技術・能力の卓越性」の項目が併せてみられた記事については、例えば「腰のけが明けだったこの春、監督から投手への復帰を促されたが断った。『調子が良かった打撃で貢献しようと思っていた』。しかし、投手もしくなっていて考え直した。『夏に間に合ってよかった』。初体験での甲子園で完投勝利。投打で主役になった」（朝日新聞，2019年8月13日，朝刊）、「昨夏にけがをし、投げられない時期があった。自主練で走り込み、課題のスタミナを克服。県大会準決勝から佐賀北戦まで先発完投し、富岡商戦では140キロ超えの直球と切れのある変化球で7回まで粘投した」（朝日新聞，2019年8月15日，朝刊）など、完投や連投による怪我や疲労の可能性、リスクという文脈ではなく、怪我や疲労などの困難な状況を乗り越え、高いパフォーマンスを発揮した証明として連投や完投を取り上げたものであった。

以上、夏の甲子園で完投・連投する投手に関する報道の分析結果について検討した。これらの記事は、夏の甲子園における試合結果や展開について選手等のコメント付きで報じたものが中心であり、完投や連投それ自体の是非を具体的に記述したものはほとんどみられなかった。投手の完投や連投を報じる文脈においては、「技術・能力の卓越性」、「成長・困難の乗り越え」、「野手・仲間の支え」などの意味が付与されたもの特に多く見られた。「疲

労・怪我・休養」という意味の付与もみられたが、完投・連投の影響による疲労や怪我という文脈ではなく、むしろ疲労や怪我を乗り越えた先に達成した完投・連投という高いパフォーマンスという文脈で報じられた傾向にあった。

4. 高校野球の投手に関する新聞報道と「物語」の再生産

以下で、改めて【研究 2】の分析結果を整理し、高校野球の「物語」再生産に対する新聞報道の関わりについて考察していく。

1) 制度の議論と夏の甲子園の様相における「書き分け」

朝日新聞における投球数制限の報道では、特に明確な立場や主張を示さない記事も多く見られたが、投球数制限の賛否に言及した記事については、どちらかの立場に偏ることなく双方の立場・主張を示したものが中心であった。賛否の議論にみられたのは、「負担軽減、障害予防」、「投げすぎによる疲労・健康問題」という選手の健康管理に重点をおいた観点と、「勝利主義・公平性」「選手の思い、チームの主体性」という指導現場の論理からみた観点のせめぎ合いという構図であった。この構図は、第四章で検討した「正しい投手のあり方」に関する「制度の論理」（医科学的知見に基づき投球数の機械的線引を志向）と「現場の論理」（選手の意味世界や個人差を考慮して現場での柔軟な指導を志向）のせめぎ合いという構図と概ね同調している。また、こうした論調は、朝日新聞の主張としてではなく、有識者や監督、選手、多角的な立場からの意見として明示されている傾向にあった。高校野球を正しく管理するという立場から規範や価値観の形成に深く関与し、啓蒙的な姿勢が指摘されてきた朝日新聞ではあるが、投球数制限に関する報道に関しては、展開される議論の要点を紙面に配列している様相を読み取ることができる。

他方、夏の甲子園における投手の完投・連投に関する報道をみると、完投・連投それ自体の是非を示さない試合結果や展開の記事が大多数を占めるなかで、完投・連投に対して「技術・能力の卓越性」「成長・困難の乗り越え」「野手・仲間の支え」などの意味付与が多くみられた。「疲労・怪我・休養」という意味付与もみられたが、完投・連投による疲労、怪我のリスク等に言及したものではなく、むしろ疲労や怪我を乗り越えて完投・連投した投手に「技術・能力の卓越性」「成長・困難の乗り越え」という意味を見出す文脈が中心であった。成長や仲間という意味を付与した報道は、学校教育における部活動としての野球と、そこで重視される集団主義的側面を美的に象徴化させた、まさに「若者らしさ」「青春」の「物語」に準拠したものである解釈しうる。

2つの報道に関する分析結果を比較すると、投球数制限に関する報道と、完投・連投する投手に関する報道における朝日新聞の巧みな「書き分け」の様相が見て取れる。高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎを象徴する制度改正の議論に関しては、自社の主張より多様な立場の人々の意見として多角的な視点を客観的に報じているものの、他方で、投手の完投・連投という、これまで「鍛錬主義」的な価値基準において評価されてきた取り組みに、成長や仲間などの意味を付与し、「若者らしさ」「青春」に準拠したテキストとして配列する。こうした「書き分け」によって、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争、「正しいあり方」の揺らぎを社会的事実として可視化しつつ、「若者らしさ」「青春」という歴史的に形成されてきた高校野球の解釈枠組み、「物語」の再生産に関与しているという一

側面を指摘できよう。その意味で、高校野球を「正しく」管理する立場で夏の甲子園を主催する朝日新聞が、制度改正における賛否の立場を自社の主張として明確に示さず、多様な立場の人々の意見を中心に報道していることは、「科学主義」的観点の重要性に言及しつつ「鍛錬主義」的な取り組みを「正しさ」として評するという両義的な立ち位置を担保するための巧妙な報道戦略であるとみることもできる。

2) 新聞報道と「物語」の揺らぎ、再生産

以上のように、【研究 2】における 2 つの分析の比較を通じ、制度に関する報道と選手やチームの取り組みに関する報道における「書き分け」によって、新聞社が「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争、「正しいあり方」の揺らぎを可視化しつつ、「若者らしさ」「青春」の「物語」が再生産されることに関与しているという一側面が示唆された。

一方で、完投・連投する投手の報道に対する「視点・意味付与」に着目すると、歴史的に生成されてきた高校野球の「物語」について、同一構造の単純反復生産ではなく、変動可能性を含みこんだ動態的な再生産の様相も読み解くことができる。投手の完投・連投に対する意味付与においては、一高野球の信条を基盤とする高校野球の伝統的な規範や価値観として理解されてきた「精神力」「勝利主義」などはあまりみられず、「技術・能力の卓越性」「成長・困難の乗り越え」「野手・仲間の支え」などが中心となっていた。

第四章で検討したように、近年、夏の甲子園をめぐるのは、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を背景として、選手の健康管理を重視する「科学主義」的な価値基準をもとにした制度改正が段階的に行われてきており、この経緯と連動し、完投の減少、継投の増加という投手戦術の変化や、健康管理を焦点とした「正しい投手指導のあり方」の揺らぎがみられている。上記の制度的な展開を、大会の主催者という立場を有しつつ客観的に報じている新聞報道は、その報じ方を選手やチームの取り組みと書き分けているとはいえ、例えば完投を精神力と結びつけて美化するなど、「鍛錬主義」的なあり方を無批判に強調し賛美すれば、たちまちその矛盾した立場を表面化させてしまうことになる。そのため、完投や連投という本来的には「鍛錬主義」的価値基準に準拠した取り組みを、「成長」や「仲間」という別の意味から、「若者らしさ」「青春」の枠組みに準拠させた文脈として紙面に配列することで、「若者らしさ」「青春」の意味内容に揺らぎを持たせているとも推察しうる。結果として、高校野球にまつわる「若者らしさ」「青春」の「物語」は、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争のもとに生じている取り組みの変化を扱う新聞報道によって、「精神力」などの直接的な「鍛錬主義」的価値が一部脱色され、「成長」や「仲間」といった価値が前景化されるなど、内的な揺らぎを含みながら再生産されていくこととなろう。

このように、【研究 2】では新聞報道のテキストに関して、投手の完投・連投というある種の「鍛錬主義」的な取り組みの報じ方に着目したことで、結果として「物語」の再生産に関する動態的な側面が顕在化された。一方で、「科学主義」的な価値基準に準拠して台頭した投手の継投がメディアにどのように報じられ、その報道が「物語」の再生産にいかに関与しているのかという点も、重要な検討課題であるといえる。次章ではこの点踏まえつつ、高校野球のテレビ放送に関するテキストを分析し、「物語」再生産の様相とメディアの影響についてさらに多角的に検討していきたい。

第六章 テレビ放送にみられる揺らぎ

本章では【研究 3】として、高校野球の投手に関するテレビ放送に着目し、「物語」の再生産とテレビ放送の関わりについて検討する。

1. 分析概要

1) 分析の背景および視点

第一章で詳述した通り、高校野球のテレビ放送は、NHK による甲子園大会の実況中継を中核として、毎年多くのコンテンツを人々に提供し続けてきた。高校総体など他の学生スポーツに関する放送と比較しても群を抜く放送量の多さ（木原・櫛木，2007）を誇り、視聴率も高い水準を記録している（中島，2016）。毎年繰り返される 2 つの甲子園大会に関する放送は、それぞれ季節の風物詩としての意味合いを帯び、ある種の儀礼的な「国民的行事」として受け止められてきた。また、試合の実況中継のみにとどまらず、スポーツニュースにおける試合結果の放送、ローカルニュースにおけるチーム紹介、試合ハイライトをもとにしたドキュメンタリー番組など、様々な形式でコンテンツ化される様相もみられている。「マス・メディアのなかでも非常に大きな影響力をもつ、メジャー・メディア」（向後，2004，p.309）であるテレビが、高校野球に関する多量の放送を展開することは、高校野球人気の拡大に大きく寄与するとともに、「物語」の生成、再生産にも重要な影響を与えてきたものと推察される。

テレビは、時空間を超えて視覚と聴覚に関与し、受け手に高い参与度、没入感を生み出すメディアであるとされる（マクルーハン，1987；今村，2003）。こうしたテレビのメディア特性から、メディア・スポーツを対象とした研究においては、第二章でも示したように、特にテキストの意味作用や、象徴的なメッセージ性を分析する試みが盛んに行われてきた。意味作用とは、記号表現（映像や解説などの表現そのもの）と記号内容（記号表現が何を意味しているのか）の関係構造から生成される「何かが何かを表すという働き」（池上，1984，p.32）のことである。また、メッセージとは、コミュニケーションにおける「表現の結果」であり「それが何らかの他のことを表しているもの」で構成された、したがって必ず意味作用を内包するもの（池上，1984，pp.66-67）を指している。

清水（1998）は上記の研究視点に依拠し、1968 年の第 68 回夏の甲子園に関する NHK の実況中継を対象として、テキストの意味作用とメッセージを検討する記号論的分析を行っている。当該放送ではテキストによる意味作用によって「全員一丸」「アルプスの乙女」「応援団と選手の一体感」「記録」「勝敗にかかわらず、諦めないで努力すること」「気迫、精神力」「友情」「一体感」「エラー」「地元での盛り上がり」などのメッセージが提示されているとされ、これらのメッセージは「まさに『青春』や『若者らしさ』の『物語』」（清水，1998，p.50）として解釈が可能であるという。

以上の背景を踏まえ、【研究 3】では、高校野球の「物語」再生産に対するテレビ放送の関わりについて検討していく。【研究 1】では、1990 年代以降の夏の甲子園において、投手の完投が減少し継投が増加するという変化が顕著にみられることが示された。したがって、選手や野球部の取り組みの揺らぎを伝えるメディア・テキストの諸相から「物語」再生産の

様相を読み解くという本研究の枠組みを踏まえれば、投手戦術の変化が顕著な今日、完投と継投というそれぞれの取り組みをテレビ放送がどのように伝えているのかを読み解くことが重要な検討課題となる。そこで【研究 3】では、夏の甲子園において完投する投手および継投する投手たちの様相を描いたテレビ放送を対象として、テキストにみられる意味作用とメッセージを分析し、高校野球の「物語」再生産に対するテレビ放送の関わりについて考察していく。

2) 分析対象

朝日放送テレビ・テレビ朝日共同制作のスポーツ・ドキュメンタリー番組『熱闘甲子園』において、完投する投手、および継投する投手たちを描いた 2 つの放送を分析対象とする。ドキュメンタリー番組は実況放送と比べ、制作者の意図のもとに取り上げる情報の選択・再構成がより豊富に行われストーリー化される放送形式であるため、テレビ放送による選択的でシンボリックなメッセージ伝達の様相をクリアに捉えられる可能性が高い。1980 年に放送が開始された『熱闘甲子園』は、毎年夏の甲子園開催期間中、継続して当日の試合ハイライトを放送し続けているドキュメンタリー番組である。球児の素顔や背景を試合展開と重ねて放送する手法が人気を博し、長期にわたって比較的高い視聴率を記録してきた（城島，2005）。こうした番組特性や歴史性、影響力に鑑み、高校野球の「物語」再生産に関わる代表的なコンテンツの 1 つであると捉え、当該番組を分析対象とした。

番組は、基本的に 1 試合ごとに片方の高校に焦点が当てられ、高校の特徴や注目選手を中心に 1 つの放送が構成されている。ここでは、完投する投手を中心とした放送として「第 95 回夏の甲子園三回戦『済美 vs 花巻東』」、継投する投手たちを中心とした放送として「第 99 回夏の甲子園二回戦『北海 vs 神戸国際大学附属』」の 2 つの放送を対象に分析を行った（表 6-1）。「済美 vs 花巻東」は、完投した済美高等学校（愛媛）の安樂智大投手を中心に放送が構成され、また「北海 vs 神戸国際大学附属」は、継投した北海高等学校（北海道）の多間隼介投手と阪口皓亮投手を中心に放送が構成されている。

表 6-1 分析対象

分析対象	大会（年）	試合	放送日	放送概要	放送時間
完投した投手	第95回夏の甲子園 (2013)	3回戦 済美vs花巻東	2013年8月17日	完投した済美高校の安樂智大投手を 中心とした放送	8分2秒
継投した投手たち	第99回夏の甲子園 (2017)	2回戦 北海vs秀岳館	2017年8月12日	継投した北海高校の多間隼介投手， 阪口皓亮投手を中心とした放送	5分16秒

2 つの放送を選定して分析するにあたっては、それぞれの放送が完投および継投の典型的な事例であると捉えうるのかという点を確認しておく必要がある。佐藤によれば、研究対象としての「典型」とは「現象の歴史的経過における法則性を暗示」（佐藤，1957，p.236）するものであり、その信頼性は、歴史的具体的な現象の量的側面を反映していること、および理論的に構築された研究視点と論理的な整合性があることによって確認されるという。佐藤（1957）の議論に依拠し分析対象の選定基準を検討すれば、まず現象の量的側面の反

映として、放送で取り上げられた 2 つの高校が、それぞれ完投および継投を戦い方の基本方針として多く用いていたのかという点が重要であろう。また、研究視点との論理関係としては、本研究がメディアを介した「物語」再生産の分析を目的としていることから、2 つの高校が、そもそもメディアから完投および継投を戦い方の基本方針とした代表的なチームであるという目線を向けられていることが重要となる。以上 2 点の基準から、2 つの高校および放送選定の妥当性について検討しておきたい。

まず、「済美 vs 花巻東」で取り上げられた済美の安樂投手は、2013 年春・夏の甲子園で戦った計 7 試合のうち 6 試合に完投するなど、チームの「大黒柱」のエース投手であった。とりわけ春の甲子園では、決勝までの全試合を完投し大会の最多投球数（772 球）を記録したことで注目を集めている。安樂投手の連投をきっかけとして高校生の連投や完投の是非、球数制限に関する社会的な議論が生じ（西尾，2019）、米スポーツ紙 ESPN の記者が「彼を通して日米の野球観、投手に対する考え方の違いを取材したい」（日経新聞，2013 年 6 月 13 日、夕刊）と来日するなど、メディアから「1 人で投げ抜くエース」を象徴する存在として扱われたなかで、夏の甲子園を迎えている。

また、「北海 vs 神戸国際大附属」で取り上げられた北海高校は、地方予選 7 試合および夏の甲子園 1 試合の計 8 試合全てで、放送で取り上げられた多間投手と阪口投手の継投戦術が用いられていた。「投手陣は継投で勝負する」（読売新聞，2017 年 8 月 6 日、朝刊）と評されるなど、メディアからも「継投するチーム」として注目されたなかで、夏の甲子園を迎えている。

以上、2 つの高校の完投および継投の量的側面とメディアからの目線を示したが、先述した基準に照らし、分析対象として選定した 2 つの高校と放送は、完投および継投を描く 1 つの「典型」事例として妥当性を有するものと思われる。

3) 分析方法

清水（1987）が用いたテレビ放送の記号論的分析の手法を「熱闘甲子園」の番組構成に適用させ、分析を行う。記号論的分析は、テキストの意味作用を読み解くことでメディアが人々の思考の枠組みや価値観を形成する構造を可視化する（橋本，1986，p.44）という点において、テレビ放送を介した「物語」の再生産を読み解く本研究の目的に適合的な方法論であるといえる。

清水（1987）は、テキストから重層的な意味作用を読み解くロラン・バルトの分析モデルを援用し、映像や音声などが「何を伝えようとしているのか」という第 1 の意味作用を抽出し、さらに第 1 の意味作用から「どのような価値や観念が生成されているのか」という第 2 の意味作用を検討する手法を用いている。この手法を『熱闘甲子園』の番組構成に適用させたものが、図 6-1 に示した分析枠組みである。当該番組における各試合の放送は、序盤に注目選手や放送の主題が提示され、それを受けて中盤は試合のハイライトが主題に沿って展開し、終盤に主題に関する帰結がインタビュー等から示されるという形式を基本とする。そのため、本分析では、まず序盤および終盤のシーンから放送主題を解釈し、その解釈を踏まえ、主題に沿った中盤ハイライトが強調している点を解釈することで、2 つの放送が提示する重層的な意味作用とメッセージについて検討していくこととする。

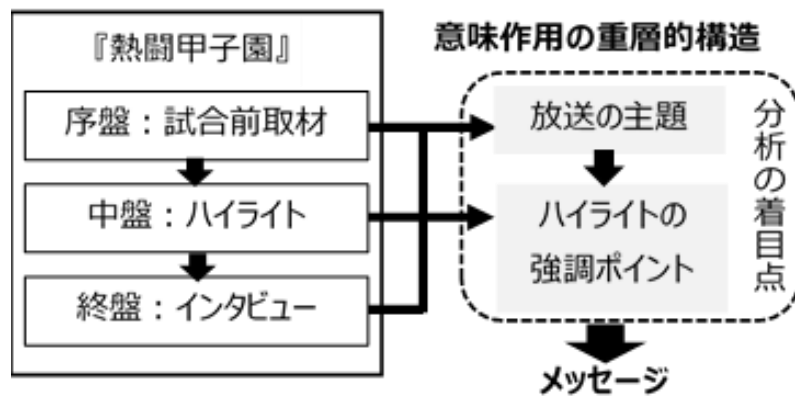


図 6-1 「熱闘甲子園」を対象とした記号論的分析の枠組み

なお、記号論的なメディア・テキスト分析では、テキストの解釈から分析者の主観や恣意性が完全に排除されていると認めることは困難であることから、解釈の妥当性担保に工夫が求められる。清水（1987）は、分析者によるテキスト分析の結果と視聴者による印象分析の結果を摺り合わせることで解釈の妥当性を検討しているものの、意味作用を捉える分析者の解釈プロセスがブラックボックス化されているという点に課題が残る。そこで本分析では、分析要素（表 6-2）をワークシートで開示することで従来ブラックボックス化されがちであった分析者のテキスト解釈に関するプロセスを示すことを重視した藤田（2006）や加藤（2009）による記号論的分析の手続きを援用する。この手続きによって、放送の意味作用とメッセージの分析を解釈の根拠を示しながら展開でき、反証可能性を含んだ「開かれた解釈」（加藤，2009，p.18）を提示することが可能となる。具体的には、はじめに放送をカットごとに分割してナンバリングし、各カットの映像概要とナレーションを抽出して分析ワークシートを作成する。その上で、表 6-2 に示したカメラの動きや写し方、編集の技法などの要素とナレーションの組み合わせに着目し、2 つの放送それぞれにみられる意味作用とメッセージを読み解いていく。

表 6-2 分析要素

カット	ある映像が次の映像に切り替わるまでの間
映像の概要	カット毎の映像の具体的な内容
フレーム サイズ	<p>カメラのフレームにどれくらいのサイズで人物が入るか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ L ロングショット : 風景・背景に人物が入るショット ドラマが展開される場面を説明する ・ F フルショット : 人物の全身がフレームに収まったショット 全身の動きの描写などに使われる ・ M ミディアムショット : 人物のヒザまたは腰から上がフレームに収まったショット 人物の動き・会話場面の描写などに使われる ・ B バストショット : 人物の胸から上がフレームに収まったショット 会話場面の描写などに使われる ・ CU クローズアップ : 人物の顔がフレームに収まったショット 人物の表情の描写や道具・文字など強調したい部分の描写に使われる
アングル	<p>カメラが対象をとらえる角度</p> <p>高い方から順に</p> <ul style="list-style-type: none"> H : ハイアングル（見下ろす表現） E : アイレベル（通常の描写） L : ローアングル（見上げる表現）
ナレーション	<p>カット毎に流れるナレーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Na : 番組ナレーター ・ 選手名 : 選手の語り
技法	<ul style="list-style-type: none"> ・ スロー : スローモーション 1秒あたりのコマ数を増やし動きを遅くみせる表現技法 夢や空想の出来事・抒情的な表現・驚異的な力・壮観な光景や感動的な 場面を長引かせて強調する表現など ・ 反復 : 同じ場面を繰り返しみせる表現技法 重要な構成要素（モチーフ）を表す表現など

藤田（2006）、ボードウェル・トンブソン（2007）、加藤（2009）を参照し筆者作成

2. 完投する投手に関する放送

はじめに、「第 95 回夏の甲子園三回戦『済美 vs 花巻東』」にみられる完投の描かれ方について分析を行う。当該試合は 7 対 6 で花巻東高等学校（岩手）が勝利しているが、放送は全 155 カットのうち 88 カット（56.8%）を済美高校の安樂投手が占めており、敗戦投手でありながら前の試合に続いて二試合連続で完投した安樂投手に関する映像とナレーションを中心に放送が構成されている。

1) 「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」

放送の序盤（表 6-3）は、試合前取材での安樂投手の語りから、前の試合（一回戦）において思い通りのピッチングができなかったことが示され（カット 10）、苦しい表情で汗を拭く表情のアップや、肩のマッサージを受ける映像と共に、ナレーションで不調の原因が疲労にあることが説明される（カット 11—12）。また、この苦しい状況を乗り越える手段として、安樂投手から、今回の試合では変化球主体のピッチングを目指すことが語られる（カット

14)。さらに、この判断が、自身のパフォーマンス（球速）を追求することよりもチームの勝利を優先したものであることが、ナレーションで補足されている（カット 15—17）。終盤（表 6-3）には、完投しながらも敗戦投手となった安樂投手のインタビューにおいて、調子が悪くてもチームを勝利に導ける存在こそが「エース」であり、自身もそれを目指したいという思いが語られる（カット 155）。

表 6-3 完投の放送主題を示す内容

カット	映像の概要	フレーム サイズ	ア ン グ ル	ナレーション	技法
序盤：試合前の安楽投手取材、前試合の内容					
10	安楽投手 マウンド上 汗拭う	CU (表情)	E	Na：11安打を浴び、7失点。 安楽：やっぱり調整不足というか、自分の思い通りのピッチングができなかったのだ。	
11	安楽投手 肩マッサージ	F→CU (肩)	E	Na：肩の張りに、体調不良も重なり、決して万全とは	
12	安楽投手 マッサージ中表情	CU (表情)	L	いえなかった甲子園初戦。	
13	安楽投手 投球練習→ボール追う	M	E	Na：昨日の練習で入念に確認していたのは、変化球。	
14	安楽投手 インタビュー	CU (表情)	E	安楽：まあ皆さんスピードを期待されると思いますが、スピード勝負をすべて捨てて、コントロール重視でいきたいと思います。	
15	安楽投手 整列、挨拶	CU (表情)	E	Na：自らの記録より、チームの勝利を。安楽の立ち上がり、花巻東一番八木への初球。	
16	安楽投手 マウンド上	B	E		
17	花巻東高校 打者	M	E		
終盤：安楽投手試合後インタビュー					
155	安楽投手 試合後インタビュー	CU (表情)	E	安楽：やっぱり調子がどれほど悪くても、勝てるピッチャーがエースだと思うんで、まあ自分はまだまだエースにはなりきれてないかなーと思うんで、やっぱり、あと1年で、まあほんとのエースに、成長したいなと思います。	

序盤および終盤のカメラワークにおいて、アイレベルの高さに固定されたショットで安樂投手の表情を写すクローズアップが多用されていることから、1人の選手の個性や人間性を際立たせた人間ドラマとして放送を構成する（加藤，2009，pp.28-29）意図が推察される。その人間ドラマは、映像とナレーションの組み合わせによって、疲労や不調といった困難な状況や、それでもチームのために投げるという姿勢、困難を乗り越えてチームを勝たせることが「エース」の務めであるという思いなどを中心に構成されていることが読み取れる。

以上の分析を踏まえれば、当該放送の序盤および終盤では、いわば「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という放送の主題が提示されているといえることができる。

2) 「選手の気迫」

上述した「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という主題が、中盤の試合ハイライトにおいてどのような点を強調しながら描かれているのかについて、以下で分析を行う。放送全体の構成と同様、中盤の試合ハイライトも 140 カットのうち 69 カット (49.3%) と、半数近くを安樂投手に関する映像とナレーションが占めており、設定された主題が安樂投手の試合での様子を中心に描かれているものとみられる。試合は、安樂投手が相手打線に打たれ、点差がつきながらも、その後に粘りをみせた済美高校が接戦に持ち込むという展開

であった。この展開の中で、特に安樂投手が苦しい場面に対峙するシーンにおいて、スローや同場面の反復といった技法が用いられている。

1 対 3 の済美高校ビハインドで迎えた 8 回、安樂投手が相手打者から三振をとってピンチを抑えたシーン（表 6-4）で、当該放送で初めてスローと反復の技法がみられた（カット 50—53）。ここでは、ハイアングルからのロングショットで試合展開が写された（カット 50）後、同じ場面での安樂投手の様子が反復されて写されており、そのカットは雄叫びをあげる表情をクローズアップで捉えている（カット 51）。カメラはそのまま安樂投手の投球する姿をスローで写し（カット 52）、次の打者を打ち取って再び雄叫びをあげる様子をバスタアップで写すカットにつながっていく（カット 53）。このシーンではスローや反復によって、この場面が当該放送の主題である「困難を乗り越える」ことを象徴する重要な場面であることが示されているといえる。さらに、プレー全体の動きよりも安樂選手の雄叫びなど、表情のアップを中心としたカメラワークによって、「困難を乗り越える」選手の「気迫」を伝えるような描き方がなされているものとみられる。また、これら一連のカットに「3 者連続三振。決め球はスライダー。勝利のために」というナレーションが組み合わせられ、映像で印象づけられた選手の「気迫」が「チームの勝利のため」という主題に再接続されている。

表 6-4 完投の試合ハイライトで強調された内容①

カット	映像の概要	フレーム サイズ	ア ン グ ル	ナレーション	技法
中盤：試合ハイライト					
50	安樂投手 投球→打者空振り	L	H		
51	安樂投手 雄叫び	CU (表情)	E		【反復】 カット50→51
52	安樂投手 投球→打者空振り	F	E	Na：3者連続三振。決め球はスライダー。勝利のために。	【スロー】 カット51
53	安樂投手 雄叫び→ベンチに戻る	B	E		【スロー】 カット52

上記のシーン以外にも、安樂投手の「気迫」を強調したものと思われる描き方が散見される。例えば、安樂投手が打者走者として一塁にヘッドスライディングをしたシーン（表 6-5）では、「2 年生エースがみせた、気迫」というナレーションとともに、安樂投手の表情がスローで反復されている（カット 62—64）。また、延長戦に入り投球数が増えてきたなかで、安樂投手がこの日最速となる 152 キロの球速を記録したシーン（表 6-5）でも、雄叫びをあげる安樂選手の姿がスローや反復によって強調されている（カット 107—110）。

このように、当該放送では「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という主題に基づく、困難な状況に立ち向かう安樂投手の人間ドラマが、「選手の気迫」を伝えるような描き方によって展開されていると捉えることができる。

表 6-5 完投の試合ハイライトで強調された内容②

カット	映像の概要	フレーム サイズ	ア ン グ ル	ナレーション	技法
62	花巻東投手 投球→安楽投手打撃 →セカンドがファースト送球	L	H		
63	安楽投手 ヘッドスライディング	M	L	Na : 二年生エースがみせた、気迫。	【反復】カット62→63
64	安楽投手 ベンチに戻る	B	L		【スロー】 カット63
107	安楽投手 投球→打者空振り	B	E	Na : それでも、安楽の183球目。	
108	安楽投手 投球 雄叫び	M	E		【反復】 カット107→108
109	バックスクリーン 152キロ	CU (球速)	H	Na : この日最速の152キロ。	【反復】 カット108 →110
110	安楽投手 雄叫び	CU (表情)	E		【スロー】 110

3. 継投する投手たちに関する放送

次に、「第 99 回夏の甲子園二回戦『北海 vs 神戸国際大学附属』」にみられる継投の描かれ方について分析を行う。当該試合は神戸国際大附属高等学校（兵庫）が 5 対 4 で勝利しているが、放送では全 93 カットのうち 62 カット（66.7%）を継投した北海高校の多間隼介投手、阪口皓亮投手の映像とナレーションが占めており、敗戦したチームの投手 2 人を中心とした構成がなされている。

1) 「対照的な 2 人の投手による協働」

放送の序盤（表 6-6）では、地方予選大会と試合前の取材における映像およびナレーションによって、「長身で熱い男」阪口投手と「小柄でクールな男」多間投手という対照的な 2 人のキャラクターや、予選大会の全試合で 2 人が継投してきたこと、ピンチの場面も 2 人で支え合い協働し乗り越えてきたことが示される（カット 6—22）。また、2 人の語りによって、お互いの存在があることで力を発揮できていることが説明されている（カット 23—24）。その後、2 人が談笑しながら練習する映像と共に「デコボココンビは、2 人でエース」というナレーションが挿入され（カット 25—26）、2 人の握手が写されるカット（カット 27）に展開する。放送の終盤（表 6-6）には、2 人のインタビューにおいて、敗戦したものの 2 人で切磋琢磨してやってきて良かったという思いが語られ、再度握手をするカットで放送が締められている（カット 93）。

カメラワークは、ハイアングルやアイレベルからのバーストショットが多くみられた。特に会話場面などに着目して 2 人の関係性に焦点を当てる意図が推察される。その関係性はナレーションにより、対照的な 2 人の投手が支え合い協働して、互いに力を発揮するものとして説明されている。序盤および終盤に挿入された 2 つの握手シーンは、こうした 2 人の関係性を象徴的に提示し、当該放送が 2 人の協働に関するドラマであることを示しているといえる。

以上の分析を踏まえれば、当該放送の序盤および終盤では、いわば「対照的な 2 人の投手による協働」という主題が提示されているといえることができる。

表 6-6 継投の放送主題を示す内容

カット	映像の概要	フレーム サイズ	アングル	ナレーション	技法
序盤：試合前の二投手取材、地方予選大会の内容					
6	阪口投手 投球練習	F	E	Na：速球派、阪口皓亮。	
7	阪口投手 投球練習	M	E		
8	多間投手 投球練習	B	E	Na：技巧派、多間隼介。	
9	多間投手 投球練習	F	E		
10	二投手インタビュー	M	E	Na：身長差はなんと20センチ。性格も大きく違う。	
11	二投手インタビュー	B	E	阪口：隼介は静かに淡々とできる。	
12	多間投手 マウンド上	B	H	Na：クールな男多間と、熱い男阪口。	
13	阪口投手 ベンチ内	B	H		
14	二投手インタビュー	B	E	多間：まあ、抑えたときとかはやっぱり皓亮の方がチームも盛り上がるんで。	
15	阪口投手 マウンド上	B	H	Na：地方大会では、二人揃って全試合に登板。 阪口が打たれても、	
16	阪口投手 投球→打者の打撃	L	H		
17	センター、ライトが打球を追う	L	H		
18	相手ランナーホームイン	F	L		
19	多間投手 マウンド上	M	H	Na：多間が切り抜ける。	
20	多間投手の投球	F	H		
21	多間投手 ベンチに戻る	M	H		
22	阪口投手が多間投手にアイシング	CU（表情）	E	Na：多間が疲れても、阪口が支える。	
23	阪口投手 インタビュー	B	E	阪口：ピンチを作った場面でも、あとに隼介がいつてことで、自分は思いっきり投げることができるんで。	
24	多間投手 インタビュー	B	E	多間：皓亮が投げてくれたんで、まあ自分も投げれた というか、絶対1人では投げてこれなかったと思うんで。	
25	二投手 ストレッチ	F	L		
26	二投手 トレーニング	F	E	Na：デコボココンビは、2人でエース。	
27	二投手 インタビュー→握手	F→CU（手）	E	阪口：明日もよろしく。 多間：よし、頑張ろう。	
終盤：二投手試合後インタビュー					
93	二投手 試合後インタビュー→握手	M	E	多間：2人でここまでこれたのが、ほんとに幸せて。 阪口：切磋琢磨して3年間やってこれた良かったなって いうふうには思います。 多間：ありがとな。 阪口：うん。	【スロー】カット93 （握手時）

2) 「選手たちの友情」

上述した「対照的な2人の投手による協働」という主題が、中盤の試合ハイライトにおいてどのような点を強調しながら描かれているのかについて、以下で分析を行う。完投した投手に関する放送と同様に、当該放送も、中盤の試合ハイライトの65カット中38カット（58.5%）を2人の投手に関する映像とナレーションが占めており、提示された主題が2人の試合での様子から描かれている。試合は、阪口投手が先発し4回にピンチを招いた場面で多間投手に継投をしたものの、その後に多間投手が打たれ北海高校が敗戦するという展開であった。

上記の試合展開の中で、特に2人の投手が交代するシーン（表6-7）でスローや反復の技法が多用されている（カット49—56）。交代時にマウンド上でボールを受け渡す場面は、ア

イレベルショットによる阪口投手中心のカット（カット 49）と多間投手中心のカット（カット 50）、さらにハイアングル（真上）から俯瞰で 2 人が入れ替わる様子を捉えたカット（カット 51）と、異なる視点から 3 度も反復される。ここで、交代する坂口選手の気持ちを代弁するかのように「ごめん、頼むわ」というナレーションが挿入され、交代後は、ベンチで大きな声を出す阪口投手（カット 52）とマウンド上の多間投手（カット 53）という 2 人の様子を写しながら、「もう一つのアウトを多間に託す」というナレーションが流される。その後、ピンチを切り抜けた多間投手がベンチに戻る場面では、笑顔で多間投手を出迎えて嬉しそうに背中を叩く阪口投手のバストアップが映される（カット 56）。

表 6-7 継投の試合ハイライトで強調された内容

カット	映像の概要	フレーム サイズ	ア ン グ ル	ナレーション	技法
中盤：試合ハイライト					
49	阪口投手 多間投手にボールを渡す→ベンチに走る	B→CU (表情)	E	Na：ごめん、頼むわ。	
50	多間投手 マウンドでボールをもらう	B	E		【反復】カット49→50
51	上空から二投手の交代の様子	F	H		【反復】カット49→50 →51 【スロー】カット51
52	阪口投手 ベンチから声を出す	B	H	Na：もう一つのアウトを多間に託す。	
53	多間投手 マウンド上 投球	B	E		
54	多間投手 投球→打者の打撃→ショート→セカンド	L	H	Nb：ショートゴロ、多間、打ち取りました。	
55	手を叩いてベンチに走る多間投手	B	E		
56	阪口投手 ベンチで笑顔で出迎える→多間投手の背中を叩く	B→F	E	Na：デコボコエースは二人でエース。	

このシーンでは、3 度反復される投手交代の場面が、まさに「2 人の投手による協働」という主題を象徴した場面として強調されているものとみられる。3 度目のハイアングルからのカットには、中盤の試合ハイライトにおいて唯一となるスローが用いられている。このカットは、2 人の入れ替わる様子をまるで時が止まる瞬間のように描くことで、単に交代という事実を伝える以上に、2 人の関係性を抒情的に表現しているといえる。さらに、ナレーションで「ごめん、頼むわ」という口語的な表現や「託す」という選手の感情を示した表現が組み合わせられ、その後に笑顔で背中をたたきカットに繋げられることで、2 人の関係性が、ただの協働関係を越えた精神的なつながり、仲の良さや信頼感といった、いわば「友情」を想起させるような描かれ方がなされているといえる。

「友情」を想起させる描き方は中盤の試合ハイライトだけでなく、先に表 6-6 で示した序盤や終盤における取材やインタビューでも散見される。2 人が談笑しながら共に練習する映像に「デコボココンビは、2 人でエース」とナレーションが挿入されるシーン（カット 25—26）では、試合において協働関係にある 2 人の日常的な仲の良さが描かれているといえる。また、序盤の取材で 2 人が試合での健闘を誓って握手し（カット 27）、ハイライトで交代のシーンが抒情的に強調され、終盤の試合後インタビューで互いの健闘を称え合い再度握手

をする（カット 93）という放送の構成からも、単に試合の戦術として 2 人が協働する様子を伝えるだけでなく、野球を通じて 2 人の「友情」が育まれているようなドラマを描くという意図を読み取ることができる。

このように、当該放送では「対照的な 2 人の投手による協働」という主題に基づいて展開される 2 人の関係性に関するドラマが、投手の交代という象徴的なシーンや、2 人が関わり合うシーンを通じて、「選手たちの友情」を伝える形で展開されているものとみられる。

4. 完投と継投のテレビ放送と「物語」の再生産

以下で、2 つの分析結果を改めて整理し、「物語」の再生産に対するテレビ放送の関わりに関する一側面について検討していく。

完投した投手の放送から、「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という主題から「選手の気迫」が伝わるような描かれ方が看取され、継投した投手たちの放送からは、「対照的な 2 人の投手による協働」という主題から「選手たちの友情」が伝わるような描かれ方が看取された。この結果について、記号論モデルにおける意味作用とメッセージの概念を用いて整理すれば、完投を描いた放送は、テキストによる意味作用において「困難を乗り越える投手の姿から伝えられる『気迫』」というメッセージを生成し、継投を描いた放送はテキストによる意味作用において「2 人の協働する姿から伝えられる『友情』」というメッセージを生成しているといえることができる。

ここで、2 つの放送がそれぞれ提示する「気迫」「友情」という意味が、どちらも清水(1998)が示した「若者らしさ」「青春」の「物語」を構成する要素に含まれたものであることに注目したい。すなわち、完投する投手と継投する投手たちを描いた 2 つの放送は、選手や野球部の異なる取り組みをそれぞれ選択・再構成し、異なる意味作用とメッセージを生成しているものの、それらの意味作用とメッセージは、どちらも「若者らしさ」「青春」という枠組みに還元可能なものであると捉えることができる。

投手による完投という戦術は、「鍛錬主義」的な価値基準に準拠した取り組みのあり方であり、その価値を基盤として歴史的に生成されてきた「若者らしさ」「青春」の「物語」にも適合的な営みであるといえる。その意味で、完投する投手の放送にみられた「困難を乗り越える投手の姿から伝えられる『気迫』」というメッセージ生成の様相は、テレビ放送を介して既存の「物語」の枠組みが象徴的に強化されるプロセスとして読み解くことが可能であろう。

一方で、継投という戦術は、投手の健康管理を重視する科学研究の蓄積や大会の制度改正と連動して台頭してきた、「科学主義」的な価値基準に準拠した取り組みである。これは、監督の指示のもとに投手がシステマチックに分業するという機能的なあり方という点で、「若者らしさ」「青春」という情緒的な「物語」の枠組み自体を揺さぶる事象であるようにも思われる。しかしながら、当該放送は、継投するシーンを抒情的な表現技法を用いて編集することや、試合の外部にある日常性から継投する選手たちの関係性を想起させる場面を補足的に挿入することなどによって、機能的な戦術を情緒的な「友情」のドラマとして、「若者らしさ」「青春」という「物語」に基づく解釈が可能な内容に再構成していることが示唆された。

【研究 1】で明らかにされたように、特に 1990 年代以降の夏の甲子園では、完投の減少、

継投の増加が顕著にみられ、継投の方が完投よりも多く用いられる様相もみられている。そのため、完投する投手という「鍛錬主義」的営みに象徴化された「若者らしさ」「青春」の「物語」という図式は減退せざるを得ない。しかしながら、代わって増加した継投を、象徴的な意味や価値の伝達によって人々の認識枠組みの形成に関与するテレビ放送が、「若者らしさ」「青春」の枠組みに準拠した意味で再構成しメッセージ化することで「物語」そのものの解体を防いでいるものとみられる。この一連の過程は、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争と、そのもとに生じている取り組みの揺らぎが、テレビ放送を介して「若者らしさ」「青春」の構成要素の揺らぎへと回収される一側面として理解しうる。結果として、テレビ放送は、「友情」という意味をより前景化させるなど、「物語」の意味内容に内的な揺らぎを生じさせつつ、「物語」の枠組みを再生産させていくことに寄与していると指摘できよう。

【研究 2】と【研究 3】によって示された、新聞報道およびテレビ放送の揺らぎと、マスメディアを通じた「物語」再生産の具体的な諸相については、第九章で研究のまとめとして改めて詳細に考察していく。次章では、従来のメディア・スポーツ研究および高校野球の「物語」研究において対象化されていないソーシャルメディア言説と「物語」再生産の関りについて、新たな理論的視点を提示しつつ検討していきたい。

第七章 ソーシャルメディアと「物語」

本章では【研究 4】として、高校野球の「物語」再生産に対するソーシャルメディア言説の関わりについて、投手の連投をめぐる「炎上」の事例に着目して検討していく。

1. インターネット、ソーシャルメディア、「炎上」

従来のメディア・スポーツ研究および高校野球の「物語」研究は、主にマスメディアによるメッセージの伝達と受け手による解釈との相互作用において生成される意味や価値、「物語」の諸相を読み解くことが中心とされてきた。しかしながら、今日ではインターネットの普及に伴い、メディアを介した情報伝達のあり方が、従来メディア・スポーツ研究が想定してきた単線的な経路から、より多様で複雑な構造へと変化してきている。

インターネット (internet) とは、「あいだ」を意味する「inter」と「ネットワーク」を意味する「net」からなる用語であり、直訳すると「ネットワークの間をつなぐもの」となる。技術的には、「TCP/IP という通信プロトコルを用いて、さまざまなローカルネットワーク (LAN と WAN など) を相互に連結させて、地球規模の通信ネットワークを築いたグローバルネットワーク」(劉・木村, 2012, p.124) と定義されている。つまり、これまで局所的に構築されてきたネットワークを相互に接続することで、グローバル規模での接続が可能となった通信のネットワークである。

インターネットの普及により、全世界からアクセスが可能となる「場所」(Web サイト等)、その場所へアクセスする「行動」、場と場を電気信号によって接続する「道路」の 3 要素が整い、そこにサイバースペース、すなわち「人間がコンピュータとインターネット上で作りだした時間と距離に制約されないさまざまな行動を可能にする情報空間」(劉・木村, 2012, p.132-133) が構築された。サイバースペースは、時間と場所を越えて世界中の人々が瞬時にコミュニケーションを取ることを可能にしている。

サイバースペースの構築によるコミュニケーションの拡張は、ソーシャルメディアの登場によって更に促進された。「インターネットを利用して誰でも手軽に情報を発信し、相互のやりとりができる双方向のメディア」(総務省, online) であるブログや掲示板、SNS 等のソーシャルメディアは、従来マスメディアの受け手であった人々が、受け手と同時に送り手にもなりえるという状況を作り出し、情報流通の加速化と経路の複雑化をもたらしている。ソーシャルメディアの普及率は 2010 年代から急速に拡大 (遠藤, 2016a, pp.44-45) し、人々のコミュニケーションおよび情報収集の手段として一般化してきた。今日では、ソーシャルメディア上で話題となった出来事をテレビがニュースとして取り上げるなどの事例もみられている。

ソーシャルメディアの特性として、単に情報流通の経路を受け手同士のやり取りに開いたことのみに留まらず、「特定の対象に対して批判が殺到し、収まりがつかないような状態」(荻上, 2007, p.7) である「炎上」が頻繁に生じることが指摘されている。このことから、「炎上」をソーシャルメディア、あるいはサイバースペースでのコミュニケーションが生じさせる特徴的な現象と捉え、その様相を検討した研究 (小峰, 2015 ; 田中・山口, 2016) なども行われている。高校野球に関しても、特に伝統的な「物語」の枠組みに準拠した取り組みや報道をめぐる「炎上」が度々みられてきたことは、第一章で指摘した通りである。

こうした様相に鑑みれば、ソーシャルメディアの「炎上」が高校野球の「物語」にどのような影響を与える可能性があるのかを読み解くことは、現代的なメディア環境における「物語」の再生産について論じるうえで、重要な検討課題であるといえる。

そこで本章では【研究 4】として、まずソーシャルメディアにおける「炎上」という現象を分析するための理論的な枠組みについて検討する。また、その枠組を用いて投手の連投に関する「炎上」事例の分析を行い、高校野球の「物語」再生産に対するソーシャルメディア言説の関わりについて考察する。

2. 高校野球に関する「炎上」の分析枠組み

1) 「炎上」の要因に関する視点

ソーシャルメディア上で「炎上」が生じる要因について、荻上（2007）は「サイバースペース」という概念を用いて説明している。「サイバースペース」とは、「サイバースペースにおいて各人が欲望のままに情報を獲得し、議論や対話を行っていた結果、特定の一定の言説パターン、行動パターンに集団として流れていく現象」（荻上、2007、pp.34-35）を指している。つまり、サイバースペース特有のコミュニケーション形式を「炎上」の生成要因として捉えた議論である。また、平井（2012）も、『2ちゃんねる』や携帯電話でのコミュニケーションに特有の形式や文化性から「炎上」の背景を考察している。

荻上（2007）や平井（2012）の議論は、「炎上」の生成を規定している現代的なメディア環境のコミュニケーション特性を示した示唆的なものであった。しかしながら、コミュニケーションのあり方を規定する要因をメディア環境に求める場合、環境決定論に陥り、その背後にある社会的・文化的背景を等閑視してしまわぬよう留意する必要がある。若林によれば、メディアの使用法は「メディアが使用される社会の構造によって規定され、その条件下で選択される」ものであり、「メディアの技術特性は、そうした社会的選択を条件付ける要因の一つではあっても、単一の要因ではない」（若林、2007、p.827）とされる。すなわち、ソーシャルメディアのコミュニケーション形式によって「炎上」の行為パターンが条件付けられていたとしても、その環境において人々がなぜ「炎上」につながる行為を選択していくのかに関しては、現代の人々を取り巻く社会的・文化的背景を勘案しつつ検討していく必要があるといえる。

この点を踏まえ、行為者の心理や社会的・文化的背景から「炎上」の意味や要因を検討した研究（大谷、2016；伊藤、2014；鈴木、2005）もみられている。大谷（2016）はルサンチマンの概念を援用し、「炎上」が、攻撃対象に関する問題の根拠が曖昧なまま人々の妬みや嫉妬心の発露として生じている可能性を指摘した。分析事例は少数であるものの、「炎上」にルサンチマンという行為者の心的原理を見出している点は示唆的である。では、ルサンチマン的な感情の発露は、なぜ現代にソーシャルメディアという環境で頻出するのであろうか。伊藤（2014）は、社会的分化が進行しつつ他方で社会統合が求められる現代社会が、ある種の「集合的沸騰」を必要としており、その「集合的沸騰」がソーシャルメディアの形式に規定され具現化したものが「炎上」であると指摘した。しかしながら、伊藤は事象の非日常性に着目した「集合的沸騰」という概念に準拠する一方で、「炎上」が人々のリアルな日常を構成し始めていることも示唆している。確かに、従来「集合的沸騰」という概念で検討

されてきた祭りや儀式などの非日常的現象に比べ、ソーシャルメディアにおける「炎上」は、より日常の文脈に位置づく現象として観察されよう。

この点について、祝祭の日常化という観点から論じているのが鈴木(2005)である。鈴木は、ネット「炎上」や渋谷スクランブル交差点における若者の騒乱等、現代に散見される人々の集合的、瞬発的振る舞いを「カーニヴァル」という概念を用いて説明した。鈴木によれば、「大きな物語」(リオタール, 1989)を失った後期近代において、不安定化した個人は「カーニヴァル」としての瞬発的な振る舞いを流動的に浮遊するような日常世界を生活しているという。鈴木が提示した「カーニヴァル」の概念は、人々の集合的、瞬発的振る舞いが生まれる背景を後期近代の社会論に依拠して説得的に論じており、特にその振る舞いを日常の領域に位置づくものとして捉えようとしている点で、「炎上」を分析する視点として有用なものであると思われる。そこで、以下では「カーニヴァル」概念の理論的系譜について論じたうえで、高校野球に関する「炎上」を「カーニヴァル」として捉え分析する枠組みを検討していくこととする。

2) 「カーニヴァル」の概念

(1) ミハイル・バフチンの「カーニヴァル」論

「カーニヴァル」はイタリア語で「肉断ち」を意味する *carne-levare* ないし *came-vale* を語源とし、キリスト教の伝統的祝祭である「謝肉祭」の意味のほか、社会学においては「儀礼」などと同様の非日常的、境界的な祝祭現象を表す概念として扱われてきた(盛岡ほか, 1993)。バフチンは、中世ヨーロッパの都市における多種多様な民衆的祝祭において、「時代、民族、個々の祝祭によって様々なバリエーションとニュアンスの違いがある」にも関わらず、それらが「一つのカーニバル的基盤を共有している」(バフチン, 1995, p.248)ことを発見し、「カーニヴァル」概念の体系化を試みている。

バフチン(1995)によれば、「カーニヴァル」の概念は、主に「常軌の逸脱」「自由で無遠慮な人間同士の接触」「ちぐはぐな組み合わせ」「卑俗化」の4つの論理によって構成されているという。「カーニヴァル」においては、階層や地位、年齢、財産といった社会的諸条件から解き放たれた純粋な人間同士が自由に接触する過程で、偉大なものと下らぬもの、神聖なものと冒瀆的なものが結合し、パロディや笑いなどによって公的秩序が格下げを受け、社会的な規範や価値観の相対化が生じるとされる。大熊は、バフチンが「カーニヴァル」の概念に「非支配階級の支配階級に対する反逆の契機」(大熊, 1997, p.185)を見出していた可能性があると論じている。すなわち、公的な権威が「カーニヴァル」によって格下げを受けることで、民衆の手によって新たな価値体系が生産され、日常を支配する価値や規範が更新されることが期待されていたという指摘である。境界的な事象が社会変革の力学を内包するという見立ては、祝祭現象の社会的機能を読み解く諸研究において度々論じられてきた観点であり、例えば、ターナー(1996)が儀礼論において示したりミナリティ概念などにも共通してみられている。

また、バフチンによれば、「カーニヴァル」は中世ヨーロッパの人々に「二重の生活」(バフチン, 1995, p.261)を経験させるものであったとされる。人々は自らの所属する国や都市、あるいは宗教が形作る公的な秩序の中で日常生活を営む一方で、「《裏返しにされた世

界》《あべこべの生》(バフチン, 1995, p.258) として「カーニヴァル」を生きる時間を持ち合わせていたという。つまり、バフチンは「カーニヴァル」を日常の世界に対置した、非日常的世界を構成する事象として捉えていたといえる。

(2) 再帰的近代型「カーニヴァル」論

バフチンが中世ヨーロッパの民衆的祝祭から「カーニヴァル」の概念を導いたことに対し、鈴木(2005)が現代社会の診断に用いた「カーニヴァル」の概念は、アンソニー・ギデンズ、ウルリヒ・ベック、ジグムント・バウマンらが論じた再帰的近代論の系譜に位置づいている。

ギデンズ(1993)によれば、再帰的近代(後期近代)とは、地域固有の慣習や宗教といった社会活動における伝統的な基盤から個人が解放される「脱埋め込み」が生じた結果、自己アイデンティティや他者との関係性が常に個人による絶え間ない問い直しの対象となり、行為の再帰性が見境もなく働くことを特徴とした社会であるとされる。再帰的近代においては、伝統社会において個人を規定していた諸条件(身分、年齢、ジェンダー等)による拘束の弱体化が「あらゆるものごとくに不確かさの感覚をもたらし、個人に対してさまざまな場面で自己決定」(大澤ほか, 2012, p.437)を要求しているという。ここでいう自己決定のメカニズムについては、ベック(1989)が個人化論として詳細に検討している。自己決定の絶え間ない再帰性にさらされた個人は、伝統社会の価値や規範に規定されていた個人と比べ、より自己を確固たる一義的、無矛盾の存在として定位させることの困難性と向き合うこととなる。その結果、多元化したアイデンティティとその境界の曖昧さに直面しながら、自らの語りによってはじめて自らを統一的な存在として把握できるフィクショナルな主体(準主体)が立ち現れるという。

バウマン(2001)は、上記の再帰的近代論および個人化論を踏まえ、自己決定の絶え間ない再帰性にさらされた個々人が生成する共同体が、永続性を欠き一時的な結合の後に離散する特性を有することを指摘し、これを「カーニヴァル型共同体(またはクローク型共同体)」と呼んだ。「カーニヴァル型共同体」は、流動性と不安定性が増した社会において、一貫性を維持することの困難さを抱えた個々人が共通の関心に基づいて集合し、その場固有の論理に身を委ね、爆発的に騒ぎを起こした後、統合されることなく雲散霧消するものであるとされる。バウマンが用いた「カーニヴァル」の概念は、社会的な規範や価値観からの解放・逸脱、その場特有のコードの生成という点で、バフチンが体系化した「カーニヴァル」概念を念頭においていると思われるが、加えて、特に一時性・瞬発性を強調する意図が込められているものとみられる。

鈴木はバウマンの議論に依拠し、「カーニヴァル型共同体」の論理を『『共同体』から『共同性』への転換』(鈴木, 2005, p.138)であると捉えた。換言すれば、『『カーニヴァル』の日常化』とも表現しうる解釈である。つまり、自己の一貫性維持に困難さを抱え、多元的なアイデンティティを自己統合しつつ振る舞う個々人は、永続的な共同体として結合することよりも、自己の一側面に見いだされる他者との共同性をフックとして、アドホックな繋がりや連続という日常を流動的に生きているということである。こうした観点から、鈴木は「炎上」をはじめとする、現代社会における人々の集団的、瞬発的な振る舞いを「カーニヴァル」の概念を用いて分析し、それらが人々にとって非日常ではなく日常を構成する原理であることを論じてきた。鈴木が特に着目しているのは、「カーニヴァル」的な振る舞いの「自

己目的性」と内容の「ネタ化」という事態である。「共同性」の生成原理である「カーニヴァル」は、爆発的に盛り上がることや繋がりを確認すること自体が目的化した振る舞いとして定位しており、何のために盛り上がるのかという内容部分は、もはや「コミュニケーションのための『ネタ』に堕している」（鈴木，2005，p.142）と指摘されている。

3) 分析枠組みの提示

ここまで「カーニヴァル」概念に関する理論的な潮流を検討してきた。この議論を踏まえ、以下では再帰的近代型「カーニヴァル」の特性を整理するとともに、「カーニヴァル」的振る舞いが生成される空間としてのソーシャルメディアの特性を勘案し、「炎上」を分析する枠組みを提示する。

(1) 「カーニヴァル」の論理における継承と変容

バウマンが「カーニヴァル型共同体」を別名「クローク型」と称し、「劇場にでかける人間は、服装のそれなりのきまりにしたがって、普段着と異なる服を着る」（バウマン，2001，p.257）とその特徴を表現している点をみれば、バフチンが示した「常軌の逸脱」という論理は、再帰的近代型「カーニヴァル」にも共通して見出されるものであるといえる。また、バウマンは再帰的近代型「カーニヴァル」におけるもう一つの「逸脱」にも言及している。それは、『形式上の』個人を孤独な格闘の日々の苦しみや困難な状況から、いつとき解放してくれる」（バウマン，2001，p.259）という、いわば自己決定をめぐる絶え間ない再帰性からの一時的な解放である。つまり、中世の祝祭的現象にみられた「常軌の逸脱」という「カーニヴァル」の論理は、再帰的近代の文脈においては、個人を規定する社会的制約からの解放に加えて、その制約が弱体化したことによって生じる絶え間ない再帰的な自己構築の螺旋からの解放という二重の意味において継承されていると捉えうる。

また、「常軌の逸脱」という論理の継承は、その論理を基盤に生成された空間における「自由で無遠慮な人間同士の接触」の論理も合わせて継承されることを意味している。バウマンはこの点について、「昼間の関心や趣味がどんなに違っていても、人々は夜の公演になると同じ場所にあつまってくる。観客席に座るまえ、人々は外で着ていたコートやアノラックを劇場のクロークにあずける」（バウマン，2001，p.258）と比喩的に記述している。

一方で、バフチン（1995）が中世ヨーロッパにおける都市や教会を中心とした共同体、すなわち日常の個人をある種永続的に規定する社会的諸条件の存在を前提に、その裏に潜在する非日常的営みから「カーニヴァル」の論理を体系化したことに対し、バウマン（2001）や鈴木（2005）は、伝統社会から「脱埋め込み」化された個人の日常的、一時的結合原理として「カーニヴァル」の概念を扱っている。日常化した再帰的近代型「カーニヴァル」は、特にその事象の一時性、瞬発性に特徴が見出されることとなる。

また、再帰的近代型「カーニヴァル」において、「ちぐはぐな組み合わせ」、「卑俗化」という論理は変容する可能性もあるものと思われる。なぜなら、先にも検討したように、再帰的近代型「カーニヴァル」では盛り上がること、繋がること自体が自己目的化し、内容は「ネタ」化している傾向にあるとされ、必ずしもその内容が聖なるものと冒流的なものの組み合わせや、公的秩序の格下げである必要は無いはずだからである。再帰的近代型「カーニヴァル」における、こうした社会的な規範や価値観の相対化に関する側面は、「カーニヴァル」

の論理として必然的、目的的に立ち現れる訳ではなく、むしろそれが盛り上がりやすい内容だからと判断された場合において、結果論的に生起するものであるとも考えうる。

以上のように、再帰的近代型「カーニヴァル」は、「常軌の逸脱」や「自由で無遠慮な人間同士の接触」の論理といった、いわば「解放性・逸脱性」の側面を中世における「カーニヴァル」概念から継承しつつ、「一時性・瞬発性」や、繋がること自体への「自己目的性」を特徴とする概念であると整理できる。また、「ちぐはぐな組み合わせ」、「卑俗化」の論理といった、いわば「秩序の相対化」に関する側面が見られた場合においても、その様相は繋がること自体への「自己目的性」との関係において慎重に検討する必要があるといえる。

(2) 分析枠組み

では、「カーニヴァル」的振る舞いは、ソーシャルメディアのメディア特性にどのように規定され、「炎上」として表出するのだろうか。先に論じたように、ソーシャルメディアは、従来マスメディアの受け手であった人々同士が送り手にもなり、互いにコミュニケーションを取ることを可能にしたメディアであるが、遠藤によれば、そのコミュニケーションにおける主体は「顔や名前を持たない」「集合離散を常態とする〈群衆〉」（遠藤，2016b, p.2）という特徴を有するという。

「群衆」とは、もともと都市への集住が進んだ社会において生じた、混沌とした人だかりを身体隠れ蓑とする流動的な主体像を捉えた概念である。「社会参画意識が薄く、自己中心的でありながら他律的であり、一時的な享楽を追求する人々」「非合理的な集団心理に惑わされやすく、不確実な情報に踊らされて、パニック、暴動、不可解な流行に走り、社会秩序を脅かす」（遠藤，2016c, pp.31-33）存在として特徴づけられている。遠藤は「メディアの発達は、空間的制約を越え、広い範囲に〈群衆〉を生み出していく」（遠藤，2016c, pp.33）と指摘し、ソーシャルメディア等による匿名的なコミュニケーション形式が、現代における「群衆」の生成に寄与していることを示唆している。ソーシャルメディアにおける匿名性とその形式が導く「群衆」の性質は、その場特有のコードに基づくコミュニケーションによって瞬発的に秩序からの解放、逸脱を果たすという再帰的近代型「カーニヴァル」の論理と親和性が高いものであるといえる。

また、「匿名性・群衆性」などのソーシャルメディアの特性に規定された振る舞いが、なぜ「炎上」という批判的なコミュニケーションの爆発という形式をとりやすいのかについては、集団分極化に関する議論が有用な示唆を与えてくれる。荻上（2007）は、討議において人は自分と異なる意見に歩み寄るよりも、自分の意見を補強する方向に傾きやすいことを表す集団分極化という性質が、サイバースペースにおいて加速化される側面があることを指摘している。例えば、匿名性による不用意な発言のコスト低下や、常に複数のコミュニケーションに同時接続されることによる「演じ分け」の切迫感などが、「多くの水が流れることで淹ができ、淹ができることでさらに多くの水がそこに向かってながれていく」（荻上，2007, p.35）ような、特定のトピックに対する言及の雪だるま式な増加を後押ししている可能性があるという。こうしたメディア特性が、「解放性・逸脱性」や「秩序の相対化」の論理を内包した批判的言説を加速度的に増加させる背景となっている可能性も指摘できよう。

さて、ここまで検討してきた後期近代型「カーニヴァル」の概念とソーシャルメディアの特性に基づき、「炎上」に関する分析枠組みを図 7-1 に示す。

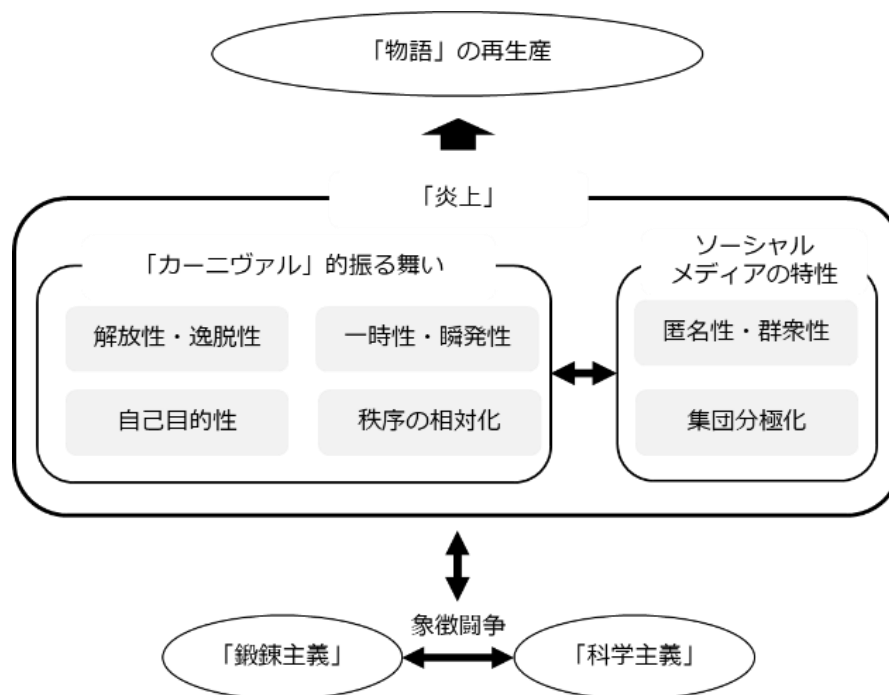


図 7-1 高校野球に関する「炎上」の分析枠組み

「匿名性・群衆性」というソーシャルメディアの特性は、「解放性・逸脱性」「瞬発性・一時性」などの論理を有する「カーニヴァル」的振る舞いがソーシャルメディア上で展開されることを形式的に担保しているものと思われる。さらに、「集団分極化」を導きやすいメディア特性も、「解放性・逸脱性」の論理を有する言説の爆発的増加を後押ししているとも推察しうる。こうしたメディア特性との親和性によって、ソーシャルメディア上で「カーニヴァル」的な振る舞いの爆発的表出（＝「炎上」）が導かれている可能性がある。また、「炎上」の内容に「秩序の相対化」という性格が観察される場合、「集団分極化」の特性がその先鋭化に加担しているとも捉えうるが、一方で、内容はただの「ネタ」であり、「カーニヴァル」的振る舞いそれ自体が「自己目的」的に駆動している可能性にも留意する必要がある。

上記の枠組みをもとに高校野球に関する「炎上」の諸相を分析し、「物語」の再生産に対するソーシャルメディアの影響についての一側面を読み解いていきたい。

3. 分析概要

1) 分析対象

ここでは、2013 年の第 85 回春の甲子園でみられた済美高校・安樂投手の連投と、その事例をめぐる Twitter の「炎上」を分析の対象とする。第六章でも詳述したとおり、安樂投手の連投は、高校野球において「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎが見られる近年において、投手の完投・連投という「鍛錬主義」的な取り組みを象徴するものとして社会的な注目を集めた事例である。Twitter ではこの事例に言及した Tweet（投稿）が爆発的にみられ、いわゆる「炎上」状態が生成された。これらの経緯から、当該事例を「鍛錬主義」と「科学主義」

の象徴闘争のもとに生じたソーシャルメディアの「炎上」に関する 1 つの代表的事例として捉え、分析対象に選定した。第 85 回春の甲子園における安樂投手の連投に関する様相は、表 7-1 に示した通りである。

表 7-1 2013 年春の甲子園における安樂投手の連投

日付	概要
2013年3月26日	春の甲子園2回戦、済美vs広陵にて、安樂投手が本大会初登板。 最速152キロを記録し、延長13回232球を投げて完投。済美高校が4-3で勝利。
2013年3月31日	3回戦、済美vs済々黌にて、安樂投手が9回159球を投げ、2回戦に引き続き完投。 大会での合計投球数は391に。済美高校が4-1で勝利。
2013年4月1日	準々決勝、済美vs県岐阜商にて、安樂投手が2日連続で登板。9回138球を投げ、3試合連続完投。 大会での合計投球数は529球に。済美高校が6-3で勝利。
2013年4月2日	準決勝、済美vs高知にて、安樂投手が3日連続で登板。9回134球を投げ、4試合連続完投。 大会での合計投球数は663球に。済美高校が3-2で勝利。
2013年4月3日	決勝、済美vs浦和学院にて、安樂投手が4日連続で登板。6回109球を投げ降板。 安樂投手の本大会合計投球数は772球（春の甲子園大会史上最多）。浦和学院が17-1で勝利。

毎日新聞による報道内容を参照し筆者作成

当該事例の「炎上」に関する契機として、著名人がその問題性に言及したことが挙げられる。スポーツジャーナリストの乙武洋匡氏は、2013 年 4 月 3 日に自身の Twitter で「成長過程にある高校生がそれだけの球数を投げることに對し、科学的に疑問符がつけられる」「ところが報道を見ていると、『エース力投』など美談、賞賛の一边倒」「本当に球児たちの体のことを考えているなら、なぜ球数制限の導入を検討しないのだ」という問題提起を行った。この一連の Tweet に対し、メジャーリーガーのダルビッシュ有投手が「出場選手登録を 25 人にして、学年別に球数制限がいいかと」と賛同的な反応を示したことで、Twitter 上での議論が加速した（乙武，2013）。こうした背景も踏まえ、当該事例における「炎上」の具体的な様相について分析していく。

2) 分析方法

(1) 調査 A : Twitter 言説の様相に関するメディア分析

調査 A では、当該事例に言及した Tweet を抽出し、その内容や傾向について分析を行う。渡辺・相場（2015）や岩瀬・矢吹（2018）の手法を参照し、Twitter 社が提供する、特定の期間の Tweet をキーワード指定で検索できる「高度な検索」機能を用いて、対象の Tweet を収集した。当該事例で安樂投手が初めて連投で試合に出場した 2013 年 3 月 31 日から、春の甲子園大会終了 1 週間後の 2013 年 4 月 10 日までの期間で「安樂 and 連投」「安樂 and 連投」のキーワードを含む Tweet を検索したところ、1,728 件が抽出された。抽出された Tweet について、その形式や内容、時系列推移などの観点から分析を行う。

(2) 調査 B

調査 B では、調査 A で明らかになった Twitter 言説の様相を読み解くにあたっての補足的な知見を得るため、インターネット・ユーザーにおける高校野球やソーシャルメディアへの投稿に対する態度について、アンケート調査を用いて分析を行う。分析にあたっては、第八章で示す高校野球に対する受け手の解釈に関する調査結果のうち、インターネット上への書き込みに対する質問項目などの一部を抽出して用いている。当該調査は、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」などについて、728 名を対象にアンケートを行ったものである。調査概要に関する詳細については、第八章を参照されたい。ここでは高校野球の情報取得におけるインターネット利用の状況や、高校野球に関する投稿経験とその意図、インターネット・ユーザーによる高校野球の見方などについて検討し、調査 A の結果を補足しつつ、「物語」の再生産に対するソーシャルメディアの関わりを読み解いていく。

4. 安楽投手の連投に関する Twitter 言説の様相

まず、調査 A の結果をもとに、安楽投手の連投に関する Twitter 言説の諸相について検討する。

1) Tweet の形式

Twitter への投稿については、投稿者が自ら文字を入力し投稿する方法の他、他者の記事やコメントなどを引用して投稿する、いわゆる「シェア」という方法も存在する。そこで、分析対象として抽出した 1,728 件の Tweet の形式について、投稿者のコメントのみが記されたもの、他者の記事やコメントのシェアのみが行われているもの、他者の記事やコメントのシェアに投稿者のコメントが付記されたものの 3 つに分類し、その割合を分析したところ、表 7-2 に示した結果となった。

表 7-2 Tweet の形式

n=1728		
投稿者の コメントのみ	他者の記事やコメント等の シェアのみ	他者の記事やコメント等のシェア + 投稿者のコメント
499件 (28.9%)	711件 (41.1%)	518件 (30.0%)

最も多かった Tweet の形式は「他者の記事やコメント等のシェアのみ」(41.1%) のものであり、「他者の記事やコメント等のシェア+投稿者のコメント」(30.0%)、「投稿者のコメントのみ」(28.9%) のものは相対的にやや少ない傾向が看取された。すなわち、当該事例における Twitter の爆発的な盛り上がりは、その半数近くが自らの意見を直接表明したものではなく、他者の記事やコメントが様々な人に繰り返しシェアされたものによって構成されていたといえる。シェアという機能によって、他者の主張や立場にいわば「便乗」しやす

い状況が作られていることが、ソーシャルメディアにおける集団分極化の性質を担保し、「炎上」が生じやすい土壌を形成している様子が伺える。また、自らの主張を明示せずとも気軽に盛り上がりに参加しやすい構造が「炎上」の表出を支えているとすれば、それは同時に、「炎上」への参加がその内容に深く拘らず自己目的的に行われることも許容する構造であるとも指摘できよう。

2) Tweet の内容

次に、Tweet の内容について、特に「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争との関係において、どのような主張の傾向がみられるのかについて検討してみたい。抽出した Tweet のうち「他者の記事やコメント等のシェアのみ」を除く 1,017 件の Tweet の内容について、第五章で示した新聞分析の手法と同様に、当該事例をはじめとする高校生による完投・連投に対して「肯定的」「否定的」「両論併記的」「その他」という 4 つの項目を設定し、コーディングを行った。結果を表 7-3 に示す。なお、本コーディングについても、第五章で示した新聞記事分析における妥当性検証の手続きに準じ、第二コーダーにランダムに抽出した 50 件の Tweet に関するコーディングを依頼して一致度を検討した。その結果、 $k=0.85$ と高い一致度がみられ、判定の客観性・妥当性が確認された。

表 7-3 Tweet 内容のコーディング結果

n=1017			
肯定的	否定的	両論併記的	その他
36件 (3.5%)	415件 (40.8%)	38件 (3.7%)	528件 (51.9%)

コーディングの結果、「その他」(51.9%)と「否定的」(40.8%)の項目に該当する Tweet が大半を占め、「両論併記的」(3.7%)、「肯定的」(3.5%)の項目に該当するものの割合は少なかった。また、「その他」の項目に該当した Tweet は、投手の完投・連投の是非に直接言及はしていないものの、中には批判的な目線を指導者や高野連、メディア、あるいは日本政府や無関係な他者に向けているものなどもみられた(表 7-4)。

表 7-4 連投・完投それ自体の他に批判的な視線が向けられた Tweet 例

【済美・安楽投手の連投に思う】<http://blogos.com/outline/59308/> 16歳の少年に600球超を強い
るアホ監督・・・期限付き雇われ監督の保身、名誉心だけだろ。

ダルビッシュもうちょっとで完全試合だったのに…。高野連きめえ / “済美・安楽投手の連投に思うこ
と - Togetter” <http://htn.to/uHK4Ne>

その安楽君は、5連投する体力を付ける宣言してるのが泣ける。高野連はクソ

まあパン（アベノミクス）とサーカス（高校野球）はメディア的に聖域っぽいんで。革命しかないん
ですかね（嘆息 / “済美・安楽投手の連投に思うこと - Togetter” <http://htn.to/UgmWEptT9i>

乙武さんの「済美・安楽投手の連投批判」で思うのは、この調子で「AKBは高校野球なんです」と
言ってる秋元康も批判してほしいってことだなあ。高野連って誰でも批判できるよな…。

絵文字等の使用は筆者が一部修正（その他は原文ママ）

このコーディング結果を、第五章の新聞分析において析出された投手の完投・連投に対する報道の立場（「肯定的」0%、「否定的」0%、「両論併記的」3.0%、「その他」97%）と比較すると、**Tweet** では投手の完投・連投に「否定的」な内容が相対的に多い傾向にあることが分かる。対象とした事例や年代が異なるため単純な比較は難しいが、当該事例では投手の完投・連投に対する「否定的」な見解が **Twitter** において集団分極的に積み重なり表出していた可能性も指摘できよう。また、投手の完投・連投が、伝統的に高校野球の「正しいあり方」を形式づけてきた「鍛錬主義」的な価値基準に準拠した取り組みである点を踏まえれば、その取り組みに対する「否定的」な言説の表出は、高校野球における伝統的な文化的秩序からの解放・逸脱と相対化の論理を有したものであると捉えうる。連投や完投に対する批判のみでなく、その批判が高野連や政府、無関係の他者への権力批判等に転化している **Tweet** がみられる点も、この「炎上」が秩序からの解放・逸脱、相対化の論理を内包している傾向を示しているといえよう。

3) **Tweet** の時系列的推移

ここまで検討した **Tweet** の形式や内容の傾向を念頭に、ここではその **Tweet** がどのような時系列的経緯で表出していたのかについて分析していく。分析対象期間の各日における **Tweet** 数の分布を、当該事例に関する出来事の経緯と合わせて図 7-2 に示す。

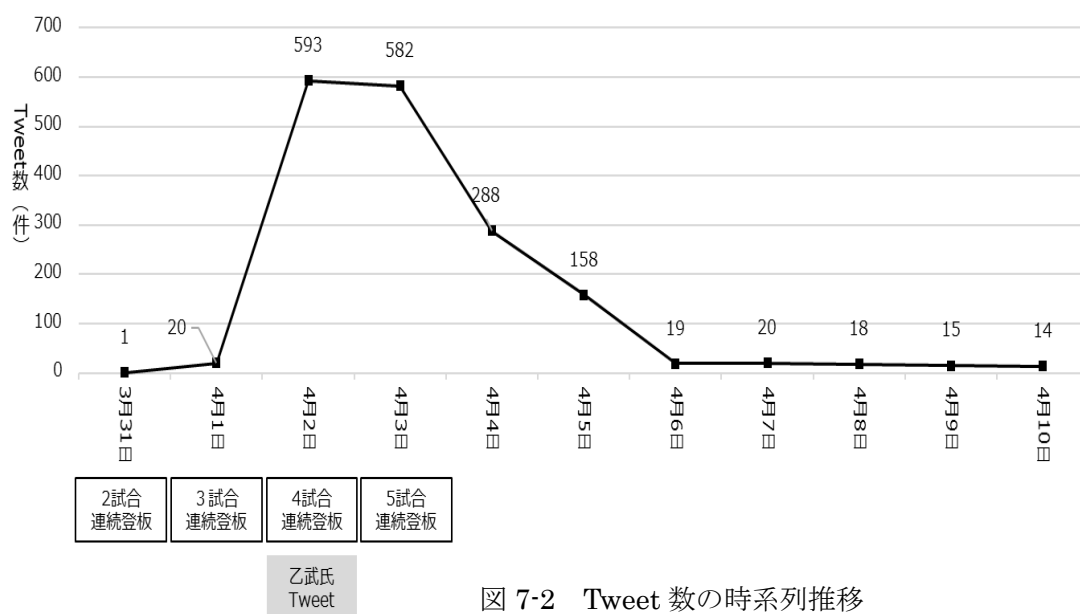


図 7-2 Tweet 数の時系列推移

安樂投手の連投自体は3月31日から連続しているが、Tweetの時系列推移をみると、特に4月2日、4月3日の2日間にTweetが集中していることが分かる。対象期間における全Tweetのうち上記2日間で表出した割合は68.0%にのぼる。4月2日は、乙武氏による前述したTweetの公開日であった。Tweetの形式が「他者の記事やコメント等のシェアのみ」のものが最も多いという点も併せて考えれば、著名人による当該事例への言及を引用・拡散する振る舞いが、Tweetの爆発的表出に関する力学の一つであったとも推察できよう。

連投自体の動向がピークに達したのは4月3日（4日連続5連投）であった訳だが、翌日の4月4日以降Tweet数は急激に減少している。また、Tweet数が顕著に少なくなった4月6日以降については、全86件中56件（65.1%）のTweetが、1つのアカウントによって同じ記事のシェアが繰り返されたものであった。こうした結果をみれば、当該事例に関する「炎上」は、連投が加速化するにつれて徐々に話題が盛り上がり一定の到達点をもって活発な議論がなされたというよりも、むしろ連投がみられたある地点において爆発的な言及が殺到し、その後数日で急速に収束した極めて一時的・瞬発的な事象であったと捉えることができる。

以上、調査Aとして、安樂投手の連投に関する「炎上」事例について、Tweetの形式、内容、時系列推移などの観点から分析した結果、他のメディアと比較して完投・連投について否定的な傾向にある言説が、投稿者の主張よりも他者の記事やコメントのシェアという形式を中心に、短期間で爆発的に表出している様相が看取された。

5. インターネット・ユーザーの態度

ここまで検討してきたTwitter言説の様相を踏まえ、以下ではその様相を読み解く際の補足的な知見を得るため、インターネット・ユーザーの高校野球やネット投稿に関する態度について分析を行う。

1) インターネットの使用と投稿に関する様相

まず、そもそもインターネットが高校野球の情報取得にどの程度用いられているのかについて検討するため、「日常的な情報取得」「高校野球の観戦や情報取得」それぞれについて、「情報取得に最もよく用いるメディア」の割合を分析した（表 7-5）。結果をみると、日常的な情報取得の方法と比べ、高校野球に関する情報取得は、インターネットの利用率がやや低い傾向にあることが分かる。また、高校野球の情報取得にインターネットを最もよく利用する人の年代別割合は、図 7-3 に示した通りであった。若い年代、とりわけ 20 代の人々は、高齢の人々よりもインターネットの利用率が高い傾向がみられた。

表 7-5 情報取得に最もよく利用するメディア

n=728

メディア	日常的な情報取得	高校野球に関する情報取得
テレビ	52.6%	64.8%
新聞	6.6%	8.1%
ラジオ	1.9%	1.9%
雑誌	0.7%	0.5%
インターネット	33.7%	11.5%
その他	0.4%	0.3%
メディアで情報取得しない	4.1%	12.8%

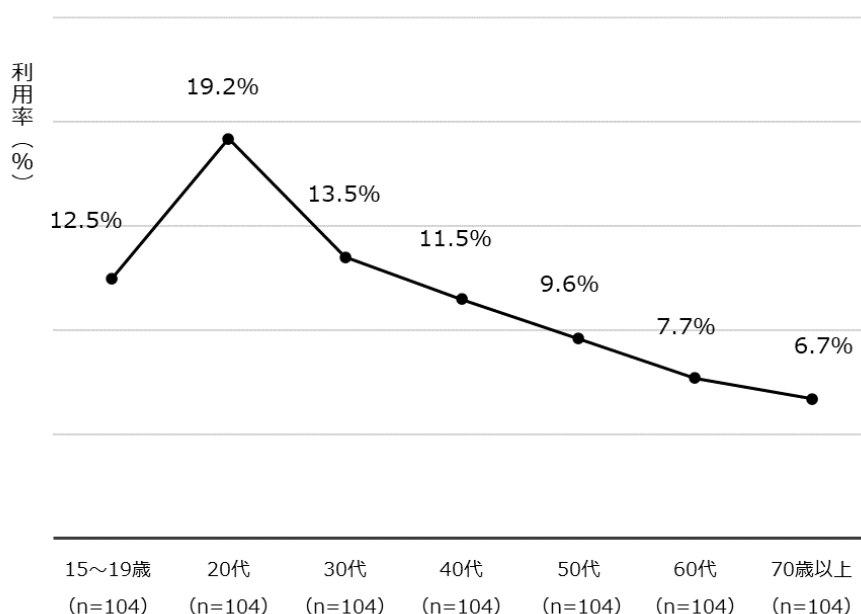


図 7-3 高校野球の情報取得にインターネットを最もよく利用する人の割合（年代別）

次に、ソーシャルメディアへの投稿について検討していく。高校野球に関する内容についてソーシャルメディアへ投稿した経験を有する人の割合は15.2%であった(表7-6)。また、投稿経験を有する人における投稿の意図・態度については、表7-7に示すような結果となった。最も多かった投稿の意図・態度は、「メッセージが選手や監督、チームに届くことを期待している」(32.4%)であり、次いで「特に理由や目的はないがなんとなく書き込みをしている」(25.2%)、「インターネット上でつながりのある人に自分の意見を知ってもらいたい」(22.5%)などの回答が上位にみられた。Twitter言説の分析においては、他のメディアと比較して投手の完投や連投に否定的な内容が多い傾向がみられていたが、調査Bの結果をみると、そもそもソーシャルメディアに投稿を行う人自体は相対的に少数であり、その意図や態度は、メッセージや意見の伝達・共有といった点に重きが置かれている、あるいは特に明確な意図を持たずに投稿が行われていることも多いことが分かる。

表 7-6 ソーシャルメディアにおける高校野球に関する投稿経験

		n=728
頻繁にしている	3.7%	投稿経験あり 15.2%
数回したことがある	7.0%	
1度だけしたことがある	4.5%	
したことはない	84.8%	

表 7-7 投稿の意図・態度

	n=111
メッセージが選手や監督、チームに届くことを期待している	32.4%
特に理由や目的はないがなんとなく書き込みをしている	25.2%
インターネット上でつながりのある人に自分の意見を知ってもらいたい	22.5%
自分自身にとってのメモや備忘録として書き込みをしている	18.9%
盛り上がっている話題については何か書き込みをしたくなる	18.0%
書き込みによって制度やルールなどが変わることを期待している	17.1%
自分の意見がメディアに取り上げられたり拡散されたりすることを期待している	14.4%
匿名だといふ過激な書き込みをしがちである	4.5%

2) インターネット・ユーザーにおける高校野球の見方

では、高校野球の情報取得にインターネットを用いる人々は、高校野球にどのような目線を向けているのであろうか。この点について、これまで論じてきた「若者らしさ」「青春」という解釈枠組みやその儀礼性、マスメディアの分析において度々みられた「仲間」という表象などに着目して検討してみたい。

上述した高校野球の見方について、高校野球の情報取得にインターネットを用いる人々とそれ以外の人々の傾向を比較したものが、表 7-8 である。結果をみると、高校野球に「さわやかさ」や「青春」という意味を読み解く目線や、象徴的な儀礼性、「仲間」という表象による感動の喚起などの様相は、よく用いるメディアの違いに関わらず、共通して高い割合を示していることが分かる。すなわち、高校野球に対する「物語」に準拠した解釈は、ソーシャルメディアに親和的な人々の間にも共通している可能性があるといえる。

表 7-8 高校野球の見方（メディア別）

	高校野球の情報取得に最もよく用いるメディア		検定
	インターネット (n=84)	インターネット以外 (n=472)	
高校生が一生懸命プレーしている姿がさわやかである	94.7%	91.7%	N.S.
高校野球は若者らしい青春の場であると思う	90.0%	87.0%	N.S.
高校野球は見る人に人が生きる上で大切なことを教えてくれていると思う	97.3%	92.1%	N.S.
仲間同士が助け合う姿に感動する	86.6%	87.8%	N.S.
「そう思う」「ややそう思う」の合計%を比較			

以上、調査 B として、インターネット・ユーザーの高校野球やネット投稿に関する態度について検討した結果、高校野球に関する情報取得にインターネットを用いる人や、ソーシャルメディアに高校野球に関する投稿をした経験を有する人が比較的少数であることや、その投稿はメッセージや意見の伝達・共有に重きが置かれる傾向にあるほか、特に明確な意図なしに投稿されることも多いこと、インターネット・ユーザーにも他のメディアを良く使用する人と同様に、高校野球の「物語」に準拠した見方や解釈がみられることなどが示唆された。

6. ソーシャルメディア言説と「物語」の再生産

以下では、調査 A で明らかになった当該事例における Twitter 言説の様相に関して、調査 B で示されたインターネット・ユーザーの傾向性を参照しつつ考察し、ソーシャルメディア言説に特徴的な「炎上」の内実と「物語」再生産との関わりについて論じていく。

調査 A で示されたように、当該事例における「炎上」は、2 日間のうちに多数の Tweet が殺到しその後急速に収束した極めて一時的・瞬発的な現象であった。加えて、その内容が他のメディアと比べて完投・連投に対する否定的な見解を多く含んでいるという点から、匿名化された個人が既存の秩序を逸脱し、その秩序が相対化される様相も読み取ることができる。

一方で、調査 B で示された投稿の意図をみると、選手や監督等の当事者にメッセージを届けたいという思いのほか、特に明確な意図がないという回答や、他者との繋がりにおいて、いわば「共同性」を確認すること主目的であるとみられる回答も上位に位置していた。調査 A における Tweet の投稿者と調査 B の対象者に関連性は無いため、この結果をもって当該事例の「炎上」がどこまで自己目的的なものとして展開していたのかを判断することはできないが、少なくともソーシャルメディアにおける投稿という行為について、メッセージを伝達するという機能的側面の他に、その行為を行うことそれ自体が行為者にとって重要な意味を持つという側面があることが示唆されているといえる。また、そもそも高校野球についてソーシャルメディアに投稿した経験がある人が比較的少数である点や、インターネット・ユーザーにも高校野球の「物語」に準拠した見方が多くみられた点などを勘案すれば、「炎上」に多くみられた完投・連投に対する否定的な見方は、必ずしもインターネット・ユーザー全体の傾向である訳ではなく、むしろ一部の人々の意見が爆発的に可視化された状態であった可能性も指摘できる。

では、こうしたソーシャルメディア言説における「炎上」の様相は、高校野球の「物語」再生産にどう関連するのだろうか。この点について、当該事例後の連投をめぐる動向を参照しつつ考察していきたい。当該事例における「炎上」が話題となった後、同年（2013 年）夏の甲子園では、準決勝の前に休養日を設けるという日程変更が行われた。高野連はこの制度改正について、以前から検討していたものであり安楽投手の事例を踏まえて決定したものではないと述べている。ただし、当該事例がこれまで選手の健康管理の観点から問題化されていた連投に関する象徴的な事例として社会的な議論を巻き起こしたことから、制度改正のタイミングに一定程度影響を与えた可能性も指摘されている（産経 WEST, 2013）。ここでの制度改正は、雨天順延などの日程変更がなければ同一高校による 3 日連続の試合が無くなるといった限定的な対処に留まるものであった。しかしながら、この制度改正に関する議論についてソーシャルメディアで「炎上」となるような様相はみられていない。

以上の当該事例に関する事後的な展開も踏まえ、ソーシャルメディアにおける「炎上」と「物語」再生産の関係性に関する一側面を図 7-4 に整理する。

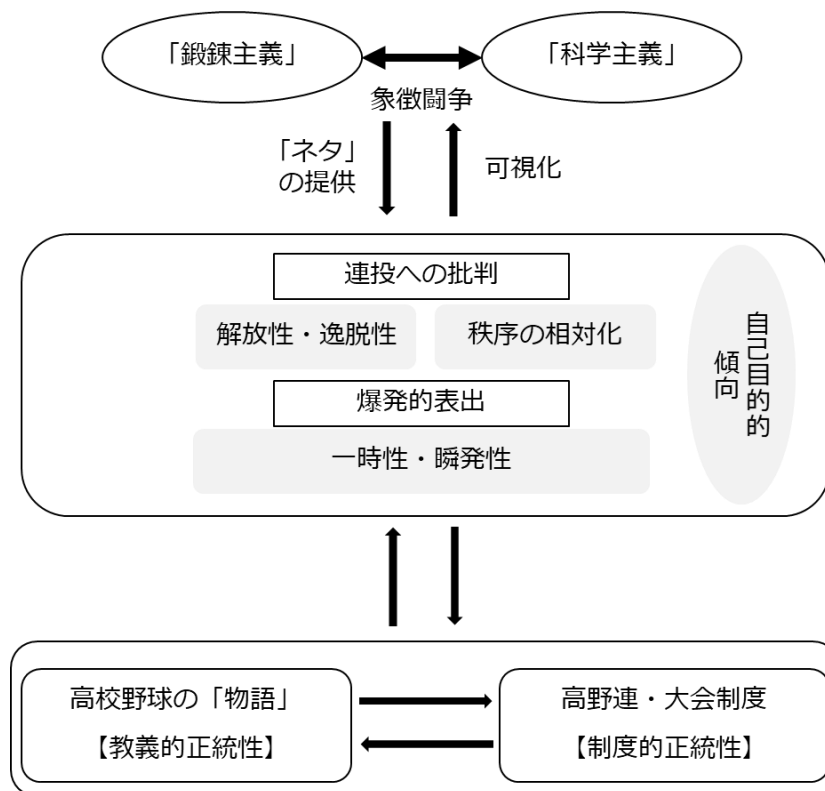


図 7-4 「炎上」と「物語」の再生産

当該事例においては、「鍛鍊主義」と「科学主義」の象徴闘争という背景のもと、安樂投手の連投を機に「連投をどう考えるか」という「ネタ」がソーシャルメディア上に生起することとなった。「炎上」には連投に対して批判的な言説も多くみられ、先述のように、高野連による制度的対応に繋がったとも指摘されている。たとえ「炎上」の言説がインターネット・ユーザーにおける少数意見であったとしても、その言説が爆発的に可視化された状況を、高野連は等閑視できなかったものと推察される。また、当該事例の「炎上」が著名人による問題提起が一つの契機となっていた点を踏まえれば、マスメディアでは公にされにくい既存の秩序に対する批判的な立場を、「カーニヴァル」の論理が保証し可視化しているとも指摘できる。しかしながら、「炎上」は極めて一時的・瞬発的現象であるため、高野連の対応が限定的なものであったとしても、この点について継続的な議論が展開する場とはなり得ない。その意味で、「炎上」単体における「物語」再生産への影響は、軽微なものに留まる可能性が高い。一方で、同種の「炎上」が繰り返し表出することや、その様相がマスメディアに取り上げられることなどを通じて、「鍛鍊主義」と「科学主義」の象徴闘争が繰り返し可視化され、間接的に「物語」の枠組みを揺さぶる力学となり得る可能性はあろう。ただし、その力学は非常に不安定なものとならざるを得ないものと思われる。なぜなら、「炎上」が少数の自己目的的な振る舞いとして駆動している可能性があるからである。「炎上」が自己目的的な振る舞いである場合、例えば「Aは最低だ」という言説が、投稿者にとっては「コミュニケーションのための『ネタ』」（鈴木，2005，p.142）であったとしても、その爆発的な表出が秩序形成・維持のダイナミズムに影響を及ぼし、結果として人々は意図や責任の所

在がない匿名的な言説に振り回されることとなる。すなわち、ソーシャルメディアの「炎上」が生み出す影響は、象徴闘争の可視化と議論の活発化に転じる可能もあれば、意志を持たない言説の空転と秩序の混乱をもたらす可能性もあるということだ。この諸相をより具体的に読み解くためには、1つの「炎上」事例の分析のみでなく、種々の事例とその帰結を継続的に検討していくことが必要となろう。

第八章 受け手の解釈にみられる揺らぎ

本章では【研究 5】として、高校野球のメディア報道に対する受け手の解釈に関するアンケート調査について分析を行い、受け手の解釈にみられる揺らぎという点から、「物語」の再生産に関する諸相について検討する。

1. 背景および分析枠組み

本稿では、ここまで「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争のもとに生じている選手や野球部による取り組みの変化を踏まえ、その取り組みを報じるマスメディアのテキストにみられる揺らぎや、ソーシャルメディアの「炎上」事例の分析を通じて、メディアを介した高校野球の「物語」再生産の様相について検討してきた。しかしながら、第三章でも検討したように、メディアを介した社会的規範や価値観の生成・再生産は、メディア・テキストが固定的に決定するものというよりも、メディアのメッセージ伝達と受け手の解釈による相互作用において動的に構造化されるものであると考えられる。したがって、高校野球に対する価値観や観念、ならびに高校野球に対する見方や解釈の枠組み（「物語」）の再生産を論じるにあたっては、受け手の解釈に関する諸相を分析することが重要な検討課題となる。

高校野球に対するメディア報道の受け手に着目した研究として、プロ野球と高校野球の視聴者の様相を比較した研究（川口，1990）や、夏の甲子園を主催する朝日新聞が実施した高校野球のイメージ調査に関する分析（狩野，2004）などがみられている。これらの研究は、プロ野球と高校野球の見られ方の違いや、受け手の野球経験に応じた視聴の楽しみ方の違い、性別や年代による高校野球イメージの違いなどを分析し、高校野球の見方やイメージ形成のパターンを分類・整理して多様な捉え方を示した点で示唆的であった。しかしながら、受け手の解釈から「物語」の再生産を論じるためには、単に見方やイメージのパターンを類型化するのみでなく、その多様な見方やイメージが、これまで論じられてきた「若者らしさ」「青春」の枠組みとその揺らぎにどのように関係するのかを検討する必要がある。そこで以下では、清水（1987，1989，1998）が体系化した高校野球の「物語」に関する構造を改めて整理したうえで、その揺らぎを検討するための分析枠組みを設定し、アンケート調査の分析によって、受け手の高校野球に対する解釈の揺らぎについて検討していく。

清水（1987，1989，1998）による高校野球の「物語」生成に関する歴史的検討、テレビ中継分析、受け手に対するフィールドワークについては、第二章で詳細に検討しているが、その論旨は主に以下のように要約できる。①夏の甲子園は精神修養・鍛錬主義を基盤とする理想的な青年の育成という理念のもとに創設された。②夏の甲子園のテレビ中継は「全員一丸」「友情」「気迫、精神力」などの意味を生成し、「青春」「若者らしさ」の「物語」を毎年繰り返し報じてきた。③「青春」「若者らしさ」の「物語」が高校野球に関する共通イメージとして「神話」化されることで、高校野球は日本人の儀礼的な自己確認の場として定位している。

以上の清水による議論をみれば、高校野球の「青春」「若者らしさ」という「物語」の構造が、理念の基盤となる価値観や観念、メディアによる意味作用とメッセージの生成、受け手における自明的な共通イメージの形成という 3 つの観点から把捉されていることが分かる。

そこで【研究 5】では、「物語」の構造に対応する分析視点として「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」の 3 点を設定し、受け手に対するアンケート調査を実施し分析を行う。「高校野球観」は、高校野球に対する意味づけや価値づけといった受け手の観念的側面を捉える視点であり、スポーツの文化システムを構成する要素として検討されてきたスポーツ観の概念（三本松，1988）を高校野球に適応させたものである。「高校野球の見方」は、メディアが生成する意味や高校野球の「物語」を受け手がどのように読み解き、評価しているのかを捉える視点である。「高校野球の表象」は、換言すれば高校野球について受け手が抱くイメージであり、「暗黙のものの見方、さらにはその根拠の問われることのない自明視されたものの見方」（松尾，2001，p.575）を捉える視点である。以上 3 つの視点から分析することで、選手・野球部の取り組みやメディア・テキストの揺らぎを受けて、「若者らしさ」「青春」という「物語」の何がどのように揺らいでいるのかに関して、要素分解的に検討していくことが可能となろう。

先に論じたように、メディアの受け手による解釈は、個々人の属性や所属する集団の文化的社会的文脈などによって多様であることが想定される。特に、野球という特定のスポーツに対する解釈である以上、野球経験の有無によって差異が生じる可能性は高い。また、第七章で検討したソーシャルメディアの「炎上」事例など、メディア特性によって高校野球の表象・言説に差異がみられるなどの様相を踏まえれば、受け手のメディア行動や態度についても、高校野球の解釈のあり方に重要な関わりをもつ属性として念頭におく必要がある。以上の議論を踏まえ、【研究 5】の分析枠組みを図 8-1 に示す。

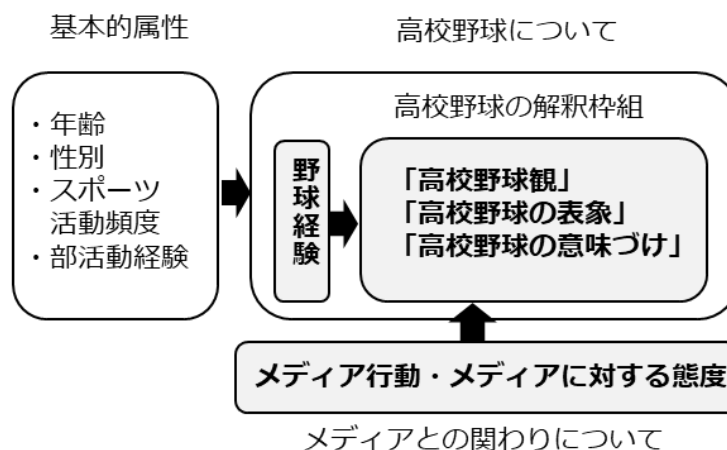


図 8-1 受け手分析の枠組み

また、本稿で検討する「物語」の再生産は、選手や野球部の取り組みの揺らぎを一つの起点としている。そのため、「物語」に対する受け手の解釈の中でも、特に選手やその取り組みを指導する監督が、メディアを介した「物語」生成の様相をどのように理解し意味づけ、日々の取り組みを行っているのかは重要なポイントとなる。この点を踏まえ、選手や監督の「物語」に対する解釈についても補足的に検討しておきたい。

2. 調査および分析の概要

以上の議論を踏まえ、【研究 5】では、まず調査 A として、受け手の高校野球に対する解釈についてアンケート調査を行い、上述した枠組みに基づき分析を行う。また、「物語」再生産の循環的な構造を捉えるため、選手や監督の「物語」に対する解釈・意味づけについて、調査 B として補足的なインタビュー調査を行うこととする。

1) 調査 A：高校野球に対する受け手の解釈に関するアンケート調査

(1) 調査対象

15 歳以上の 728 名を全国規模で抽出し、アンケート調査を実施した。対象者の抽出にあたっては、学術調査の実績が多く調査手続きに信頼性のあるインターネット調査会社 A 社に委託し、A 社に登録されたモニターを活用した。インターネット調査については、広範囲に対して迅速な調査の実施、結果の回収が可能な反面、モニターにおける性別比率や年齢層の偏りといった課題も指摘されている（大隅・前田，2008）。そこで本調査では、表 8-1 に示した通り、男女別および年代別に均等化した割り付けを行い、計 728 名を抽出して回答を得た。

表 8-1 調査対象者の割り付け

	男性	女性
15～19歳	52	52
20代	52	52
30代	52	52
40代	52	52
50代	52	52
60代	52	52
70歳以上	52	52
小計	364	364
合計	728	

(2) 調査時期および方法

2019 年 7 月 11 から 7 月 12 日の 2 日間にかけて、A 社の提供するインターネットリサーチのシステムを活用して質問紙を提供し、調査を実施した。

(3) 倫理的配慮

調査にあたっては、「立教大学個人情報保護規程」に即し、対象者の匿名性に配慮して、名誉やプライバシーを侵害することがないように十分留意して実施した。また、「立教大学コ

コミュニティ福祉学部・研究科倫理指針」に準拠し、質問紙に①調査目的と概要、②回答は任意であること、③プライバシーの保護、④調査結果はすべて統計的に処理され研究目的以外の使用はなされないことを記し、回答をもって同意を得たものとした。調査データは A 社との契約のもと厳格に管理された。

(4) 質問項目および分析方法

分析枠組みに基づき「基本的属性」「野球経験」「メディア行動・態度」「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」などについて、合計 20 の質問項目を設定し調査を実施した。

「野球経験」については、中学期、高校期それぞれについて、「学校の野球部に所属していた（いる）」「野球のクラブ・サークルなどに所属していた（いる）」「所属していない」の 3 件法で回答を得た。「メディア行動・態度」については、放送に関する世論調査（木村ほか、2015）を参照し、高校野球の情報取得に最もよく用いるメディア、および回答者の情報観（「情報を批判的に検討する態度」「情報選択の志向性」など）についての項目を設定した。

「高校野球観」および「高校野球の表象」については、スポーツ観やスポーツの表象に関する先行研究（日下・丸山，1988；松尾，2001）を参照しつつ、高校野球に合わせて項目を修正・追加した。「高校野球の見方」については、高校野球のテレビ中継分析から析出された意味作用（清水，1987）や高校野球視聴者の充足様態に関する調査（川口，1990）を参照し、「物語」、技術、戦術、独自の意味という 4 カテゴリーについて項目を設定した。

調査結果のうち、「高校野球観」については因子分析を用いて回答の傾向性を抽出した。また、「高校野球観」の傾向性、ならびに「高校野球の見方」「高校野球の表象」の各回答結果における「野球経験」や「メディア行動・態度」による傾向の違いを、分散分析、クロス集計およびカイ二乗検定などを用いて分析した。

(5) サンプル特性

回答者のスポーツ実施頻度は、週 1 回以上のスポーツ実施率が 39.3%であった。また、「学校期（中学および高校）」の運動部活動経験は、「経験あり」が 68.7%、「経験なし」が 31.3%であった。野球経験については、「中学期」で 12.9%、「高校期」で 9.0%が、学校野球部あるいはクラブチーム・サークル等への所属経験を有していた。

2) 調査 B：選手や監督による「物語」の解釈・意味づけに関するインタビュー調査

(1) 調査対象

高校野球経験者 5 名、監督経験者 3 名を調査対象とした。高校野球経験者については、高校での野球部所属時の状況を具体的かつ客観的に振り返り回答してもらうことを意図し、高校野球を経験した 20 代の大学野球部員から選定した。また、監督経験者については、現役高校野球監督を競技レベルと年代の多様さを考慮しつつ選定した（表 8-2）。

表 8-2 インタビュー調査対象者の概要

	年代	所属していた野球部のレベル
選手A	20代	都道府県で中位～上位レベル
選手B	20代	都道府県で中位～上位レベル
選手C	20代	全国で上位レベル（甲子園出場経験あり）
選手D	20代	都道府県で下位レベル
選手E	20代	都道府県で上位レベル
監督A	40代	都道府県で下位レベル
監督B	30代	都道府県で上位レベル
監督C	60代	都道府県で中位～上位レベル

(2) 調査時期および方法

2019年3月から6月にかけて、個別に1名につき1、2時間程度、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。

(3) 倫理的配慮

調査にあたっては、「立教大学個人情報保護規程」に即し、対象者の匿名性に配慮して、名誉やプライバシーを侵害することがないように十分留意して実施した。また、「立教大学コミュニティ福祉学部・研究科倫理指針」に準拠し、①調査目的と概要、②協力は任意であり拒否した場合でも不利益を被ることはないこと、③個人情報はデータ化せず個人を特定できる情報が公開される恐れはないこと、④回答したくない質問は拒否できること、⑤結果は研究目的以外では使用されないことを書面および口頭で対象者に説明し、同意書への署名を得た後にインタビューを実施した。インタビュー内容は対象者の了承を得て録音し、逐語化したデータは筆者以外アクセスできない環境で厳重に管理した。

(4) 質問項目および分析方法

インタビューでは、「野球部員あるいは監督であることに対する意識」「学校での野球部の扱い」「メディア対応の経験、所感」「『高校野球らしさ』という目線に対する意識・振る舞い」などを主な質問項目としつつ、対象者に自由な語りを促した。

逐語化した文字データを切片化した後、調査Aを補足し特に選手や監督の「物語」に対する解釈・意味づけから「物語」再生産の循環的な構造を検討するという本調査の目的を勘案し、「物語」に再帰する選手や監督の振る舞い、取り組みに関する意識等が読み取れる内容を抽出し、意味のまとまりごとにカテゴリー化して分析した。

3. 高校野球に対する受け手の解釈

以下ではまず、調査 A の結果について、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」の観点から分析していく。

1) 「高校野球観」

はじめに、「高校野球観」の諸相について検討する。「高校野球観」に関わる 7 項目の質問について、「賛成」「やや賛成」「やや反対」「反対」の 4 件法で回答を得た。回答結果について、主因子法による因子分析を行ったところ、表 8-3 に示した 2 因子が抽出された。それぞれの因子構造について、これまで論じてきた高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争という背景も踏まえて検討すれば、第 1 因子については、「人間修養」「精神力」「努力」など、まさに歴史的に形成されてきた「鍛錬主義」的な価値を重視する項目の因子負荷量が高い。対して、第 2 因子については、「科学的」「合理的」「データ重視」など、いわゆる「科学主義」的な価値を重視する項目の因子負荷量が高いことが分かる。そこで、ここでは第 1 因子を「鍛錬主義」、第 2 因子を「科学主義」と命名することとした。これまで本稿では、甲子園大会の制度改正や選手・野球部の取り組みにおいて、「鍛錬主義」的な価値基準に準拠したものと、「科学主義」的な価値基準に準拠したものととのせめぎ合いがみられることを指摘してきたが、本分析結果をみれば、受け手の「高校野球観」においても、「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎが生じている可能性があるといえる。では、受け手においては、どのような属性と関連して「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎがみられるのであろうか。分析枠組みに基づき、「野球経験」や「メディア行動・態度」という観点から検討してみたい。

表 8-3 「高校野球観」に関する探索的因子分析
(バリマックス回転後の因子負荷構造)

項目	因子負荷量		共通性
	F1 「鍛錬主義」	F2 「科学主義」	
Q8_2 高校野球は「道」（人間修養）を極める手段である	0.846		0.724
Q8_1 高校野球では技術や体力よりもまず精神力を大切にすべきである	0.703		0.513
Q8_3 高校野球は結果よりもそれまでの努力が大切である	0.480		0.236
Q8_5 高校野球では伝統的な考え方よりも科学的な考え方が優先されるべきである		0.866	0.758
Q8_4 高校野球の練習は量をこなすよりも合理的に効率よく質を高めることが大切である		0.591	0.290
Q8_6 高校野球の練習や試合では経験よりもデータを重要視するべきである		0.536	0.136
固有値	2.210	1.773	
寄与率 (%)	31.6	25.3	
累積寄与率 (%)	31.6	56.9	

まず、「高校野球観」に関する 2 因子の因子得点をもとに、野球経験者（中学あるいは高校において、野球部あるいはクラブ・サークル等に所属経験がある者）と未経験者との間で分散分析を行った。結果を表 8-4 に示す。「鍛錬主義」の因子に有意差 ($p<.001$) がみられ、野球経験者のほうが、より「鍛錬主義」的な価値を重視する傾向が認められた。「科学主義」については、有意な差はみられなかった。

表 8-4 「野球経験」と「高校野球観」因子得点の平均点

	野球経験		検定
	あり (n=99)	なし (n=629)	
F1：鍛錬主義	0.32	-0.05	$p<.001$
F2：科学主義	0.13	-0.02	n.s.

平均を 0 とし、数値が高いほど肯定的、低いほど否定的

また、「メディア行動・態度」による「高校野球観」の違いを把握するため、「高校野球の情報取得にもっともよく用いるメディア（テレビ、新聞、インターネット）」ならびに情報観（「情報を批判的に検討する態度」、「情報選択の志向性」）の違いごとに分散分析を行った。その結果、よく用いるメディアの違いによって優位な差はみられなかったものの、表 8-5、表 8-6 に示したように、情報観の違いによって優位な差がみられ、「どんな情報でもまず疑ってかかる」者ならびに「様々なメディアの情報を見比べる」者は、両者とも「高校野球観」において「科学主義」的な価値を重視する傾向が認められた ($p<.001$)。

表 8-5 「情報を批判的に検討する態度」と「高校野球観」因子得点の平均点

	どんな情報でもまず疑ってかかるほうだ		検定
	そう思う群 (n=281)	そう思わない群 (n=153)	
F1：鍛錬主義	-0.07	0.13	$p<.05$
F2：科学主義	0.17	-0.17	$p<.001$

平均を 0 とし、数値が高いほど肯定的、低いほど否定的

表 8-6 「情報選択の志向性」と「高校野球観」
因子得点の平均点

	様々なメディアの情報を見比べるほうだ		
	そう思う群 (n=402)	そう思わない群 (n=94)	検定
F1：鍛錬主義	0.06	-0.10	n.s
F2：科学主義	0.14	-0.20	p<.001

平均を0とし、数値が高いほど肯定的、低いほど否定的

野球経験者が「鍛錬主義」的な価値を重視するという傾向は、高校野球において歴史的に形成されてきた「鍛錬主義」的な価値が、選手や野球部による経験的な観点からの同意も得つつ社会的に共有されていることを示唆していよう。一方で、情報を批判的に検討する、あるいは複数の情報を見比べるという態度を有する者が「科学主義」的な価値を重視するという傾向は、現代のメディア環境という観点から「高校野球観」の揺らぎを読み解くための重要な示唆を与えてくれる。

ソーシャルメディアが普及し個人間での情報流通が加速化した今日においては、受け手の「メディア・リテラシー」、すなわち「メディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創りだす力」（鈴木，1998，p.389）が重要視されている。この点を踏まえて上記の分析結果をみれば、情報のクリティカル（批判的・分析的）な検討や能動的な評価・選択という意味において、比較的「メディア・リテラシー」を有すると思われる受け手に、「科学主義」的な価値を重視する傾向がみられていることが分かる。受け手の高校野球に対する解釈の揺らぎは、メディア環境の変化という社会背景と連動して生じている可能性があるものと推察されよう。

2) 「高校野球の見方」

次に、受け手の「高校野球の見方」について検討する。「物語」に関する見方、技術に関する見方、戦術に関する見方、独自の意味に関する見方それぞれ2項目ずつ、計8項目について、「そう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で回答を得た。各項目について、「高校野球観」における「鍛錬主義」と「科学主義」の傾向に有意差がみられた「野球経験」および「メディア行動・態度」による傾向の違いを、クロス集計およびカイ二乗検定を用いて分析した。

まず、「野球経験」と「高校野球の見方」についての分析結果を表8-7に示す。各項目について、「そう思う」「ややそう思う」の回答を合計した割合を比較している。技術に関する見方のみ、「野球経験」の有無による有意差がみられ、野球経験者の方がより技術的な側面に着目して高校野球を見ている傾向性が認められた。一方で、「野球経験」の有無に関わらず、「物語」や独自の意味に着目した見方が高い割合でみられ、多くの受け手が「仲間」と

「困難」を乗り越える、「プロとは異なる」「教育的な意味」を有するという目線で高校野球を見ている様相が看取された。加えて、「野球経験」の有無に関わらず、戦術として投手の完投よりも継投の方が「高校野球らしい」と捉えられている傾向もみられた（ただし、野球経験者は未経験者よりも完投を「高校野球らしい」とする回答もやや多い）。

表 8-7 「野球経験」と「高校野球の見方」

		野球経験		検定
		経験あり (n=99)	経験なし (n=629)	
「物語」	疲労やケガを乗り越えて プレーする選手の姿に感動する	68.7%	59.0%	n.s.
	仲間同士が助け合う姿に 感動する	85.9%	79.0%	n.s.
技術	投手の配球を予測したり バッターの狙いを評価したり しながら見るのが好きである	49.5%	21.2%	p<.001
	バッティングフォームや ピッチングフォームについて 評価しながら見るのが好きである	49.5%	18.1%	p<.001
戦術	チームのエース投手が一人で投げ 抜くことは高校野球らしくてよい	41.4%	32.8%	n.s.
	複数の投手が協力して投げ抜くこ とは高校野球らしくてよい	55.6%	55.3%	n.s.
独自の 意味	高校野球は高校生の人間教育の 場であると思う	75.8%	63.9%	n.s.
	高校野球はプロ化してしまうと つまらなくなっていくと思う	72.7%	62.8%	n.s.

%は「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合

また、「メディア行動・態度」における「情報を批判的に検討する態度」「情報選択の志向性」に着目し、「高校野球の見方」を分析した結果を表 8-8、表 8-9 に示す。こちらも技術に関する見方のみ有意差がみられ、「どんな情報でもまず疑ってかかる」者および「様々なメディアの情報を見比べる」者は、両者とも技術的な側面に着目して高校野球を見ている傾向性が認められた。加えて、「野球経験」ごとの分析結果と同様に、「メディア行動・態度」の違いに関わらず、「仲間」と「困難」を乗り越える、「プロとは異なる」「教育的な意味」を

有するという目線で高校野球を見ている者が多く、完投よりも継投の方が「高校野球らしい」と捉えられている傾向もみられた（「様々なメディアの情報を見比べる」者は特に完投よりも継投の方が「高校野球らしい」と回答した割合が高い）。

表 8-8 「情報を批判的に検討する態度」と「高校野球の見方」

		どんな情報でもまず疑ってかかるほうだ		検定
		そう思う群 (n=281)	そう思わない群 (n=153)	
「物語」	疲労やケガを乗り越えて プレーする選手の姿に感動する	58.7%	68.0%	n.s.
	仲間同士が助け合う姿に 感動する	77.9%	85.0%	n.s.
技術	投手の配球を予測したり バッターの狙いを評価したり しながら見るのが好きである	30.2%	23.5%	n.s.
	バッティングフォームや ピッチングフォームについて 評価しながら見るのが好きである	27.0%	18.3%	p<.05
戦術	チームのエース投手が一人で投げ 抜くことは高校野球らしくてよい	38.4%	32.0%	n.s.
	複数の投手が協力して投げ抜くこ とは高校野球らしくてよい	59.8%	58.8%	n.s.
独自の 意味	高校野球は高校生の人間教育の 場であると思う	65.5%	73.9%	n.s.
	高校野球はプロ化してしまうと つまらなくなっていくと思う	66.2%	71.9%	n.s.

%は「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合

表 8-9 「情報選択の志向性」と「高校野球の見方」

		様々なメディアの情報を見比べるほうだ		検定
		そう思う群 (n=402)	そう思わない群 (n=94)	
「物語」	疲労やケガを乗り越えて プレーする選手の姿に感動する	63.7%	57.4%	n.s.
	仲間同士が助け合う姿に 感動する	83.6%	77.7%	n.s.
技術	投手の配球を予測したり バッターの狙いを評価したり しながら見るのが好きである	33.6%	11.7%	p<.001
	バッティングフォームや ピッチングフォームについて 評価しながら見るのが好きである	27.4%	14.9%	p<.01
戦術	チームのエース投手が一人で投げ 抜くことは高校野球らしくてよい	37.6%	29.8%	n.s.
	複数の投手が協力して投げ抜くこ とは高校野球らしくてよい	62.4%	55.3%	n.s.
独自の 意味	高校野球は高校生の人間教育の 場であると思う	71.1%	62.8%	n.s.
	高校野球はプロ化してしまうと つまらなくなっていくと思う	67.9%	62.8%	n.s.

%は「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合

これまでも論じてきたように、投手の完投は「一人で投げ抜く」という意味において「鍛錬主義」的な価値基準に準拠した戦術であるといえる。一方、継投は「医科学的に投手の負担を考慮し、複数の投手で分業する」という意味において「科学主義」的な価値基準に準拠した戦術であると捉えうる。そこで、回答者から「完投派」（完投について「そう思う」「ややそう思う」かつ継投について「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した者）と「継投派」（完投について「あまりそう思わない」「そう思わない」かつ継投について「そう思う」「ややそう思う」と回答した者）を抽出し、それぞれの「高校野球観」に関する分散分析を行ったところ、表 8-10 に示したように、「完投派」は「鍛錬主義」を重視し、「継投派」は「科学主義」を重視する傾向が認められた ($p<.05$)。

表 8-10 「完投派」と「継投派」の「高校野球観」因子得点の平均点

	投手戦術の好み		検定
	完投派 (n=25)	継投派 (n=137)	
F1：鍛錬主義	0.20	-0.28	p<.05
F2：科学主義	-0.18	0.26	p<.05

平均を0とし、数値が高いほど肯定的、低いほど否定的

この結果を踏まえ、「完投派」と「継投派」の「物語」および独自の意味に関する見方について、クロス集計およびカイ二乗検定を用いて分析したところ、表 8-11 に示したように、「完投派」の方が「継投派」より、「疲労やケガを乗り越えてプレーする選手の姿に感動する」と捉えている割合が有意に高いという結果となった。対して「継投派」は、「仲間同士が助け合う姿に感動する」という回答が 83.2%と、特に高い割合を示していた。すなわち、「継投派」はメディアを通じて伝統的に生成されてきた「鍛錬主義」的な価値とは異なる「科学主義」的な価値を重視し、「疲労やケガの乗り越え」という「物語」に対しての感動は相対的に低いものの、例えば継投を「仲間の『物語』」として読み解くなどの捉え方によって、結果的に「鍛錬主義」的な価値を重視する「完投派」と同様、「プロとは異なる」「教育的な意味を持つ」ものとして高校野球を見ている可能性があるといえる。このことから、「高校野球観」における「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎは、「高校野球の見方」においては「何が『高校野球らしい』のか」における揺らぎとして表れており、大枠としての「高校野球らしさ」という目線は、「高校野球観」の違いに関わらず共通しているものと推察される。

表 8-11 「完投派」と「継投派」の「高校野球の見方」

		投手戦術の好み		
		完投派 (n=25)	継投派 (n=137)	検定
「物語」	疲労やケガを乗り越えて プレーする選手の姿に感動する	84.0%	46.7%	p<.01
	仲間同士が助け合う姿に 感動する	80.0%	83.2%	n.s.
独自の 意味	高校野球は高校生の人間教育の 場であると思う	72.0%	65.0%	n.s.
	高校野球はプロ化してしまうと つまらなくなっていくと思う	60.0%	72.3%	n.s.

%は「そう思う」「ややそう思う」を合計した割合

3) 「高校野球の表象」

次に、受け手の有する「高校野球の表象」について検討する。「A 若者らしい—B 熟練した」「A 伝統的—B 現代的」など、計 13 項目の相対する表象について、「A に近い」「やや A に近い」「どちらともいえない」「やや B に近い」「B に近い」の 5 件法で回答を得た。回答結果について、「野球経験」、および「メディア行動・態度」による傾向の違いを、分散分析を用いて分析していく。

まず、「野球経験」と「高校野球の表象」についての分析結果を図 8-2 に示す。0 を中央とし、数値が小さいほど A に近く、大きいほど B に近いことを表している。

「若者らしい」「仲間意識強」「集団的」「上下関係強」「伝統的」などの表象が強くみられ、これらの項目は野球経験の有無に関わらず高い数値を示していることが分かる。「神聖な」という表象のみ、「野球経験」の有無による有意差 ($p<.05$) がみられ、野球経験者の方が、高校野球に対してより「神聖な」という表象を有している傾向性が認められた。

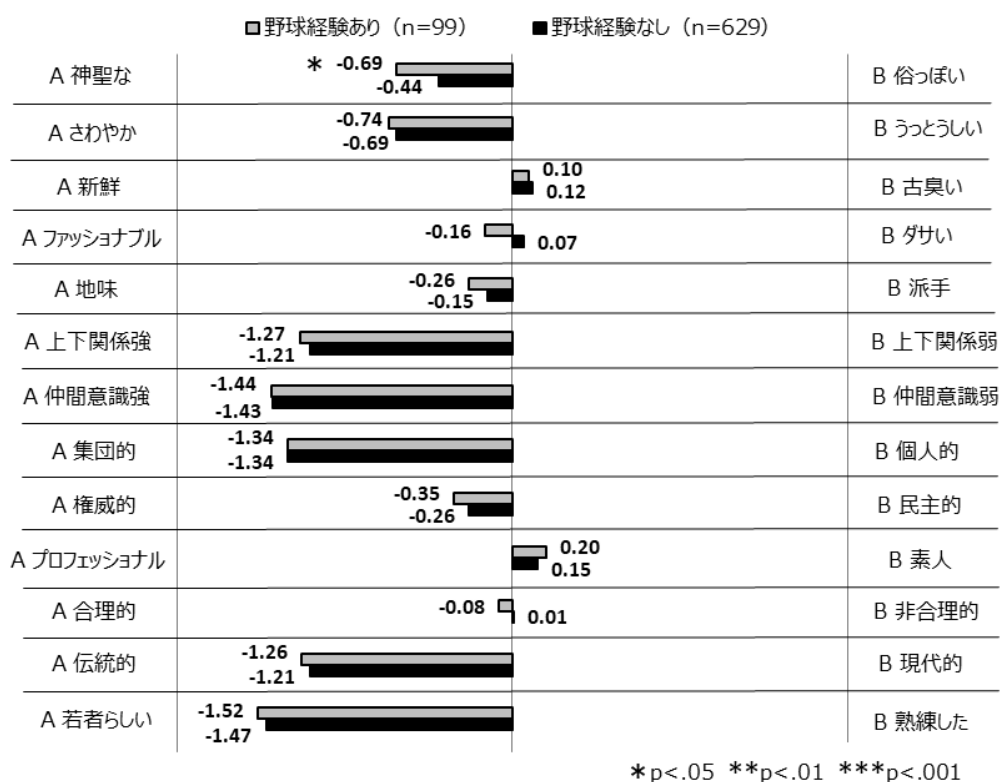


図 8-2 「野球経験」と「高校野球の表象」

また、「メディア行動・態度」と「高校野球の表象」についての分析結果を示したものが図 8-3、図 8-4 である。

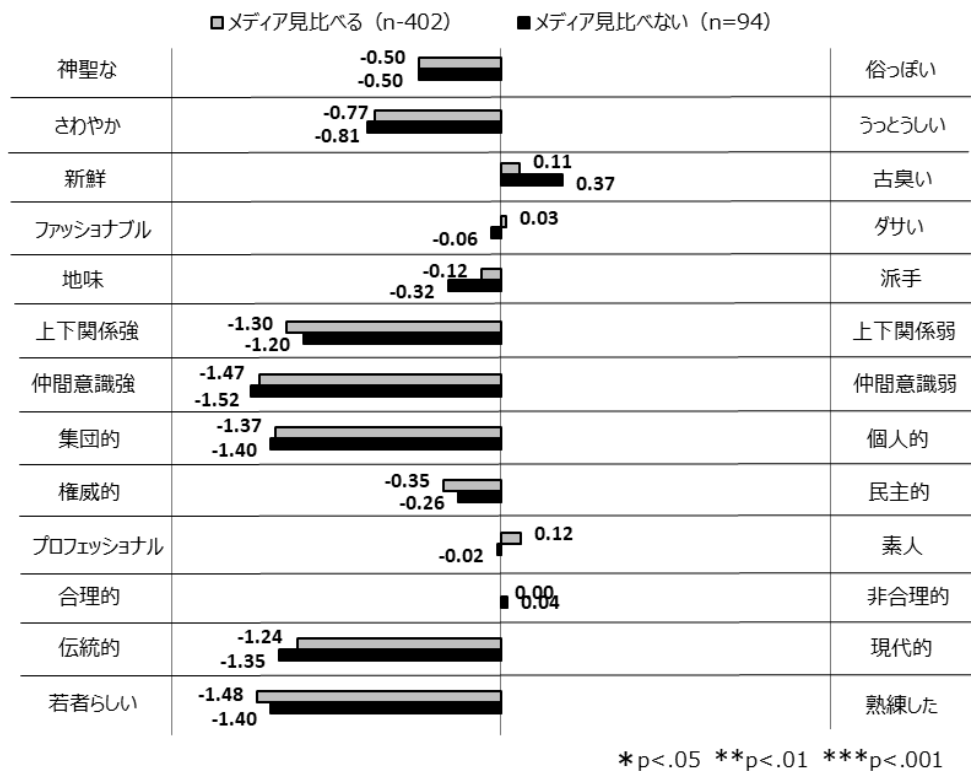


図 8-3 「情報を批判的に検討する態度」と「高校野球の表象」

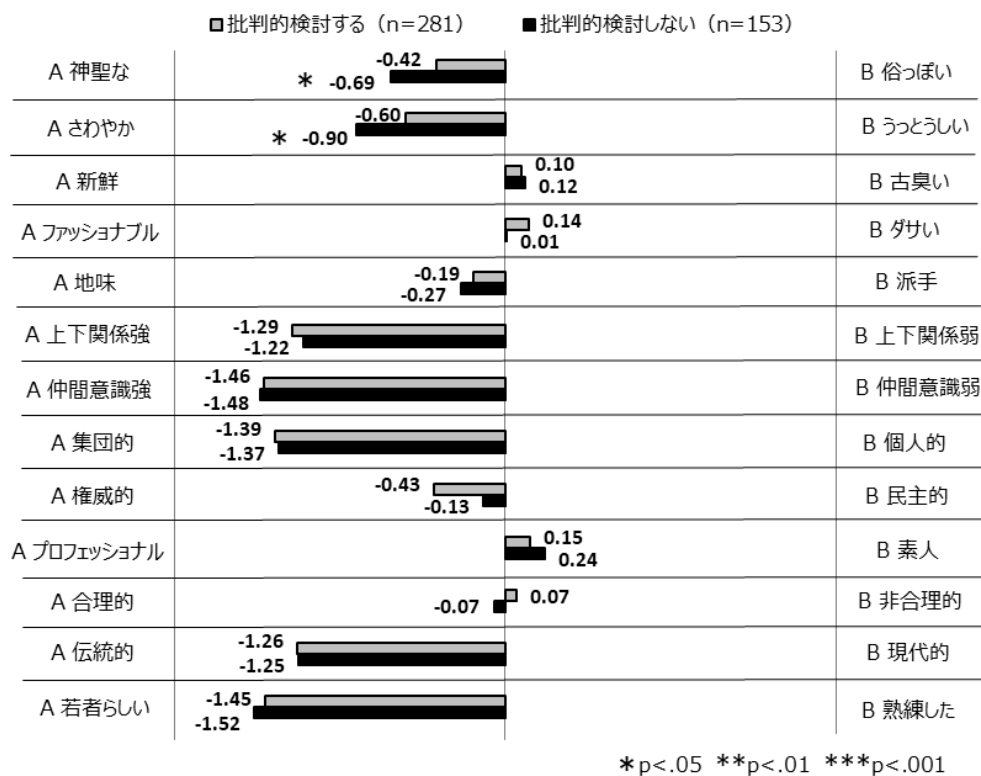


図 8-4 「情報選択の志向性」と「高校野球の表象」

「野球経験」の分析結果と同様、「メディア行動・態度」の違いに関わらず、「若者らしい」「仲間意識強」「集団的」「上下関係強」「伝統的」などの表象が強く見られた。「どんな情報でもまず疑ってかかる」者とそうでない者（図 8-4）に関しては、「神聖な」「さわやか」という表象で有意差（ $p<.05$ ）がみられ、情報の批判的検討をしない者のほうが、高校野球に対してより「神聖な」「さわやか」という表象を有している傾向性が認められた。「様々なメディアの情報を見比べる」者とそうでない者（図 8-3）に関しては、すべての表象において有意差はみられなかった。

野球経験者が高校野球を神聖なものとして自明視しているという傾向は、野球界における高校野球の象徴戦略に関わる示唆的な結果であろう。また、メディア言説をあまり批判的に捉えず、いわば「従順な解釈」をする受け手が、高校野球を神聖でさわやかなものとして自明視しているという傾向は、メディアによる意味作用とメッセージ生成の観点から「物語」の様相を検討するうえで有用な示唆を与えてくれる。しかしながら、受け手における解釈の揺らぎという観点からみれば、むしろ大半の表象、とりわけ強くみられた表象が、「野球経験」や「メディア行動・態度」の違いに関わらず共通していた点に着目する必要がある。

共通して強くみられた「若者らしい」「仲間意識強」「集団的」「上下関係強」「伝統的」という表象は、文字通りの若者らしさや伝統性に加え、仲間や先輩後輩といった集団の人間関係に関する側面など、まさにこれまで検討してきた高校野球の「若者らしさ」「青春」に関連する付加的なイメージである。こうしたイメージを、「鍛錬主義」的な価値を重視する傾向にある野球経験者も、また「科学主義」的な価値を重視する傾向にある批判的・相対的情報観を有する者も、どちらも共通して強く自明視していた。つまり、「若者らしさ」「青春」に適合的な高校野球のイメージは、「高校野球の見方」における「物語」や独自の意味と同様に、「鍛錬主義」と「科学主義」という価値観の揺らぎに関わらず、自明的に受け手に共有されているものと推察される。

以上、受け手の高校野球に対する解釈について、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」という視点から検討してきた。「高校野球観」において「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎがみられ、野球経験の有無や情報観の違いによって価値観の違いがみられた。しかしながら、「高校野球の見方」「高校野球の表象」については、「鍛錬主義」的な価値を重視する者も「科学主義」的な価値を重視するものも共通して、プロとは異なる教育的なものとして高校野球を見ており、「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みに適合的なイメージを有している様相が看取された。

4. 選手や監督による「物語」の解釈・意味づけ

次に、調査 B として、選手や監督に対するインタビュー調査から、「物語」に対する解釈・意味づけや、それを踏まえた振る舞い、取り組みのあり方を分析し、メディアを介して生成され受け手に解釈された「物語」が再帰的に構造化されていく側面について、補足的に検討してみたい。

1) 特別な扱いの自覚、「誇り」と「違和感」の同居

第一章で論じたように、高校野球は、メディア・スポーツとして他の学生スポーツはおろ

かプロスポーツを凌ぐほどの注目を集め、夏の甲子園が「国民的行事」と称されるなど、特異的な熱狂に包まれているといえる。こうした状況のなかで、選手や監督には、自身が打ち込んできた高校野球について、いわば【特別な扱いや応援に対する自覚】という意識がみられた（表 8-12）。野球部の大会に他の部活などと比べ多くの応援が集まることを認識し「嬉しく」感じつつも、その状況にどこか「野球部だけ盛り上げられている感覚」もあり、野球部でない「普通の高校生」との「境界線」を感じているなどの語りがみられている。このように、選手や監督は、高校野球の特別な扱いや応援を歓迎している傾向にある一方で、自分が置かれた状況を冷静に客観視する一面も併せ持つという様相が示唆されている。

表 8-12 【特別な扱いや応援に対する自覚】に関する語り

今から思うとやっぱ、他の高校、野球部所属の高校生と普通の高校生っていうのは少し、なんか、境界線というか、あるような感じがしたんで。（選手B）
特別扱いっていうわけじゃないですけど、ああ、まあでもちょっと特別扱いか。まあでもそんなまあ他に比べたら、そんなないと思うんですけど。なんか壮行会とかがあるんですけど、その、夏の大会の。で、まあ野球部以外のスポーツは、全部一斉にやって、野球部だけ特別っていうか、別にやるみたいな感じで、なんか凄い野球部だけ盛り上げられてる感覚はありました。（選手D）
他の部も結構応援くるじゃないですか。野球の大会は結構みんな来てくれるじゃないですか。他の部活がいつ試合してるとかも全く知らないんですけど、野球の試合は来てくれるんですよ。（選手D）
男子校でも、吹奏楽とかも、みないでも、応援に来てくれるんですよ。仲いい子たちとか、普通に、あんま喋らないのに、みに来てくれるんで、めちゃめちゃ嬉しくて。（選手A）
他の人から見る目が全然違いますよね、高校球児っていうと、礼儀正しいとか。ほんとに自分らも、まあ高校球児ですけど、同じ年代の高校生と一緒になんだぞっていうのは、ちょっと思っていましたね。少し、あれだったんですけど、はい。（選手A）
あの野球部と、チアと、吹奏楽部と一緒に、応援の練習はしましたね。でもサッカーはやりませんよね。野球部だけだと思います、それは。野球って応援しやすいからじゃないですか、なんか。（選手E）
まあ高校野球が、全体が注目されるっていうのは、もう100回大会っていう中でのその、歴代の方々の繋がりの中でそういう風になっているものだと思うので、まあそれは非常にいいことかな。（指導者B）

高校野球という自身が置かれた状況に対するある種の二面的な態度は、メディアに注目されることに対する意識において、より鮮明に現れている。メディアの取材に対する選手の語りからは、いわば【注目されることへの「誇り」と「違和感」の同居】ともいうべき様相が看取された（表 8-13）。メディアが高校野球に注目することや、自身が取材を受けたりすることに対して、多くの選手が「嬉しい」「誇り」「野球やってて良かった」という肯定的な意識を有しており、それが「優越感」「ステータス」として自己を支えていることを示唆す

る語りもみられている。しかしながら、「良いことも悪いことも大きく取り上げる」「言ったことと違うことを書かれる」などのメディアのあり方や、メディア取材によって注目度が高まることで「目立つ」ことなどに対して、「複雑な気持ち」を感じている様子も読み取ることができる。このように、メディアからの注目に対して、選手たちはそれを歓迎し自己構築に活用している側面がある一方で、その状況とメディアで「作り上げられてる」ものを冷静に客観視する、両義的な態度を有している様相が示唆されている。

表 8-13 【注目されることへの「誇り」と「違和感」の同居】に関する語り

〇〇新聞（地方紙）のど真ん中にこんくらいの写真載ったんですよ。もう、永久保存です。（選手A）
メディアは、大きく、なんか悪いことも良いことも大きく取り上げるんで、結構。あと、なんかやっぱメディアって、なんか極端に他の人と違う人って好きじゃないですか。例えば女の子のノッカーがいる高校だったり、めっちゃめちゃでかい、巨漢な人がいたり、色々なんか、あるんですけど。そういうのをみると、結構面白いですね。（選手A）
報道陣の数が、なんか、なんで敢えてあそこにスポットを当ててるのか。だって大学レベルのほうが絶対、まあレベル高くて、もっとまあ、面白いじゃないですけど、と思うのにやっぱ高校のほうが取り上げられてるから。凄いですよね。初戦でも全然放送してくれる。嬉しいっちゃ嬉しいですけどね。（選手D）
でも、なんかたまにこう、言ったことと全く違うことが書かれてる、そういうことはありましたね。それは多分、2年の夏に、こう、タイムリーを打ったときに、なんか、普通に自分は、普通に思ったことを言ったんですけど、ちょっと書き換えられてました。あれ、こんなこと言ってないのになって。それはなんか、作り上げられてるのかなーと思って。そういうのはありました。（選手D）
いい面としてはやっぱり自分は、他の人から少し、特別扱いされてる優越感というか、自分の一つのステータスじゃないですけど。普通だと、まあ〇〇高校の生徒っていうんですけど、自分の中だと〇〇高校野球部の生徒っていう、この野球部が少しステータスに感じて、強い弱いは別として、ステータスに感じた部分はありますけど。やっぱさっき言ったように、その、結構野球部だろうっていう、その、違う人からの見方は少し、いやだっていうときも、やっぱりありますね。多分他の生徒がやったら問題にならないけど、野球部がやると問題になっちゃうとか。あと、坊主だと目立つんで、そういうのがありましたね。でも、そうですね、ステータスとかそういうのにはちょっと、思っていましたね、確かに。（選手B）
一番それ（メディア対応）がめんどくさいですかね。いやでもそれが記事になったり、やっぱり抑えたときの、バンって出たりするのは、嬉しいですよ、やっぱ。野球やってて良かったなって思う一つの部分ではありますけど。その取り上げ方がね、ちょっと違う方向にいったりしたら、なんかこう、複雑な気持ちにはなるっすね。（選手C）
単純に、単純に言えば、だからそこで活躍できて、人気者というか、世間に知ってもらえるっていうのはでもやっぱり、野球人として誇り、嬉しい部分ではあったんですけど。まあその分、めんどくさかったというか、まあ、仕方ないことかもしれないですけど、だから、引退して、じゃあ〇〇のどっか遊びに行きます、じゃあ、こう同世代の、もうあからさまに野球の同級で引退したんやろうなとかいうやつに、見られたりとか。こう、せっかく、女の子と遊んで、二人で遊んでるとするじゃないですか。そしたらわざわざ声かけて来たりしたら、なんか別に、たかが高校生で、何も別に、プロ野球でもないのに、普通に遊んでるとき邪魔して欲しくないなとか思ったりとか。（選手C）

2)「物語」の客観視、「高校野球らしい」振る舞い

では、メディアを介して生成・再生産される「物語」について、選手や監督はどのように認識しているのだろうか。「物語」に関する語りからは、高校野球が「若者らしさ」「青春」という枠組みで解釈されることを分析的に客観視する、【「物語」の枠組みに対する客観視】という様相が看取される(表 8-14)。語りの内容をみると、「昔ながらの泥臭さ」「全力プレー」「人間味」「壊れるくらい一生懸命」など、どのような点が「高校野球らしさ」として語られているのかを分析的に読み取り理解している様子が見て取れる。また、「なんかもう、あたかも、こう、青春を作り上げてるじゃないですか」「なんか、若者が泥臭くやってるのが好きなんじゃないですか」「もうなんか、やってる側からしたら、それが仕事なんかになって思います」などの語りにみられるように、分析的に挙げられる「物語」は極めて客観的に捉えられており、「物語」を理解しつつ、その構造から距離化をはかるような態度も看取される。

表 8-14 【「物語」の枠組みに対する客観視】に関する語り

特集の仕方じゃないですけど、なんかもう、あたかも、こう、青春を作り上げてるじゃないですか。いや、そんなはずないだろうな、とか思いながら。きっこう、めちゃめちゃ怒られてるんだろうな、監督凄いいいやつぶるし、みたいな。自分はもうこう、ああ凄くなって見てるだけなんで。(選手D)
なんか、若者が泥臭くやってるのが好きなんじゃないですか。はい。サッカーとかも、あれ、土でやったらもうちょっとあれじゃないですか。サッカーはでも、あれか、ちょっと綺麗にやってるのがいいんですかね。泥があるんじゃないですか。甲子園が、多分人工芝だったら、多分そんなにじゃないですか。昔ながらの泥臭さとかあるんじゃないですか。多分、そう思います、自分は。(選手E)
全力プレーと言うかあの、抜くなって、走塁とか最後まで全力疾走とか、絶対そういうところで結局、なんていうんですかね、まあ周りがみてるじゃないですか。で、そういうところで、やっぱり人が頑張っている姿を見るっていうところに多分、周りの人は、心をうたれるのかなーと思って。やっぱり上手い下手じゃなくて、やっぱりそういうところを応援したくなる、みたいな。(選手A)
まあ人間味があるじゃないですけど、そういう、頑張ってるっていうのを、やっぱ、人が頑張ってるのみることで、自分も頑張ろうみたいな力にはなるから、やっぱ人気とかっていうのもあったりするんじゃないですかね。(選手B)
なんかこう親に、親とこうなんか話してる、泣いて話してる部分を撮られたっすけど、気づいたら、やっぱおった、カメラマン。まあ、いい、全然あれはよかったすけど、もうなんか、やってる側からしたらもう、それが仕事なんかだと思います。なんか、やっぱりそういう部分を伝えて、やっぱり高校野球っていいなーって思わせるのは、まあ大事やとは思っし、そういうメディアがおってもまあ別に、いいかなと思うんですけど。(選手C)
本当のことというか。〇〇の放送みたことある？あれは聞いていて面白いよ。ていうか、自分がそんなことやった記憶とか、そういうの無いわけ。ところがそいつが、こんな扱いを受けたというか、ああそういうのあったんだって。(指導者C)
壊れるくらい一生懸命やって、いい思い出で社会に行ったほうが、プロに行くわけじゃないから、って思うんだけど。なんかね、あれもね、ああいうので、メディアが美談にするから駄目だなんていう報道もあったでしょ。でも、美談だよね。(指導者A)

こうした「物語」に対する認識は、選手や監督による日々の取り組みや振る舞いにどのように落とし込まれているのだろうか。この点の語りに着目すると、【見られ方を意識した「高校野球らしい」振る舞い】ともいうべき様相を読み取ることができる（表 8-15）。メディアの取材や公の場、学校名の入ったバッグを持ち歩く際など、いわゆる「看板しょってるとき」には、自ら「高校野球らしい」振る舞いをみせているなど、「物語」に対する両義的な態度を有しつつも、その「物語」の枠組みに自ら準じて振る舞いう一側面が示唆されている。

表 8-15 【見られ方を意識した「高校野球らしい」振る舞い】に関する語り

自分らが取り上げられるってなったら何があるんだろう、もし勝ったら、そしたら多分、勉強してる風景しかないんだと。勉強と野球両方やってますよっていう。そういう青春の作り方だになって。まあでもその、向こうの強豪校とかはその、ひたすら汗流してこう、飛び込んだりするシーンとか出して、青春をアピールしてるじゃないですか。（選手D）

なんか壮行会とかでも、甲子園目指してがんばりますとか、よく言うじゃないですか。だって無理ですもん、あんな頑張ってるチームに勝つなんて。（選手D）

自分は野球やることだけなんで、次の試合もしっかり頑張りたいと思いますって言ったら、周りのスポーツ新聞のおっちゃんが、それでいいよ、みたいな、その返していいねんで、みたいなのを、こう、顔で頷いてくれたりしたんは、ほっとした部分もあったり。（選手C）

SNSに限らず、ここの〇〇通りっていう〇〇周辺でも、その、やっぱりエナメルバッグとか、〇〇（高校名）って入ってるんで、そういうのは、行動はしっかり、なんていうんですか、意識、えーっと、当事者意識もってしっかりいけよみたいなことは言われてました。まあ自分らも普通の高校生みたいにちょっと騒ぎたいなっていうのもあったんですけど。そういうのがあったんで、少し自粛というか、まああんま、度が過ぎないようにっていうのは意識してやりました。（選手A）

なんか自分が勝手に、バッグとかしょってるときは、電車とかも、態度とか気をつけてました。さすがに、なんかそういう看板しょってるときは気をつけてました。名前あるときは気をつけようっていう風なのが、もう勝手に身についていたじゃないですけど、考える前に行動してたんで。（選手B）

努力と涙と根性とみたいなのを、やっぱり欲しがるので、はい。まあべつにそういうわけじゃないんですけどーとか言いながら、じゃあこういう風に書いてくださいって言ったりとか。（指導者B）

強いところはメディアを上手く使ってますよね。ほんとのところは話さないですね。（指導者B）

以上、調査 B として、選手や監督に対するインタビュー調査を分析した結果、高校野球とメディアを介した「物語」生成の様相に対する意識・意味づけとして、【特別な扱いや応援に対する自覚】【注目されることへの「誇り」と「違和感」の同居】【「物語」の枠組みに対する客観視】【見られ方を意識した「高校野球らしい」振る舞い】といったカテゴリーが抽出された。

5. 受け手の解釈のゆらぎと「物語」の再生産

さて、これまでの分析を踏まえ、受け手の高校野球に対する解釈の揺らぎという観点から、「物語」再生産の様相について考察していきたい。

調査 A の結果をみると、野球経験者においては、「鍛錬主義」的な価値を重視し、「仲間」と「困難」を乗り越える、「プロとは異なる」「教育的な意味を持つ」ものとして高校野球をみており、「青春」「若者らしさ」に適合する自明的なイメージを有していた。すなわち、野球経験者には、まさに伝統的に形成されてきた「青春」「若者らしさ」という解釈枠組に準拠した受け手としての態度形成が象徴的に現れているといえる。

一方で、情報を批判的に検討する態度を有する者や、複数の情報を見比べる傾向にある者など、比較的「メディア・リテラシー」を有すると思われる者には、「科学主義」的な価値を重視する傾向がみられた。高校野球において伝統的に形成されてきた「鍛錬主義」的な価値に対し、現代のメディア環境に要請された情報の相対化という受け手の態度形成が従来の価値の相対化を生じさせ、新しい「科学主義」的な価値づけを表出させる力学となり得ている可能性がある。しかしながら、批判的・相対的情報観を有する者の「高校野球の見方」や「高校野球の表象」についての結果をみると、野球経験者と同様に、「プロとは異なる」「教育的な意味を持つ」ものとして高校野球を見ており、「青春」「若者らしさ」に適合する高校野球の自明的なイメージを有していた。この結果は、「科学主義」的な価値を重視する傾向にある受け手にも、やはり「青春」「若者らしさ」という高校野球の解釈枠組に準拠した見方とイメージが共有されていることを示唆していよう。

こうした「高校野球観」における揺らぎと、「高校野球の見方」「高校野球の表象」における共通性という諸相がいかにして成立しているのかについては、戦術の見方に関する分析結果が重要な示唆を与えてくれる。投手の完投と継投に対する見方では、「完投派」が「鍛錬主義」的な価値を重視することに対して、「継投派」は「科学主義」的な価値を重視していた。しかし、「継投派」は、機能的には医科学的知見に基づく分業である継投という戦術を、「仲間同士が助け合う」という意味において「高校野球らしい」ものとして解釈している傾向にあるものとみられ、結果として高校野球に対して「プロとは異なる」「教育的な意味を持つ」などの独自の意味付与がみられた。つまり、「鍛錬主義」と「科学主義」という「高校野球観」の揺らぎは、受け手の解釈においては、いわば「どちらが『高校野球らしい』のか」に関する揺らぎとして位置づいているものと捉えうる。

以上の議論を踏まえ、本章で示唆された受け手における価値観の揺らぎと「物語」の再生産に関する様相を図 8-5 に示す。「高校野球観」については、「鍛錬主義」と「科学主義」という価値づけをめぐる揺らぎが生じているものと推察される。しかしながら、この価値観の揺らぎは「青春」「若者らしさ」という「物語」の枠組みにおいて、どのようなあり方が「青春」であり「若者らしさ」であるのかという内的な揺らぎとして定位しているものと思われる。その結果、高校野球にプロにはない独自の「高校野球らしさ」を読み解く目線や自明的イメージの形成、すなわち「青春」「若者らしさ」という解釈枠組自体は、内的な揺らぎを含みこみながら再生産されていると考えることができる。

また、特に選手や監督が「物語」をどう解釈・意味づけし、日々の取り組みや振る舞いにつなげているのかを検討した調査 B の結果は、メディアを介して「物語」が再生産される循環的な構造を読み解くうえで重要であろう。選手や監督は、高校野球が社会からある種の

特別な扱いを受けていることを自覚しており、メディアや周囲の注目を誇りとし、そのことが自己構築を支えている様相も看取された。ただし、メディアの描き方、すなわち自らの取り組みという資源を選択・再構成するあり方には違和を感じている側面もあり、「物語」の枠組みを極めて分析的に客観視し距離化をはかっている様子もみられた。こうした両義的な態度が同居するなかで、注目される舞台やメディアの前では、ある意味戦略的に「高校野球らしさ」を演じる様相もみられている。こうした選手や野球部の振る舞いはメディア資源として、メディアを介して「物語」の構造化に再帰し、結果として「物語」の再生産に加担していくこととなろう。

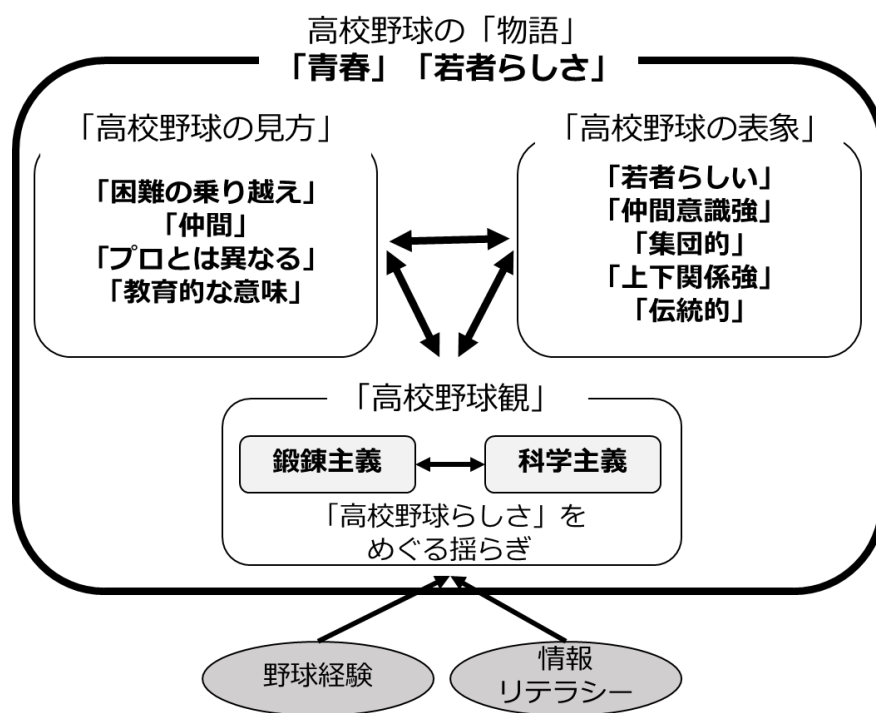


図 8-5 受け手の価値観の揺らぎと「物語」の再生産

本章で示唆された「物語」の揺らぎと再生産の様相は、これまで検討してきた選手や野球部による取り組みの変化と、その変化と連動したマスメディアにおけるメッセージ生成の揺らぎ、ソーシャルメディア言説による象徴闘争の可視化などと相互に連動しながら、動的に構造化されているといえる。次章では本稿のまとめとして、改めてメディア分析の結果と受け手の解釈に関する分析結果を突き合わせ、メディアを介して「物語」が再生産されるダイナミズムについて考察していきたい。

第九章 結論：メディアを介した「物語」の再生産

本章では、【研究 1】から【研究 5】までの結果を整理し、高校野球の「物語」再生産のダイナミズムについて、メディア横断的な観点から考察していく。

1. 研究結果のまとめ

【研究 1】では、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を背景とした、選手やチームによる練習・試合における取り組みの揺らぎについて、投手のあり方に着目して検討した。

夏の甲子園における投手戦術の変遷を分析した結果、歴史的に投手の完投が減少し、継投が増加している様相が看取された。この傾向は、特に 1990 年代以降において顕著にみられていた。こうした戦術の変遷は、高校野球に関する科学的知見の蓄積と、その知見を踏まえた大会の制度改正を背景として生じてきた可能性があるものとみられた。

また、「投手の障害予防に関する有識者会議」における議論では、投手による取り組みのあり方に影響を与えうる「正しい投手指導のあり方」に関する規範や価値観について、「鍛錬主義」的観点と「科学主義」的観点のせめぎ合いが、「科学主義」的観点を前提とした指導における「制度の論理」と「指導現場の論理」のせめぎ合いへと移行する様相が看取された。

【研究 2】では、高校野球の新聞報道について、【研究 1】で示された投手に関する取り組みの変化を踏まえ、朝日新聞における高校野球の投球数制限に関する記事、および夏の甲子園で完投・連投した投手に関する記事についてテキスト分析を行った。

投球数制限に関する記事は、その賛否どちらかの立場について記したもののより、特定の立場を明示しないものや、どちらの立場も併記したものが中心であった。記事内容は、朝日新聞の主張や調査よりも有識者や選手・監督等の関係者による意見として報じられたものが中心であり、投球数制限に対する視点として、主に「負担軽減、障害予防」、「投げすぎによる疲労・健康問題」という選手の健康管理に重点をおいたものと、「勝利主義・公平性」「選手の思い、チームの主体性」という指導現場の論理を踏まえたものなどがみられた。

また、投手の完投・連投に関する記事は、夏の甲子園における試合結果や展開について選手等のコメント付きで報じたものが中心であり、完投や連投それ自体の是非を具体的に記述したものはほとんどみられなかった。投手の完投や連投を報じる文脈においては、「技術・能力の卓越性」、「成長・困難の乗り越え」、「野手・仲間の支え」などの意味が付与されたものが特に多くみられた。「疲労・怪我・休養」という意味付与もみられたが、その文脈は完投・連投の影響による疲労や怪我というのではなく、むしろ疲労や怪我を乗り越えた先に達成した完投・連投という文脈で報じられる傾向にあった。

これらの結果から、「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎを象徴する制度改正の議論に関しては、自社の主張より多様な立場の人々の意見として多角的な視点を客観的に報じつつ、投手の完投・連投という、これまで「鍛錬主義」的な価値基準において評価されてきた取り組みに、成長や仲間などの意味を付与し、「若者らしさ」「青春」に準拠したテキストとして配列するという、新聞による「書き分け」の様相が看取された。また、投手の完投・連投に関する記事にみられた「視点・意味付与」に着目すると、「精神力」などの直接的な「鍛錬主義」的意味よりも、「成長」や「仲間」という別の意味から、「若者らしさ」「青春」の枠

組みに準拠させる文脈が多くみられた。こうした新聞報道の諸相は、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を社会的に可視化しつつ、一方で「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みを、意味変容を含みつつ再生産させることに寄与していると考えられる。

【研究 3】では、高校野球のテレビ放送について、【研究 1】で示された投手に関する取り組みの変化を踏まえ、完投する投手、および継投する投手たちを題材としたドキュメンタリー放送が生成する意味作用とメッセージを析出するテキスト分析を行った。

完投する投手を題材とした放送では、序盤および終盤の取材シーンや選手に対するインタビュー内容の構成から、「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という主題が提示されていた。また、主題に沿って展開される中盤の試合ハイライトでは、困難を乗り越える投手の雄叫びやヘッドスライディングの様子が強調して描かれており、「チームの勝利のために困難を乗り越える投手」という主題に基づく、困難な状況に立ち向かう投手の人間ドラマが、「選手の気迫」を伝えるような描き方によって展開されていた。

一方、継投する投手たちを題材とした放送では、序盤および終盤の取材シーンや選手に対するインタビュー内容の構成から、「対照的な 2 人の投手による協働」という主題が提示されていた。また、主題に沿って展開される中盤の試合ハイライトでは、継投時に 2 人の投手が交代するシーンで抒情的な表現や選手たちの信頼関係、仲の良さを想起させる描き方がみられ、2 人の投手の関係性に関するドラマが、「選手たちの友情」を伝える形で展開されているものとみられた。

完投の放送で生成された「困難を乗り越える投手の姿から伝えられる『気迫』」というメッセージと、継投の放送で生成された「2 人の協働する姿から伝えられる『友情』」というメッセージは、異なる取り組みから異なる意味作用およびメッセージが生成されたものであるものの、どちらも「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みに還元可能なものであると捉えることができる。完投が減少する今日、「鍛錬主義」的営みに象徴化された「若者らしさ」「青春」の「物語」という図式は減退せざるを得ないが、替わって増加した継投を、象徴的な意味や価値の伝達によって人々の認識枠組みの形成に関与するテレビ放送が、「若者らしさ」「青春」の枠組みに準拠してメッセージ化しているものとみられた。結果として、「仲間」という意味が前面化されるなど、「物語」の内的な意味変容を含みつつ「物語」の枠組みが再生産されている可能性が示唆された。

【研究 4】では、高校野球に関するソーシャルメディアの「炎上」について、その現象を把握する理論的な枠組みを検討し、投手の連投に関する Twitter 言説の「炎上」事例を分析した。また、「炎上」の内実を検討する補足的な知見を得るため、インターネット・ユーザーの高校野球やソーシャルメディアへの投稿に対する意識・態度について、アンケート調査を用いて検討した。ここでは、「炎上」を捉える理論的視座について、鈴木（2015）が示した再帰的近代型「カーニヴァル」の概念を参照し、「解放性・逸脱性」「一時性・瞬発性」「自己目的性」「秩序の相対化」という要素に着目して分析枠組みを設定した。

投手の連投に関する Twitter 言説を分析した結果、Tweet の形式については、その半数近くが自らの意見を直接表明したものではなく、他者の記事やコメントが様々な人に繰り返してシェアされたものによって構成されていたものとみられた。Tweet の内容については、他のメディアと比較して投手の完投や連投に否定的なものが多い傾向にあることが示された。Tweet が表出した時系列をみると、当該事例の「炎上」は、投手の連投が重なるにつれて

徐々に話題が盛り上がり一定の到達点をもって活発な議論がなされたというよりも、むしろ連投がみられたある地点において爆発的な言及が殺到し、その後数日で急速に収束した極めて一時的・瞬発的な事象であったものとみられた。

また、インターネット・ユーザーの高校野球やソーシャルメディアへの投稿に対する意識・態度については、高校野球に関する情報取得にインターネットを用いる者や、ソーシャルメディアに高校野球に関する投稿をした経験を有する者が比較的少数であることや、投稿はメッセージの伝達・共有に重きが置かれる傾向にあるほか、特に明確な意図なしに投稿されることも多いこと、インターネット・ユーザーにも他のメディアを良く使用する人と同様に、高校野球の「物語」に準拠した見方や解釈がみられることなどが示唆された。

ソーシャルメディアの「炎上」は、既存の秩序から解放された振る舞いが許容されるという点で、マスメディアでは表出しづらい「鍛錬主義」的なあり方に対する批判的な言説が表面化する土台となっている。このことは、その言説を無視できない高野連に制度的対応を迫るなど、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を社会的に可視化することに寄与しているといえる。しかしながら、一時的・瞬発的な現象であるが故に、継続的な議論の場として機能しないという点で、「炎上」単体が「物語」の再生産を揺るがす事態とはなりづらい。あるいは、「炎上」が自己目的的な現象である可能性を踏まえれば、盛り上がったことそれ自体で目的が達成されており、投稿者にとって「炎上」の結果は大きな意味を持たないものであるとも捉えうる。ただし、断片的な「炎上」が繰り返されることによって、その度に象徴闘争が可視化され社会的な議論が生じることや、「炎上」の様相がマスメディアに取り上げられるなどの展開によって、「物語」に揺らぎを生み出す力学となりえている可能性も指摘できる。

【研究 5】では、高校野球に対する受け手の解釈に関するアンケート調査を用いて、受け手による解釈の揺らぎについて、「高校野球観」「高校野球の見方」「高校野球の表象」などの観点から分析した。また、選手や監督に対する補足的なインタビュー調査を用いて、受け手に解釈された「物語」が再帰的に構造化されていく側面についても検討した。

アンケート調査の結果、「高校野球観」において「鍛錬主義」と「科学主義」の2つの因子がみられ、野球経験者は「鍛錬主義」的な価値を重視する傾向にあること、また、情報を批判的に検討する、あるいは複数の情報を見比べる者は「科学主義」的な価値を重視する傾向にあることが示唆された。「高校野球の見方」に関しては、「野球経験」や「メディア行動・態度」の違いに関わらず、「仲間」と「困難」を乗り越える、「プロとは異なる」「教育的な意味」を有するという目線で高校野球をみているという傾向が示唆された。特に「鍛錬主義」を重視する傾向にある「完投派」と「科学主義」を重視する傾向にある「継投派」による見方の違いに着目すると、「完投派」が「疲労やケガの乗り越え」という文脈に感動している傾向にあることに対し、「継投派」は「仲間の『物語』」という文脈に感動している者が多く見られた。「高校野球の表象」に関しては、「野球経験」や「メディア行動・態度」の違いに関わらず、「若者らしい」「仲間意識強」「集団的」「上下関係強」「伝統的」など、「物語」の枠組みに適合的なイメージが共通して自明視されている傾向がみられた。

以上の結果を踏まえれば、「高校野球観」における「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎは、「どのようなあり方が『青春』であり『若者らしさ』であるのか」という「物語」の内的な揺らぎとして定位しており、「青春」「若者らしさ」という解釈枠組み自体は、内的な揺

らぎを含みながら再生産されていると考えることができる。

また、インタビュー調査の結果、選手や監督は高校野球に対する特別な扱いを自覚し、それを誇りとして自己構築を支えている様子も伺える一方、メディアが自分たちの取り組みを選択・再構成するあり方には違和を感じている側面もあり、「物語」の枠組みを極めて分析的に客観視し距離化をはかっている様子もみられた。また、こうした両義的な態度が同居するなかで、注目される舞台やメディアの前では、ある意味戦略的に「高校野球らしさ」を演じる様相も看守された。このような選手や監督の振る舞いは、メディア資源として「物語」の構造化に再帰し、結果として「物語」の再生産に加担する可能性があるといえる。

2. メディアを介した高校野球の「物語」再生産のダイナミズム

以上の研究結果から示唆された、メディアを介した高校野球の「物語」再生産のダイナミズムを図 9-1 に整理する。

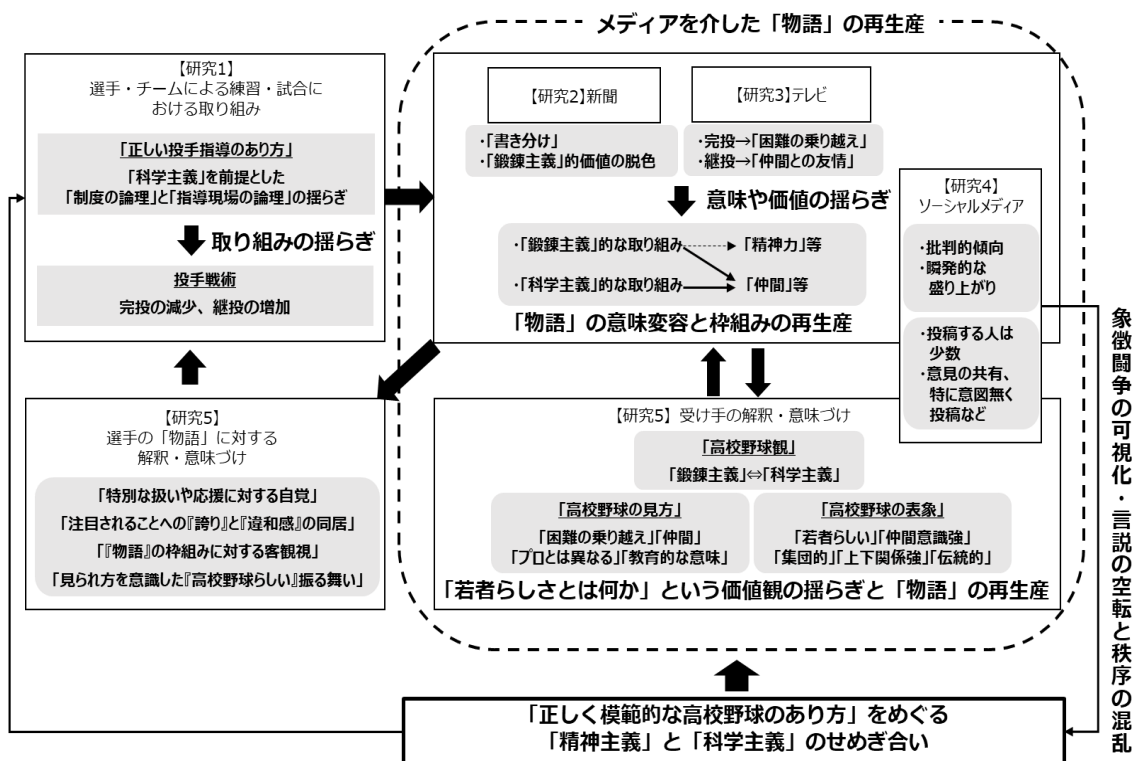


図 9-1 メディアを介した高校野球の「物語」再生産のダイナミズム

今日の高校野球における「鍛錬主義」と「科学主義」のせめぎ合い、象徴闘争、およびその様相を背景とした制度改革等は、選手や野球部における取り組みに揺らぎをもたらしているものとみられる。投手の取り組みにおいては、「鍛錬主義」的な価値基準に準拠した完投が減少し、「科学主義」的な価値基準に準拠した継投が増加していた。

こうした取り組みを資源とするマスメディアは、取り組みの揺らぎを、「物語」の意味変容と枠組みの再生産という形でテキスト化している側面があるものと思われる。例えば、新

聞報道では制度改正に関する議論の動向を客観的に伝えつつも、「鍛錬主義」的な価値基準に準拠した取り組みである投手の完投を「仲間」や「成長」という文脈で報じる「書き分け」がみられた。また、テレビ放送では、「科学主義」的な価値基準に準拠した取り組みである投手の継投を、「仲間との友情」という文脈に回収する様相が看取された。

上記マスメディアの様相にみられるのは、直接的な「鍛錬主義」的意味の脱色と、「物語」の枠組みに準拠した「科学主義」的意味の変換である。佐伯によれば、メディア・コンテンツが視聴率に基づいて市場を形成している以上、メディアの編集とテキストの生成は「多様な視聴読者の好みと期待を中核に構成される」（佐伯，2006，p. 261）という。この指摘を踏まえれば、制度面や受け手の価値観において「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎがみられる今日では、肘の痛みに耐えて投げる投手を美談化する（清水，1998）など、歴史的にみられてきた「鍛錬主義」的側面を直接的に賛美する言説は批判的となる可能性も高い。一方で、「若者らしさ」「青春」という「物語」の枠組みが人々の目線を規定し、その「物語」を中心にメディア・スポーツの市場が形成されている以上、継投のように、たとえ合理的・機能的な取り組みであっても、「物語」の枠組みに準拠した意味を付与することが求められる。その結果、マスメディアは、一方では「物語」の意味内容について一定程度の変容を許容しつつ、他方では「物語」の枠組みが解体せぬよう留意しながら、種々の取り組みをテキスト化していくことになるものと推察される。決められた紙面に文字情報を配列し人々の価値観や認識枠組みの形成に関わるとされる新聞報道が、「鍛錬主義」的な取り組みを「仲間」などの文脈で報じ、また、映像と音声による高い没入のもと象徴的に特定の意味や価値を伝達するテレビ放送が、「科学主義」的な取り組みを「仲間の友情ドラマ」としてメッセージ化するという、本研究でみられた様相は、まさにマスメディアがそれぞれの特性を背景に、「物語」の意味変容と枠組みの再生産というダイナミズムに関与した代表的な一側面であったといえよう。

マスメディアのテキストと受け手の解釈は相互規定的であるため、当然ながら受け手の解釈のあり方も、メディア・テキストの揺らぎに影響を受けることとなる。受け手に対するアンケート調査では、「高校野球観」において「鍛錬主義」と「科学主義」の揺らぎがみられたが、その揺らぎは「なにが『若者らしさ』で『青春』なのか」をめぐって「物語」の枠組み内で展開されるものであり、「若者らしさ」「青春」という枠組み自体は自明的に共有されている様相がみられた。こうした様相をみれば、マスメディアのテキストと受け手の解釈は、「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争を、ある意味で共犯関係的に「物語」の内的な揺らぎに回収し、「物語」に関する意味内容の揺らぎと枠組みの再生産というダイナミズムを安定化させていると捉えることもできる。また、選手や監督の「物語」に対する解釈・意味づけをみれば、「物語」を分析的に客観視しつつも、「高校野球らしさ」に依拠した振る舞いを自ら演じていく側面もみられている。彼らの振る舞いもまた、メディアによるテキストの生成と相互規定的に、「物語」再生産のダイナミズムを支えている可能性があるといえよう。

マスメディアのテキストと受け手の解釈との相互作用により安定化された「物語」の再生産プロセスにおいて、ソーシャルメディアにおける「炎上」は、その秩序から逃れ「物語」の意味体系を相対化する場となりえている。「炎上」が一時的・瞬発的な現象であるという点を踏まえれば、「炎上」単体が「物語」の枠組みを変動させるとは言い難い。しかしなが

ら、「炎上」が頻発すれば、象徴闘争はその度に可視化され、「正しいあり方とは何か」という問いが生起することとなる。こうした様相が、例えば高野連による対応や、マスメディアの報道姿勢等にも影響し、結果として「物語」を揺さぶる力学となりえる可能性も指摘できる。ただし、「炎上」が少数の自己目的的な振る舞いである可能性もあるという点で、その力学は不安定なものとならざるを得ない。「炎上」には、象徴闘争の可視化と「正しさ」をめぐる議論の活発化に寄与する側面と、意志を持たない言説の空転が秩序の混乱をもたらす側面が同居している。どちらの側面がどのように「物語」への揺らぎに関与していくのかを明らかにするためには、種々の「炎上」事例に対する継続的な観察が必要であるものと思われる。

3. 本研究の成果と展望・課題

先行研究の検討において指摘したように、従来の高校野球に関する「物語」研究では、「若者らしさ」「青春」の「物語」が固定的な構造として扱われる傾向にあり、その動的な側面を把握することが課題の1つであるものとみられた。また、「物語」の動的側面を読み解くにあたって、これまで対象化されてこなかったソーシャルメディア言説の影響や、個別に論じられてきた新聞、テレビなどの影響を横断的に検討することが課題とされた。

この課題を踏まえ、メディアを介した「物語」再生産のダイナミズムについて検討してきた結果、高校野球にまつわる「若者らしさ」「青春」の「物語」は、「何が『若者らしさ』で『青春』なのか」という定義をめぐる内的な意味変容を含みつつ再生産されているという様相が示唆された。高校野球の「物語」は、所与の固定的な構造として高校野球に対する目線を規定し続けているというよりも、メディアによる伝達と受け手による解釈との相互作用において、常にその意味内容が揺らぎ更新されながら成り立っているものと推察される。一方で、メディアによる伝達と受け手による解釈との相互作用は、共犯関係的にその揺らぎを「若者らしさ」「青春」という枠組みの内部に回収している。こうした二重の再生産プロセスにより、今日にみられる「鍛錬主義」と「科学主義」の象徴闘争は、結果として「物語」の意味内容に揺らぎをもたらすものとして定位しているといえる。

では、「物語」の意味内容が揺らぐプロセスは、「物語」の枠組みそのもの、すなわち高校野球が「若者らしさ」「青春」の舞台であるという共通観念自体を変動させる可能性はあるのだろうか。再生産と構造の変動について、江原は「社会は様々な闘争や『ゲーム』を含みこみながら、そうした『ゲーム』の展開の結果によって少しずつ変動していく」(江原, 2001, p.407)と指摘している。この指摘を踏まえ、本研究で示唆された「物語」再生産のダイナミズムが、「若者らしさ」「青春」の枠組み自体の変動に繋がりうる可能性について、具体的な事例をもとに若干の考察をしておきたい。

2019年、第101回夏の甲子園の岩手県予選大会決勝において、プロ野球のドラフト候補として名前が挙げられていた大船渡高等学校(岩手)の佐々木朗希投手が登板を回避したことが、大きな注目を集めた。夏の甲子園出場が懸かった大一番で、連投によるケガのリスクを勘案してエース投手の登板を回避し、結果として敗退することとなった大船渡高校の取り組みは、野球関係者の間で賛否両論を巻き起こすこととなった。健康管理を重視して登板を回避するという取り組みは、まさに「科学主義」的な営みである。本稿で示唆された「物語」再生産のダイナミズムに準拠すれば、例えば「悔しい思いをして成長する」といった文

脈において、「物語」の枠組みに回収することも可能な事例であろう。

佐々木投手を取り巻くメディア報道では「何十年に一度の逸材だとか、壊れないままプロに行けるのかとか、果ては大切に育てられすぎて本当に体力はあるのか的な論調」（プチ鹿島，2019）などがみられたという。では、「プロへのキャリアを前提とした成長」という文脈は、果たして本当に「若者らしい」「青春」という観念と合致するのであるだろうか。

メディアを介して「科学主義」的なあり方に「物語」に準拠した意味が付与され、「物語」の意味内容が更新されれば、受け手の解釈枠組みによる保証が与えられるという点で、「科学主義」的な取り組みはますます高校野球に導入されやすくなるものと思われる。しかしながら、「科学主義」的な取り組みは、因果関係から逆算して行動原理を算出するという点において、本来的には刹那的、目的的な「青春」という表象と相矛盾する性質を有している可能性がある。そのため、「科学主義」的な取り組みが加速化すれば、いずれ「若者らしさ」「青春」という枠組みを構成する意味に還元不能な形式が生じることも考えうる。このとき、意味の変換によって構造化されていた「物語」の枠組みは、その虚構性がむき出しとなり、新たな表象との間に別種の象徴闘争が生成されるとも推察しうる。佐々木投手の事例は、「物語」の再生産が繰り返される過程において、「高校野球の『プロ化』」という、「物語」の枠組みに還元することが極めて困難な価値を生起させている可能性があり、高校野球の正しいあり方とは「青春」なのか「プロなのか」という新たな象徴闘争によって、「物語」の枠組み自体を変動させる可能性を有しているのではないだろうか。

本稿ではあくまで、メディアを介した「物語」の再生産に関して、先述した二重のダイナミズムを読み解いているに留まるため、そのダイナミズムが繰り返し駆動する過程で生じる可能性のある枠組みの変動について読み解いていくことは、今後の課題となろう。また、「物語」の再生産は、メディアによる伝達と受け手による解釈との相互作用の外部にある力学にも、少なからず影響を受けているものと思われる。例えば、高野連や新聞社、学校等の組織とその関係性にみられる権力作用や政治性などについて、本稿では十分に検討していない。こうしたメディア空間の外部における諸相も勘案し、「物語」の再生産プロセスに関する全体像をさらに精緻に読み解くことも、今後の課題としたい。

【引用・参考文献】

- アバークロンビー・ターナー・ヒル：丸山哲央監訳（1996）新しい世紀の社会学中辞典．ミネルヴァ書房．
- 青木保（1984）象徴コミュニケーションの二つの型—儀礼論の一面—．青木保編，現代の人類学 4 象徴人類学．至文堂，pp.141-152.
- 有山輝雄（1996）全国優勝野球大会の形成と新聞—メディアがつくった野球—．津金澤聰廣編著，近代日本のメディア・イベント．同文館，pp.61-88.
- 有山輝雄（1997）高校野球と日本人—メディアのつくったイベント—．吉川弘文館．
- 有山輝雄（2002）戦後甲子園野球大会の「復活」．津金澤聰廣編著，戦後日本のメディア・イベント—1945—1960 年—．世界思想社，pp.23-45.
- 朝日新聞（online）聞蔵Ⅱ．<https://database.asahi.com/index.shtml>（参照日 2021 年 5 月 30 日）．
- 朝日新聞デジタル（2018）練習直後に倒れ…亡き女子マネジャーへ、捧げる 2 本塁打．<https://www.asahi.com/articles/ASL7P2RPKL7PUOHB00N.html>，（参照日 2020 年 8 月 27 日）．
- 朝日新聞社（2019）全国高等学校野球選手権大会 100 回史 甲子園編．朝日新聞出版．
- 浅野智彦（2000）社会学における物語論．情況第二期，11（7）：145-158.
- バフチン：望月哲男・鈴木淳一訳（1995）ドストエフスキーの詩学．筑摩書房．
- バウマン：森田典正訳（2001）リキッド・モダンティー液状化する社会—．大月書店．
- ベック：東廉・伊藤美登里訳（1989）危険社会—新しい近代への道—．法政大学出版局．
- ボードウェル・トンプソン：飯岡詩朗ほか訳（2007）フィルム・アート—映画芸術入門—．名古屋大学出版会．
- ブルデュー：田原音和訳（1991）人はどのようにしてスポーツ好きになるのか．ブルデュー：田原音和監訳，社会学の社会学．藤原書店，pp.223-250.
- BIGLOBE ニュース編集部（2018）3.5 キロ走らされた女子マネージャーの死を「美談仕立て」朝日新聞の高校野球記事に批判殺到．https://news.biglobe.ne.jp/trend/0724/blnews_180724_8117254364.html，（参照日 2020 年 8 月 27 日）．
- Cheska, A.T. (1981) Sports spectacular: The social ritual of power. In: Hart, M. (eds.) Sport in sociocultural process. WC Brown Co, pp.368-383.
- 中条一雄（1979）「高校野球」を問い直す．学校体育，32（9）：58-61.
- コークリー・ドネリー：前田和司ほか訳（2011）現代スポーツの社会学—課題と共生への道のり—．南窓社．
- DaMatta, R. (2009) Sport in Society : An Essay on Brazilian Football. Virtual Brazilian Anthropology, 14（2）：98-120.
- Davis, L. R. (1993) Critical analysis of the popular media and the concept of ideal subject position : Sport illustrated as case study. Quest, 45 : 165-181.
- Deegan, M. J., and Stain, M. (1978) Americana Drama and Ritual : Nebraska Football. International Review of Sport Sociology, 3（13）：31-44.
- デュルケーム：古野清人訳（1975）宗教生活の原初形態（上・下）．岩波書店．

- Eastman, S. T. , and Riggs, K. E. (1994) Televised Sports and Ritual: Fan Experiences. *Sociology of Sport Journal*, 11 : 249-274.
- 海老田大五朗 (2012) 柔道整復師はどのようにしてその名を得たか. *スポーツ社会学研究*, 20 (2) : 51-63.
- 江原由美子 (2001) ジェンダー秩序. 勁草書房.
- 遠藤華英 (2018) リオデジャネイロ・パラリンピック大会に関する新聞報道の傾向分析と一考察. *日本財団パラリンピックサポートセンターパラリンピック研究会紀要*, 7 : 31-40.
- 遠藤薫 (2016a) ソーシャルメディアの浸透と〈社会関係〉. 遠藤薫編, *ソーシャルメディアと〈世論〉形成—間メディアが世界を揺るがす—*. 東京電機大学出版局, pp.44-59.
- 遠藤薫 (2016b) 本書の目的と構成. 遠藤薫編, *ソーシャルメディアと〈世論〉形成—間メディアが世界を揺るがす—*. 東京電機大学出版局, pp.1-6.
- 遠藤薫 (2016c) 〈群衆〉と〈公共〉. 遠藤薫編, *ソーシャルメディアと〈世論〉形成—間メディアが世界を揺るがす—*. 東京電機大学出版局, pp.30-43
- 江刺正吾 (1994) 甲子園とジェンダー. 江刺正吾・小椋博編, *高校野球の社会学—甲子園を読む—*. 世界思想社, pp.63-80.
- 藤竹暁 (1996) メディアイベントの展開とニュース概念の変化. *マス・コミュニケーション研究*, 48 : 3-19.
- 藤田真文 (2006) ギフト、再配達—テレビ・テキスト分析入門—. せりか書房.
- ギアーツ : 吉田禎吾訳 (1987) ディープ・プレーバリの闘鶏に関する覚え書き—. *ギアーツ : 吉田禎吾ほか訳, 文化の解釈学Ⅱ*. 岩波書店, pp.389-461.
- ヘネップ : 綾部恒雄・綾部裕子訳 (1977) 通過儀礼. 弘文堂.
- ギデنز : 松尾精文・小幡正敏訳 (1993) 近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結—. 而立書房.
- ハーグリーブス : 佐伯聡夫・阿部生雄訳 (1993) スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴史社会学—. 不昧堂出版.
- 橋本政晴 (2002) メディアスポーツ研究の経緯. 橋本純一編, *現代メディアスポーツ論*. 世界思想社, pp. 25-47.
- 橋本雅至 (1998) スポーツ傷害に対する理学療法士の活動—全国高校野球大会のメディカルサポートの立場から—. *理学療法科学*, 13 (3) : 135-141.
- 橋元良明 (1983) 内容分析における語用論的視点—テレビ CM 記号論的分析の試み—. *新聞学評論*, 32 : 37-53.
- 秦真人・加賀秀雄 (1990) 「野球害毒論争」(1911 年) の実相に関する実証的検討—新聞各紙の論調分析を通じて—. *総合保健体育科学*, 13 (1) : 19-31.
- 服部博幸・勝見泰和・今川亮司・金原正幸・片山憲史・越智秀樹・池内隆治・松本勅 (1993) スポーツ障害における鍼灸治療の位置づけに関する研究—高校野球選手における鍼灸治療の意識調査—. *体力科学*, 42 (9) : 645.
- 平井智尚 (2012) なぜウェブで炎上が発生するのか—日本のウェブ文化を手がかりとして—. *情報通信学会誌*, 29 (4) : 61-71.
- 広尾晃 (2019) 球数制限—野球の未来が危ない!—. ビジネス社.

- 広瀬一郎（1997）メディアスポーツ．読売新聞社．
- 日吉昭彦（2004）内容分析研究の展開．マス・コミュニケーション研究，64：5-24．
- 寶學淳郎（2002）スポーツとメディアーその歴史・社会的理解一．橋本純一編，現代メディアスポーツ論．世界思想社，pp.3-24．
- 深見英一郎・井上一彦（2019）運動部活動における指導者の主導性に関する意識と部員の形成的評価の関係．体育学研究，64：369-384．
- 池上嘉彦（1984）記号論への招待．岩波書店．
- 池井優（1991）野球と日本人．丸善．
- 今村庸一（2003）映像情報論．丸善株式会社．
- 井上俊（1996）物語としての人生．井上俊ほか編，ライフコースの社会学．岩波書店，pp.11-27．
- 井上俊（1996）物語としての人生．井上俊ほか編，ライフコースの社会学．岩波書店，pp.11-27．
- 石坂友司（2003）「野球害毒論争（1911年）」再考．スポーツ社会学研究，11：115-127．
- 伊東明（1976a）体育・スポーツ資料集 明治時代の新聞記事 野球編Ⅰ．上智大学体育，9：9-67．
- 伊東明（1976b）明治時代における野球の新聞記事について．上智大学体育，9：5-7．
- 伊藤昌亮（2014）血と血祭り 炎上の社会学．川上量生監，ネットが生んだ文化―誰もが表現者の時代―．角川学芸出版，pp.173-208．
- 岩瀬翔・矢吹太郎（2018）Twitter 発言の分析による Web サービス障害の影響調査．情報処理学会第 80 回全国大会講演論文集：115-116．
- 城島充（2005）マンネリズムを越えて，25 年目の「熱闘甲子園」．Number Web，<https://number.bunshun.jp/articles/-/11308>，（参照日 2019 年 9 月 1 日）．
- 影山健（2017）批判的スポーツ社会学の論理―その神話と犯罪性をつく―．ゆいぽおと．
- 甲斐義一・谷口勇一（2012）元高校球児のスポーツ的社会的化過程に関する研究―P. ブルデューの文化的再生産論に依拠しつつ―．九州レジャー・レクリエーション研究，2：3-11．
- 狩野聡文（2004）マーケティング調査報告 夏の高校野球のイメージ．朝日総研リポート AIR21，175：106-111．
- 加藤徹郎（2009）筋書きのないドラマの「語り」を探る―スポーツダイジェスト番組『熱闘甲子園』における物語論―．藤田真文・岡井崇之編，プロセスが見えるメディア分析入門―コンテンツから日常を問い直す―．世界思想社，pp. 11-36．
- 川口晋一（1990）テレビのスポーツ中継視聴者の充足様態に関する研究―プロ野球中継および高校野球中継視聴者の野球経験による比較―．体育・スポーツ社会学研究 9：79-99．
- 川喜田尚（2012）メディアとスポーツの共栄についての研究―放送黎明期のメディア戦略と甲子園モデル形成の背景―．立教大学大学院社会科学研究科年報，19：19-30．
- 川村隆史・土井龍雄・若森真樹・立花龍司・大久保衛・市川宣恭（1990）高校野球選手のスポート障害対策に関する研究―外科，整形外科，リハビリテーション―．体力科学，39（6）：458．

- 木原資裕・櫛木雄介（2012）メディアの中の甲子園・高校野球―新聞・テレビの報道量を中心に―。鳴門教育大学研究紀要，27：370-382.
- 菊幸一（1994）物的文化装置としての甲子園スタジア。江刺正吾・小椋博編，高校野球の社会学―甲子園を読む―。世界思想社，pp.83-111.
- Kilmer, S (1977) Sport as Ritual : A Theoretical Approach. In : Lancy, D. F. and Tindall, B. A. (eds.) The Study of Play : Problems and Prospects. Leisure press, pp.44-49.
- 木村吉次（1962）いわゆる「野球害毒論」の一考察。中京体育学論叢，3：103-123.
- Kinkema, K. M., and Harris, J. C. (1992) Sport and the mass media. Exercise and Sport Science Reviews, 20：127-159.
- 木下秀明（1985）近代社会。水野忠文ほか編，体育史概説―西洋・日本―（第13版）。杏林書院，pp.237-303.
- 木村義子・関根智江・行木麻衣（2015）テレビ視聴とメディア利用の現在―「日本人とテレビ・2015」調査から―。放送研究と調査，65（8）：18-47.
- Klapp, O.E. (1956) Ritual and cult : A Sociological Interpretation. Public Affairs Press.
- 向後英紀（2004）高度経済成長とメディア。有山輝雄・竹山昭子編，メディア史を学ぶ人のために。世界思想社，pp.309-340.
- 小峰隆生（2015）「炎上」と「拡散」の考現学―なぜネット空間で情報は変容するのか―。祥伝社.
- 黒田勇（2012）はじめに。黒田勇編，メディアスポーツへの招待。ミネルヴァ書房，pp. i-iv.
- 黒須朱莉（2013）IOCによるオリンピック休戦アピールの決議決定―1992年第99回IOC総会議事録と国内外の新聞資料を手がかりに―。スポーツ史研究，26：17-31.
- 日下裕弘（1975）明治期における「武士」的、「武士道」的野球信条に関する文化社会学的研究。体育・スポーツ社会学研究，4：23-44.
- 日下裕弘・丸山富雄（1988）一般成人のスポーツ観に関する研究。体育・スポーツ社会学研究，7：131-157.
- 黒田次郎・古城隆利・松崎拓也（2018）夏の甲子園100年の歴史。かやものり：近畿大学産業理工学部研究報告，28：19-25.
- レヴィ=ストロース：仲沢紀雄訳（1970）今日のトーテミズム。みすず書房.
- リー・トンプソン（2008）日本のスポーツメディアに見られる人種言説。スポーツ社会学研究，16：21-36.
- リオタール：小林康夫訳（1989）ポスト・モダンの条件―知・社会・言語ゲーム―。水声社.
- 劉継生・木村富美子（2012）はじめて学ぶ情報社会。昭和堂.
- Lombard, M., Duch, S. J. And Bracken, C. C. (2002) Content analysis in mass communication: Assessment and reporting of intercoder reliability. Human Communication Research, 28（4）：587-604.
- マカルーン：光延明洋訳（1988）序説 文化的パフォーマンス、文化理論。マカルーン：光延明洋ほか訳，世界を映す鏡―シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック―。平凡社，pp.11-33.

- 町田夏雅子・石川ひろの・岡田昌史・加藤美生・奥原剛・木内貴弘（2018）受動喫煙規制に関する新聞記事の内容分析．日本公衆衛生雑誌，65（11）：637-645.
- マクルーハン：栗原裕・河本仲聖訳（1987）メディア論—人間の拡張の諸相—．みすず書房．
- 舩本直文（1998）スポーツ映像の中に見るオリimpiズム—その多面的表現の解釈—．体育・スポーツ哲学研究，20（1）：31-47.
- 松田恵示・島崎仁（1994）甲子園と奇蹟．江刺正吾・小椋博編，高校野球の社会学—甲子園を読む—．世界思想社，pp.39-62.
- 松尾哲矢（2001）スポーツ競技者養成の《場》とハビトゥス形成—学校運動部と民間スポーツクラブに着目して—．体育学研究 46（6）：569-586.
- 松尾哲矢（2015）アスリートを育てる〈場〉の社会学—民間クラブがスポーツを変えた—．青弓社．
- 松島剛史（2009）IRB の再編成過程に見る世界戦略と権力関係—ラグビーワールドカップの機能に着目して—．スポーツ社会学研究，17（2）：89-100.
- 松山秀明（2012）テレビ・ドキュメンタリーのなかの東京—1950・60年代の番組を中心に—．マス・コミュニケーション研究，80：pp.153-170.
- Mink, L. O.（1974）History and fiction as modes of comprehension. New directions in literary history, 1（3）：541-558.
- 宮川洋一・福本徹・森山潤（2010）義務教育段階における情報モラル教育に関する研究の動向と展望—CiNii 論文情報ナビゲータを活用した学術研究の動向把握を通して—．岩手大学教育学部研究年報，69：89-101.
- 宮島喬（1994）文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開—．藤原書店．
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編（1993）新社会学辞典．有斐閣．
- 長嶺智徳・酒匂崇・武富栄二・吉野伸司・溝口成朋・宝亀玲一（1996）高校野球選手にみられた膝蓋靱帯骨化の1例．整形外科と災害外科，45（3）：799-801.
- 中川滋人・富田哲也・鳥塚之嘉・越智隆弘・鳥岡康則・松尾知之・魚住廣信・小柳磨毅（1994）全国高校野球甲子園大会における投手肩・肘関節機能検診の結果．関西臨床スポーツ医・科学研究会誌，4：1-3.
- 中嶋晋平（2008）戦間期における軍縮輿論と新聞—「時事新報」の内容分析を中心に—．マス・コミュニケーション研究，73：pp.21-39.
- 中島隆信（2016）高校野球の経済学．東洋経済新報社．
- 中村哲也（2010）学生野球憲章とはなにか—自治から見る日本野球史—．青弓社．
- 中野俊次・井形高明・武田芳嗣・柏口新二・松浦哲也（1997）高校野球選手における肩関節の特性と投球時痛との関連．中国・四国整形外科学会誌，9（2）：317-320.
- 日本高等学校野球連盟（online1）選手権大会：大会入場者数．
<http://www.jhbf.or.jp/sensyuken/spectators/>，（参照日 2021 年 3 月 5 日）．
- 日本高等学校野球連盟（online2）選手権大会：大会小史．
<http://www.jhbf.or.jp/sensyuken/history/>，（参照日 2020 年 6 月 7 日）．

- 日本高等学校野球連盟 (online3) 選抜大会：大会小史.
<http://www.jhbf.or.jp/senbatsu/history/>, (参照日 2020 年 6 月 7 日).
- 日本高等学校野球連盟 (2019a) 有識者会議設置要項.
- 日本高等学校野球連盟 (2019b) 投手の障害予防に関する有識者会議 委員一覧.
- 日本高等学校野球連盟 (2019c) 投手の障害予防に関する有識者会議 議事要旨 (第 1 回)
 —平成 31 年 4 月 26 日 (金)—.
- 日本高等学校野球連盟 (2019d) 投手の障害予防に関する有識者会議 議事要旨 (第 2 回)
 —令和元年 6 月 7 日 (金)—.
- 日本高等学校野球連盟 (2019e) 投手の障害予防に関する有識者会議 議事要旨 (第 3 回)
 —令和元年 9 月 20 日 (金)—.
- 西原茂樹 (2013) 甲子園野球の「物語」の生成とその背景—明治末期～昭和初期の「青年らしさ」「純真」の言説に着目して—. スポーツ社会学研究, 21 (1) : 69-84.
- 西尾典文 (2019) 高校球児を守る対策は『球数制限』だけではない. AERA dot.,
https://dot.asahi.com/print_image/index.html?photo=2019030500007_1 (参照日 2020 年 9 月 1 日).
- 額田桀・永田・久紀・林正 (1968) 夏の高校野球甲子園出場選手の身長・体重. 体育の科学, 18 (11) : 678-680.
- 小方孝 (2018) 物語生成の物語論あるいはポストナラトロジー. 認知科学, 25 (2) : 200-217.
- 小木曾湧・舟橋弘晃・間野義之 (2021) エリートアスリートによる社会貢献活動の類型化—新聞記事の内容分析—. スポーツ産業学研究, 31 (1) : 83-91.
- 荻上チキ (2007) ウェブ炎上—ネット群衆の暴走と可能性—. 筑摩書房.
- 小椋博 (1994) 甲子園と「日本人」の再生産. 江刺正吾・小椋博編, 高校野球の社会学—甲子園を読む—. 世界思想社, pp.161-182.
- 大熊昭信 (1997) バフチンはいかに受け入れられたか—英米仏日の〈カーニバル論〉の展開を中心に—. 阿部軍治編, バフチンを読む. 日本放送出版協会, pp.171-196.
- 大井幸子 (1982) 二つの正統性と近代—丸山真男における二つの正統性概念と近代社会の成立過程におけるピューリタニズム—. ソシオロギス, 6 : 86-96.
- 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一 (2012) 現代社会学事典. 弘文堂.
- 大隅昇・前田忠彦 (2008) インターネット調査の抱える課題—実証調査から見てきたこと— (その 2). 日本世論調査協会報「よろん」, 101 : 79-80.
- 大谷卓史 (2016) 炎上とマスメディア—最近の定量的研究を読み解く—. 情報管理, 59 (6) : 408-413.
- 大塚英志 (2001) 定本物語消費論. 角川書店.
- 大塚良貴 (2006) 歴史的出来事の実在性をどう考えるか—A・C・ダントーにおける歴史の物語り論の検討—. 待兼山論叢, 40 : 33-49.
- 小野瀬剛志 (2002) 野球害毒論 (1911 年) に見る野球イデオロギー形成の一側面—「日本的スポーツ観」再考試論—. スポーツ史研究, 15 : 61-71.
- 乙武洋匡 (2013) 済美・安楽投手の連投に思うこと. <https://togetter.com/li/481601>, (参照日 2020 年 8 月 9 日).

- プロップ：北岡誠司・福田美智代訳（1987）昔話の形態学．水声社．
- プチ鹿島（2019）報道が過熱する「佐々木朗希」問題．各スポーツ紙はどこに注目したのか。．Number web. <https://number.bunshun.jp/articles/-/840179>, (参照日 2021 年 9 月 29 日)．
- 來田享子（2014）1960-1979 年の IOC におけるオリンピック競技大会への助成の参加問題をめぐる議論—IOC 総会議事録の検討を中心に—．スポーツとジェンダー研究, 12 : 47-67.
- Riffe, D., Lacy, S., Watson, B. And Fico, F. (2019) Analyzing media messages : Using quantitative content analysis in research(4th ed.).Routledge.
- Rothenbuhler, E. W. (1988) The Living Room Celebration of the Olympic Games. Journal of Communication, 38 (4) : 61-68.
- Rothenbuhler, E. W. (1989) Values and Symbols in Orientations to the Olympics. Critical Studies in Mass Communication, 6 : 138-157.
- 佐伯年詩雄（2006）現代スポーツを読む—スポーツ考現学の試み—．世界思想社．
- 斉藤正美（1998）クリティカル・ディスコース・アナリシス—ニュースの知／権力を読み解く方法論—新聞の「ウーマン・リブ運動」（一九七〇）を事例として．マス・コミュニケーション研究, 52 : 88-103.
- 作田啓一（1965）高校野球の社会学．思想の科学 第 5 次, 30 : 8-13.
- 作田啓一（1967）恥の文化再考．筑摩書房．
- 三本松正敏（1988）スポーツの文化システム．森川貞夫・佐伯聰夫編，スポーツ社会学講義，大修館書店，p.26.
- 産経 WEST（2013）遅すぎた休養日設定—ノーモア連投の悲劇—．
<http://www.sankei.com/west/news/130425/wst1304250004-n1.html>, (参照日 2017 年 3 月 26 日)．
- 佐藤博（1957）典型調査の意義について．北海道大学経済學研究, 13 : 235-244.
- 沢田和明（1994）マニュアル野球としての甲子園．江刺正吾・小椋博編，高校野球の社会学—甲子園を読む—．世界思想社，pp.113-136.
- 週刊朝日編集部（2018）完全保存版 夏の甲子園 100 回 故郷のヒーロー．朝日新聞出版．
- 清水論（1987）スポーツの神話作用に関する研究—全国高校野球選手権大会テレビ中継におけるテレビの神話作用について—．体育・スポーツ社会学研究, 6 : 215-232.
- 清水論（1989）甲子園野球の神話分析—記号学コンテクスト分析へ〈池田町'88 夏〉—．体育・スポーツ社会学研究, 8 : 27-49.
- 清水論（1998）甲子園野球のアルケオロジ—スポーツの「物語」・メディア・身体文化—．新評論．
- 総務省（online）平成 29 年通信利用動向調査報告書（世帯編）：平成 29 年通信利用動向調査用語集. https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/pdf/HR201700_001.pdf, (参照日 2020 年 9 月 3 日)．
- SPORTS BULL（online）バーチャル甲子園：甲子園戦績.
<https://vk.sportsbull.jp/koshien/stats/>, (参照日 2021 年 5 月 30 日)．

- Suchman, M. C. (1995) Managing legitimacy : Strategic and institutional approaches. *Academy of management review*, 20 (3) : 571-610.
- 杉本厚夫 (1994) 劇場としての甲子園—高校生らしさの現実—. 江刺正吾・小椋博編, 高校野球の社会学—甲子園を読む—. 世界思想社, pp.15-38.
- 鈴木謙介 (2005) カーニヴァル化する社会. 講談社.
- 鈴木みどり (1998) メディア・リテラシーとはなにか. 情報の科学と技術, 48 (7) : 388-395.
- 鈴木俊彦 (2008) 高校野球 甲子園—名投手物語—. 心交社.
- 高柿健 (2020) 高校野球フィールドマネジメント 4.0—「武士道野球」と「スポーツ野球」の信念対立の克服を目指して—. 城西大学経営紀要, 16 : 145-155.
- 高橋豪仁 (1994) 広島市民球場におけるプロ野球の集会的応援に関する研究. スポーツ社会学研究, 2 : 53-66.
- 高橋豪仁 (2000) 新聞における阪神淡路大震災に関連づけられたオリックス・ブルーウェーブ優勝の物語とあるオリックス・ファンの個人的体験. スポーツ社会学研究, 8 : 60-72.
- 高橋一郎 (1990) 文化的再生産論の再検討—「教育科学の社会学」の試み—. ソシオロジ, 35 (1) : 3-17.
- 竹下俊郎 (2008) メディアの議題設定機能—マスコミ効果研究における理論と実証—. 学文社.
- 友添秀則 (2016) スポーツ科学のこれまでとこれから. 現代スポーツ評論, 35 : 8-16.
- 田中辰雄・山口真一 (2016) ネット炎上の研究—誰がおり、どう対処するのか—. 勁草書房.
- 津田正太郎 (2013) 物語の公共性とメディア—「シニク・ナショナリズム」を超えて—. 金井明人ほか編著, メディア環境の物語と公共圏. 法政大学出版局, pp.11-39.
- 津金澤聰廣編著 (1996) 近代日本のメディア・イベント. 同文館出版.
- 筒井清忠 (1999) 大正期の軍縮と世論. 青木保ほか編, 近代日本文化論 10 戦争と軍隊. 岩波書店, pp.19-54.
- Turner, V. (1974) Liminal to Liminoid, in Play, Flow, and Ritual: An Essay in Comparative Symbolology. *Rice Institute Pamphlet-Rice University Studies*, 60 (3) : 53-92.
- ターナー：大橋洋一訳 (1981) パフォーマンスとしての人類学. 現代思想, 9 (12) : 60-81.
- ターナー：富倉光雄訳 (1996) 儀礼の過程. 新思索社.
- 氏原英明 (2014) 故障防止に動き出した高野連。タイブレークは消去法の苦肉の策？. Number Web. <https://number.bunshun.jp/articles/-/822104>, (参照日 2021 年 7 月 24 日).
- 宇都山登 (1961) 運動中の心搏週期の変動に関する研究—第 1 編 短距離全力疾走中の心搏週期の変動経過について—. 体力科学, 10 (1) : 81-89.
- 若林幹夫 (2007) テーマ別研究動向 (インターネット). 社会学評論, 57 (4) : 821-830.
- 渡辺大貴・相場亮 (2015) Twitter を用いた開催中のソーシャルイベントの状況把握に関する研究. 情報処理学会第 77 回全国大会講演論文集 : 527-528.

- 綿貫慶徳（2001）近代日本における職業野球誕生に関する史的考察—新聞社主催による野球イベントの分析を中心として．スポーツ史研究, 14 : 39-53.
- Whannel, G. (1992) *Fields in Vision : Television sport and cultural transformation*. Routledge.
- Wilson, B. and Sparks, R. (1996) It' s gotta be the shoes : Youth, race, and sneaker commercials. *Sociology of Sport Journal*, 13 (4) : 398-427.
- 山口誠（2001）メディア（オーディエンス）,吉見俊哉編,知の教科書 カルチュラル・スタディーズ,講談社, pp.52-92.
- 山口昌男（1983）相撲の宇宙論. ターナー・山口昌男編, 見世物の人類学. 三省堂, pp.317-326.
- 山口昌男（1978）歴史・祝祭・神話. 中央公論社.
- 山腰修三（2014）批判的コミュニケーション論における「政治的なもの」の再検討—N.Couldryのメディア理論を手がかりとして—. 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要, 46 : 41-51.
- 山本教人（2000）国内外におけるメディア・スポーツ研究の動向と今後の課題. 九州体育・スポーツ学研究, 14 (1) : 1-10.
- 山本教人（2005）駅伝を語る—第 51 回九州一周駅伝の物語. 体育学研究, 50 : 641-650.
- 山本武利（1979）経営基盤確立期における広告. 津金澤聰廣ほか編, 近代日本の新聞広告と経営—朝日新聞を中心に—. 朝日新聞社, pp.161-332.
- 安田尚（2008）ピエール・ブルデューのメディア論. 福島大学行政社会学会行政社会論集, 20 (4) : 49-68.
- 吉松俊一（1983）高校生にみられるスローイングによる障害（ピッチング障害）について. 体育の科学, 33 (8) : pp.589-592.

【資料 1】

高校野球に対する受け手の解釈に関するアンケート調査 質問項目

Q1 100%

この1年間に運動やスポーツを実施した日数を全部合わせると、何日くらいになりますか。この中から1つだけお答えください。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

- ① 週に5日以上（年251日以上）
- ② 週に3日以上（年151日～250日）
- ③ 週に2日以上（年101日～150日）
- ④ 週に1日以上（年51日～100日）
- ⑤ 月に1～3日（年12日～50日）
- ⑥ 月に1日未満・運動はしたが頻度はわからない
- ⑦ この1年間に運動・スポーツはしなかった

Q2

あなたは、学校期（中学校、高校）に運動部活動に所属した経験がありますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

- ① ある
- ② ない

Q3

あなたは、高校野球に関心がありますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

- ① 関心がある
- ② やや関心がある
- ③ あまり関心がない
- ④ 関心がない

Q4

あなたは、高校野球が好きですか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

-
- ① 好きである
-
- ② どちらかといえば好きである
-
- ③ どちらかといえば嫌いである
-
- ④ 嫌いである
-

Q5

あなたが中学生のとき、野球チームに所属していた経験はありますか。この中から1つだけお答えください。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

-
- ① 学校の野球部に所属していた
-
- ② 野球部に所属してはいないが、野球のクラブチーム・サークルなどに所属していた
-
- ③ 所属していない
-

Q6

あなたが高校生のとき、野球チームに所属していた経験はありますか。この中から1つだけお答えください。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

-
- ① 学校の野球部に所属していた（いる）
-
- ② 野球部に所属してはいないが、野球のクラブチーム・サークルなどに所属していた（いる）
-
- ③ 所属していない
-

Q7

あなたは、高校野球の試合をどの程度観戦していますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

0/2

¹ テレビなどメディアを通じた試合観戦	▼
² 甲子園球場や地方の野球場での直接試合観戦	▲

- ① 数えきれないほど見ている（見に行っている）
- ② 数回見たことがある（見に行ったことがある）
- ③ 1回だけ見たことがある（見に行ったことがある）
- ④ 見たことはない（見に行ったことはない）

Q8

高校野球に対する次のような価値観について、あなたはどのようにお考えになりますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

¹ 高校野球では技術や体力よりもまず精神力を大切にすべきである。	▼
² 高校野球は「道」（人間修養）を極める手段である。	▼
³ 高校野球は結果よりもそれまでの努力が大切である。	▼
⁴ 高校野球の練習は量をこなすよりも合理的に効率よく質を高めることが大切である。	▼
⁵ 高校野球では伝統的な考え方よりも科学的な考え方が優先されるべきである。	▼
⁶ 高校野球の練習や試合では経験則よりもデータを重要視するべきである。	▼
⁷ 高校野球では監督やコーチの命令にはメンバーは全面的に従うべきである。	▲

- ① 賛成
- ② やや賛成
- ③ やや反対
- ④ 反対

Q9

あなたは高校野球に対して、どのようなイメージをお持ちですか。次の項目ごとにあてはまる番号を選んでください。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

0/13

1	A 若者らしい	▼
	B 熟練した	
2	A 伝統的	▼
	B 現代的	
3	A 合理的	▼
	B 非合理的	
4	A プロフェッショナル	▼
	B 素人	
5	A 権威的	—
	B 民主的	
6	A 集团的	▼
	B 個人的	
7	A 仲間意識強	▼
	B 仲間意識弱	
8	A 上下関係強	▼
	B 上下関係弱	
9	A 地味	▼
	B 派手	
10	A ファッションナブル	▼
	B ダサい	

11	A 新鮮	▼
	B 古臭い	
12	A さわやか	▼
	B うっとうしい	
13	A 神聖な	▲
	B 俗っぽい	

- ① Aに近い
-
- ②
-
- ③
-
- ④
-
- ⑤ Bに近い
-

Q10

高校野球に対する次のような見方について、あなたはどのようにお考えになりますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

1	疲労やケガを乗り越えてプレーする選手の姿に感動する。	▼
2	仲間同士が助け合う姿に感動する。	▼
3	選手のひたむきな努力に感動する。	▼
4	無名校が有名校に勝つと嬉しくなる。	▼
5	有名高校や有名選手の試合・プレーを見るのが楽しい。	▼
6	母校や地元の高校を応援しながら見るのが楽しい。	▼
7	大会の新記録や価値の高い記録が生まれることに興奮をおぼえる。	▼

⁸ 応援しているチームであったとしても接戦のほうがおもしろい。	▼
⁹ 高校生が一生懸命プレーしている姿がさわやかである。	▼
¹⁰ ドラマのある試合に感動や興奮をおぼえる。	▼
¹¹ きびきびした動作・試合展開に高校野球のよさを感じる。	▼
¹² 応援団が一生懸命応援する姿に青春を感じる。	▼
¹³ この選手はプロで通用するとかしないとか判断しながら見るのが好きである。	▼
¹⁴ 投手の配球を予測したりバッターの狙いを評価したりしながら見るのが好きである。	▼
¹⁵ バッティングフォームやピッチングフォームについて評価しながら見るのが好きである。	▲

- ① そう思う
-
- ② ややそう思う
-
- ③ どちらともいえない
-
- ④ あまりそう思わない
-
- ⑤ そう思わない
-

Q11

高校野球に対する次のような評価について、あなたはどのようにお考えになりますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

0/7

¹ チームのエース投手が一人で投げ抜くことは高校野球らしくてよい。	▼
² 複数の投手が協力して投げ抜くことは高校野球らしくてよい。	▼
³ 高校野球は若者らしい青春の場であると思う。	▼
⁴ 高校野球は高校生の人間教育の場であると思う。	▼
⁵ 高校野球は野球のプロフェッショナルを育てる場であると思う。	▼

6	高校野球は技術的にプロに近い最高峰の舞台の一つであると思う。	▼
7	高校野球はプロ化してしまうとつまらなくなっていくと思う。	▲

- ① そう思う
-
- ② ややそう思う
-
- ③ どちらともいえない
-
- ④ あまりそう思わない
-
- ⑤ そう思わない
-

Q12

高校野球の社会に対する次のような影響や位置付けについて、あなたはどのようにお考えになりますか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

0/3

1	高校野球は日本人の心やあるべき姿を示していると思う。	▼
2	高校野球は見る人に人が生きる上で大切なことを教えてくれていると思う。	▼
3	高校野球はプロ野球などと同様に楽しさを与えてくれるエンターテインメント（娯楽）の一つであると思う。	▲

- ① そう思う
-
- ② ややそう思う
-
- ③ どちらともいえない
-
- ④ あまりそう思わない
-
- ⑤ そう思わない
-

Q13

高校野球の選手・監督のインタビューや語りに関する次のような印象について、あなたはどのようにお考えになりますか。

○ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

0/4

¹ 選手のインタビューや語りはさわやかですがすがしいものだと思う。	▼
² 選手のインタビューや語りはどの選手も皆同じように聞こえる。	▼
³ 監督のインタビューや語りは選手に対する教育的な内容が多いと思う。	▼

⁴ 監督のインタビューや語りは選手やチームの技術に関する科学的な内容が増えてきたと思う。	▲
---	---

- ① そう思う
- ② ややそう思う
- ③ どちらともいえない
- ④ あまりそう思わない
- ⑤ そう思わない

Q14

あなたは日常生活で、また、高校野球に関する情報取得にどのようなメディアを使用していますか。

✓ 複数回答 ★ 必須回答

▲ とじる

¹ 日常的な情報取得によく用いるメディア（いくつでも）	▼
² 日常的な情報取得に <u>最も</u> よく用いるメディア（一つだけ）	▼
³ 高校野球の観戦や情報取得によく用いるメディア（いくつでも）	▼
⁴ 高校野球の観戦や情報取得に <u>最も</u> よく用いるメディア（一つだけ）	▲

- ① テレビ
- ② 新聞

③ ラジオ

④ 雑誌

⑤ インターネット

⑥ その他

(必須入力)

⑦ メディアで情報取得はしない

Q15

情報に関する次のような態度について、あなた自身はどのようにお考えですか。

◎ 単一回答 ★ 必須回答

0/5

¹ どんな情報でもまず疑ってかかるほうだ。	▼
² 必要な情報は自分で選びたい。	▼
³ 様々なメディアの情報を見比べるほうだ。	▼
⁴ 不確かなものが混じっていても情報は多いほうが良い。	▼
⁵ 多くの情報の中から信頼できるものを選び分けることができる方だ。	▲

① そう思う

② ややそう思う

③ どちらともいえない

④ あまりそう思わない

⑤ そう思わない

Q16

高校野球のメディア報道に関する次のような態度は、あなたのお考えにどのくらい当てはまりますか。

○ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

0/3

¹ 高校野球の試合結果や内容、制度などを客観的に解説したものが好みだ。	▼
² 高校野球の選手や試合の背景などを含めストーリー仕立てに報じたものが好みだ。	▼
³ 高校野球について自分も情報を発信して議論したい。	▲

① そう思う

② ややそう思う

③ どちらともいえない

④ あまりそう思わない

⑤ そう思わない

Q17

あなたは、高校野球に関することについて、インターネット上（掲示板やSNS、ニュースのコメント欄など）に書き込みをしたことがありますか。

○ 単一回答 ★ 必須回答

▲ とじる

① ひんぱんにしている

② 数回したことがある

③ 一度だけしたことがある

④ したことはない

Q18

高校野球に関する書き込みをしたことがある方にお伺いします。書き込みをした内容について、次の中から当てはまるものを全て選んでください。

✓ 複数回答 ★ 必須回答

▲ とじる

- | | |
|----|--|
| 1 | 特定の選手やチームを応援するメッセージやコメント |
| 2 | 特定の選手やチームではないが高校球児や高校野球全体を応援するメッセージやコメント |
| 3 | 感動や共感など高校野球に対する肯定的な感想 |
| 4 | 批判や問題提起など高校野球に対する否定的な感想 |
| 5 | 高校野球連盟（高野連）に対する肯定的な意見 |
| 6 | 高校野球連盟（高野連）に対する否定的な意見 |
| 7 | 選手やチームの技術・戦術などに関するコメント |
| 8 | 選手の進路やプロとしての可能性などに関するコメント |
| 9 | 特に意味のない高校野球に関する「ネタ」のような書き込み |
| 10 | 高校野球に関してニュースや世間で話題になったことがらに関するコメント |
| 11 | 記事やほかの人の投稿のコメント付きシェア |
| 12 | その他 <input type="text" value="(必須入力)"/> |
| 13 | 書き込みはしたが内容は覚えていない |

Q19

高校野球に関する書き込みをしたことがある方にお伺いします。書き込みに対するあなたの思いや考えについて、次の中から当てはまるものを全て選んでください。

✓ 複数回答 ★ 必須回答

▲ とじる

- | | |
|---|--------------------------------------|
| 1 | メッセージが選手や監督、チームに届くことを期待している |
| 2 | 書き込みによって制度やルールなどが変わることを期待している |
| 3 | 自分の意見がメディアに取り上げられたり拡散されたりすることを期待している |

4	インターネット上でつながりのある人に自分の意見を知ってもらいたい
5	自分自身にとってのメモや備忘録として書き込みをしている
6	コメントの内容よりも他者とコミュニケーションを取ることで自分が大事である
7	盛り上がっている話題については何か書き込みをしたくなる
8	匿名だといふ過激な書き込みをしがちである
9	特に理由や目的はないがなんとなく書き込みをしている
10	その他 <input type="text" value="(必須入力)"/>

Q20

あなたが現在の高校野球について感じていることを自由にお書きください。

0/500文字

アンケートは以上で終わりです。
ご協力ありがとうございました。
送信ボタンを押してください。

送 信